

スタンドが手に入ったと思ったら、毎日ランダムでした ヒロイン
全員ヤンデレなハーレム リリカルな冒険編

KEY(仕事で執筆中なのでそちら優先)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

こんにちはんこそば

ヤンデレハーレム好きのKEY（ほぼ毎日投稿）と申します

投稿するとしたら空いた時間に書いたストックの分です

現在は仕事で執筆中ですのでできたら更新、という程度です。

あなたの感想をお待ちしております

ジョジョのスタンドが毎日ランダムで入れ替わるスタンド使いな人を別の作品に送り込む

ことにしました（ゲス顔

しかし最近は他の転生者からもらった能力を使っているようです

あつ、転生者＋踏み台転生者＋特典＋ヤンデレ＋ハーレム＋スタンドの設定注意だゾ

ご指摘いただいた通り、利用規約に引つかかる可能性がありますので

名言などは感想欄ではなく、メッセージにて私に直接送っていただくか、活動報告のコメントにて書いていただけると幸いです

サンマ味のヨーグルト様、ご協力いただき誠にありがとうございますました

本編の方はマイナーなスタンドばかりだったけどこっちでは強いスタンドも容赦なく

主人公に使わせてあげます（リミッター解錠
あと、好きな能力をどんどん出したいために大量の転生者達を
出した模様

KEY（ほぼ毎日投稿）

目次

ヒロインの状態

ヒロインの状態 その1

1

無印編 しかし原作とか主人公は知らない

一話 嫁さんたちの旦那探索の始まり

8

二話 いつから転生者が一人だけだと錯覚していた？

13

三話 転校生ってその後の生活がうまくいくパターンといかない

パターンがあるよね

19

四話 リアルコナンと化して感動している俺ガイル

23

五話 子ども頃の友達の家に行くときのワクワク感は異常

29

六話 脱、ブラック企業宣言

35

七話 やっぱ、このスタンドチートだわ

40

八話 思いが重い。それはグラ子妹だけではありません。切実に

44

九話 膝ってすりむくと意外とグロいよね

51

十話 原作？知らない子ですね

59

十一話 子供の喧嘩にしてはいきすぎているような

64

十二話 今日は子供のけが人が多いなあ

70

十三話 実の子供からの説教は意外と堪える

78

十四話 頭脳が大人な子供が増えました

87

十五話 アイドルってどうやっておっかけやファンとうまく付き

合っているんだろう

93

十六話 えっ、終わりって何？

98

幕間 お菓子好き。でも食べ過ぎると体が痛い。

105

AS? ああ、オートメーションサービスのことでしょ？

一話 また行き倒れかあ、壊れるなあ・・・ 111

二話 本当に行き倒れだった件 116

三話 体育祭でちゃっかり種目にでないでいたやつを俺は見たことがある 121

四話 俺の知らないところで惨劇が起きたとか 127

五話 体育祭と文化祭ってどっちのほうが好き？ 132

六話 旅行 楽しみ よめ こわい 136

七話 連行される宇宙人の気持ちを思い知った 141

八話 やってしまった でも言い訳はしない 147

九話 野良のエイって釣ったら犯罪だってよ 152

十話 剣を握るのではなく自分が剣そのものになるのだからってお犬ちゃんが言っていた 156

十一話 お仲間が増えたそうで 161

十二話 女性同士のドロドロはおなかいっぱいだよ・・・ 166

十三話 小細工は効かないけど、直球は別 170

十四話 ヲっちゃんや 許しておくれ 愛してる(媚) 174

十五話 今までにあった女性の中でも一番スタイルがいいってどういうこと？ 179

十六話 めでたしめでたし・・・とはまだいかない 184

十七話 プレシアちゃんマジ女神 188

十八話 これは夢だから問題ない 193

十九話 風さん。なんでこれ渡したの 197

幕間 俺のなつやすみ1 くお前のルールはおかしい編く 202

幕間 俺のなつやすみ2 く虫相撲したのか？俺(キンオニクワガタ)以外の虫で？く 206

幕間 俺のなつやすみ3 くトラウマ製造機な風さんく | 210

STS 導入編1 あのトラウマの夏から数年がたちました | 214

STS 導入編2 俺の頭は食い物じゃねえ | 219

STS 導入編3 ムツのゴロウさんもまさか人間に手を食われた

ことはあるまいて | 223

STS 導入編4 プリズンなブレイクをしたい15の夜 | 227

STS 導入編5 ドーラおばさんはかかあ天下の鏡 | 232

STS 導入編6 科学者と化学者の違いがわかる人ってすごくね

| 236

STS・・・聞き覚えがないんですが、それは

一話 管理局とかいう悪の組織がいるらしい | 240

二話 スナッチっていう映画が面白い | 244

三話 そいつらをぶったおせばお給料を上げてくれるんですね？

| 248

四話 101匹ようじよ | 253

五話 101匹のハンターたち | 257

六話 映画版レジアスさん | 262

七話 映画版レジアスさん そのに!! | 268

八話 潜入 遠くの管理局 | 273

九話 宇宙戦艦や(それ以上いけない) | 277

十話 いちもーだじん?これプロレス(隠語)っていうんじゃない

の? | 284

十一話 管理局本部に、さよならバイバイ 俺はこいつと、旅に出

る(ヴィヴィチュウ) | 290

おまけ 誰がお母さんだって?え?全員?ふ、ふーん(震え声)

VIVID導入編1 え？光源氏計画？何を言っているんだヴィ
グリーズ

VIVID導入編2 女の怖さは男のそれと違う

VIVID導入編3 ぱぱー、無職って何ー？

VIVIDっていうバンドが好きだった

一話 学校に知り合いばかりいるんですけど

二話 この子の強さは少年兵ってレベルじゃねーぞ!!

三話 マジレスよくない

四話 この田中!!容赦せん!!!

五話 ああ、やめてえ：俺をベッドまで引きずり込まないでえ：

(寝言)

六話 それいけ！スカさん！

七話 関西弁キャラに狙われているような気がする。

八話 ああ、逃げられない!!

九話 あの日から変わらずに追いかけてきた彼女

十話 武道大会・・・天下一的なアトモスファイア

十一話 エリオ君、バター醤油味のポップコーンとはわかってい

じゃないか

十二話 言い出しっぺの法則ってやつ

十三話 鬼ごっここの始まり始まり

377 371 366

300 304 309 314 319 324 329 334 338 343 348 354 360

ヒロインの状態 ヒロインの状態 その1

高町なのは

昔てんし。今はあくま。そんなレディー。

子供時代はツインテールの髪型に茶髪といったなかなかファンキーな格好の子だった。

様々な転生者達から狙われていたが、下心が特になかった田中君と知り合い、仲良くなつた末に恋心を抱く。なかなかそれを認めまいとしていたがアリサ・バニングスの他の人にとられてもいいの？という一言によつて素直になることにした。

それからは恥ずかしがりながらもアプローチを積極的にしていくことになる。

大人になると、実家の翠屋のマーケティングをしながら店を拡大。中学生にして翠屋の支店を任されるほどになる。

それもこれも、逃げ出した田中君を追うために自由な時間を作るために仕事に打ち込んで自分いなくてもビジネスが成り立つようにしたとか。

女の執念ってこわい。

昔は病んではいなかったが、中学生の頃に突然田中君が失踪。

胸にぽっかりと喪失感を抱えた彼女は人知れず泣いていたところ、彼のこと自分の予想以上に好きなことに気が付き、執着するようになる。

田中君いわく、「なのはちゃんマジ肉食ヘヴィー。」

フェイト・テストロッサ

今も昔もてんし。白い悪魔とは違うのだよ！白い悪魔とは！

この世界では原作と違ってプレシアさんと和解。死亡していたアリシアが復活するなど

おいおい、テンプレ乙と言われそうな状況でハッピーになっている。

子供にしては発育がよく。クラスメイトの男子から意味深な目線を送られてはよく田中君の背中に隠れていたとか。

大人になった今では一番闇が深い子にクラスチェンジしました。

ファイアー・エムブレムでいうと封印の剣のゼフィールぐらいの変貌っぷり。

お前別人だろ!!!と突っ込みたくなるほどの変化である。

電撃を魔法で操るのが得意、というかテストタロットサ姉妹全員がそうである。

バリアジャケットをまとうたびに痴女!!痴女!!と田中君に言われていたが、

見せているのよ、と開き直り彼に迫ることになる。

魔力を流せばすぐに使えるスタンガンを常備しており、彼を気絶させて二人つきりで過ごそうと画策している。ち、ちがう・・・これはただの電動ひげそりじゃ・・・と職質で持ち物検査されたときにそう言い訳したが、自分が女であったことに気が付き泣いた。

警察まで迎えに来てれた田中君に感激して、人前であるのに抱き着いてキスするというおい、お前の頭の中は常時お花畑なのか?と言いたくなるテンションになった。

・
フェイトそのの闇度は世界一いいいいいいいい!!

八神はやて

この子原作からして救いがなさすぎるよお、と二次小説を書いていりりりかる好きなおじさんからもっとも幸せにしてあげたくなるような境遇の娘。

子供のころは家族が事故で死んでいたので一人で生活をしていた。しかも足が不自由だったので、どこへ行くにしても車いすでなければならなかった。

学校に行けずに暇だったので本を借りに図書館まで行っていたが、その時に知り合った田中君と本をお互いに貸しあう仲になった。

事情を察した田中君が、あ艦これ、と冷や汗を垂らしてはやての悲

しみにきがついたのでそれとなく気にかけてなるべく多くの時間を過ごすことになる。

その結果、無印では恋心は抱いてはいなかったが、足を直してもらってから田中君にぞっこんLOVEとなる。

こっちむいてー♡とデレデレになる。

でも、勝手に浮気したらNOだそうです。

大人になると、今までのショートカットの髪型から長髪にするようになる

なんでもお酒を飲みながらヴォルケンズに実はロングの髪型のほうが好みなんだ、と彼がうっかりいったのを聴いてしまい、ちよつとへこむ。

だったら伸ばしてもつとメロメロにしたる!!

と彼のためだけに髪を伸ばしはじめ、腰ぐらいまで伸ばす。

過去の寂しい経験からか、一番彼に甘えたがる。

それをわかつている田中君は彼女を何も言わずに受け止める。

そのありかたは、おおよそ夫婦といった言葉を超えた何かの絆であつた。

でも病んでます。

アリサ・バニングス

だれがくぎゆうよ!!、だそうです。中の人的にはそうだけどき。

金髪、ツンデレ、高飛車、お嬢様といった、おうお前別の作品でヒロインやったほうがええんちゃうん?というもう恋愛ゲームに出るために生み出されたんじゃないやなかうかというレベルの設定を持つ女の子。

子供のころは、大人っぽく、面倒見がいい姉御肌みたいな感じの、精神年齢が高く、よくもわるくも周りから浮いていた娘だった。

そんなときに自分と同じレベルの会話をできる異性に初めて出会い、時を重ねるたびに強く意識していくことになる。

ち、ちがうんだから!!

と言ってじぶんの気持ちをごまかそうとしたが、結局、自分の家に

彼を呼んで自身の心と向き合うことになり、それを受け入れた。

それからは不器用ながらも彼にそれとなくアピール。

直球で実に男らしいです。

大人になると、実業家の父の後をついで会社の経営者となる。

子供ころからそうした仕事に携わってきたので大した障害もなくスムーズに引き継ぐことができた。

会社の後をついだ理由は、早く自分なして会社が動くようにして彼との時間を増やすためだとか。

お金はまかせろー(バリバリ)

彼が自分の元から離れたときにはとつても悲しんだ模様。

もう、ツンツンしないからあああああつと泣いて素直になると固く心に誓ったようで、再会した時に田中君は思わず「誰？」と尋ねたほど。

結構病んでるけど、ときめもの爆弾みたいのためこんだものが爆発しないようにしていれば大丈夫。

爆発しちゃったら一緒に死んであげましょう。

月村すずか

その意味ありげな視線を見ると思わずヒエ、と言ってしまったくなるヘアバンドが特徴の女の子。

子供時代はアリサと同じく精神年齢の高さから周りの子供とうまく溶け込めず、こどくだだったが、アリサ、なのはと知り合い、親友となる。それからは、保護を求めてきた田中君と屋敷で知り合い、自分と同じ年齢なのにあそこまで考えて行動できるなんてすごい、と彼を気にかけるようになる。本の好みがあったのも大きかったようだ。

無印編ではまだ自分の気持ちを自覚できていなかったが、後半の学校の旅行で決心を固める。

自分のキスマークを彼にこっそりつけてマーキングするなど、将来が心配になるほどの魔性の女っぷりを発揮した。

また、自分の姉に事情を説明して外堀を埋めてもらい、中学生で勝負を決めようとしていたところ、彼が失踪。

黒い笑みを浮かべながら、田中君によく似た人形に話しかけている

彼女の姿が確認される。

再会した時には意外としおらしく、きゅつと彼の服の袖をつかんで「・・・さびしかった。」と甘えた。

というのはちよつと演技が入っていて、ほかのみんなが彼のことを責めるだろうな、と予想して自分は反対に全く責めないようにして癒せば私に溺れてくれる、と打算していたから。

今では家庭科の先生として彼と一緒に学校で幸せそうに教鞭を振るっている。

そろそろ彼との子供がほしいなーとか。

ヴォルケنز

やあやあ、久しぶり、と言いたくなる粹。

ザツファイーは実は本作で一回もしやべっていないという空気っぷり。

泣いてもええんやで。そのほかの三人は田中君をよく思っている・・・けど

ちよつと恥ずかしいなーみたいな思春期特有の異性との距離感で接する。

最近、ほかの娘たちに頼んでおしやれに磨きをかけるシグナムと、化粧をしてみるヴィータ、夜の営みの勉強をしているシヤマルさんの姿が見られた。

でも、まだ気持ちを伝えるのは恥ずかしいようです。

結ばれるのはいつになることやら。

プレシア・テストアロッサ

かつては狂気のマッドサイエンティスト。今ではただの女の子。

いやあ、あなたの人生ジェットコースターみたいですね、と出版社から自伝のオフアアがきそうなくらいアップダウンが激しい人生を送ってきたお人

50代のころに、何で私あんな痴女コスしていたのかしら・・・と反省する。

周りからしたら今更？みたいな感覚だったが。

彼とガチでバトって凹された後に娘をはいはいテンプレテンプレ、と言いたくなるご都合主義で蘇生、しかも自身の体調も完璧に治してもらい、若返らしてもらったのもう頭が上がりません状態に。

彼を二人の娘の父として迎えるのはどうかと真剣に悩み始めた。

わかいって素晴らしい!!

失踪した彼から唯一会いたい、というメッセージをもらったときには心臓がバクバク跳ねたとか。

君の科学力を借りたい、と言われて思わずビンタした。

ばか、だそうです。でも彼を見捨てはしない愛情深き女性。

今は同じくヒルダ魔導学院に通って、魔導を教えている。

かつての自分と同じ過ちを繰り返すものが一人でも減ることを願って日々、研究を進める。

娘と彼を取り合うこともあるが譲れない模様。

過去に娘を失った経験から病み度は未知数。暴走したらどうなることやら。

アリシア・テストアロッサ

私おねえちゃんだもん!!と胸を張って言うが、周りから見たらフェイトそのほうが大人に見えるみたいで納得いかない模様。

彼に生き返らしてもらったことを知ってからは、だいしゆきホールド、三姉妹全員で彼のベッドにもぐりこむなどの積極性をもって求愛する。

しかし、いやあ子供の戯言でしょ、とあしらわれてしまうがそれでもあきらめなかった。

彼が失踪してからは泣くわけでもなく、落ち込むわけでもなく

絶対彼は帰ってくる、と確信を抱いてお淑やかさを獲得するためにいろいろと経験を積む。

生来の明るさと、静かな落ち着きの両方を身に着けた魅力的な女性へと成長し、

彼を一番驚かせることになる。

彼と結ばれたときには私の想いがやっと実った!!と昔の頃みたい

に彼に抱き着いて喜んだ。

無印編　しかし原作とか主人公は知らない
一話　嫁さんたちの旦那探索の始まり

とばされました

どこどこ？

・・・・・・・・・・・・・・・・

とりあえず状況確認

俺の格好はなぜか20代後半から10歳程度まで退行している
さつきまで嫁たちに搾り取られていたはず

そして・・・・・・・・

「旦那さま、いかがされますか」

「どうする、マスター」

スタンドのヨーヨマツとサーフィス（嫁の艦娘のグラフ・ツエペ
リンの姿をコピーしている）が隣で話しかけてくる

とりあえず一人じゃないってことは力強いが・・・・・・・・

金がない

家がない

まずい、ミニ四駆の某ホームレス小学生みたいな生活はイヤだ
「私がキャバクラにでも行って稼いでくるか？」

そうこちらを気遣って言うてくるグラ子妹（サーフィスの名前）
しかし

嫁にそんなことをさせるわけねええええええええ!!

グラ子妹とは正式に結婚しているのでそんなマネをさせるわけが
ない

考える

必死に

そして気が付く

今日のスタンドを確認していないと

そして出してみると

こ、こいつは――――（CV 高木渉

.....

「じゃあね、なのはちゃん」

「またね、なのは」

「うん!!またね!!二人とも」

友達二人と別れ、家に帰る

あく今日も楽しかったなー

でも.....

「なんだか変な夢をみたなー」

男の子がもやもやしたお化けに襲われて、フェレットに変わってしまっただ

そんな夢を昨夜見たのだ

なんか不思議だな
すると

視界の端を何かを通り過ぎたのに気が付く

結構素早いスピードだったので気が付かなかった

よく目を凝らしてみると

なんだかがちつちやな蜂みたいな生き物が、切手やコインとかを持ち歩いてた

な、なにこれ.....

「ミツケタゾ.....ししし」

そういつてどこかにとんで行ってしまおう

ポカーンとあつけにとられる私

・・・・・・・・・・・・・・・・

はっ!!

「追いかけてみよう!!」

今思うと

これが運命の始まりだったのだろう

彼と出会ったのは

・・・・・・・・・・・・・・・・

おっしやああああああああああ!!

ハーヴェスト最高おおおおおおおお!!

今、俺たち三人は裏にある山にまで来ている

スタンドの中でも最強クラスの性能を持つといわれるハーヴェストの高性能を存分にいかし、自重せずに金になりそうなモノを片っ端から拾わせていく

まだ、スタンドが入れ替わるまで時間がある

このまま変わるまで拾わせ続けてやる!!

「ご主人さま。換金すれば少なくとも数十万円はいきます」

「ごっちもだマスター」

ヨーヨツマとグラ子妹の二人が数えてくれている

原作で仗助がハーヴェストの使い手であるしげちーにやらせた手段だ

切手や、チケットなど金に換えられそうなものをかたっぱしから拾わせてきて

くる

うははははははははははは!!

笑いが止まらねー!!

こんな大金持っている小学生なんていないだろうなああああ

と、ハイになっていると

何体かのハーヴェストがきれいな宝石を持っていることに気が付いた

へっ？

お、おいおい。宝石が落つこちているなんて、質屋が貴金属の輸送中に落としまつたのか？

厄ネタっぽいが一応これもしまっておく

すると

「このへんなの」

という子供のこえが聴こえてきた

マズイ!!子供!?!

俺のスタンドはスタンド使いじゃない人間にも見えるタイプ!!

ばれたら面倒だ!!

そう考え、切手や、金目の物を全部グラ子妹とヨーヨツマと俺でもち、ハーヴェストで俺たち三人を木の上まで運ばせた

ここならばねえはず

すると、ランドセルを背負ったまだツインテールの小学生の女の子がやってきた

しきりにあたりを見回している

「あれ〜?ここつちにあの変な生き物が来たとおもったのに〜」

おいおい、ハーヴェストを追ってきたっていうのか?!

仮にもスピードBのスタンドだぞ!!

「でも勘違いだったのかな〜」

そうだよ（便乗）だからさっさと・・・

その時、

俺の腕の中で抱えていた宝石が落ちてしまう
がああああああ

とさつと女の子の横に音を立てて落っこちる
それに気が付いた女の子がそれを拾いあげる

「なんだろう、これ」

そして、彼女が上を見上げると

大量のハーヴェストに支えられている俺と目が合う

あ

その目は、面白いものを見つけた子供特有のものだ
ちよ、ハーヴェスト、俺を運んで・・・
気が付いた

あいつら二人は女の子から見えない位置にちやつかりいやがる
うらぎりやがったなああああああ

ヨーヨツマツはにたりと笑い

グラ子妹は胸をはだけさせ、「後で私のこと好きにしていいいから」
と顔を赤らめて言ってきた

許せる!! (モンスター教授

とふざけつつ、この状況をどうしようかと考えるのであった
続くかも

To be continued?

二話 いつから転生者が一人だけだと錯覚していた？

「へー…この子たちって君の出したものだー」

幼女には勝てなかったよ……

と白く燃え尽きながら自分のスタンドの能力で

目の前にいる子供を楽しませてやる

くそう

あの二人はきの上から降りてこないし

俺一人で何とかするつきやない

それとなく会話から様々なことを聴いてみる

ここはどこ？

………

今日あった男の子は不思議な子だった

裏にある山まで珍妙な生物を追いかけていったら

私と同じくらいの男の子がその生物を操っているのを目撃した

とんだり跳ねたりもするし、いっぱい出てきたりしてすごかった

なんでも超能力みたいなので、いろいろなことができるのだとい

う

お金になりそうなものを探して生活費を稼いでいたのだという

なんだかハードな生活を送っている子だなあ……

私とほとんど変わらないのに

そうして、私は彼の顔に全く見覚えがないことに気が付いた

「どこから来たの？」

そう聞くととても気まずそうな顔を始めた

え……。聞いたらまずいことだったのかな

そう心配していたが彼から事情を聴いた

………

ここがどこかある程度はわかった

少なくとも日本という同じ国で、海鳴市という市の一つらしい

で、目の前にいる娘は高町なのはちやんというらしい

ホッポに似ていてとても人懐こい娘だ

話していても、この子がいい子なんだろうな、と感じさせるあたかな雰囲気だ

しかし、事情を説明しようにも、こんな子供に本当のことを話していても

どうなることやら

一芝居打つことにして、ひとしきり会話をして離れる

何とかごまかせたとな思うが・

また彼女がやってくる前に別の場所に移動するか

そう決意するのであった

ちなみにヨーヨツマには全身を隠せるコートを買ってやった
さすがに見た目が見た目だからな

ウエザーと一緒に戦ってからはもう家族みたいなものだから
こいつが悪意にさらされるところは見たくないし

すると、ヨーヨツマがわかっておりますよ、みたいな顔でこちらを
見てきたので、膝蹴りを顔にぶち込んでおく

もつとおおおおおおお、とか言い出しているのを無視して
グラ子妹と拠点にできそうな場所を探す

さつき、ハーヴェストを町中に放したときに、捨ててられていた地
図があつたらついでに撮ってくるように命令をしておいた

幸い、500匹いたので何体かはもってきてくれていたようだ

お金を換金できる場所と、今日の宿を求めて行動を開始するので
あつた

裏山であつた子と出会って、お土産をもらって帰る

なんでもさつきのあの子たちが21個宝石を拾ってきて、

そのうちに一つを私にくれるといった時にはさすがに困惑した

でも、ただのガラス細工だから心配しなくてもいい、と聴いてから
安心して、受け取ることにした
きれいだなあ

また明日、あの子にあっていってみよう
そうして帰ろうとしていると

「よう、なのは」

と複数の男子小学生のグループとであう

あ、同じクラスの子たちと、同級生の子たちだー

「こんにちはー」

そういつて挨拶をにっこりと笑って返す

なんか、みんな「くあああああ．．．」

とか悶絶したりしてるけどどうしたんだらう

「今帰り？」

「うん、ちよつとね。そつちもっ？」

「ああ、よかつたらみんな帰らない？」

そういわれ断る理由もないので一緒に変えることにする

それにしても大所帯だなあ

きつと学校から帰る途中でいろいろな場所にみんなによって帰っ
ているのだらう

色々とみんなが話しかけてくるけど、私の頭の中にはさっきの不思
議な男の子のことと、

能力のことが浮かんでくる

皆で仲良く帰りながら、私は一人物思いにふけていた

．．．．．

「帰ったか．．．」

俺たちは高町なのはどう同級生の女の子と一緒に帰っていた

実は俺たちは普通の人間じゃない

俺の名前は佐藤

いわゆる輪廻転生の生まれ変わりを果たした、前世の記憶を持つ人

間である

過去の文献等でも調べてみたが、こういった怪奇現象の話は伝記などにも多く

残されており、俺たちもそれにもれず、転生というものを果たした人間なのだと気が付いた

自我が目覚め始めたのはここ数年のことだが

そして、もう一つ秘密がある

「で、今日目覚めたのは何人いるんだ？」

「隣のクラスが2人、上級生のクラスが3人つてところだな。やけに大人びている雰囲気の奴らほかにもいるからその可能性は高い」

「俺の能力で調べたところ、宇宙空間みたいところでジユエル・シードを輸送している

部隊の輸送艦が墜落して、この海鳴市にばらまかれたところまでは見えた」

目が覚めたやつらは何かしらの超能力に目ざめている

隣にいる鈴木は、ドラゴン・ボールの世界の住人のような戦闘能力を持っていたし

同じクラスの広田は、無限に成長し続けるゲッターロボを召喚できる

そして俺は

「なんで型月なんだろう」

あのFATEシリーズで有名な英雄の力を使えるようになっていた

ギルガメッシュの力まで使えると知った時には唾然としたが

今はその力を十全に使いこなすために図書館にいつて、過去の英雄の

伝説を追っている

ギルガメッシュ叙事詩はもちろん、アーサー王の伝説

クーフーリン、ヘラクレス、カルナ、イस्कन्दルなど、調べれば

調べるほど

面白い

そして、そういったものを読み進めて、理解が深まったらその人物の力を

使えるようになった

きつとそれが能力を使えるようになるための条件なんだろう

今までは一人だったが、同じぐらいの時期に、急に大人び始めたやつらが出てきて

もしや・・・と思い、カマをかけてみたらビンゴだった

同じ秘密を抱えているモノ同士、みな気が合い、よくお互いの家に行って

スーフアミや64をやっている

なつかしさに泣きそうになった（何人かはカービイのスーパーデラックスのデータが消えていて違う意味で泣いていたが

今日もこれから友達の家に行って存分に遊ぶつもりだ

そして、みんな隠しているつもりだろうがお互いにバレバレの秘密がある

高町なのは、というこの物語の主人公のことが気になっていることだ

この世界は魔法少女リリカルなのはという俺たちの世界に

あった創作物の世界と全く同じであり、その主人公である

彼女の純粋さに惹かれていた

そして、同じクラスの重要人物、アリス・バニングスと月村すずかという

娘が気になっていることも

クラスには気立てがよく、かわいい子がいるがこの三人は別格だった

ま、今はそれよりも

「今のうちにちやんと勉強しといて、みんなMARCH以上の大学は行けるようにしようぜ」

「俺、前世はFランの大学で就活にてこずったからなあ」

「僕はそもそも工業高校で高卒だったよ」

わいわいとみんなそれぞれの人生を振り返る

せつかくもう一度人生をやり直せるだったら、かわいい子を嫁にも
らって

面白可笑しく人生を送ってもいいよな

ボールあて鬼の片づけをする奴は、ここでも最後にボールに触つて
いた奴なんだなあ

と小学生のルールを感慨深く懐かしみながら、帰るのであった

三話 転校生ってその後の生活がうまくいくパターンといかないパターンがあるよね

戸籍持っていないなくてカプセルホテルにすら泊まれなかったというくそう

仕方がないので今日はキャンプセットを購入し野宿をすることにする

ハーヴェストは12時になって能力が入れ替わるまで

金目のものを拾わせ続けている

すぐ近くではヨーヨツマツとグラ子妹がテントを張ってくれてい

る
警察に補導されて面倒なことにならないように、人があまり来ない場所に野営地を設ける

今の俺は小学生と同じだからな

「マスター。提案があるのだが」

はい、なんだねグラ子妹くん

「とりあえずどこかの保護下に入るのはどうだろうか」

具体的には？

「この市の勢力図を調べていたら、どうも月村とかいう家系が実質的な
支配者の様だ」

そこへ取引を持ち掛け、こちらの身の安全を保障してもらおうと

「そういうことだ。我々に利用価値がある、とううまく思わせられれば

生活も安定するだろうしな」

となると、今俺が持っているこの金目のものと現金を

みかじめ料として払っておくか

「いくつかは当然残しておくとして、どれくらい払っておく？」

三人分の住居確保してもらおう提案するんだから

今持っているうちの100万円はきつかりあげちやうか
それと、このきれいな宝石も

「それ、本物なのか？」

前世でサラリーマンやっていた時にこういったものをおじいちゃんとおばあちゃんがよく

持ってたからわかるけど、少なくとも贋作ではないな

あの女の子には気をつかって偽物だとは言っておいたが

グラ子妹と打ち合わせをしながら商談の内容を固めていく

.....

あれから数日たって、あの男の子を探しに行ってみたけれど

結局一度も会えていなかった

またいろいろとお話してみたかったが残念だ

周りにいる男のたちはいろいろと話しかけてくれるけど

あまり耳に入ってこない

アリサちゃんとすずかちゃんに話してみようかな

そんな風に考え事をしていたら先生が入ってくる

「おはよー」

おはようございまーすとみんなが返事する

「実は今日はみなさんにおしらせがありまーす」

えーなんだろー、と騒がしくなる

「転校生の男の子がきまーす」

ええええええええええつとどよめく

「それじゃあはいつてきてねー」

ガラガラつとドアが開き、中に入ってくる

そこには

数日前にあつたばかりの子が入ってきていた

あつ、あの子だ

「じゃあ、自己紹介してもらえかな？」

「田中たろうつていいいます。好きなことは本を読むこととスポーツです。」

よろしくお願いします」

ぺこり、と礼儀正しく頭を下げてお辞儀をする男の子

周りの子たちは、「まつ、フツメンだね」とか

「男かよー」とか言っていた

友達のアリサちゃんとすずかちゃんの反応を見てみようとしたら

なんかすごく驚いている

えっ？知り合い

.....

俺たち転生者のクラスに転校生の男がやってきた

見た感じだと普通の子供っぽいな

ちよつと雰囲気の特異だが、ほかに目立ったような点はない
シロ、と判断する

それよりも今日の献立は何だったか確認しなくちゃ（使命感
プリンとかがデザートだったら戦争になるぞ・・・!!

佐藤は、田中が大人の間人であることには気が付かなかった

.....

月村さん家にお邪魔して、正面から取引を持ち掛けた

筋を通して挨拶に向かい、対価を差し出したら要求そのものは

あっさりとおった

グラ子妹とヨーヨツマツは月村さんのところで紹介された仕事を

行いながら

当面のお金を稼ぐことになった

でも、その顔は家族もほかの身よりがいなく、生活費すら自分たち
で稼いでいることに

多少の同情を感じ、そんな子供からお金をうけとるのにも躊躇して
いる感じだった

うわー、いい大人だな

良心をちゃんと持っている社会人っていうのは大切だからな

対談のなかで不思議なことを聴かれた

「夜の一族という者たちを知っているかと」

吸血鬼の伝承ですか？と答えたら、あっさり会話が終わった
いったい何を聴きたかったんだろう

そんな風に、小学生を20代後半まで人生を生きた自分がやりな
おす

ことになる事実から目をそらすために考える

給食が終わった時に、飲み残しの牛乳を大食缶に入れるの気持ち悪
かったな

と思い出しながら無難な自己紹介を終える

教室全体を見回していると

茶髪のツインテールの子供と目が合った

あっ、この子・・・

そうして気が付く

ほかにも二人ほど見知った顔がいることに

「じゃあ、一限目はみんなで校舎案内の時間にしましょうか」

さんせー、というみんなの声を聴きながらこれからの

学生生活をどう送ろうか考えるのであった

あっ、今日の給食は一か月に一回のカレーの日だ

やったぜ

四話 リアルコナンと化して感動している俺ガイル

「・・・で、なんであんたがここにいるのよ？」

そういつてくる金髪の強気っ子のアリサちゃん
横にいる二人もそれを聴きたがつているように見える
今は自己紹介が終わった後の休み時間
静かな図書室でみんなでお互いに本を勧めあいながら
話している

でも、アリサさんや、マルセル・プルーストとか
ユゴーとかちよつと古典好きすぎない？

すずかちゃんは反対に日本の小説好きで、

白い巨塔とかで有名な山崎豊子とか、

容疑者Xの献身とか薦めてきた

ああ、容疑者Xの献身は映画館で見て、

原作もみたなあ

ガリレオシリーズは全部見たけど本当に好きだったわ

高町さんは年相応というか、ズッコケ三人組とか、

パスワード探偵団とか懐かしいものを引っ張り出してきた

これも10冊以上読んでいたけど終わり方しらないんだよな、

と思いつつ、いい機会だから読み直すかと思うのであった

ここの来た理由を述べる

知り合いが学歴的にも小学校中退はマズイ、

と言つてこの学校に通わせてくれるようにしてくれただと

説明する

ふーん、と返しそれ以上は追求しようとはしてこない

年齢以上に大人びている子だなあ

と思いつつも次々と浴びせられる質問に答えていく

あらかた質問に答え終わったところで高町さんがすごい

そわそわしているので話を聴いてあげる

耳を貸してほしいといわれ貸す

「昨日のあの能力つてやっぱりみんなには内緒にした方がいいの？」

できればそうしてもらえると助かる

俺がああいった能力を持っていることを馬鹿にする奴も出てくるだろうし、

まあ、隠すに越したことはないと思う

「二人っきりの秘密ってやつだね」

と笑って茶化してくる

このぐらいの年齢の子ってこういういった異性に対して強く興味、関心を

持ち始める時期だったな

接し方を考えないと思いい、これからのお子ちゃまライフを計画する

そういえば三人とも頭いい？

「私はまあ、トップだけど」

「なんで？」

テストとか対策したいんだけど、あまりこの学校での

勉強レベルとか知らないから今のうちにやってきたくて

「なかなか殊勝なところがけね。すずかとなのはの3人でよく

集まって勉強したりしているからあんたも来てみる？」

あつたばかりだけどいいの？

「少なくとも悪い奴には見えないわ・・・本の趣味も合うし」

君たちのおすすめの本どれも面白そうでいいな

本ってどれから読もうか迷っちゃうもんなあ

「それわかる。積読しちゃうよねー」

ねーと同意する

とりあえず知り合いが居てよかった

女友達はこの子たち経由から知り合って仲良くなっていくとして

後は同性の子とどう仲良くなっていくかな

そして、体育の時間があると聞いてあることを思いついた

.....

よう、と転生者仲間の鈴木に挨拶する

やあ、佐藤、と返してくる

「次の時間は水泳だな」

「もう夏だもんね」

女子が着替えている時は男子は教室の外にいるルールがある
間違えて入ろうものなら女子から総スカンをくらって

二度とこの学校で生きていけないことになるからな

「俺なんて着替える時間が無くなることを考慮して

家からはいてきたぜ」

「僕も実はそうしてきた。女子の着替えが長引くと普通に

僕たちが着替える時間が無くなっていくからね」

バスタオルや着替えを入れたバッグを担いでプールサイドまで向
かう

「で、例のあれはどうだ?」

「けんもほろろ。今までは反応を確認できたんだけど・・・」
けど?」

「急に反応が消えちゃったんだ。確か全部で21個だよね」

ああ

「その21個全部が裏の山に集まったと思ったら、20個の反応が消
えちゃったんだ。」

そのうち一個は市街地のどこかにあるみたいだけど」

誰かが集めているっていうのか?」

「ありえない話じゃないと思う」

その言葉を聴いて、原作でジュエルシードの輸送を任されていた
ユーノ・スクライアの

ことを思い出す。奴が集めたのなら話は楽だが・・・

「市街地に一個だけ残すようなマネを、わざわざすべて命がけでジュ
エル・シードを探している彼がする理由がない」

その通りだ

考えられる可能性はもう一つ

「テスタロッサか?」

原作でも、ジュエル・シードを狙っていた、悪役の一人

クローン技術を使って生み出したフェイト・テスタロッサという

少女を地球に派遣して回収に当たらせていた

本人が来ない理由はおそらく病の床に臥せているからだ
年齢も50台と高齢で病気を患わっていて、体調はあまり思わしく
ない

「これも違うな。なぜならテスタロッサも21個集めたら、もたもた
せずにさっさと帰ればいい」

最後の可能性

「第三者の介入」

声が重なる

「仲間集めて放課後にゲームしながら対策しようぜ」

「あつ、僕マリオパーティーやったことないからやってみよう」

「おいおい、昨日みんなですごしたばかりじゃねえか」

「今日は2だからノーカン」

そういう鈴木をみてしようがない奴だと考える

高町なのはももうすぐ魔法に目覚めて原作が始まる

ま、俺たちがいけば原作よりはハッピーなエンドにはなるだろう

そう考えて、みんなですごしたまで向かうのであった

.....

「すげーいい!!」

俺こと田中太郎はみんなと仲良くなるためにプールでの
レースに参加している

最近の小学生に底力まじばねえ、と畏怖しつつ

皆でリレー形式で

7人×4チームのレースだ

そして俺は今、アンカーをやらしてもらっている

いいところをスポーツで見せて、運動神経があるところを

見せておくと、クラスの中心的な奴らとは仲良くなりやすい

そう考えたうえでアンカーだった

「田中くん、頼んだ!!」

そういわれ、飛び込む俺

うおおおおおおお!!! スイミングスクールに

三年間行っていた男のクロールをなめるなよおおおお!!
力を入れすぎず、リラックスして最適なフォームで泳ぐ
ほかの2チームとは大差をつけられた
しかし

「まだまだああああああああ」

素晴らしいながら追いかけてくる男子

確か佐藤って子だ

がむしやらの泳ぎではなく、無駄のないスマートな泳ぎだった

この子経験者か?!

負けるかあああああ

当初の仲良くなるために体育の時間を頑張る、という最重要

の目的を忘れて勝利への執念を燃やす

ガッツあるな・・・!!

そして、ほぼ同時にゴールにつく

・・・・・・

「オマエやるじゃん」

ケラケラと笑いながら肩をバンバンとたたいてくる佐藤くん

いやー。前世の知識を活かしてこれとか君ももしかして

同じ境遇なんじゃないの?

と心の中で思いつつ、一緒に給食を囲む

「俺の名前は佐藤健。あつ、俳優の佐藤とは似てないけど、雰囲気の違い

ケメン度には

自信があるぜ！」

と明るく努めて言ってくる

詳しいな

隣にいる眼鏡の男子が話しかけてくる

「僕の名前は鈴木順。よろしくね」

よろしく、と返しながらカレーを食べ続ける

いやー、雰囲気もいいクラスでよかったー

男子はこの二人が

女子はあの三人組が主に中心になっているようだ

クラスの中心的存在と仲良くなれたことはラッキーだった
前世だと俺の学生生活はスクールカーストの底辺だったからなあ
カーストの天辺にいる奴らも案外いい奴が多いと知って
ホツとする

「そういえば田中。転校してきてそうそうだけどテストあるの知って
いるか?」

マジで

「5科目のテストだね。僕たちはちゃんと勉強しているから毎回平均
90点以上キープできているけど」

ちよつとした時間にあの三人と勉強する約束しておいてよかった

そう思いつつ牛乳を飲む

うえっ、なんか微妙に給食の牛乳ってぬるいな

「もし対策とかしたかったら言ってくれ。できる範囲だったら助ける
からよ」

そうニカつと笑って宣言する佐藤くん

二人ともいい子だなあ

談笑にふけりながらみんなで仲良く給食を取るのであった

放課後はあの三人とどっかで勉強すつか

グラ子妹とヨーヨツマに連絡入れておかないとな

To be continued

五話 子ども頃の友達の家に行くときのワクワク感 は異常

学校が終わって三人と一緒に遊びに行く

誰の家に行こうか考えていたら高町さんがうちにきてほしい
と言ってきた

なんでも地元だと有名なデザート屋さんだという

ま、せっかくだし行くか、と思いつつひとまずうちに帰る
そして、そこで少々問題が発生する

家に帰るとは言ったが今現在俺とスタンドたちは月村さんに
用意してもらった住居にいる

マンションの一室で部屋が中に5部屋ある高級な物件で

三人で暮らしていくには申し分ない

月村邸のすぐそばにある建物だ

そして、何に頭を悩ませているのかというと

「田中君」

そういつて俺の家の前で待っている彼女

月村すずかちゃんだ

なんでも、月村家の娘さんのひとりだそうだと

当主を任されている月村忍さんの妹さんらしい

実質的なパトロンの妹さんだと思うと気があまり休まらず、ハラハ
ラする

前世でサラリーマンやっていたときに、大口のお客さん相手に
慎重になったときのことを思い出す

話がよく合うことが分かっていろいろとうちに遊びに来ることが
多い

グラ子妹と夜戦しているときに来られた時には本気であせったが
「あの本どうだった？」

貸してもらった本はその日のうちに読むようにしているの、
次の日にあの本面白かったよー、と言えるようになってい
そういつて本を返すとすぐに次の本が来るのはびっくりするが

「よかったー。田中君推理ものとかも好きなんだね」

探偵ものけいでは特に有名なシャーロックホームズを貸しても
らった

阿片狂いとは思えない主人公のさえわたりにびっくりした

妹ができたような気持ちでほっこりする

支度をすませ、書置きをのこし、家のカギを閉めて出る

友達の家にお邪魔するとなったらお菓子の一つぐらい持っていく
か

そう考え家にある万人受けしそうなお菓子を持っていくことにす
る

「なのはちゃんのおうちのお菓子はとてもおいしいんだよ」

シュークリームふわふわー。といてうれしそうに話す彼女

ああ、やっぱり子供はいいもんだわ

結婚はしていたけど子供はまだいなかったしな

そして、連れられてついたお菓子屋は翠屋と書かれていた

おお、店の内装センスいいな、どんなお客さんがターゲットなんだ
ろう、

と前世の職業病を發揮して考える

「なのはちゃんとアリサちゃんももう待っているみたいだから早く行
こう」

背中を押されながらも進む

中に入ると何というか、居心地の良い空間だった

「こんにちはー」

すずかちゃんに続いてあいさつする

「あら、すずかちゃんいらっしやい。あら、そちらの子は初めてよね
？」

はい、初めまして。今日転校してきた田中太郎と申します。
これ、お菓子持ってきたんでよかつたら食べてください。
「あらあら。うちのなのはと同じくらいなのにしつかりしている子
ね。」

アリサちゃんももう来ているわよ」
上に上がってもいいから、と言われ、いくつかお菓子をもらってな
のはちゃんの

部屋まで上がる

こんこん、とノックしてうかがう

田中と月村さんですけどー

入ってー、と言われ中に入る

中はとてもきれいに整頓されており、ベッドのそばのテーブルでは
二人が

お茶とお菓子を食べながら座っていた

「おまたせ」

おじやましませ

そういつて二人でテーブルの近くに座る

「じゃ、あんたの学力がまずどれくらいか測るところから始めましょ
うか」

そういつて、基本的な教科書の問題をやるように言われる

三人は教科書の今やっているところの復習と予習をやるようだ

前世では普通レベルの大学に行っていて、本を読み続けていたから
大丈夫

そう考え、問題に取り組むのであった

.....

「おっしや、3V S 1のミニゲームだ!!死ね一位いいいいいい!!」

「ちよ、このミニゲーム一人側不利過ぎない?!!」

4人でゲームに興じる

結局鈴木の要望通りマリオパーティ2をやることになった

ちなみに後の二人は渡辺と、遠藤という同じ転生者のクラスメイト

だ

「旗揚げハイホーとか懐かしすぎい!!」

「ちよ、旗上げるスピードやべええええええ!!」

絶叫が部屋に響き渡る

「で、そろそろ例の原作が始まるんだろう?」

そう聞いてくる渡辺

「ああ、もう始まっている。ジュエルシードがこの市にあるのは間違いないからな」

鈴木が能力を使って調べた情報を交換する

「で、どうすんの?どうやって介入すんの?」

「それなんだがな。俺たちは高町に気がある。それはみな同じだな?」

皆が同意する

「こうして同じ転生者同士争わずに、まったりゲームやりながら就職の準備を続けているわけだが、高町なのはフェイト・テストロッサと戦うまでは傍観でも構わないと思っっている」

「その心は?」

「二人同時にプレシア・テストロッサから守っていいところ見せて

惚れさせようぜ」

きゅぴーんと目を輝かせてそう断言する

「問題はだ。ほかにいる転生者たちだな」

テレサで鈴木のコインを23コインごっそり奪いながら言う遠藤

「俺たち四人は基本味方チームの方についているけど、悪役のほうにつく奴らだっている可能性は高いだろうしな」

50コイン払ってテレサでスターを鈴木から盗みながら進める俺

「ていうかなんで僕ばっか集中狙い?!」

「オマエ対人ゲームあんま慣れてないだろう」

「一位に早くなってヘイトを稼ぎすぎだ」

そういつてうぐう、とうなる鈴木

「じゃ、あとはそれぞれの能力を使いながら原作キャラを守っていく方針で」

おーと、気の抜けた返事をしながら次はスマブラやろうか、ボンバーマンをやろうか
もめる

彼らの思い人がどこかの馬の骨とも知れぬ男と仲良くしているのには気が付かずに

ゲームを楽しむのであった

.....

「82点。なかなかあってところね」

ま、私にはかなわないけど。ふふーん、と胸を張ってどや顔される。うーん、まあ思ったよりは学力を維持できていてよかった。

「基礎はできているから、あとは苦手な個所を強化して、全体の底上げね」

さっそくアリサちゃんに教わりながら問題を解いてく

まさか、精神年齢20代で小学生に勉強を教わることになる

は.....

そのまま解き続け、みんなの今日の分の勉強が終わった

「はい、ご苦労様。あとは何かして遊びましょ」

「あ、じゃあ私田中君のことが聞きたいな」

やべえ、ガールズトークの餌食になる、と思わず身を固くする

「女の子が集まってやることと言ったら恋バナよね」

そういつて意外とノリノリで会話を仕掛けてくるアリサちゃん

きみ、結構話せるタイプだね

「じゃ、ずばりききましょー。この中の3人だったら誰が一番好き？」

「へえあ?！」

「.....!?!?」

真っ赤になつて慌てる二人と興味津々に聞いてくるアリサちゃん
くそう、逃げ道はないのか

今日のスタンドで何とか切り抜けられないか

はやくはやく、と目線でせかしてくる三人にかなわず

あらいざらいぶちまけるのであった

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

六話 脱、ブラック企業宣言

ふー、遊んだ遊んだー。

そして三人にいじられたー

全くどうして女子って噂話とか好きなんだろうな

家に帰ったら三人から薦められた本を読んで、グラ子妹といたして寝るとするか

そう考えていたら

なんかオコジョヨ？みたいなのが無残に打ち捨てられている

保健所に誰か連れてけや

と突っ込みつつも拾ってやる

「ノックしてもしもくくくくし」

ゆさ、ゆさと揺さぶって生きているかどうか確かめる

お、もぞもぞと動いた

喉元に指をあてると呼吸をしているのを感じる

死んではいないようだ

しゃあない

「近くの獣医さんのところまで連れていくか」

ナマモノを預けて家に帰った

.....

「そろそろだな」

「うん」

原作キャラのユーノ・スクライアが高町なのはに拾われているであらう

時間帯を見計らって原作開始を待つ鈴木と俺

渡辺と遠藤は別の思い当たる場所で待機してもらっている

にしても

「おっかしいなー。原作だともう拾っているはずだよな？」

一向にその気配がない

遠くから道を見ているオコジョらしき生物いない

「もしかして、バタフライエフェクトみたいにちよつと話が変わったか？」

「ちよつとした変化がほかのすべてにも変化を及ぼす……だっけ。あり得るね。」

僕たち転生者はイレギュラーだし」

「万が一原作が始まらなかったらどうする？」

「僕たちが管理局と接触してこの星を守ろうか」

「それっきやねえよな……」

……

三人を見送って部屋に戻る

机の中にしまっている先日田中くんからもらったガラス細工のアクセサリーを取り出して

見つめる

淡い青色のきれいな装飾品だ

今まで男の子を部屋に呼んだことがなかったから新鮮で楽しかった

「薦めた本読んでくれるかな」

明日また話題に出してみよう

夕飯まで雑誌をみて過ごすのであった

……

ただいまー

「おかえりー」

ドアを開けたら、どたどたと音がして、グラ子妹に抱きしめられる
ヨーヨツマは？

「奥の部屋で内職中」

なけるなあ、おい

意外とまじめなヨーヨツマに感動しつつも今日のことを話す
膝の上に乗つけられて、頭の上に胸が乗っかってくるのであまり落ち着かないが

「で、その女の子たちとは何もなかったんだな？」
病んだ瞳で仕切りに気にしてくる

俺がかかわった女の子たちはなぜか病んでしまうので注意してくる

グラ子妹も例にもれず、ご覧のありさまだ

「夕飯まであと一時間ある。寝室に来てくれ。」

がばつと体を持ち上げられ、なすすべもなく運ばれる

ちよつ、へるぷ

と奥の部屋で働いているヨーヨツマに助けを求めると

ガチャツとドアを開けて、顔だけ出しながら

「げっへっへっへ・・・」

と笑って、また引っ込みやがった

あつ、てめ

「ますたー?」

はい

「こつちをみろ」

眼を合わせられ、ちゅーをされる

ほかの女性の匂いが付くといつも上書きしようとしてくる

「6回は出してくれよ」

俺死ぬかもしれん・・・

・・・

場面変わって時の庭園

ここはプレシア・テストアロッサという次元犯罪者の隠れ家だ

いつもは、娘であるフェイト・テストアロッサを叱るか折檻してばかりだったが・・・

なんか四人くらいいる10歳くらいの男の子たちに守られていた

「やめろよー若作りー」

「やめろよー若作りー」

「そうだぞ。50代後半なのにうわきつ、な衣装を着ている若作りの

BB A」

「虐待おばさんやめてー」

「プレシアさんかわいい!!」

なんだコイツら

プレシアが最初にこの子供たちとであった時の印象であった

・・・・・・・・・・・・・・・・

フエイト・テストロツサは困惑していた

先日急に現れた4人組の男の達がこの時の庭園までやってきて、私をお母さんのしつけから守ってくれた

それはいいんだけど・・・

なんていうか、距離が近くて戸惑う

きつと悪気もないんだらうけど、異性の相手にどうやって接すればいいのかわからず

今日も愛想笑いで乗り切る

逃げるように地球に行つて、お母さんの命令を果たしに行つたのは悪くないよね

つてあれ？

「ジュエル・シードの反応が一個しかない・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「はいはい、なんでしよう」

からからになった俺と、つやつやなグラ子妹を見て

「精のつくものをおかずに足しますね」と言つて追加の料理を作つているヨーヨツマに話しかける

あの宝石つて今どこあるの？

「すくなくともわたくしが考えうる限り世界一安全な場所に保管させていただいております」

ニタリ、と笑う

その一言でこいつがどこにあの20個あつた宝石を隠したのか確信しつつも、月村さんところからの依頼がないか聞く

二人だけに働かせず、俺も何か仕事を回してもらっている

幸い、会いに行つたときは強いスタンドが発現していた時だったので、あつさりと実力が認められ、危険だが報酬が高い依頼が回されるようになった

「なんでも謀反を企てているほかの月村の分家を制圧してほしいとか」

うげ、まじかよ

まあ、今日のスタンドなら余裕でいけるけど、問題は
「手加減できるかどうかですか」

そうなんだよなあ。原作でもこいつの能力はチートだったからその分本体は馬鹿に設定されていてうまくバランスが取れていたけど、一撃必殺だから下手したら相手を殺しちゃおうな

「わたくしが代わりに戦いましょうか？」

俺を想ってそう申し出てくれる従者に感謝しつつも、うちはそんな週に7日働かせるブラックなマネはさせません。とホワイト企業宣言しつつ、やんわりと断る

12時を回るまでに終わらせてくる

能力を使って汚れてもいい服装を引き寄せて着替える

「行ってらっしゃい」

「行ってらっしゃいませ」

家族二人に見送られ、出かける

サラリーマンの方がやっぱ性に合っているわ、と社畜根性丸出してお仕事に出かけるのであった

To be continued

七話 やっぱ、このスタンドチートだわ

「う、うああああああああああ!!!」

悲鳴を上げて逃げていく奴ら

今俺は、月村の分家の本拠地に乗り込んで敵を次々に倒している

「くっそう!! 囲んで銃で撃ち殺せ!!」

そういつて銃をこちらに向けてくるが、能力をつかい、上に向かって腕を振るう

「馬鹿が!! どこに向けている!!」

すると、上に瞬間移動して、敵にまで近づく

そのままスタンドで飛び膝蹴りをかまして敵をなぎ倒す

そして、近くにあった柱に潜む

あと、数人程度といったところか

それにしてもザ・ハンドマジばねえ

億安のスタンドは原作でも京兆が「この俺でさえぶるつと震えちまう恐ろしいスタンド」

って言っていたけど改めてそう思うわ

ザ・ハンドのスピードはB。あのキラークイーンやプッチのCMO ONと同じレベルだ

原作でプッチはCMOONで銃撃を弾き飛ばしていたから同じ速さのザ・ハンドでもできると思ってたやってみたら普通にできてびっくりした。

相手が仗助だったり最強クラスのレット・ホット・チリ・ペッパーだったり運がなかったただけどとてつもなく強い能力だとわかる

そういうしているうちにもうあと一人まで減っていた

奥の部屋まで逃げる

するとそこにはメイドの服を着た同じ顔つきの女性が5人ほどいた

しかし、その目には生気を感じない

「ははははははは!!」ここまで追い詰められたらもう出し惜しみはでき

ないない!!こいつらはロボット!!!それも人間の数倍の身体能力を有している高性能のロボットたちだ!!

こいつらを起動させ、貴様を・・・」

長い話を無視して腕を振るう

男がすぐ近くまで引き寄せられる

「あ」

お前、馬鹿だろ

顔面に右ストレートを叩き込み吹っ飛ばす

ザ・ハンドで消し飛ばしてやらなかったのは情けだ

お仕事終わりっつと

ホワイトな職場で8時間労働で済む環境に感謝しながら
後に残されたロボットたちを見る

にしても、精工に作られたロボットだなー

そう思い、触ってみると、

キュイイイイイイイイインという音を立てて動き出す

あ、やべ

「マスター認証を行いました。以後、認証確認が必要な際は顔に指紋をつけて

確認を行ってください」

一機が動き出すとほかの4機も動き出す

どうやら、俺が触れたのはほかの4機を操る司令塔の役割をもったやつだったらしい

これ、月村さんになんて言おう

.....

「で、新しい女を連れてきたと?」

「ごオオオオオオつ、と嫉妬の炎をたぎらせこちらをにらみつけてく

るグラ子妹

あのあと、結局雇い主の月村さんには内緒にしておうちに連れて帰ってきた

ロボットであるこの5人娘を見たグラ子妹が怒こり始めた

同じ人形同士、馬が合わないと感じているらしい

ヨーヨツマツはこの状況を見た瞬間

「お部屋の掃除をしますね」と言って離脱しやがった

ヨーヨツマツ絶許

不可抗力なんだが・・・

「マスターが触らなければこうならなかった。違うか？」

うっ、と正論につまり彼女から目を背ける

「コツチヲミロオ・・・」

と顔を両手でつかまれ、グラ子妹の方を向かされる

「居候させるのは許す」

お許しの言葉が出てホッとす

「ただし」

？

「もし、肉体関係をもったら包丁でわき腹を刺して、植物人間にする」

絶対にやりかねないその瞳に気圧され、グラ子妹以外の人形は愛さないことを誓わされたのであった

一緒に手をつないでデートに行ったら機嫌は直ったが、その分ベッドではとても激しく搾り取られた

・・・・・・・・・・・・・・・・

場所は変わって月村邸

「彼の仕事は早いわねー」

そういつて田中くんからの報告書を見る

詳細に書かれているそのレポートは並みの大人が書いたものよりもわかりやすく

丁寧なまとめ上げられていたものであった

今日頼んだばかりの月村の分家の掃除を終えて戻ってきたという

味方につけて正解だったわ

すると、ドアがこんこん、とノックされる

「お姉ちゃん、今大丈夫？」

妹のすずかの声だ

中に入ってもいい、といい、レポートを机の引き出しの中にしまっておく

「どうしたの？」

「うん、あのね、田中くんの本を貸そうと思っているんだけどどつちがいいと思う？」

そういつて取り出したのは、時代劇ものの短編を多く書いている藤沢周平の本と、

サスペンスもので有名な西村京太郎の本だった

「彼は基本なんでも読むとは聞いたけど、短編で読みやすい藤沢周平の方がいいかもね」

そう返すと「そっか、ありがとう。」「と出していく

あの娘もすつかりお熱よねー

本人が気づいているかどうかは別として、気があるのがバレバレだ
まあ、仕事をまじめにやっている彼ならいいかも

妹の恋を応援しながら、引き出しを開けて彼のレポートをまた読み始める

明日彼氏のところに遊びに行こうつと

そう考えながら、目を通し続けるのであった

T o b e c o n t i n u e d

八話 思いが重い。それはグラ子妹だけではありません。切実に

最近、平和だ

前の世界では今まで戦いづくめだったからなあと、この平和を満喫する

教室の外で子供たちがサッカーしている

ああ、本当に俺って今小学生時代に戻っているんだなあ、と
哀愁を漂わせる

すると、丸めた教科書で頭をぼこんつ、と軽くたたかれる

「なーに黄昏ているのよ」

後ろでは呆れた顔をしたアリサちゃんが立っていた

おっす

「おっすじゃないわよ、のーてんき。前のテストでどうやったらあんなにいい点数が取れたのよ」

テストの日から数日立っているが、アリサちゃんとすずかちゃんの教えもあって

人生で初めて五教科満点を取った

なのはちゃんも、すずかちゃんもとつても驚いていたけど、中でも抜かれたことに気が付いたアリサちゃんには一番追及されている

今もこうして、いろいろと絡まれ続けている

きつと、今まで自分と同じレベルの相手があまりいなくて退屈だったんだろうなあ

と同情する

「なにみてんのよ」

いや、こうして五教科満点をとれたのアリサちゃんのおかげだなーっと思つて

「・・・そ、そう」

恥ずかしかつたのかぶいっとそっぽを向く彼女

かわいい

「かわいいっていうなーーーーー!!」

ぽこぽこ痛くない程度にぽかぽかとたたかれる
痛くない程度に加減してくれているところにアリサちゃんのやさ
しさが垣間見える

「で、あんたは何を黄昏てるのよ?」

いやあ、子供って元気だなあと思つて

あんたもこどもじゃない・・・

そういつてため息をつく彼女

まあ、同じ年齢くらいの見ただからそう思うよね

「前はなのは家で遊んだから今日はあたしの家に来ない?」

おつ、マジで?本棚とか見てもいい?ラインナップが気になる

「いいわよ。あんたと結構趣味かぶっているけど楽しめるでしょう
し」

やったーとはしゃぐ俺

やれやれ、と言いなながらも喜ばれてまんざらでもないのか嬉しそう
な彼女

「じゃあ、放課後校門の前でね」

次の授業がそろそろ始まるので席に着く

何かお菓子とか持って行った方がいいかな

と、営業周りのおっさん臭く考えながら放課後を楽しみに待つので
あった

.....

あいつは、変な奴だ

つい先日転校してきたばかりの田中太郎とかいう男子
なんかぼーつとしていて気を抜いているし
でも、話してみるといろいろと面白い奴だと分かった

あの年齢で幅広い教養に手を出していて、音楽の方もたしなんである

あたしのお気に入りの本を貸してみたらすぐに読んできて、具体的な感想を述べてくれて

うれしかった

いつもは人のつい冷たくしてしまっていたけども、話があう異性の友人を得たことで何か自分の中で心に余裕が出てきたように思う

テストで勝負したときにはあたしが絶対勝つと思っていた

以前あいつの学力を測ってみたときには、82点という高得点を出していた

あたしは90点代をキープしていたので勝てるかと踏んで勝負を挑んだのだが

あいつは五教科満点とかいう偉業を成し遂げた

その時は思わず口をあんぐりと開けて間抜けな顔をさらしてしまった

どうやってそんな点数が取れたのか聴いたら

「アリサちゃんのおかげだよ」と言われた

はずかしかったのでポカポカたいておいた

そして、今日初めて異性の友達を自分の家に呼ぶ

はつきり言って恥ずかしい

パパとママには茶化されてがんばれー、なんて応援される始末もう！

これもあたしの気分をかき乱すあいつが悪いんだから

そう思いながらも待ち合わせ場所の校門まで向かうのであった

.....

時間は過ぎ去り、時は放課後

約束の待ち合わせ場所まで向かい彼女を迎えに行く

行ってみると、先についていたようだ
後ろを向いている

「よっ」と手を挙げて呼びかける

するとものすごい速さでがばつと振り返る

えっ、どうしたん

なんだか「うー・・・」とかうなっているけど俺なんかしたか？

まあ、いいか

今日はよろしくね。そういつて彼女と並んで帰る

友達の家によつて遊んでくるので夕飯はいらぬ、と家のグラ子妹とロボたちには言つてある（ヨーヨツマツ？あいつは適当に雑草でも食つてるんじやね？

帰り道に何気ないたわいもない会話をす

そうしているうちに、月村さんちのお屋敷にまけないくらいの大きな家に着いた

ほえー

「どうしたのよ？」

アリサちゃんつてブルジョワだったんだな

「成り上がりの資本家ではないわよ」

さっ、はいつていはいつて、と言われて腕を引かれて入る

おお、中もすごいきれいで立派だ

おじやましませ、と言つて玄関に入る

アリサちゃんに続いて中に入つていく

リビングらしき部屋までやつてきた

「お菓子と飲み物持つてくるけど飲み物は何がいい？」

あればお茶で、なければなんでもいいです

チョイスが渋いわね・・・と言いながらキッチンに向かう彼女

それにしても本当に広い部屋だ

真ん中にソファアールが置いてあつて、あとは転々と置物が少しあるく

らいで

広々としている

「おまたせ」

その言葉をきいて野獣なあの人のことを思い出し、とっさに身を構えるが

相手はまだ小学生の子供だから大丈夫だと思いなおし、なおる

「今日はなにをして遊ぶ?」

ツイスターゲーム

殴られた

「次セクハラしたら強めにしばくわよ」

はい

じゃあ、アリサちゃん家に来たんだからアリサちゃんのこと聞かせてよ

「アタシのこと? まあいいけど・・・」

そういつて話し始める彼女

コミュニケーションで大切なのは相手に興味関心を持っていることが伝わるようにすることだ

だから、まず最初に彼女のことを聴いてみる

話は転々と広がり続け、最近のドラマのことから、給食の時間にあつた男子小学生同士のプリンをかけた男と男の熱き戦い、なのはちゃんと、すずかちゃんと仲良くなったきっかけ

本当にいろいろなことを聴いた

「次はあんたのことを聴かせなさい」

俺のこと? たいしたことでもないと思うが・・・

「あんた、年齢の割には大人びていて、同じように大人びているアタシやすずかとかにとつては気兼ねなく話せる相手なのよねー」

そりゃ、元社会人の人間ですから

「なのはの家にみんなが集まった時に、誰が一番好みか聞いたじゃない?」

何とか切り抜けたときの話を蒸し返されうつつとなる

「今はあたしとあんたしかいないから、本当のこと聞かせてくれない？」

いつもの強気な感じはなりをひそめ、おずおずと聴いてくる彼女
そうか、やはり女の子っていうのはそういうのが気になるもんか
と、彼女の気持ちにはまったく気が付かずという

俺は・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

あいつが窓から見送る

時々振り返っては手を振ってくれる

それに対してこちらも手を振ってかえす

それにしても

「君は『特別』か・・・」

一体どういう意味でその言葉を言ったのかわからないが、それでも
「・・・えへへ」

顔がにやけてきてしまうのを抑えられない

まだ出会って20日程度だけど、それでも彼とはかなり仲良くなっ
ている

今もあたしはまんざらでもない気持ちになっている

顔が熱い

身も心も焼けて燃え尽きてしまいそうだ

そうか

あたしきつと田中のことが気になり始めているんだ

そのことに気が付くと心臓の音がどんどん大きくなっていく

学校でもほかの男子とはよく話したり遊んだりもする

だけど、家に男の子を呼んだのは初めてだった

「そっか。うん。そうだったんだ・・・」

きつと、あたしが今日、田中を呼んだのも自分の気持ち確かめた
かったからかもしれない

なのはとすずかは呼ばずに彼だけを家に呼んだのは、二人っきりの
時間を満喫したかったからだと気が付いた

うとうとううとう

ああああああ

声にならない叫びを挙げながらベッドの上をゴロゴロと転がる

明日からどんな顔をしてあいつに会えばいいのよ・・・

その問いに答えるものは誰もおらず

そのまま親に夕飯だと呼ばれるまで悶絶し続けていた

T o b e c o n t i n u e d

九話 膝ってすりむくと意外とグロいよね

昨日、アリサちゃん家に遊びに行って、また本を借りた
今はそれを読んでいる

朝ごはんは居候のロボ子たちがやっつけてくれるので、空いた時間をこうして別のことに使える

うーむ、マンダム

「ほら、ご飯ができたぞ」

そういつて俺を膝の上に乗せながらあーんしてくるグラ子妹
ぱくり、と食べてむぐむぐと噛む

おいちい

ニコニコするグラ子妹

いやー、やっぱいい嫁さんですわ

新聞を読んでいると、気になる記事が見えた

何々？雷が海鳴市で落ちた？桃色の光りが観測された？

なんだか異常現象が多いな

「旦那様、ランドセルの中に今日必要な教科の教科書をいれておきました」

ごくろうさん

ご飯を食べ終えて、歯を磨き、いつも一緒に登校する班のところまで向かう

じゃあ、行ってきまーす

.....

ああ、昨日は大変だったの

なんだかよくわからないフェレット？みたいな生物が公園でこれまた変なオオカミに襲われていて、それを助けようと思わず前に出たら、食べられそうになって大変だった

しかも、そのフェレットは人の言葉を話す生物で、ユーノっていう名前らしい

その時は狼を撃退するために、力を貸してほしいといわれて承諾し

たら

なんか白い衣装の魔法少女に変身させられた

変身させたフェレット君も驚いていたけど、私には魔法の才能があつたらしい

何とか杖から桃色の砲撃を打ち出して退かせることに成功したけど・・・

「大変だったなー」

「ごめんね、巻き込んだじゃって・・・」

申し訳なさそうに言うユーノくん

今は学校の中だけど、カバンの中に入って隠れている

彼は別の世界の住人でジュエル・シードとかいう宝石を探しているらしい

机の中に入っていた宝石がそうだと知った時には私も彼もとても驚いたけど

「ユーノくん。あれからジュエル・シードの反応はあつた？」

「いや、実は君が持っているあれ以外は全く反応がなくて・・・」

全部で21個あるというジュエルシードの魔力反応が感じられなくて

困惑するユーノくん

誰かの手にわたったら大変な代物らしいけど

「下手したらこの星が滅茶苦茶になってしまうぐらいの力を秘めたものなんだ」

へーっと他人ごとのように聴く

「ところでなのは」

「なあに？」

「この学校にいる人たちってみんな普通の人たちだよな？」

「？そっただけど」

「こんなに高い魔力反応がこれだけ存在しているなんておかしい・・・」
と死んだような目をしてつぶやく彼

なんにしても、ジュエル・シード探しを頑張らなければならないよ
うだ

.....

「ユーノ君がカバンの中からチラ見していて草生える」

「そうだよ（同意）」

転生者である俺たち二人は、高町なのはの動向を観察していた

違うクラスだったのでさすがに声をかけるのは難しかったが、無事にフェレットがひろわれたということは

「原作はじまったな」

「おっ、そうだな（適当）」

隣の奴を殴る

「めんご」

陸という名前の銀髪オツドアイの男子だ

そしておれは空という名前で、金髪オツドアイという

別にニコポ、撫でぽはもっていない

俺たち二人は特別な能力を持っている

陸はレイヴという漫画に出てくるテン・コマンド・メンツという剣の能力をすべて使える

俺はタイガー&バニーに出てくる主人公の身体能力百倍を制限時間なしで使える

「ほかにも転生者いるけどどうする？面白がって高町と敵対する気狂いとかいそうだけど」

そういつてくる陸

「ほかの転生者もいるからあまりおおっぴろに動けはしないけど、そろそろフェイト・テスタロッサとか出てくるはずだ。できれば彼女も味方のできればいいんだけど」

「親御さんのプレなんとかさんがネックだよなあ。死んだ自分の娘を甦らそうと

もう一人の娘であるフェイトを一人で地球に送り出すくらいだから基地外だし」

「児童虐待とか許せませんなあ」

前世では教師をやっていたこともあって拳に力がこもる

「落ち着け。で、高町と同じクラスに入っていた転校生がいるけど
そいつは

俺たち転生者とは違うのか？」

「違うと思う。でもあの三人と仲が良くて正直嫉妬する」

「見苦しいわ」

転生者どうして牽制しあっていたら田中とかいう男子生徒がいつ
の間にか

アリサ、すずか、なのはと仲良くなっていた

くそう、もっと早く行動すりやよかったぜ

「空はおしとやかなすずかちゃんとか好みだもんね」

「お前はアリサとかツンデレ系好きだよな」

お互いに女性の好みを通じ合っているくらい仲がいい俺たち二人

「キリンラガー飲んでやけ酒したい」

「シャンパンメリーで我慢しとけ」

二人で慰めあいながらとぼとぼと廊下を歩く

.....

体育の時間

体操着に着替えて、グラウンドに出る

今日はリレーをやるみたいだ

先生が説明を行う

なんでも今日は男女混合のリレーだそうだ

テンションが上がる男子勢と、なんか微妙な空気の女子

その温度差に思わず笑いそうになる

「じゃあ、適当にふりわけていくからなー」

先生がランダムに選んでいく

四人×7チームだそうだ

佐藤くんや鈴木くんと組めないかなーと思っていたら

あの三人娘と組むことになった

せんせー

「なんだ」

男女比がおかしいと思います

ほかの女子が入っていない男子のところへ恵んであげてください
「人をモノ扱いでするな！」とアリサちゃんから突っ込みをいただきつ
つ

先生にモノ申すと、

「めんどい、却下」といわれた

やるっきゃないようだ

「よろしくねー」

よろしくー

そして、みんなで走る順番を決める

「アタシ一番最初にはしってペースを作ろうか？」

アリサちゃんって運動神経いいっけ？

「すくなくとも上位には入るわよ」

すげー

「あ、じゃあ私次に走っていい？」

どうぞどうぞ

「あ、じゃあ私はその次で」

どうぞどうぞ・・・うん？

「じゃああなたはアンカーね」

・・・はめられた!!

「一番プレッシャーかかるけど頑張りなさいね」

「ファイトだよー」

と二人からもありがたい声援をいただく

みんな走る順番が決まったようで、それぞれのレーンにつく

「位置について、よーい」

どん、と先生が手を振り下ろすと

一斉に走り始める

アリサちゃんもかなりはやい

しかし、一人だけ明らかに速さがおかしい子がいる

鈴木くんがウサイン・ボルトと同じくらいの速さで駆け抜けているぐんぐんと後続の人たちを抜かしていく

あの速さはチーターや!!と叫びたくなるくらいにおかしかった
皆もその速さに大盛り上がりだ
第二走者にバトンが渡される
なのはちゃんは7人中4位だった

息を切らしながらすすずかちゃんにバトンを渡している
俺もがんばれえええええと声援を送る
すると、こちらを一瞥してにこつと笑うと

とてつもない速さで一位に迫る

最近の小学生はおかしいなあ（白目

と思いつながら見守る

現在は2位だ

「田中君、あとはお願ひ」

おっしやああああああああ

力強くバトンを受け取り、ダッシュで走る

後ろに足をもつていくのではなく、前の方に足を出すように意識して走る

日本人にとって最適なフォームを取る

前にいるのは

「やっぱりお前が来るか!!」

そう叫ぶ佐藤君

いや、君すごすぎでしょ

と、心の中で絶叫しつつ走る

肩を並べながら走る

追い付けはしたが、相手も全力になったのか抜くことができない

うおおおおおおお負けるかああああああ

「俺もだああああああ」

二人して一步も互いに譲らない

このままつばぜり合いが続くかと思われたが
佐藤君のある一言でその均衡は崩れた

「あつ、女子がパンチラしている」

えっ？

そういわれてみんなの方を見ってしまう

「もらったあああああああ」

そのまま抜かれる

「おっしゃああああああ!!俺のかちいいいいいいいい」

足が悲鳴を上げているが意地で追いかける

「なにいい?!」

そして、そのまま並走し続けて

.....

「まさかゴール前で転ぶとわねー」

派手に顔面からダイブした馬鹿を治療しながらそういうアタシ

田中は佐藤と並走し続けていたけど足を滑らして転んでしまい、結局2位だった

めんもくない・・・

と悔し氣にいう

そのしゅんした姿が面白く、噴き出す

「じゃあ、アタシ先に教室に戻っているから。一人でも大丈夫?」

だいじょーぶ、と手をひらひらさせて言ってくる田中

ドアを開けて保健室の外にでる

ぴしゃり、と扉を閉めた瞬間

その場でうづくまる

足を怪我した田中を治療していたときに、思ったよりも近くによつていて、意識してしまっていた

何とかごまかせたようだけど
ううっ

すると、後ろの扉ががらがらつと開く
ひうっ、と変な声が出てしまう

田中がにゅつと顔を出す

「言い忘れてた」

「？」

「けが、ちりょうしてくれて、ありがとう」

そういつて、また扉をしめてもどる田中

．．．．．

．．．．．!!

もう！もうっ！

そのまま教室に帰ったら、すずかとなのはに体調を心配された

顔が真っ赤だったらしい

はずかしい．．．

To be continued

十話 原作？知らない子ですね

体育が終わってお昼の時間になった

今日は席にかかわらず好きな人と一緒に食べられるらしい

いつもは鈴木さんと佐藤さんと一緒に食べていたから誰と一緒に食べようかなー

と考えていた

そしたら後ろから首根っこを掴まれる

ぐえっと首を絞められカエルがつぶれたような声を挙げてしまう

後ろを向くとアリサちゃん、すずかちゃん、なのはちゃんが立っていた

どうしたの？

「あんだ、一緒に食べてくれる人いる？」

俺は孤立している人間だと思われているのだろうか

彼女に一応いるけど・・・と答える

「よ、よかったらあたしたちと・・・」

「よー！田中！！一緒に給食食おうぜー！！」

そういつて手を挙げてこちらに呼びかけてくる佐藤君

横には鈴木くんがいる

ああ、いいよ

「~~~~~」

自分のセリフを遮られたのが不満だったのか、声にならない声を挙げる彼女

珍獣かな？

「誰が珍獣よ!!」

そういつて肩パンされる

うーむ、かゆいかゆい

あ、そうだ。さとうくん。この子たちとも一緒でも大丈夫？

すると、ぽかんとした顔をする

笑顔になる彼ら二人組

えっ、どうしたの

「いやー!! 持つべきものは素晴らしき友人かな!! なっ、鈴木!!」

「まったくもってそうだね。佐藤君」

にっこにっこの太陽みたいな笑顔だ

二人はフツメンの俺と違いかなりのイケメンで、その笑顔にほかの女子も

少し顔を赤らめている

性格よくて、外見もいとか完璧超人すぎて嫉妬もわからない（悲しみ

みんなで机を合わせる

合わせたのだが・・・

なのはちゃんが鈴木くと佐藤君に挟まれる形で並ぶ

反対に俺はすずかちゃんとアリサちゃんに挟まれている形だ

えっ、こういうときって男子は男子で、女子は女子で隣り合わせじゃないんですか

佐藤君と鈴木くんはなのはちゃんに気があるのか、積極的に話しかけている

なのはちゃんは普段あまり関わり合いがそこまでない男子に話しかけられて戸惑っているようだ

まあ、俺は彼らの良さを知っているけど君からしたらねえ

そう思っって給食をぱくつく

うんめええええええええ

一人暮らししていた時はどうしても野菜不足とかになっっていたから、栄養を考えられた食事っていうのは体が癒える

給食を堪能していると、横から何かオーラを感じる

な、なんだ・・・

グラ子妹並みのプレッシャー・・・?

右からはアリサちゃんの

左からはすずかちゃんの

言いようのない圧迫感が迫る

「田中、あんた今日放課後空いてる？」

「？一応今日の予定はまだ入っていないけど・・・」

「ま、またあたしの家に遊びに来ない？パパとママもあんたのこと結構気に入っているみたいだし」

「!!」

へー、そりやうれしいなあ。でも二日連続で遊びに行くなんて迷惑じゃない？

「平気よ。だから遠慮なく来ていいわよ。」

そういうならお言葉に甘えて

すると、左からそつと袖を掴まれる

見てみるとすずかちゃんが握っているのが分かる

どうしたの？

「・・・私のおうちにまた来てほしいな・・・」

「!!」

ああ、忍さんへの挨拶もしていった方がいいか

「そ、それもそうだけど。私が田中君と一緒に遊びたくて・・・」

そういわれるとめっちゃめっちゃうれしいです。はい

「本当？よかったあ・・・」

ふふふ、と優し気に笑うすずかちゃん

てんすや・・・

右からまた何か威圧感を感じる

「あ、アタシが先に誘ったんだから今日はあたしよね?!」

「アリサちゃんは昨日おうちに呼んだんでしょ？だったら今日は私の家がいいと思うな」

このとき俺は、元の世界での記憶がよみがえった

深海棲艦のみんなと艦娘のみんな

初めて顔合わせをしたときはこんな感じだった

今はそれに近い修羅場の香りを感じている

逃げなきや

あつ、そうだ（名案

なのはちゃん

「ふえっ!? な、なに?」

佐藤君と鈴木くんにアプローチされ困惑していたが、急にほかの人に話しかけられたびっくりしたようだ

今日、佐藤君、鈴木くん、すずかちゃん、アリサちゃん、俺の五人を含んだみんななのはちちゃん家に遊びにいったいいい?

「へっ?・・・た、たぶん大丈夫だけど」

修羅場をくぐり抜ける方法は一つ

ほかの人を巻き込むことだ

すずかちゃんとアリサちゃんが喧嘩しているのなら関係のない第三者を巻き込んで

喧嘩しにくくしてしまえばいい

痴情のもつれで何度も腹を包丁で刺されたところをさすりながら思い返すのであった

佐藤君と鈴木くんはグツジョブ!! という顔でアイコンタクトをしてくる

二人はなのはちちゃんに気があるから賛成側にまわってくれるしね

そのまま、佐藤君と鈴木くんは俺がなのはちちゃんの家まで案内するとして、

放課後になのはちちゃんの家で集まることになった

俺の家によることになったが、グラ子妹とヨーヨツマにはロボ子を押入れにしまっておくように頼んだ

ばれたらまずいからな・・・

あつ、そういえばなのはちちゃんが前拾った宝石を探している人に出会ったから

その人に返してあげてほしい、とかいってたな

ちようどいいからヨーヨツマに頼んで用意させておこう

そしてこのときの俺には知る由もなかった

今までヨーヨツマの体内にあったから、ジュエル・シードの魔力反応が気づかれなかったことを

それが気づかれるようになるとはどういうことなのかを

T o b e c o n t i n u e d

十一話 子供の喧嘩にしてはいきすぎているような

「おらあああああ!!死ねや踏み台どもおおおおお!!」

「ぎっけん!!誰が踏み台だゴラアア!!」

今、俺は嵐の中一人で突っ立っている

あちらこちらでは俺と同じくらいの子供が空を飛んだり

何かエネルギー弾を飛ばしたりしている

おかしい

佐藤君と鈴木くんまであの中に入っていけるのはいくら何でもおかしい

もしかして彼らもスタンド使いなのか?

と考えていたが、わからない

二人は「やることができたから後で合流する」

といつてこの戦場のど真ん中に突っ込んでしまった

バッグに皆で食べるためのお菓子と、例の宝石を20個入れて

あり、それを持ったままなのはちゃん家に向かう

いやー、俺の家まで来て、ランドセルをおいてさあいくぞ

つて感じで道を歩いていたら、急に俺たちと同じくらいの子供たちが出てきて

「ジュエル・シードを渡せ」

とか言ってきて、なんのこっちゃとなつて

そうしているうちに、また別の子供がやってきて

喧嘩を始めたというわけだ

時折こちらの飛んでくる攻撃をスタンド能力でいなしながら進む

あの三人にはなんていおうかなー

.....

「.....かな.....」

私はお母さんのお願いで地球までジュエル・シードとかいうロストギアを回収しに来た

今まで魔力反応が見えなかったが、突然巨大な反応で発生し、あわてて一人で滞在しているマンションを飛び出して反応のある場所までやってきた

とてつもない魔力がいくつもある

「ここだ」

そう思つて、海の上にまでやってきたら

私と同じくらいの子供たちが空を飛びながら大喧嘩していた

ええ・・・

なにこれえ・・・

あまりの光景に呆然と立ち尽くしてしまふ

「おらあああ!!ゲイ・ボルグ!!!」

「んなちやちなもんあたんねーよ!!反射アア!!」

「かめはめ波ああああああああ!!!」

「やるじゃねええかあああああ!!!」

滅茶苦茶にエネルギー弾や、見たこともない武器を飛ばしている

正直、お母さんのところまで帰りたくなつた

そして、ぼーつとしていて、エネルギー弾が私の方まで飛んできているのに気が付かず

私は閃光に飲み込まれた

.....

そろそろあの二人の用事も終わったかなー

と考えつつ、なのはちゃん、すずかちゃん、アリサちゃんと一緒にガールズ(?) トークを楽しむ

「でねーその時のなのはったらねー」

「もう、アリサちゃん恥ずかしいよー」

ああ、平和だ

そうだよ。子供つてもつとこういうホンワカしたものだよ

さつきみたいな殺伐とした現場はきつと夢に違いない

そう考え、目の前の三人との談笑にふける

すると、なのはちやんの部屋のドアがノックされる

「はい」

がちやり、と開けると20代くらいの超イケメンが顔をのぞかせる
この市は俺以外全員イケメンなのか・・・と絶望しつつ、よく見ると

月村邸でよくあうあの人だと気づく

あつ、苗字一緒だったな、そういえば

「お菓子もってきたぞ。よかつたらみんなで食べるといい」

「ありがとう！お兄ちゃん！」

そういつてコトリツ、とお菓子がのったお盆をおいてくお兄さん
眼を合わせないようにそらす

すると耳元で小声でささやかれる

「ちよつとごめん」

はい

二つ返事で了承する

三人にはちよつとお手洗いに・・・と席を離れる

離れた場所までやってくる

「オマエ・・・なのはの知り合いだったのか？」

知り合ったのは学校に入ってからでしたけどね。よくお兄さんの
自慢話とか耳にタコができるほど聞かされましたよ

そうか・・・と言って照れを隠す恭弥さん

この人とは月村の家に行くときに何回かたびたび出会っている

月村忍さんの恋人だそうで、美男美女カップルでお似合いの美形コ
ンビといったところか

今日はなのはちやんたちと遊ぶために来ました。本当はあと二人

男の子が来る予定でしたが

その言葉を聴いて、ピクツ、と耳を動かす恭也さん

あつ、やべ

「……………どこの馬の骨だ？そいつらは」

この人は見てわかる通り

超 絶 ブ ラ コ ン だ

前に俺が初めて会った時に、高町なのはちやんと同じ学校に通うという案が出たときに真つ向から反対した人だ

なんでも、俺の得体のしれない感じが不気味に思えたそう

まあ、10歳でここまで考えて話せる奴がいたら年齢詐称しているという考えに至ってもおかしくはない

そうして、なぜかガチの剣術使いだという彼と戦うことになってしまった

いわく、戦いの中で人の本性というのは見えてくるものだ

なんとという脳筋的蛮族思考

その単純さに涙が出る

うれし涙では決してないが

その時は、スタンド能力で恭也さんの動きをラーニングして、コピーして見極めたから何とかして勝つことができた

真剣の形をとっていたスタンドだったが、模造等のように刃がつぶれて誰も傷つかないような形に変化していた

なぜか恭也さんと戦った後に、月村さんところまで遊びに来たという同じくらい強かった美由紀さんという妹とも戦ったが

おかげさまで、あのスタンドが消えた今でも二人の剣術が使えるようになっってしまった

高町はおそろしい……

それから恭也さんに認められ、年齢の離れた友人的な付き合いをしている

この人口下手だけどころかなりいい人なんだよなー
社会人の苦勞が分かるから不思議と馬が合う

「その二人は大丈夫なのか？なのはに手を出すような奴らか？」
眼が据わっている恭也さんにそう尋ねられる

正直あの二人はなのはちゃんに惚れていると思います
ピシイつと空気が凍る

でも、だからどうするんですか？誰かが誰かを好きになるのを止める権利があるのですか？

「む………」
そういわれ押し黙る恭也さん

自分自身も忍さんという想い人がいるから納得しているようだ
何かあったら大変だから、クラスのほかにものはちゃんに惚れているであろう子たちを注意して見張らなければな

そう考えていたが、目の前の恭也さんにじっと見つめられる
どうしたんですか？

「……お前はなののことをどう思っている？」
へ？

「男として好きか？」
急にそんなことを聞かれて驚く

いえ、友達としてなら好きですよ

「お前がなののはの恋人になればお前は俺の義弟になる。そうしたら毎日戦えるんだが……」

怖っっっ!!!
どんだけ狂戦士やねん

この人生まれる時代間違えてませんかねえ、と考えつつ

恭弥さんに、きちんと自分には将来を誓い合った相手がいることを伝える

さすがにびっくりして大きく目を見開いていたが

面白かったので写メっておいた

後でなのはちゃんに見せてあげよう

話が終わったようなのでなのはちゃんの部屋に戻る

「・・・お前だったらなのはと懇意になってもいいんだがな・・・」

後ろでは寂しそうに恭也さんがつぶやいていたのも知らずに

鼻歌を歌いながら写メを保存するのであった

To be continued

十二話 今日の子供のけが人が多いなあ

なのはちゃん家からの帰りに焼け焦げていた少女を発見いたしました
した

えーつと、行き倒れかな？

恰好がなぜかレオタードにマントという痴女ルックススタイルの女の子だ

髪は金髪でツインテールにまとめられており、グラ子妹を幼くしたらこうなるだろうな、という感じだ

まあ、さすがに放っておくわけにもいかない

おんぶする

すると、近くに子犬が寄ってきてものすごく吠えてきた

うわ、うわ、なんだなんだ？

この子のことを守ろうとしているのか？

おんぶしながらがんで子犬と目を合わせる

すると吠えるのをやめる

悪いけど、この子を助けたいのなら協力してくれないか？

もし、俺がこの子を害したら腕の一本やるからさ

そういつて頭をなでてやると、大人なしくなってくれたようだ

しゃがんでいるこちらの頭の上に乗っかってきた

うおっ、結構人なれしているな

そのまま自分の住んでいるマンションまで向かうのであった

.....

「フェイトそんなどこだ?!」

「てめーのエネルギー弾のせいだ!!」

「てめーが手加減せずにぶっぱなすから反射するしかなかったんだろ
うが!!!」

「喧嘩はやめやめ。今は彼女を探そう」

俺たち転生者たちの戦いに巻き込まれてしまった原作キャラの一

人、フェイト・テスタロッサを現在みんなで戦いをやめて搜索している。

攻撃が当たってしまい、どこかに吹っ飛んで行ってしまったのだ。

「ちくしよおおおおお!!彼女とフラグをたてたかったのにいいいいいい!!」

俺、パツ金の美人とか好みドストライクなんだよおおおお

そう叫ぶ金髪オツドアイの空

同じように残念がる銀髪オツドアイの陸

佐藤、鈴木、遠藤も搜索に加わっているが一向に見つかる気配がない

誰かがぽつりと漏らす

「これ、殺しちやったんじゃ・・・」

「いなあああああ!!!」

悲痛な叫びが空にこだました

.....

やわらかな感触

温かい感じ

なんかふかふかしたものに包まれているような気がする
眼をそっと開ける

すると、そこは見覚えのない部屋だった

布団の上では小さくなったアルフが丸くなっている

眼を覚ましたことに気が付いたのか、アルフが喜んでとびかかって来た

それを後ろから首根っこを押さえる誰かの手

ステイ

「ギャウウウン!!?」

首が閉まり、苦しそうな声を挙げるアルフ

そして、見たことのない私と同じくらいの年齢の黒髪の男の子

「あ、だ、だれですか・・・？」

おー、起きたか

いやーなかなか目を覚まさないから心配だったんだよなー
けらけらと笑う男の子

なんか見た目のわりに大人っぽいというか・・・

俺の名前は田中太郎。なぜか道端で黒焦げになっていた君を保護
したものさ

警察や救急車を呼ぼうとしたらそのちっこいのがわんわん吠え
るから

しようがなく俺の家にかくまったのさ

そっか、アルフに助けてもらってたんだ

ほかの世界からこの星にやってきた私が公的機関にお世話になる
と厄介なことが起こるからそれを防いでいてくれたんだね

アルフをよしよし、と撫でる

嬉しそうに目を細めている

んで、君の名前はなんだい

「あ、フエイト・テスタロッサと言います」

へー、外国の子かな？まあ、道端で黒焦げになって倒れているなん
て普通じゃないし、何かあったんでしょ？大変だったねー

そういつて、洗濯物をたたんでいる

なんかやけに所帯じみている

着替えとか一応新品で持っている俺の下ろしといたから、廊下で
て右手が浴室で、シャワー浴びてそれに着替えな

そしたらご飯作って待ってるから

それじゃ、と言って部屋を出ていく

気が付いたけど、どうやらこの布団や枕は誰かのものらしい
つまり・・・

「あの男のこの使っているやつか・・・」

想像してちよつと恥ずかしくなる

すこし寝汗で体がべたつくので、シャワーを浴びに行く

ご飯を食べながらある程度の事情は、助けてもらったあの人に話した方がいいよね

誰に言うのでもなく、そう考えるのであった

.....

「まったく、このエロオコジョが」

そういつて僕からジュエル・シードを奪う男の子

「やめて!!返してよ!!」

そうは言うものの、魔力が戻って人間の姿に戻れたが、なすすべもない

「はっ、俺の能力にかなうわけねーじゃねーかタコ」

そういつて不思議な力を使ってこちらを吹き飛ばしてくる

うう、せつかくなのはがジュエル・シードをすべて集めてくれたのに

このままじゃもってかれちゃう!!

「あばよ。珍獣」

そういつて、剣を振り下ろしてくる男の子から目を背けて瞼を閉じるが

剣が振り下ろされぬ

不思議に思つて目を開けると

黒髪の男子が僕を抱えているのに気が付いた

~~~~~

恥ずかしさでじたばたもがく

あつ、ちよつ、あぶない、あぶないつて!!

あわてて僕を落とさないように抱きしめてくる



ますます恥ずかしくなってくる

「なんだ?てめえ……」  
にらみつけてくる相手

さつきまでこちらのことをなぶってきた相手だから恐ろしく感じる

お前のその宝石、どこで手に入れた?

静かに問いかける彼

その言葉からは穏やかな怒りを感じる

「そのチビから俺が受け取ってやったんだよ!!プレシアにプレゼントして、プレシアをゲットするためになあ!!」

熟女最高!!とか変なことを叫んでいるが、頭に入らない

僕を抱えている男の顔がものすごく険しくなっているからだ

君、今何歳だ?

「は?」

急にそんなことを聞かれて戸惑う男

「ああ!!んなこと聴いてどうすんだよボケナスが!!」

じゃあ、同い年くらいのよしみで

一呼吸して告げる

半殺しで許してやろう

「は?……っつが!?!?」

吹き飛ぶ男

え?

いつの間にか、僕を抱えながら敵の前までやってきている隣には深紅の怪人がたたずんでいる

ああ、悪い悪い。もし、一撃で気絶したらそれで許してやろうと思っただけだ

「てっめええええっ……」

地獄からの死者が出すような低いうなり声をあげて男の子をにらみつける相手

なんか変な能力もっているみたいだけど悪いね。今日の俺には効かねえ

「ふざけんな!! 月牙てん……」

キング・クリムゾン

……

ちよつとー。フェイトちゃんが好きそうなお菓子やジュースを彼女が寝ている最中に買ってこようと思ったら、なんか小さな子供がこれまた小さな子供に絡まれているじゃないのー

一方的ないじめだったから止めたけどさー

あー、時間切れる前のこの無敵のスタンド使えてよかったー

お先にあがりまーす

そういつて消えるキン・クリさん

バイトのシフト上がりみたいに消えていった

スタンドもシフトがあるのか……

立ち尽くしていると、腕の中にうずくまっている子供が顔を赤くしていることに気が付いた

よしよし、怖かったなー。もう大丈夫だぞー

子供をあやすようにやさしく上げる

子供の顔からはほろほろと涙が流れている

「うわああああああああん!!」

そのまま、落ち着くまで抱きしめてあげた

落ち着いた？

「はい」

落ち着いたこの子から話を聴いてみたところ、なんでももう一人前の社会人として働いていて、例の宝石を届けているところだったとか

落としてしまった宝石がやっと戻ってきたけど、さっきの変質者に襲われて全部奪われそうになっていたとか

そこを偶然お菓子を買いに出かけていた俺が通りがかって何とかたすかったらしい

いやあ、えがったなあ

頭をわしわしとなでてやる

「おかげ様でお仕事を何とか果たせそうです」

そういって、お世話になりました、といって立ち上がり帰ろうとするが

先ほどの攻撃のダメージが残っていたのか、ふらつく

救急車呼ぶ？

そう聞いてみると、ぶんぶんと首を横に振る

この子もわけありか・・・

きつとホームステイ中だけど、パスポート落としちやっただろうな、と考え

手を引いていく

「・・・？あ、あの？」

もう12時を回っていて危ないから今夜は俺の家へ寄ってきな  
そのケガも直したほうがいいしき

困惑しつつも手を引かれる子供

そのまま、けが人を家まで連れて帰った

フェイトは知らない

探してるジュエル・シードをすべて持つ存在がすぐ隣の部屋で治療を受けていることを

ユーノは知らない

自分がジュエル・シードを輸送しているときに雷を落として妨害してきたプレシア・テストアロッサの娘がすぐ隣の部屋で熟睡していることに

原作を知らない田中は、奇跡的なニアミスを今日も連発し続ける

To be continued

### 十三話 実の子供からの説教は意外と堪える

あのあと、ユーノとかいう子を治療してから、もう暗くなっていたので

途中まで送っていった

なんかケータイの連絡番号くれたし、ラインの申請もしたからこちらからメッセージ送ります、だそうだから

家に帰ってきて、気が付く

あのダイヤが入った袋をあの子が忘れて行ってしまったことに  
おいおい、忘れん坊さんだなあ

帰ると、晩御飯を食べてからぐっすり眠っていたフェイトちゃんが目を覚ましていた

おっす、もうけがは大丈夫？

「はい、おかげさまでだいぶ良くなりました」

そっか、親御さんに連絡入れておく？

「お母さんのおうちって電話がなくて」

今時珍しいなあ。別の連絡手段があるのかな？

すると、部屋に別の人物が入ってきたことに気が付く

「フェイト。けがはもうだいじょうぶかい？」

赤髪の女性だ

「アルフ、ありがとう。」

どうやら知り合いらしい。

「すみません、フェイトから連絡を受けて、こうして勝手に上がり込んでしまっただけです」

いえ、お子さんがお怪我をされたのなら冷静になれなくても不思議ではありません

フェイトちゃんが無事だったからアルフさんもホッとしているよ  
うだ

「・・・すみません、少し別の場所でお話できませんか？」  
そういつてフェイトちゃんをちらつと一瞥してから見てくる彼女  
なるほど、子供の前では話せないようなことか  
わかりました。ではこちらの部屋で

そういつて別の場所に移る

・・・

あああああああああ  
どうしようどうしよう

あのジュエル・シードをどこかに置いてきてしまった  
袋の中に保存しておいたのに・・・

そうして気が付く

さっきの彼の家にうっかり忘れてきてしまったのではないのかと  
とりあえず、もう深夜でまたお邪魔するのはいけないだろうから  
ラインで忘れ物がないかどうかを彼に尋ねる

今日はもう寝よう・・・

そう思い、眠りにつくのであった

・・・

アルフと田中つて子が別の部屋に行ってから数十分が経った

そして、二人が部屋に戻ってくる

「フェイトちゃん。ちょっと行く必要のある場所ができたからお出か  
けしてくるね。」

留守番任せでも大丈夫？」

「へ？あ、はい」

神妙な顔つきになっている彼

なんていうか・・・

悲しみながら怒っているような

じゃあ、行きましょう、アルフさん

「ええ」

そういつて出ていく二人  
一体何があつたんだろう

まだ眠かつたので、再び眠りにつく

そして、次の日の朝、すべてが好転することになるとはこのときの  
私には

夢にも思わなかつた

.....

ここですか？

「ええ」

そういつてアルフさんに連れてこられたお宅

フェイトちゃんが虐待を受けていると聞いてもたつてもいら  
れず、

一緒に直訴しにきたのだ

深夜だが、夜型の人なのでまだ起きているという

取り合あえず、アルフさんが持っているという超能力で

お城の中まで転移する

彼女もスタンド使いみたいな能力を持っていたと聞いた時には  
びっくりした

そうして、移動した場所には

5歳くらいの子供がポッドみたいな器の中で

液体に包まれて眠っていた

いや、眠っているというよりは・・・

「この子がさつき話したアリシア・テストロッサというフェイトのお  
姉さんさ」

悲しそうにいうアルフさん

「生物学的にはもう死んでいる。しかし、プレシア・テストロッサはそれ

を認めず、もう一人の娘であるフェイトを地球まで使いに出して、死者復活の方法を探しているのさ」

一度聴いていたとはいえ、そのハードな家庭環境に思わず黙る

そのプレシアって人がどれだけ深い悲しみを負っているのかはわからない

でも、それにフェイトちゃんを巻き込むのは論外だ

死者は、生き返らない

「それを決めるのは私よ。あきらめはしない」

そういつていつの間にか近くまでいる妙齢の女性

この人が・・

「ようこそ、犬っころに侵入者さん。私の大切な娘と同じ部屋に入るなんて死ぬ覚悟はできているんでしょうね？」

バチバチつと彼女の周りに紫電がほとばしる

何か特別な能力を持っているようだ

「私は、アリシアだけを娘として認めている。もう一人の人形なんて娘だと認めていない」

その言葉をきいた瞬間、頭の中で何かがぶちぎれた

気が付いたら彼女を、スタンドで殴っていた

「・・・っ?!」

驚く相手

今日の俺のスタンドはまあまあといったところか  
近距離パワータイプの中では上位には入る強さ

ジャツジメント

ランプの魔人のようなスタンドだ

「私はこんなところでもたもたしてられない・・・!!私には時間がな



いの!!」

それがなんのことはわからないが、その悲痛な叫びは痛々しいまでに

悲しいものだった

その言葉を聞いてなお怒気を強める

なぜ、その愛情を少しでも彼女に向けられないのかと

拳に力がこもる

この人はアルフさんから聞いたが滅茶苦茶強いらしい

下手をすれば、雷で町一つ滅ぼすことも簡単だという

それでも俺の決意は揺らがなかった

うなされていたフェイトちゃんの寝言を聴いてしまった

お母さんからの愛がほしいという彼女の悲しみを知ってしまった

だから、引けない

理由も事情もしらない

だが

ぶっ飛ばす

.....

あの田中って子を見込んで頼んだ

知り合いでもないフェイトをあれだけ看病してくれたこの子なら

何とか

プレシアを止めてくれると

ロボットみたいなのビジョンを従えて、プレシアと戦っている

ロボットの中が光りつつある

あの光、どこかで見たような・・・

そして、気が付く

あの光はあたしたちがずっと探していたあの宝石の光だと  
そうだ、あれは・・・

・・・

プレシア・テストロツサは混乱していた

なんでこんな子供が大魔導士である私に食らいついてくれる？

雷を放出して襲うが、地面が隆起し始めて、そちらに雷が誘導され  
てしまう

避雷針のように防護壁を作っているようだ

そして、気が付く

相手の従えるロボットみたいな人影から漏れている光が、私がずつ  
と探し続けていた

あのロストギアだと

事情は聴いた

静かな声で告げてくる

そして、考えた。この宝石は願いをかなえる力を持っていると  
ならば

俺の願いをかなえるスタンドに使ったらどうなるのか？

今までの大人びた表情から年齢相応の悪戯好きな子供のそれに代  
わる

レクイエムでも、メイド・イン・ヘヴンでもない

名づけるのなら・・・

ホープ、とでも呼ぶか

光が強くなっていき、私はあたたかなものに包まれた

.....

まさかまさかの展開。

あのユーノくんが持っていたという宝石がなんでも願いをかなえる力を持っているという

オカルトチックな代物だったという

宝石をみたアルフさんからそう聞いた

今日のスタンドはジャツジメント

で、思いついた

俺のスタンドに21個すべて取り込ませたらどうなるのかを

進化すんじゃないかね？と考え、ジャツジメントに入れる

ドクン、ドクン、と融合していく

CMOONやメイド・イン・ヘヴンみたいに進化するのかな、とわくわくしながらアルフさんとフェイトちゃんのおうちに一緒に向かったら、とても怖い女性に出会った

顔色が悪いなーと思いつつ、彼女のフェイトちゃんへの容赦なき罵倒を聞いて、

同じく家庭を持つ身として切れてしまった

スタンドのパワーを全開にし、ジャツジメントでオラオラする

そうして、胎動が止まり始める

進化が始まったようだ

そのスタンドの力も俺にはわかった

ジャツジメントの能力は土を操る近距離パワータイプで、ランプの



なんか20代後半くらいまで若返っている

ええー・・・

病気が治っているのは顔色の良さからわかるがまさか、年齢のことを気にしていたのか・・・

「ママ、眠っちゃっているけど、大丈夫かなあ？」

君のお母さんはちよつと疲れているだけだから、一緒にママを寝室まで運ぶの手伝ってくれる？

「うん！」

彼女に服を着せてから、一緒にうんしょ、うんしょ、とプレシアさんを運ぶ

アルフさんはさつきから突っ立ったままだ

まあ、驚き過ぎて脳の処理が追いつかないのだろう

寝室までプレシアさんを運びきる

さて、アリシアちゃんにも事情を全部説明しておいて、プレシアさんが起きたら説教してもらおう（名案）

そう黒い笑みで考えるのであった

To be continued

## 十四話 頭脳が大人な子供が増えました

「はじめまして、フェイト・テストロッサと言います」

「あたしはアリシア・テストロッサです!!」

おとなしいフェイトと、活発なアリシア

教室内にいる男子はみな目を奪われている

いや、というよりはありえないものを見ているような顔だ

まるで幽霊でもみたかのように

そして

「プ、プレシア・テストロッサです・・・」

恥ずかしそうにそういう紫髪と同じく10歳くらいの少女

プレシアさんはもう一度学生生活を送ることになった

ことの経緯は、先日の戦いにまでさかのぼる

.....

「じゃあ、アリシアちゃんはお母さんが妹のフェイトちゃんをこれ以上いじめないように

お母さんをちゃんと叱ってくれるかな?」

「うん!任せて!わたしの妹をいじめるなんてお母さんでも許さない!」

そういつて、その場でしゅっ、しゅっ、とシャドーボクシングし始める彼女

こっちはこれでよし。プレシアさんの様子をもう一度見に行くか

アルフさんとアリシアちゃんを連れて部屋を訪れる

ノックをする

「は、はい」

ん?声が変わっているような・・・

ドアを開けると

ベッドに見知らぬ美少女がいた

だ、誰だ?!

「ア、アリシア!!?」

「あれ、あなた私のこと知っているの?」

「何言っているの!私よ!」

プレシア・テスタロッサよ!!

.....

俺のジャツジメント・ホープがかなえたプレシアさんの願いはたったの一つだけだった

「娘のアリシア・テスタロッサとまた、幸せなひと時をともに過ごしたい」

この願いが成就され、アリシアちゃんが生き返り、プレシアさんも健康体になってめでたし、めでたし、で終わるかと思っただが

なんと、プレシアさんが幼女化してしまった

さつきは20代くらいだったが、ベッドに寝かせたあのもも若返り続けていたようだ

フェイトちゃん、アリシアちゃんと同じくらいで姉妹みたいに見える

ジャツジメント・ホープはプレシアさんの願いを

「同じ立場でもにいられるようにいたい」と解釈し、

10歳のころまで戻したという

しれっとそういうジャツジメント・ホープの規格外な能力に唾然としつつも

めっちゃグツジョブとほめておいた

ご機嫌な気持ちでランプの中にもどっていった

ありがとう・・・ありがとう・・・!!（カイジ風

横でアリシアちゃんに怒られているプレシアさんを見ながらそう思うのであった

・・・・・・・・・・・・・・・・

男子たちはフリーズしていたがなぜか突然お喜びし始めた  
三人とも超がつく美少女だからなあ

プレシアさんも美人だったから、子供の姿もかなりかわいい

二人とおそろいでツインテールに髪をまとめている

この学校で彼女たちはテストタロツサ三美少女として男から絶大な  
人気を誇ることとなった

テストタロツサ家・・・恐ろしい子!!

・・・・・・・・・・・・・・・・

今日信じられないことが起きた

俺の目の前に原作の美少女キャラたちがいる

フェイト・テストタロツサ、アリシア・テストタロツサ

そしてなぜか同じ年齢になっているプレシア・テストタロツサ

鈴木が話かけてくる

「佐藤君、彼女たちってもしかしくなくても・・・」

「ああ、原作のテストタロツサだろうな」

なぜ転校してきたのかはわからない  
けど

「美少女がまた増えた・・・。男としちやあ天国だぜ・・・」

「正直僕も」

周りの転生者の奴らもぞっこんって感じだ



二次元のキャラがリアルで存在したらこうだろうな、ってレベルだからな

マジやべえ

一時限目はそのまま質問タイムとなったのであった

.....

月村さんに相談して、テスタロッツサ家の人たちをこの市に住まわせてあげられないか

聴いてみたら何とかなった

幸い、プレシアさんはお金をたくさん持っていたようで、それを対価に差し出したら

あつさりと地球での住所と戸籍を作ってくれたみたいだ

俺の今住んでいるマンションの隣の部屋に

もつといい場所に住まなくてもいいんですか？お金あるのにと聴いたら

「あなたの近くに住んだほうが娘も喜ぶから」

と笑顔で言われた

うーん、あの狂気にとりつかれていた女性と同じとは思えない母性に満ちた笑顔でそういつてくる

幼女だけど

俺と同じくもう一度学生生活をやるなんて大変だろうけど

きつと俺よりもはるかに大人な人だから大丈夫だろう

男子や女子に囲まれている彼女たち三人をみながらそう考える

.....

「ねえ、おか．．じゃなかった。プレシアねえさん」

そういつてくるフェイト

周りに人はいないが、念のために姉妹ということにしておいてある無用な混乱を避けるためだ

あのあと、アリシアにガチ説教され、反省させられた  
冷静になつてからフェイトに謝り倒した

お互いに泣きながら抱きしめあい、感情を吐き出しあつた  
結果的に良好な家族関係になれた

「なあに？・フェイト」

「彼を見る目が何か違うような気がするんだけど・・・」

そういつてちら、と田中君を見るフェイト

わが娘ながら目ざとい

「あー、フェイト。お父さんほしくない？」

「おかあさん?!」

娘に叫ばれながら、男性の落とし方を頭の中で考え始めるのであつた

.....

アリサちゃん、すずかちゃん、なのはちゃんもテストアロツサ三姉妹  
と仲良くなれたようでよかったよかった

ジャツジメントのそのあとだが、俺が冗談でお前とずっと一緒にいられたらいいなー、と言つたら願いとして聞き届けられ、そのままラ  
ンプの中にもどつてこの世にとどまり続けているようだ

「マスター。私を絶対に離さないでください。もし捨てたりしたら・・・」

暗い瞳でそういつてくるジャツジメント・ホープ

相変わらず天使のような女性の姿のままですう言われ本気でビビる

俺の能力はランダム・マン

毎日違うスタンドをランダムで使えるようにする能力だ

ヨーヨツマツ、サーフィスのグラ子妹、そして、ジャツジメント・  
ホープ

さまざまスタンドをつかっている

艦これの世界にいるときに気が付いたことだ

バッグの中にいるジャツジメント・ホープに小声で呼びかける

何かほしいものはないか？

願いをかなえてもらってばかりなので何かお返しができないか考  
える

「マスターを抱き枕にして一緒に寝たいです」

おおぅ……。グラ子妹がきいたらぶちぎれそうだが・

まあ、何とかするか

しかし、これで終わりではなかった

次元犯罪者として指名手配されているプレシアを追う者たちが  
地球にやってくる

T o b e c o n t i n u e d

十五話 アイドルってどうやっておっかけやファン  
とうまく付き合っているんだろう

現在みんなでテストタロツサ三姉妹の席を決めております。

やっぱりクラスの人のほとんどが彼女たちの近くにいたいようだ。  
性格がよくて美少女な娘が三人もいればそうなるよな

くじ引きで引いていく

フェイトちゃん

俺の隣

アリシアちゃん

俺の隣

プレシアちゃん（さん付けと敬語はやめた）

俺の隣

囲まれてしまった

男子生徒からの怨念のこもった嫉妬の視線を受けてひるむ

すると、急に男子生徒たちが顔を青くし始めた

どうしたんだろう

プレシアちゃんがにつこりと笑いかけただけなのに

席はそうして決まり、今は全游時間だ。

小学校では二限目と三限目の間に、30分程度の全校生徒が外で遊  
ぶ時間がとられている

全校生徒が外にでるということは、噂の的になっている三姉妹を見  
にくる人が多いということであり……

ブランコで一緒に遊んでいる俺たちの周りに野次馬ができている  
アイドルのおっかけかよ、と辟易としつつ彼女たちをいつでも守れ  
るように

体の位置を変えておく

アリサちゃんや、すずかちゃん、なのはちゃんもそれとなく注意してくれているようだ

見られて落ち着かないフェイトちゃんと、全く気にしないアリサちゃん

二人に手を出したら指を詰めさせるぞ

という目つきで周りの男子をけん制するプレシアちゃん

佐藤君、鈴木くん、遠藤君も一緒に遊んでおり、役得役得、といった感じでご満悦のようだ

俺一人だけだとあれだから美少女にお似合いのイケメンを配置しておいて、あの美形とだつたらしかたないよね、といった雰囲気を出して向けられる悪意や敵意を減らす方法だ。

自分がイケメンではないことを再確認させられ胸が痛くなる

帰ったらグラ子妹に慰めてもらおう

ブランコで楽しく遊んでいるみんなを見ながらそう思うのであった

.....

俺たち転生者の会は、原作キャラとフラグを立てるために日々行動を起こしているものだ

転生者の会に所属しているものは、俺こと佐藤、鈴木、遠藤、渡辺、

そして、先日本気でやりあつて仲良くなった陸と空の計六名だ

学校にはほかにも転生者同士の派閥があり、それぞれが同盟関係にあつたり、敵対関係にあつたりしている

俺たちの派閥はかなりの穏健派で、それぞれの惚れている好きな原作キャラを落とすためだけの会だ

よほどの危機がない限り出しゃばつたりはしない

「ねえ、佐藤」

そういつてくるのは金髪オッドアイの陸

「これで六人までヒロインが増えたけど、まだまだ増えるんでしょう

？」

そうだ

陸の言う通り、リリカルなのはという作品は無印の一番最初から、VIVIDという四作品目まで存在する

その間に出てくるヒロインの数は敵を含めると30を超える

とてつもない数字だ

「俺はやっぱ無印の原作キャラと付き合いたいなー」

そういう銀髪オッドアイの空

皆も同じようのでできることなら原作の魅力的なキャラと付き合いたいと全員思っているようだ

俺も同じ気持ちだ

「無印の問題が終わったとして、次はASだっけ？」

「そうだ。八神はやてというキャラとヴォルケンリッターというキャラたちに、フローリアン姉妹が主な女性キャラだ。」

「また美少女が、うれしいなあ……」

しかし気がかりなことがある

「ジュエル・シードがいつの間にか消えている件だね？」

「ああ」

「ユーノ・スクライアは原作でもそこそこ強いキャラで支援能力の方が高い

印象が勝る人物だった。できないとは思わないが、彼一人で果たしてこの海鳴市に

落ちたジュエル・シードをすべて回収できるのだろうか」

ないな、とその可能性を捨てる

「プレシア・テストロッサが悲願を成就したということは、そのためにジュエル・シードの

能力が使われた可能性がある。用済みになったジュエル・シードをばれないようにユーノ・スクライアに送れば後は終わりだ。プレシアの目的はアリシア・テストロッサの蘇生だからな」

遠藤が次に口を開く

普段寡黙でめったに口を開かない彼の言葉にみんなが耳を傾ける

「……………ほかの転生者、ないしは協力者の可能性がある……………」  
失念していた考えを思い起こさせられる

「……………敵か、味方か、はたまたそれ以外か。どちらにせよ注意することだ……………」

そういつてまた口を閉ざし黙り始める

俺たち転生者の会に所属している全員が強力な能力を持っている

陸のテン・コマンド・メンツはどんな威力だろうと、魔法やオカルトといったものを問答無用で切ってしまうルーン・セイブや、世界を切り裂ける可能性を秘めたレイヴェルトという最強クラスの能力がある。

空のタイガー&バニーの身体能力100倍もすさまじい

体を鍛えれば鍛えておくほど100倍になる能力を使った時の効果が上がる

そんな中でも遠藤はぶつちぎりの力を持っている

能力もそうだが、前世の境遇がすさまじい

彼は戦争経験者であり、負傷が原因で退役するまで、戦場の最前線で戦い続け、生き残った本物の戦士だ

この学校どころか星を探しても勝てる相手はおそらく見当たらない

い

そんな俺たち全員でも解決できないことがある

それは

「あああああああ、原作の美少女キャラがこんなにいるのにいいいい」

俺たちは、みな童貞で独身貴族だった

もちろん女の子とどうやって仲良くなればいいのかなんてわから

ない

そうしてる間にも、鳶に油揚げをかつわられるかもしれないというのに

美形に全員生まれることができたが、告白してくるのはモブの女子だけ

悲しいな

と肩を落としながら、履歴書の書き方を練習するのであった

.....

ん？いまどこかで昔の俺みたいな人が助けを求める声が聞こえたような・・・

「どうしたの田中君？」

フェイトちゃんにそう尋ねられるが気のせいだと片付ける

すずかちゃん、アリサちゃん、なのはちゃん、テストタロツサ三姉妹と一緒に

仲良く帰る田中君であった。

To be continued



## 十六話 えっ、終わりって何？

管理局

それは世界を守るという名目でいろいろな世界を行き来する  
魔道をつかさどる軍隊

この作品を知った人はわかるだろうが、軍隊と言っても、現実の世界以上に

腐敗、墮落している部分も強い

まともな人物ももちろんいるが、最上層部が「アレ」な時点でお察しである（ネタバレになるためSTSまで言及しない）

この管理局がどうも俺たちの星までやってきているようだ

「ということなんです」

オレンジがかった色のショートカットヘアの子ども、

ユーノ君にそういわれる

俺の中身が大人であることを仲良くなつてついぽろつとこぼしてからは

甘えさせてほしい、と頼まれ胡坐をかいているなかにすっぱり収まっている

そして、こうして密着していて疑念が湧き上がる

ユーノ君

「はい？」

ちみはガールかい？

「そうですけど？」

今度からはユーノちゃんと呼ぼう  
そう決めるのであった

.....

次元航行艦アースラ

プレシア・テスタロッサを追ってやってきた戦艦だ

中には歴戦の強者が乗り込んでおり、大魔導士である  
次元犯罪者のプレシア・テスタロッサとを捕まえるために集められ  
た

若くして出世街道をひた走る執務官、クロノ・ハラオウンは船の外  
から景色を眺める

頑固な部分もあるが、頭の回転は速く、実力も一級品のエリートだ  
何かいやな予感を彼は感じていた  
プレシアを相手にするからではない

では、この胸騒ぎは一体何なのか  
訳も分からず外を見続ける

「クロノ」

そう呼びかける女性

見た目は20代だが、この女性はとんでもなく若い外見の女性であ  
る

「母さん」

そう呼ばれたのは、リンディ・ハラオウン

この次元航行艦の艦長を務めている人物だ

40代で子会社の社長になっているといえればそのキャリアの高さ  
が分かるだろう

「そんな不安そうな顔をしてどうしたの？」

「・・・僕の思い過ごしかもしれないけど」

向き直る

「この市は何かやばいような気がする。ジュエル・シードとか、プレシ  
アとかじゃなくて

他にもっととんでもないものが、それもたくさん潜んでいるような  
気がする」

不安そうな瞳をのぞかせながら独白するクロノ

息子を安心させようと頭を撫でる

「あなたの勘は当たるかもしれない。注意ぐらいはしておきましょう

う。

「・・・今日はお母さんと一緒に寝る？」

「そういつてくるが、さすがに16歳で母親と一緒に寝るのは恥ずかしい

僕にはもつたいない、とやんわりと断る

去っていく息子の後ろ姿を眺めながら、どこかに10歳くらいの黒髪で

大人っぽい子はいないかしら。

と、フェチ全開で想うであつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

寒気がした

何か未亡人の黒タイツが似合いそうな緑髪の美女が俺のことを話しているような気がする

胡坐をかいている中に納まっているユーノちゃんを抱きしめて不安を紛らわす

彼女もそつと抱きしめ返してくれる

あゝいやされるううううう

すると、腰に手を入れられ、ひよい、と持ち上げられる

「あつ・・」とユーノちゃんが切なそうな声を挙げるがそれどころじゃない

後ろを向くと、グラ子妹とホープがいた

「どうやら二人とも買い物から帰ってきたらしい

おかえりー

「ただいま。妻がいないと時に女を連れ込むとはいい度胸だな？ええ？」

結構怒っているグラ子妹とホープにビビりながらも、無罪を主張する

主張は認められず、そのまま寝室まで連れていかれた

ごめんユーノちゃん、と顔の前で手を合わせて謝りながら連れていかれる

頬を膨らませる彼女

後ですぐにフォローしとかなきゃな

と思いつつ、肉食系女子二人を相手取るのであった

.....

「おはよう」

「おはよう！プレシアちゃん！」

そういつてにこやかに挨拶してくる男子、女子

皆仲良くしてくれるのはありがたいが、私の頭の中はそれどころじゃなかった

ユーノ・スクライアという子から聞いたが、私を追って管理局がやってきているらしい

マズイ

今まで使っていたアジトは跡形もなく消し飛ばしておいたから証拠は残っていないはずだ

しかし、直接地球に來られたら厄介だ

娘二人もそうだし、周りの子供たち、そして彼にも迷惑がかかるかもしれない

とにかく彼らに危害が加わらないようにせねば

最悪の場合自首しよう

そう覚悟を決めるべしあちゃん10歳であった

.....

「なーんて思ってたんじゃないの?」

「ありえるね」

そう考える俺たち佐藤と鈴木

他の奴らは過激な転生者をつぶしに行ったり、ほかの作戦のために出払っている

プレシアが思いつめた顔をしているからだ

「アリシアが生き返ったからって無印の問題が終わるわけでもない」

「なぜなら管理局は彼女のことを犯罪者と定めて追ってきているから、それを何とかする必要がある」

実のところ、彼女はジュエル・シードを輸送していたユーノ・スクライア達に雷を落としたこと以外は無罪だ

しかし、プレシア・テスタロッサというのは彼らからみたら利用価値が大いにある存在だ

だから、ありもしない罪状を重ねて、逮捕のための大義名分を立てる

単体の戦力としていかに優秀でも、組織ぐるみで継続的に攻撃しつづければいずれは倒れる

そこを奴らは逃さないだろう

そばに遠藤が戻ってくる

「どうだった?」

「……………同盟関係を3つの派閥とむすべた。……………どれも良識あるやつらの派閥だから安心しろ……………」

そう報告してくる

「どうやって説得したの?」

「……………なあに、すこしがキの『喧嘩』をただけさ……………」

そういつて消えていく遠藤

「さっすが。『最強』の男」

「遠藤くんは同盟を組んだ派閥が不穏な動きを取っていないか監視してもらおうとして、次はどうするの?」

「決まっているさ。ハッピーエンドの準備だ。」

.....

アリサちゃん、すずかちゃん、なのはちゃんを家に招待した  
三人ともとっても喜んでくれたが、家にテストタロツサ三姉妹が遊び  
に来ていたのでかち合った

グラ子妹とホープは仕事なのでおらず、ヤンデレる心配もない  
三姉妹の家が俺の隣だと知らなかったのか三人とも驚いている  
よく、一緒に朝食をたべるんだよー、というとすずかちゃんとアリ  
サちゃんが石になって固まっていた  
それをスルーして、アリシアちゃんを抱きしめてたかいたかーいし  
てあげる

鍛えているので腕力があるからこういったことも軽々とできる

喜んでくれている

フェイトちゃんがチラ見して興味をもっているのはわかるがプレ  
シアちゃん、

あなたを抱き上げるのはちよつと・・・  
テレビをつける  
すると、速報が流れる

海鳴市で巨大な閃光が海の上に突如発生したという  
へえーと感心するが興味もないので、勉強も終わったことだし  
みんなでゲームしようかと提案する

クレヨンしんちゃんのリアルおままごことをなぜかやることになり  
俺とプレシアちゃんが夫婦役  
すずかちゃん、アリサちゃんが愛人役  
なのはちゃん、フェイトちゃんが妹役

アリシアちゃんが娘役だった  
未亡人のガチ演技に子供たちは震えあがった

知らぬ間に管理局との接触を終えた転生者たちが、脅迫まがいの交渉をして、

プレシア・テスタロッサの死亡報告をさせたという事件があったが  
些細な話

無印編 完

T o b e c o n t i n u e d

幕間 お菓子好き。でも食べ過ぎると体が痛い。

幾度も

待てども来ない

管理局

田中 太郎

あつ、季語入れ忘れた

なんかユーノちゃんに聴いたら管理局が地球に来たのは

確実みたいだけど、すぐに帰っちゃったらしい

グラ子妹とホープでお菓子作って待っていたのに・・・

残念だなーと思いつつ、友達皆を呼んでお菓子をふるまう・・・

と言いたいところだが、うちじや友達全員を呼ぶことなんてもう無理だったから

すずかちゃん家に行くことにした

すずかちゃんに頼んで迷惑が掛からないか考えていたけど、にこに

こで了承された。

やっぱりええこや・・・

作っておいたお菓子だけでなく、さらに追加で月村さんちの人たちのために

スイーツを作ることにした

思いつめていた顔をしていたプレシアちゃんが最近ぼーっとしてきている

なんか拍子抜けしたみたいなそんな感覚を受ける

今は男友達も女友達も全員呼んですずかちゃん家にやってきている

最近、金髪オツドアイの空ってこと、銀髪オツドアイの陸ってことも知り合った

二人とも佐藤君や鈴木くんたちみたい不思議な力を持っている



と知った時には  
驚いたが

でも、なぜか親近感がわくっていうか、二人から醸し出される雰囲気  
気が30代後半の管理職って感じがする

お菓子を食べながらそうして談笑にふけた

．．．．．

うめえええええ

こいつお菓子作りができたのか

そう思い、隣の田中をちらっ、とみる

なぜかユーノ・スクライアを膝の上ののつけて食べさせ合いつこさ  
せているが

(ホモだったのか．．．)

そう考え距離を置く

他の男子の奴らも田中から距離を置いている

いくらいい奴でもホモはノーセンキュー

それよりも全員がこのチャンスをものにしようと張り切っている  
それは、原作の女性キャラと仲良くなることだ

今までは学校にいてもなかなか話す機会がなかったから、田中を通  
して

他の女子陣と遊べるのはうれしかった

アリサ・バニングス、月村すずか、高町なのは、フイト・テスタ  
ロツサ、プレシア・テスタロツサ、アリシア・テスタロツサ．．．

あらかじめ考えておいた作戦をみんなで遂行する

それは、まず友達になって連絡先を確保することだ

こういった集まりがまた、田中によって開かれるかもしれないが、  
個人的な連絡番号を交換できれば御の字だ

しかし、最初にそれをやるのはハードルがきつい

今は、とにかく一緒にいてメリットがあると相手に思わせるのが先だ

そして、この人は変な人じゃない、と警戒心を解いてから徐々に男として

迫る

向こうがこちらの誘いを断らなくなったら、それはこちらに好意を抱き始めているサインだ

それまでは徐々に仲良くなっていく・・・!!

Never Give Up!!

アイコンタクトで男子全員の意思が一致した瞬間であった。

田中（ホモ）は別

.....

何かいわれのないような誤解を受けている気がするが、気にせずにお菓子を食べさせ合う

いやー、妹ができたような気分だなあ

精神年齢がもう数百歳だったからかあまり体も反応しなくなってきたけども

皆の様子をうかがう

女子勢は男子勢と談笑している

あらかじめいい奴らだよ、と言っておいたのが効いたのか、すぐに打ち解けて仲良くなっている

もしかしたらこの中からカップルが誕生するかもしれない  
ワクワクしながら眺めていると、背中に何か乗っかる

後ろを向くとアリシアちゃんに乗っかっているのが分かる

ユーノちゃんばかりでもなく、自分にも構え、ということらしい。  
肩車をしてやる

きやつ、きやつとはしやぐ彼女

ユーノちゃんを抱っこする

発車しまーす

「しまーす!!」

そういつて庭にでて遊ぶ俺たち

途中から見覚えのある赤毛の犬が乱入してきて大変だった

肩に乗っている彼女を落とさないよう、俺の頭を掴ませて、バランスを取りながら庭で遊ぶ

かつては命を失っていた彼女もこんなに元気になってよかったよ  
かった

プレシアさんが凝視してくる

娘に手を出すな、ということだろうか

男子勢は、女子勢とうまくいつて、連絡先の交換に成功しているよ  
うだ

コングラツチュレイション・・・!! (黒服

と、心の中で拍手を送りながら

温かく見守るのであった

.....

「ひゃっほおおおお!!」

「かんぱーい!!」

そういつて一軒家で騒ぐ俺たち転生者の会

ついにやった

やり遂げた

「原作女性キャラと知り合えたぞおおおお!!」

うおおおおおお!!  
と全員で盛り上がる

普段はおとなしいあの遠藤でさえ力強くガッツポーズしている

「これ、いけるんじゃないか?!?!」

「せやせや!!」

ぐいっと三ツ矢サイダーをあおる

おつまみはアルフォートだ

「今日はわさびーふもだしちやうもんねー」

「俺はピザポテト持ってきたぜ!!」

スナックの袋を次々に開けて食べていく

「田中さまさまですわー。いやー、ここから楽しくなってきたねー」

「もうすぐで次のASに入るから、八神はやてや、ヴォルケンリッター達にも会える!!おっぱい騎士!!おっぱい騎士にあえるぞおおおおお!!」

巨乳好きでもある佐藤が歓喜の雄たけびを上げる

この戦い(女子を落とす争い)・・・我々の勝利だ!!

そう宣言する

そうして、次の日の朝まで騒ぎ続けるのであった

.....

おっす

「おー。先日ぶり」

あの本おもしろかったでー

そういつて笑いかけてくる車いすに座っている少女

関西弁のイントネーションが彼女の活発な性格に似あっている

そういえばもうすぐ誕生日なんですよ?みんなで何かお祝いしようか?

「えーっ、そこまでしてもらえるのもうれしいけど、悪い気がするわー」

そういいながらも期待した目つきでこちらを見てくる彼女  
実は俺料理できるけど

「マジ?!うちもできるでー」

おそろいやなーと茶化してくる彼女

図書館で偶然知り合った女の子だ

同じ本好きだからすぐに仲良くなれた

知り合いも呼ぼうか?

「それもうれしいけど、二人つきりでお祝いしてくれたらうれしいんやけどなー」

そうか。ケーキは何かいい?

「普通のショートケーキがええな。一緒にたべよう?」

わかった。じゃあ、用事があるからまた電話か図書館に来るわ

「ほなまたなー」

ばいばーいと言って手を振って別れる

楽しみがまた増えた

グラ子妹とホープには事情を説明しておいて、浮気だと思われな  
ように

しておかないと(迫真)

To be continued

AS? ああ、オートメーションサービスのことでしょ？

一話 また行き倒れかあ、壊れるなあ・・・

ベッドから目を覚ます

足は動かない

枕元にある本に手を伸ばす

数か月前から仲良くなつて、一緒に遊び始めた男の子がいた

その子は・・・

・・・

やあ

現在こちらに滞在しているというユーノちゃんを肩車しながら同じ家の中でゲームしております

やるゲームはニンテンドーのスマブラ64?ここ重要

空中での緊急回避がないからDXやXと比べても初心者でも

比較的戦いやすいゲームだ

横にはアリシアちゃんとフェイトちゃんもいる

なんでもマイコントローラーを持っているらしく

ピカチュウ版の64についてくるコントローラーでプレイしている

今日は趣向を変えて、プロアクションリプレイを使い、

ザコ、メタルマリオ、マスターハンド、ジャイアントドンキーコングを使っている

カオスになったのでやめた

とりあえず、彼女たちと室内でたくさん遊んだので、次は近くの公民館に行つて

おもちゃでも借りて遊ぶのを提案した

レールキットを借りて、ユーノちゃんと二人で町を作っていたら、テスタロツサ姉妹に

領土侵攻を受けて、捕虜になってしまった

プレシアちゃんもちやつかり混じって童心に帰って遊んでいた

うわきつ、という言葉が喉まで出かかっていたが命が惜しかったので

お口をミツフィーにしておく

そのまま日が暮れるまで遊び倒した

あつ、プレシアちゃんがこけた

.....

「誰もいねーのかな?」

田中の家に遊びに来たら、インターフォンを押しても誰もいない

どうやらどこかに出かけてしまっているようだ

「前のお礼にケーキ買ってきたんだけどなあ」

「しゃーない。このまま持ち続けて悪くなってもあれだから遠藤んちでも行つて一緒に食べるか」

「はーい」

田中の家から離れる佐藤と鈴木

二人は気が付かない

田中の家を監視している猫がいることには

.....

「オラアアツ!!」

今、俺と陸は敵対している転生者たちのアジトを責めている

敵が特典の能力を使う前に身体能力を100倍にして叩き潰していく

10人ほどいたやつらも残り2人だ

「くっそお.....!!あいつはいねーのか?!?!」

「女ひっかけに行つちまつているよ.....」

悪態づきながらイラついている

追い詰められているようだ

片方の男が草を取り出して飲み込む

「風来のシレンのドラゴン草を食らえ!!」

火炎が吐き出され、火の息吹が空に襲い掛かるが

陸の剣によつて消滅させられた

「ルーン・セイヴ。いかなる超能力もこの剣には効かない」

幻想殺しの剣版の能力とも言えるルーン・セイヴで能力を無効化されていく

「んで、肉弾戦闘は俺にお任せって話だな」

ボケっとしていたもう一人を殴って気絶させる

さつき火を噴いてきた方は逃げたようだ

「これで全員か？」

「うん。念のためルーン・セイヴで全員の超能力を封印しておくね。  
封印剣舞・・・」

デモン・シール

そういうと、転生者たちの能力が封印される

「お前のその剣やつぱはチートだわ。しかも形態が10個あるとか」

「空のその力なんて僕のより使いやすいじゃん」

アジトを物色し始める

「うわあ・・・こいつらまじかよ・・・。高町なのはや、月村すずか、

アリサ・バニングス、テストアロツサ三姉妹の盗撮写真を隠し持って

やがる・・・」

「こつちには惚れ薬を作ろうとした跡があるね。原作キャラに飲ませようとしていたのかな？」

テン・コマンド・メンツで叩き斬る

霧散していく犯罪の証拠

「ほかにもヤバイのがあるそうだな。・・・ん？」

そうしてアジト内を探しているとあるものを発見した



「いっしょは・・・？」

・・・・・・・・・・・・・・・・

公民館でみんなで遊んでいて、くたくたになるまではしゃいだ  
アリシアちゃんなんかは寝てしまったのでおんぶしてあげる

プレシアちゃんはフェイトちゃんの手を引きながら歩いている  
ユーノちゃんは俺の右手を掴んでいる

最近ますます甘えられるようになったなー、と

家族が増えたような気持ちになる

帰ってくるともう、五時を回っていた

アリシアちゃんをベッドに寝かせて、夕飯の支度をする

ロボ子に任せてもいいが、たまには自分で作りたい

出かける前に下準備はしておいたので、あとはルーを入れて

煮込めばシチューの出来上がりだ

グラ子妹とヨーヨツマは仕事で出かけている

シチューを煮込みながら、器を出す

ああ、あの子の誕生日が近いからお祝いも考えなくっちゃ

そう思いながらテレビをつける

ニュースをやっている

そこで速報が流れる

なにに？海鳴市・・・、また海鳴市か壊れるなあ・・・

海鳴市の廃工場が謎の爆発？

こわっ!! 廃材が熱気で粉塵爆発でも起こしたのかな？

あつ、そういえばそろそろ卵切れるんだった

プレシアちゃんとユーノちゃんに煮込んでいるシチューを見ても

らい、

スタンドを出して向かう

近くのコンビニで買えばいいか

そう考えてコンビニに向かうと

風来坊みたいな恰好をした子供が道路に伸びていた

編み笠をかぶり、縦縞のマントをつけて、口にはカイワレ大根を啜えている

首に手をあて鼓動を確認する

息はあるようだ

見たところユーノちゃんや、フェイトちゃんの時並みの訳アリっぽいので

家まで連れていくことにする

そのマントからありえないほどの量のアイテムがちらりと見えたが、

目の錯覚だと考え家路を帰る

彼と仲良くなるのはもう少し先の話

▪  
T o b e c o n t i n u e d

## 二話 本当に行き倒れだった件

「ぐあつ、ぐあつ、ぐあつ、がつがつがつ」

ものすごい勢いで食事を口の中に入れて食べる男の子

現代の日本では異様といえる風貌をしている

網傘をかぶり、縦縞のマントをつけて、風来坊の格好をしている

倒れていた彼を家まで連れてきて、シチューを食べさせてあげている

トースターでパンを焼き、

レンジでレトルトのご飯をチンしておく

みるみるうちに食べ物が減っていく

彼が食事を終えたのはそれから30分後だった

.....

「いやー、あんがとさん」

ごちになりやした、と言って手を合わせてお辞儀をしてくる

おなかすいてたんだ

「ああ、ちよつと訳ありでな・・・」

そういつてマントの中から何かを取り出す

ツボ？みたいだが・・・

「ご飯のお礼にいいものやるよ。ほれ」

そういつて渡してきたのはツボだった

なんの変哲もないがどうしたのだろうか

「ごいつはポケモンのモンスターボールみたいなものな。投げれば人間以外の動物をすべて捕獲して仲間にできる」

それが本当だとしたらすごいが・・・

「あーつ、その顔は信じてねえなあ」

ちよつとまってる、と言ってまたマントの中をガサゴソと探る

「あつた、あつた。でろ!!」

そういつて先ほどと同じ形のツボを取り出し、呼びかけるとのつぺらした紫色のモンスターが出てきた

「きゃああああ?!」

急に怪物が現れて驚くフェイトちゃん。

ちよつ、首が締まる・・・

しかし、そのモンスターはおとなしくたたずんでいるようだった

「こいつはな、石とかの物体をおにぎりに変えちまう便利なモンスターなんだ」

エンゲル係数が下がるぜ、と言って笑ってくる

いらなくなった本を渡してみると、おにぎりに変えられてしまう

「ほーら。本当だったろ?こつこついつたすこつこついやつさえも従えられるんだぜ」

おにぎりをもらつて食べてみる

おお、シーチキンマヨとはわかつてるなあ

「このモンスターのツボをやるよ。あ、あと一つ、お前には世話になつたからな・・・」

そういつて何かを取り出す

すると、彼の手には見たことのないすごそうな剣が握られていた

「宝刀ミジンハ。俺が持っている剣の中で二番目にすげーやつだ。」

さすがに最強の剣は渡せねーがこいつならやるよ」

そういつて受け取る

もつた瞬間にそのすごさがわかる

宝刀と呼ばれるだけあつて、装飾もきらびやかで美しいが

何よりもその刀身の鋭さが目を引き付ける

高町家の人の戦闘技術をラーニングした俺が使えば面白いことになる

ジヨジヨの原作でアヌビス神がやっていた  
俺+その日のスタンド!!

みたいに攻められるわけだ  
そういえばここまでしてもらってまだ名前を聞いていないことに  
気が付いた

田中太郎です

「おれの名前は、風 来防。そのまんまさ。その日暮らしを楽しんで  
いたんだが・・・。」

実はちよつと変な奴らに巻き込まれちまってな・・・」

暗い顔になる風君

何があつたのだろうか

「まっ、気にすんな」

何かあつたら連絡してくれ

そういわれ電話番号がのつた紙を渡され、出ていってしまう

本当に風のようなひとだったなあ

「ねえ、田中くん」

どうしたの？ プレシアちゃん？

「シチュー、なくなっちゃったけど・・・」

・・・あ

.....

うーい食った、食った

うめえシチューだったぜ

さつきは田中つてやつに助けられてよかつたぜ

いくら強い能力をもつていても行き倒れで死ぬなんて

風来坊らしいっちららしいがしやれにならねえ

すると、俺と同じくらいの子供たちが

10人ほどやってきて俺を取り囲む

「なんだ？てめえら」

「お前、転生者だろう？見たところ単独行動しているってことは他所からきたってことか」

同じくらいのガキが俺を見据えてそういつてくる

こいつがこの羊の群れのボスらしい

「そうだよ。で？何の用だ？」

「俺たちの派閥に入れ。そうしたら身の安全は保障してやる」

うそこけ、とは返さずにこいつらの目を見る

さつき会った田中に比べたら幼く、よどんでいるクソガキの

瞳だ

「論外。あいつならともかく、お前らと組むなんて俺の格が落ちちまう」

その言葉に切れたのか、手に武器をもって突撃してくる

うし、あの手でいくか

両手を上にあげる

敵のうちの一人が武器をもって襲い掛かってくる

それを無防備にくらう

ほかのやつらの攻撃を次々にくらい

意識が遠のいていく

そうして、血まみれで床に伏す

「なんだ。大口たたいた割には雑魚じゃねえか」

ははははははははは、とすかした笑いを取る子供達

後ろを向いて、ここから離れようとしたとき

半分が消し飛んだ

「は・・・？」

何が起きたかわからずに絶命する子供達

いきなり五人がやられて困惑する敵のリーダー格

「何が起きた!!？」

そういつて後ろを振り返ると

無傷の姿の風来坊が立っていた

右手にはギザギザした青い刀身の奇妙な刀を持っている

「馬鹿な・・・?!不死身か・・・?!？」

「あたり。条件付きだけどな」

そういつて何の変哲もない草を見せてくる

「喧嘩を売った相手が悪かったな。散れ」

「ま、まて・・・」

右手の究極の剣を振るい、衝撃波を発生させて吹き飛ばす  
なすすべもなく遠くに飛んで行った

「ホームライン、ってか？」

剣をしまい、薬草を取り出してのみこむ

「このアイテム持っているだけで残機が増えるとかチートだわ。

一日に一個ずつすべてのアイテムが補充されるし」

今日はどこで寝ようか

そう考えながら、歩くのであった

To be continued

三話 体育祭でちやつかり種目にでないでいたやつを俺は見たことがある

「にゃああああああ!!」

雄たけびを上げてかりかりと爪でひつかいてくるダブルにゃんこ  
どうやら姉妹らしい

玄関前にいた猫を捕まえてしまった

前に風さんからもらったモンスターのおぼをもって何か面白そうな生物がないかなーと思つて散策していたら、転んで、前の方で日向ぼっこしていた猫二匹を捕まえてしまった

く、首輪がついていないから飼ひ猫ではないよな・・・

でも、人慣れしていないのかツボから出してやるとものすごくひつかいてくる

ごめん、マジごめん、と謝りつつ頭を撫で続ける

必死に撫で続けて猫たちが落ち着いたのはそれからしばらくしてからだった

.....

「あんだ、どうしたの？」

聞かないで

生傷が顔から絶えない俺を心配して声をかけてきたアリサちゃんにこたえる

すずかちゃんもついていたばんそうこうを猫にひつかかれた箇所  
に貼ってくれる

ありがとう・・・ありがとう・・・

クラスの女子からは、「痴情のもつれ」とか、「女を捨てたから」と  
かよからぬ噂が立つ

ああ、学校生活での肩身が狭くなるうゝ

プレシアちゃんがあきれた顔でひそひそと話しかけてくる



「で？あの猫たちを飼うの？」

当然。捨てて保健所に連れていかれて薬殺処分とかいやだし。最近かまってやれてなかったホープのランプを撫でてご機嫌をとる

アリシアちゃん、さすがに教室内で人の膝の上に乗るのはどうなの？

廊下までこのクラスにいる六大美少女を見に来ている男子達がすごい剣幕でにらみつけてくる

怖いので目を合わせないようにしておく  
くわばらくわばら

クラスの佐藤君、鈴木君、遠藤君なんかはあまり怒っていないように見えるが、

その実すさまじい怨念を感じる

こえー

能力を使って暗殺してこないよな？と怯えつつ授業を受けるのであった

.....

もうすぐ体育祭だ

適当に綱引きとリレーに入っておく

運動神経はいいほうだから大丈夫だろう

佐藤君、鈴木君はさすがというか、個人で出られる最大種目の4種目にでるようだ

女子からは期待の声援を送られる

モテモテのイケメンめ（悲哀）

なのはちやんたちは玉入れとかやるみたいだ

よし、当日は五段重箱のお弁当を持って行って皆を驚かせちやる  
帰ったらグラ子妹とお弁当をなに作るか一緒に考えよう

.....

やあ

へ？俺が誰だって？

町田江つてものです

あ、転生者です

前世ではいじめられっ子でクラスカーストの最底辺だったけど、今  
回の人生はかなり良かった

いじめは少なくとも俺たちのクラスでは起きていないし、女子はか  
わいいし

神様がイケメンにしてくれたからやりほーだいでせ

今は体育祭で誰がどの種目に出るのかを決めているところだ

佐藤、鈴木、遠藤といったスクールカーストのトップはクラス代表

リレーの出るようだ

いいなあ・・

俺はこのクラスでの発言力、影響力がないからなあ・・・

ほかのオタクな男子と集まってクラスの隅っこでひっそりとして  
いる

みんなも俺と同じく転生者だ

DSでポケモンをやっている

しかし、特にうらやましいのが田中つてやつだ

突然転校してきたと思ったらスクールカーストのトップと仲良く  
なっただし、

この学校の六大美少女と言われている娘たちと親しい付き合いを  
しているとか

どろどろとした感情が胸の中に湧き上がる  
なんであんな奴がかわいい子たちと・・・  
ほかのやつらと同じような顔をしている

この学校のほとんどの男子生徒から人気があるという高町なのは、  
月村すずか、アリサ・バニングス、テスタロッサ三姉妹  
どうしてあいつばかり

学校中の転生者たちが彼女たちを狙っているのに

田中許すまじ

暗殺を企て始めるのであった

・・・・・・・・・・・・・・・・

風さんにもらった宝刀ミジンハを高町さんちの道場を借りて振る  
う

なのはちゃんのお父さんである高町士郎さんと、兄である高町恭弥  
さんが

真剣を子供だけで扱わせるわけにはいかない、とって二人が監視  
しているうえでなら剣を振るってもいいといわれた

まあ、それは建前で二人ともこの剣を使ってみたくてしようがな  
いって顔をしているが

いいだろうと言って二人に見せびらかす  
本気でうらやましそうにしている

「田中君、田中君、うちのなのはを上げるからその剣を使わしてくれな  
いかね」

「今ならセットで美由紀もついてくるぞ」

冗談めかして言う二人

冗談・・・だよな？

「なにいつているの！おとうさん！おにいちゃん！」

そういつて顔を真っ赤にして二人の頭をぽこりとたたたく美由紀さ  
んとなのはちゃん

あ、こんにちわー

「久しぶりね、田中君。前に剣をあわせて以来かしら。」

あの時は涅槃寂靜が見えましたよ・・

思い出したくない記憶がフラツシユバックする

動きの見えない体捌き、その場に残る残像、一瞬で距離を詰めてくる奥義

それ以上いけない（防衛本能

体を震わせながら美由紀さんにお土産を渡す

なのはちゃんから聞きましたですが、ここのお店のお菓子食べてみて  
いって、いっていたそうなので、よかつたらどうぞ

「ええ、うれしいなあ。いいの？ありがと〜」

うーむ、やはり女性はすいーつのよわいな

そう満ちげにうなずいていると、なのはちゃんにじっと見つめられる

どうしたの？

「・・・わたしには？」

0円のスマイル

頬をつねられた

いひやい、いひやい

「むー、お姉ちゃんにはプレゼントがあつて私にはないんだ・・・」

背中に乗ってきて、いじけはじめ

子泣き爺みたいにとりついてきた

除霊するために、お祓いしなくては

袋からあるものを取り出し、髪につけてあげる

「へっ？」

それ、ららぽいったとときに買ったからあげる

なのはちゃんに似合うじゃないかな

髪留めをつけてあげた

彼女の茶髪によく映える金色をチョイスして買っておいだ

「ありがとー！ー！！」

そういつて首をぎゅうううううと絞めてくるのはちゃん

ぐわああああ、除霊どころかますます呪われてしまったああああ

「この子は女性関係でもつれる未来が見えるな・・・」

「田中、なのはがほしければ俺を倒して行け」

「私は?!」

高町さん家は今日も愉快だった

お返しに、なのはちゃんと美由紀さんが作ったというスイーツをも  
らって帰った

明日は体育祭だ

T o b e c o n t i n u e d

#### 四話 俺の知らないところで惨劇が起きたとか

たららっただったらー

ごまだれ〜、とゼルダの伝説風に重箱を取り出す

できたー、いえー

とグラ子妹とハグする

まさぐるのはやめて

「旦那さま、準備ができましたよ」

そういつて、全身コートで身を隠しているヨーヨツマ

さすがに学校であるの格好していたらまずいからな

重箱をバッグに入れて、学校まで向かう

「後で学校に向かうからな。ケガしないように気をつけるんだぞ」

ぎゆううううつと抱擁を受ける

顔に胸が当たって苦しい

「はあ、はあ」と顔が赤くなってきた

やばい

そう思い、胸をもんで、すきを作り抜け出す

あのままだったら玄関でいたしてしまっていたかもしれないから

な

いつてきまーすと言つて、外にでる

テストロッサ三姉妹が待っていてくれた

おはよー

「おはよう。今日は体育祭だね。楽しみー！」

世間話に興じながら登校した

.....

「でさあ、俺たち転生者が狙っているのに横からモブがかっさらつていくとかありえなくねー」

「マジそうだわー」

柄の悪い10代くらいの男子小学生が集まって何かを話している

「その田中つてやつ、ぶち殺していいんじゃない？」

「だべ？」

げひやげひやと気持ちの悪い笑い声をあげる

「じゃ、そいつを殺したらあの美少女たちを山分けってことで」

「じゃあ、俺は気の強そうなあの金髪ちゃんをもらうわ」

「俺は抱いたら激しく感じそうな黒髪のおしとやかな子ね」

生理的に受け付けないような気味の悪い表情で、婦女暴行の計画を立てる

波乱の体育祭が幕を開ける

.....

「がんばれー!!田中ー!!」

恥ずかしい

何がって？

みんなが名前を呼んで応援してくることだよ

綱引きやつているだけなのに名前を呼ばれるのはさすがにね

敵どころか味方の男子からも鋭い視線を浴びる

おっかねー

しかし、応援された以上彼女たちにかっこ悪いところは見せられな

い

いしよ、こらしよ、と力を込めて引っ張る

あっ、すっぽ抜けちゃった

結局負けちゃったよ

まじめにやりなさい、とアリサちゃんからおしかりを受けてしまっ

た

俺がスタンド使ったら一般人にも見えるから大騒ぎになっちゃう

し

.....

「みんな、準備はいいかー？」

おおー、と誰もいない教室に集まった子供たちが決起している

「田中をぶっ殺した後に、女子を拉致。あとはぐるぐるまわしてお楽

しみだ」

「俺、よく効く薬もってきたからよ!!これ飲ませてぶっ壊そうぜ!!」  
「じゃ、しゅっぱーっ」

ドアを一人の男子生徒がくぐろうとした瞬間  
吹き飛ぶ

ぬっと、変な格好をした男子が出てくる

「なんだてめえ!!!」

「殺すぞオラアっ!!!」

男子達が吠えるが、目の前の男は動じない

「お前らさつき田中ってやつを殺すとか言っていなかったか？」

「それがどうしたつーんだよ!!!」

「あいつに会いに教室まできたら、近くでごみどもが何かいっていた  
ようだったから

「ごみ掃除に来たのさ。」

「ぎげんな!!死ね!!」

銃を懐から取り出す

発砲するが、キン、という音を鳴らしてはじかれる

見ると奇妙な盾を装備している

「ラセン風魔の盾。お前らごときにはもったいなかったか。」

ドアを閉めて密室にしてくる

「一人で俺たちに勝てると思ってるんのか!!」

「そうだ!!罠んで袋にしちまえ!!」

そういつて襲いかかってくると

突然現れた巨大な顎にかみ砕かれる

「ぎゃあああああああ!!!」

「あああああああああ!!!」

悲鳴が上がる

みると、骨でできた竜が男を食べている

「なんじゃこりゃあ!!」

「くるな!!くるなあああああ!!」

次々とかみ砕かれる



「ガラムドラゴンって言ってな。骨の龍さ。とりたてて特別な力もってはいないが

お前らごみにはこいつで十分だ」

一人が窓から飛び降りて逃げようとする

窓を開けて、足をかけた瞬間

男の胴体に穴があいた

「はれ・・・？」

後ろを向くと一つ目の赤い魔物が首をこちらに投擲しているのが見える

「ギガヘッド。遠くにいるやつも自分の首を投げて殺すおっそろしいモンスターさ。」

もしダンジョンで出会ったら気をつけな・・・。あ、もう全滅しちゃったか」

教室が血まみれなので、ガラムドラゴンとギガヘッドを戻して、握りもとじめをよびだし

すべておにぎりにももらう

「これで当面の食い物は困らねえ」

もうけ、と言って服の中に隠す

ドアを開けて外に出ようとすると、男子生徒がしりもちをついてこちらを恐怖の表情で見ってくる。

さっきまでの惨状をばっちりみてしまったようだ

「な・・・な・・・」

「お前も転生者か？こいつら屑どもに用事があるんだったら帰んな。今頃三途の川を渡るのに忙しいだろうからよ」

そういつて、男子の横を通り過ぎる

「ああ、そうだ」

ぴたり、と歩みを止めて振り返る

「お前、もし田中ってやつに手をだしたら・・・」

けすぞ

口には出していないがそういつてきたような重圧感を男子は感じた

失禁して気絶してしまう

その姿をみた風が苦笑する

「そんな度胸もねえ小物か。前にあったあいづらが体育祭にでるって連絡をもらったはいいけどよ、どこにいるんだ？」

風来坊なのに方向音痴な風が校内をさまよう

この日、風来坊の格好をしたお化けを見たという人が後を絶たなかった

To be continued

## 五話 体育祭と文化祭ってどつちのほうが好き？

赤組の選手頑張ってください

青組の選手も頑張ってください

白組の選手もあきらめないでください

体育祭でよくある実況の応援

これはひどい

白組にとどめを刺そうとしている

しょうがないけども、こういった応援されるとはまずい

まあ、みんなから名前呼びで声援を受けるよりはましだけどな！

今はリレーを行っている

佐藤君、鈴木君が頑張っているところだ

勝つために俺はある秘策を考えた

「佐藤くーん!!鈴木くーん!!頑張つてー!!」

そう、六大美少女に名前呼びで応援させるということだ

自分の名前を呼ばれて気をよくしたのか二人の疾走するスピードがとんでもない速さとなる。グラウンドで風のように駆け巡っている。

二人の名前を呼んでいる女子もまんざらではなさそうだし

これは二人がフラグを建てたのでは？とわくわくする

うはっ、他人の恋路を盛り立てるのって楽しいぞ、とおせっかいおばさんのような思考回路に落ちる

周りの人たちで見えないから肩車してほしいというユーノちゃんを肩車しながら一緒に見る

彼女も今日遊びに来たようだ

出会ってから身体的接触が多いような気もするが、9歳で労働に従事しているぐらいだからストレス解消に誰かと触れ合っていたいのだろう、と推測し気にしないことにする

リレーはうちのクラスがダントツの一位だった

俺の足の10倍くらい早かった

くそつ、くそつ、くそつ!!

さっきの変な奴のせいで入れてもらおうと思っていた派閥がつぶされちまった

おかげでまた一人だ

なんで俺の身にはこんなことばかりが降りかかる  
すると、グラウンドでブルーシートに座って食事をしている見知った顔を見かける

この小学校で絶大な人気を誇る六大美少女たちだ

それだけでなく、金髪ツインテールのグラマラスな女性と金髪ロングな白のワンピースの女性までいる

田中が美女、美少女たちに囲まれている

男子生徒たちが少しでも彼女たちを目に焼き付けようと近くまで寄っている

やはり、顔が平凡なあの男があんな美女、美少女に囲まれているなんてみんな納得がいかないようだ

中にはあからさまに舌打ちをしているやつもいる

かくいう俺も全く納得できない

あんな平凡そうな普通の男が何で

佐藤や鈴木ならまだわかるがイケメンでもない不細工が美少女たちの隣に座るなんて許せん

やつをにらみつけながら、男子たちは食事をするのであった

.....

「マスター、周りの塵を消滅させていいですか」

やめーや、とホープの頭をチョップする

グラ子妹も結構怒っている

「マスターのことを馬鹿にしているような目つきで見ってくるやつらばかりにきにくわん」

やはり気のせいではなかったようで、俺一人でみんなとご飯を一緒に食べているから

嫉妬のこもった視線を一心に受け止めることになった

佐藤君、鈴木君を誘おうとしたらみんなに連行されて、あつという間にブルーシートの上に座らせられていた

茶化してあーんしあっているのも周りの男子を怒らせる原因となっているのだろう

グラ子妹とホープが最近病み気味だから、こうでもしとかなないと監禁されて絞りころされてしまうからな

プレシアちゃんを胡坐の中に入れてながら食事続ける

最初は恥ずかしい、恥ずかしい、と顔を真っ赤にしていたが、たくさん甘えてもいいんだよ？と言ったらリミッターが外れたようで遠慮なくべたべたとしてくるようになった

すずかちゃん、アリサちゃんの背後には仁王金剛が垣間見える

なのはちゃんもハリセンボンみたいに頬を膨らませている

ユ一ノちゃんは怖いので見たくない

親を取られた子供が見せる嫉妬に感じた

こんなことしているから周りの男子の不興を買うとわかっていても体が求めてしまう

グラ子妹とホープに調教されてからはさらに病状が進行してしまっただ

二人はニタニタと笑っていたが

そうしていると風さんがやってきた

相も変わらず風来坊といった格好をしている

ご飯を分けてくれたが、おにぎりばかりってどういうことなの

さつきそこで大量に手に入ったとか言っているが、何かあったのだろうか

男子の風さんが加わったことにより、ほかの男子も女子たちに話しかけ始めた

「な、なあ高町さん。よかつたら一緒に・・・」

「俺たちも一緒にご飯たべていいかな？」

押し寄せるイケメンの波

すげえ、この学校マジで俺以外美形しかない

風さんは男前って感じだし

話しかけられた女子たちもイケメンばかりでびっくりしているのかどぎまぎして

困惑しているように見える

せっかく女子たちがイケメンと知り合う機会だから、グラ子妹とホープ、そしてユーノちゃんを抱っこしながら連れてちよつと離れてみんなが話しやすいようにしておく

やだ、俺ってば気づかひのできる男、なんてふざけながら風さんとおにぎりを食うのであった

ちなみに風さんは生たらこ派だった

焼きたらこ派の俺と戦争になりかけたが半生のたらこで停戦協定を妥結した

T o b e c o n t i n u e d

## 六話 旅行 楽しみ よめ こわい

あれこれあったが体育祭がとうとう終わりを告げる  
俺たち白組が結局勝った

何で赤と青はいて、黄組がないのだろうとどうでもいいことを考  
えながら

閉会式を見届ける。

アリサちゃんやんが体育祭実行委員の委員長を務めていたと知って  
びっくりした

みんなでほめ殺しにしたら顔を真っ赤にして逃げて行ってしまっ  
た

かわいい、アリサちゃんかわいい、とほめそやしていたら  
スタンド組に空き教室まで腕を組まれて連行された

浮気、よくない

おれ、よめさんあいしている

解放されて教室に戻る

来週からはお泊りでどっかに旅行に出かけると先生からの連絡で  
知った

班は女子六人、男子六人だった

男子をとりあえず探した

知り合いの佐藤君、鈴木君、遠藤君、渡辺君、茂部くんと一緒に班  
を組むことになった

女子と組むことにもなっているが、男子班と女子班の組み合わせは  
くじ引きでランダムだった

俺のスタンドと一緒にだな、と自嘲しながらくじを引く

すつと、取り出すとなのはちゃんたちの班と同じ数字の6  
ではなく知らない子たちの班である9だった

女子は俺以外の男子に話しかけている

茂部くんもかなりのイケメンだから女子受けがいいらしい

俺？ごみのように扱われているけど？

帰ったら慰めてもらおうことにした

イケメンはええのう

.....

最近、体の調子がおかしい

足が動かないのはいつものことだが、心臓が痛んできている

もう少しで私の誕生日なのに

あの元気そうな男の子の顔が浮かぶ

学校にも行けず、一人っきりの私につきっきりで遊んでくれていた  
子

図書館でもちよくちよく会うが、やはり、私も学校にいつて一緒に  
遊びたい

なんだかんだ言つて結構気になってはいるのだ

イケメンじゃないけど、まあ、蓼食う虫も好き好きということなの  
だろう

自分の美的センスに驚きながらも、なんとか腕を伸ばして、彼と  
撮った写真を手に取る

ツーショットでプリクラみたいに間抜けなデコや加工がされてい  
る

ゲーセンに行ったときにやったものだ

まだまだ、死にたくない

彼と一緒に遊びたい

すべてが消え去ってしまうかもしれないと思うと恐怖と悲しみで  
涙があふれ出てくる

足が動かないこんな私が彼のそばにいても邪魔になるだけかもし  
れないが

もつといっしょに

本棚においてある、八神はやても知らない黒い本がうごめきだす  
事件はすぐそこまで迫っていた

.....

朝起きると、めちやくちや熱く感じた

まだ秋だから、残暑で熱を感じるのかなと思っていたが違うらしい  
なぜか俺のベッドの中にもぐりこんでいたテストタロツサ三姉妹が



原因だった

以外と寝相が悪いプレシアちゃんの足俺の顔に突き刺さっている。  
痛い

なんとか知恵の輪をとくように慎重にベッドの中から脱出し、リビングにまで行く

今日は旅行の日だ

朝の9時に学校集合でどこかにいくらしい

たしか沖縄だっけ？

バッグの中を再確認しておき、忘れ物がないかをチェックしておく  
お土産リストを見る

高町さん、月村さん、風さん

主にこれらの人たちのために何かを買ってくることにした  
スタンド組はお留守番だった

お土産は何かほしい？と聞かれたら

ママシ酒がほしいといわれた

朝食を作り、みんなが起きてくるまでニュースと本を見る

天気予報でも特に心配なことはない

空をみるとハトが飛んでいくのが見えた

.....

「ねーねー鈴木君、佐藤君、これ食べる？」

そういつって同じ班となった女子がお菓子を渡してくれる

ありがとう、と営業スマイルをして笑顔で返しておく

顔を赤くして照れている

今俺たちはバスの中で近くの空港まで向かっている

この女子たちもそこそこかわいいが・・

ちらつと別の座席を見る

六大美少女たちが同じ班の男子達に猛アプローチをかけられてい

た

ちよつと、引くぐらいに必死だ

普段接点がなくて焦るのはわかるけど怖がらせちゃったら本末転

倒だぞ

と、心の中で注意しつつ見守る

遠藤、渡辺、茂部も女子からすごい人気だ

ただ一人、田中は女子から相手にされていなかった

田中・・・

顔つきが普通だが、中身が伴っているクリリンみたいないやつのことを

哀れずにはいられなかった

窓の外の風景を眺めている

我関せず、といった感じでマイペースに楽しんでいるようだ

田中のことを女子に話したら「だれ？それ？」と言われてしまい

そんなことよりも私たちとお話ししようよー、とねだられた

六大美少女は田中の方をそれとなく気にしているのがわかる

気があるのか？

男子はそういうのに敏感だから、ほかの女子に相手にされていなくても

そんな美少女たちと仲がいいあいつは敵だと目されている

俺自身も複雑だが、嫉妬の心を抑えて、隣にいる女の子たちとの交

流を楽しむ

・・・・・・・・・・・・・・・・

こっそり連れてきたランプを窓の外に向けて景色を見せてやる

次々に建物が通り過ぎては見えなくなっていく

俺以外の同じ班の男子は女子からモテモテです

俺は話しかけられたことがないけどな！

ホープに慰められる

「どこかについたらいいことしてあげますから」

胸元をだけさせて誘ってくるが、旅行中はさすがにやめてほしい、と懇願した

グラ子妹はついてきたがったが、どう考えてもついてこれるわけもなかったのをおいてきた。

ホープがざまあ、といった顔でグラ子妹を見下したらキャットファ

イトに発展した

猫というよりは虎どうしの戦いだっただが

タブレットをたべながら早くつかないかなー、とぼーっと外の景色を眺めるのであった

T o b e c o n t i n u e d

## 七話 連行される宇宙人の気持ちを感じ知った

そうしてつきましたおきなーわー

わーぱちぱち、と一人で盛り上がる

同じ班の人たちはそれぞれ別の人と話しながら行動しているので

俺は一人で歩いていた

バス、飛行機と乗り継いで沖縄本島にまで上陸を果たした

ホテルについて、70分後に夕食であることを知らされる

明日は別の場所に泊まるようだが今日はこのままホテルで一泊する  
という

部屋はスタンダードなタイプだった

すると、鈴木君と佐藤君が悪い笑みを浮かべていた

スーツケースから見慣れたものを取り出している

64だった

ちよ

「作戦成功・・・ってな」

がちやがちやと準備し始める

彼らはわざわざ沖縄まで64を空輸して持ってきたらしい

ゲームキューブ、Wiiでないと彼らのセンスを感じる

「田中」。一緒にやろうぜー」

バスの中でずっとハブ、しかも飛行機でも実質一人つきりだったことを気にしているのか誘ってくれる

俺のネスの下スマ地獄を見せてやる

「僕はピカチュウかな」

「俺はドンキーで仲良死狙いだわ」

戦争が始まった

夕食の時間になるまでそうしてゲームし続けていた

.....

ドカポンみたいにリアルファイトになりかけたので途中でやめた  
夕食は自由に食べられるバイキング形式らしい

俺たち6人でテーブルを探していた

まだ空きがあるようだがせつかくなので景色のいい場所を取りた

い

田中はどこがいい?と聞こうとしたら

いなくなっていた

遠くをみると、女子に連行されているのが見える

アリサ・バニングスト、月村すずかが腕をとって連れていく

うらやましいやつだ

と思いつつ同じ班の女子たちを合流し、飯を食べ始めた

.....

「あたしたちにもちゃん構いなさい」

同じ班になれず、今日まだ話せていなかった女子たちにそういわれる

いつもはずっと一緒にいたからその分の反動で寂しくなったんだ  
ろう、と納得し

アリシアちゃんを膝に抱えながら食べ始める

サラダとサラダとサラダを取ってきた

沖縄のサラダがおいしそうだったので三つもとってきてしまった

お代わりしたくなるような味だ

ほかの男子も誘ったほうがよかったかな、と思いつつ、嫉妬される  
だけだから

やめておこう、と考え直した

炭水化物と肉をとってくるのを忘れたのでみんなから分けてもら  
う

佐藤君の卑怯なドンキーコングと、かみなりぶっぱの鈴木君絶対許  
さねえ.....!!

と怒りを燃やしながらばくついていく

ほかの女子は、俺が一人で彼女たちと食事をしているのに驚いてい  
るようだ

なんであいつが.....?むしろ誰.....?みたいな顔をしていらっ

しやる

気にせず食べ続ける

大所帯の父親とはこういうものか、と感じながらみんなと一緒に沖縄料理に舌鼓を打つのであった

部屋に帰ったらマリオカート64で決着をつけることになった

ジャンプ台前でサンダーを使ったらまたリアルファイトになりかけたので

旅行中はみんなで64を封印することに決めた

.....

あいつは今日ずっと一人ボツチだった

同じ班の女子からは全く相手にされておらず、正直見る目がない子達だと思った

佐藤や鈴木は確かに美形だけど、だからと言ってあいつをないがしろにするなんて信じられない

そのおかげでこうして昼食を一緒に食べられるんだけど

アリシアやプレシアは遠慮せずに田中に甘えるようになって

ただでさえ、グラ子って女の人やホープって大人の女性があいつと同居しているっていうのに、なおさらどぎまぎしてくる

こつちを見てほしい

もっと構ってほしい

一緒に過ごしてほしい

仕事で忙しいパパに甘えることができいなかったからか、自分の恋愛感情を含めた

どろどろとした思いが煮立っているのを感じる

すずかも顔には出していないが同じく寂しそうだ

そうして、思いついたことがある

就寝時間が過ぎてからあることをすると

みんなに提案したらあっさり通った

それは・・



「今日は私たちと同じ部屋で寝てもらおうわ」

その言葉を聞いた瞬間体に悪寒が走ったので抜け出そうともがく

「大声だすわよ」

おとなしく人の話を聞いたほうがいいよね！うん

「じゃ、横に寝なさい」

そういつてぽんぽん、と自分の膝を叩くアリサちゃん

膝枕だと・・・？

「ユーノやアリシアをいつも自分の膝に乗っけたりしているじゃない。

今更恥ずかしがることもないでしょう」

そうはいつても君の顔が真っ赤だけど

とは言わずにお言葉に甘えて膝の上に頭を乗つける

やわらかーい

頭を撫でられる

「ねてもいいわよ」

そういわれると、だんだん眠気が襲ってくる

ね、寝てしまったら何か悪戯をされるのではないか

そう考えつつも抵抗できずに

・・・・・・・・・・・・・・・・

「寝ちやった？」

小声で聞いてくるのは

「髪かたいね」

そういいながらいとおしそうに撫でるすずか

「あとは布団に寝かせてそれぞれが好きなポジションをとってくつきながら一緒に寝るわよ」

おーっ、と小声で言うみんな

昔の戦争のときに使われた密集体系のようなカオスが出来上がった

田中が時々寝言で「おもいといい・・・」

というと上に乗っているのはが「重くないもん!!」  
と首筋を軽くかんでいる



すずか、うらやましそうに見るのはやめなさい  
こいつが起きたときにどんな顔をするのか楽しみだ  
みんなで、状況証拠としてあたしたち女子に囲まれている写真を  
撮っておいた

T o b e c o n t i n u e d

八話 やってしまった でも言い訳はしない

起きるとそこは

女体じゃった

というのは冗談だが、笑えないくらいのブラックなジョークの光景が目の前に広がっている

俺の服の中になのはちゃんがもぐりこんでいる

おい

幼女

おい

それだけでなく囲碁みたいに四隅を取られている

プレシアちゃん、人の腕を勝手に腕枕にするのやめない？

すずかちゃんはこちらの腕をかでチューチュー吸っている

同じ血液型の人間じゃないと病気になるって大変だぞ、と心配しながら、なのはちゃんを服の中から出して起き上がる

そうだ、アリサちゃんに誘われて部屋にきたら、そのまま寝ちゃつて・・・

黒幕を探す

洗面台から身支度を終えて出てきたところのようだ

「おはよう。すけこまし。」

おはよう、墮天使

憎まれ口をたたくとケータイの画像を見せてくる

なんだ？

「この写真をみたら学校のやつらはどう思うのかしらね」

画像には俺がパンツ一丁にされて、みんなに囲まれているシーンが見える

これはしやれにならねえ

「あたしね、本当はもつと穏便にことをすすめようとしていたの」

こちらの手を取って、顔に触れさせてくるアリサちゃん

「でも、あんたは普通の女子には見向きもされないけど、なぜかなのは  
やすずかたちからはなつかれている」

ぐるぐると黒いわっかが瞳の中で回っている

その暗さに吸い込まれそうになる

「今くらいいこうしていちやダメ．．．？」

普段強気な彼女にしおらしくなられて、弱る

女の涙に弱いのは何年たっても変わらないらしい

彼女の顔をつかんで、引き寄せ．．．

．．．．．

「よう、夜這い野郎」

「やあ、夜這いくん」

「．．．．．夜這い．．．．」

部屋に戻ったらそんなことを言われた

無実冤罪を訴えるが全く取り合ってもらえない

「どこに行っていたかは知らねえけど、そろそろ片して朝飯食いに  
行こうぜ」

佐藤君のいう通り、早く行ってすいているうちに朝食をとってしま  
いたい

64 や、カード麻雀を片して部屋から出る

昨日は女子たちと一緒に食べたから、今日はおとなしく佐藤君たち  
と食べることにする

男子のヘイトが集まりすぎて死にそうだからな

風さんがいれば助けてもらえそうだけど、さすがに頼りっぱなしも  
気が引ける

そのまま朝のレストランまで向かうのであった

後から聞いた話だと茂部君も女子の部屋でお泊りしていたとか  
ばねえ

．．．．．

あいつが出て行った扉をじっと見つめる

唇を触り、さつきまで触れていたところを確かめる

しちやった

あいつ、いつもは飄々としているくせに・・・  
そういうところが嫌いで・・・大好きなのよ

みんなが寝ているようだが、場所を移して電話を取り出し、家族を  
呼び出す

いつも早起きだから起きているはずだ

「・・・あ？パパ？うん私、アリサよ。え？旅行中なのにどうしたの  
かって？」

実はね・・・」

外堀を埋める

狡猾だといわれてもやめない

だって、だって

本当にほしいと思ってしまったから

・・・

アリサちゃんがどこかに行く

実は私は寝たふりをしていた

昨日は彼の首筋をかんでいたなのはに嫉妬してしまったが、あのあ  
と血を少し吸うことに成功した  
でも、

ずるいなあ・・・

みんながいる前で・・・

ワタシガイルノニナア・・・

どす黒い感情が生まれる

自分が今まで気が付かなかった、目をそらしづつつけてきたもの  
アリサちゃんが本気を出したら、手ごわい

今のうちに彼をかつさらってしまおうか、アリサちゃんと協力体制を  
とったほうがいい

でも今は、私が内緒でつけた彼の背中の噛み傷を思い出して恍惚と  
する

みんなもしらないことだけど、彼とアリサちゃんが起きる前に先に起きたので体中にキスマークを付けておいた

服をまくらなければわからないことだけど、ばれたとしても、ほかの女が悔しがる様が目に浮かぶ

お姉ちゃん

おうちに帰ったらお話があります

彼と私の将来についてです

.....

「大丈夫か？正露丸あるけど」

いや、この寒気は・・・懐かしいような

「？」

佐藤君たちとご飯を一緒に食べている

みんなそれぞれ違うものを取っているのが面白い

「やっぱり朝は目玉焼きにベーコンだよな」

「やっぱり朝はスクランブルエッグにウィンナーだよね」

「は？」

「あ？」

いつもは仲がいい佐藤君と鈴木君がマジ喧嘩しかけている

二人とも能力を発動しかけているのか、大気が揺れ始めている

「.....やめろ.....」

遠藤君がそういうと、ぴたっと止まる二人

以前、二人に聞いたことがあるけど、二人も強いが、

遠藤君は別格だと言っていた

「.....そんな争いを朝からするな.....」

「.....わりい」

「.....ごめん」

素直に謝りあう二人

人間ができている

「.....卵かけごはんが至高だということは周知の事実なのだから.....」

「は？」

あ、そんな争いするなっていうのは「卵かけごはんが一番だからお前はカス」

みたいなあおりだったのか

朝食をもって別のテーブルに退避する

巻き込まれてたまるか!!

むぐむぐと朝食を咀嚼しながら、やっぱり卵焼きがナンバーワン!!  
と心の中で再確認して、そそくさと逃げた

To be continued

## 九話 野良のエイって釣ったら犯罪だつてよ

俺は!!今!!猛烈に感動している!!

というのはうっそぴょん

海岸に来て釣りをしております

ホテルを離れて向かった先はとある民宿でした

沖繩は大きな本島以外にも様々な島が存在する

今俺たちがいるここもその島の一つだ

あく釣りで待ったりするいいなく

昼食は特製のタコライスだった

こつてりとした味わいがたまらない沖繩の食べ物だ

白いビーチを回って貝殻拾いと白い砂集めをしたりもした

今は夕飯のおかずにするための魚を釣りに来ている

佐藤君、鈴木君はどんどん釣り上げていつている

くそう、リアルリゾートもめ

茂部くんもすごい速さで魚をとらえていつてるし

というか素潜りが似合いすぎている

沖繩出身の方ですか？

今日のスタンドはビーチボーイ

結構釣れているが、三人には叶わなかった

渡辺君と遠藤君はなぜかエイを捕まえてリリースしていた

野良のエイとか初めて見たわ

.....

白い砂浜を歩く私たち

「プレシアお姉ちゃん、この砂ってビンにつめると願い事が叶うの?」

「正確には思い人との恋が叶うってところね」

わいわいと砂をびんに詰めていく

なのも無邪気に砂をつめている

しかし

「アリサちゃん、お話があるんだけどいいかな?」

目が笑っていないとびっきりの笑顔でそういうすずか

ふーん

見ていたのね？と目で問うと

ニタア、と牙をのぞかせて笑いかけてくる

みんなからちよつと離れた場所に移って話し始める

さてと、一番やつかいな相手を仲間に引き込みますか

キスをしたのはアタシだけみたいだけど・・・ね

お互いに自分のアドバンテージを思い出して笑いあう二人

田中が見たら「あ！これ見たことがある」

と、修羅場を思い出しながら言うだろう

・・・

室伏の兄貴みたいに筋肉を信じてトライしたが、家庭教師の会社みたいになまくいかなかった

ビーチボーイにお疲れ、と労いの言葉をかけつつ夕飯を堪能する

そーきそばと、釣った魚のから揚げだった

この辺でとれる魚の味は淡泊なものが多かったが、宿屋のおかみさんの調理のうまさでおいしくなっていた

がつがつと食べていく

そーきそばをお代わりし、から揚げの争奪戦を行う

夜中は全力で枕投げをした

・・・

「じゃあ、彼の第一夫人になるのが誰かは後で決めるとして、それまでは協力して彼を落とす方向で」

「うん、よろしくねアリサちゃん」

お互いに手を握り合う

すずかは親友だ

だが、恋愛となったら話は別だ

彼と一緒にいられるならハーレムを築かせてもいいが、序列がどうかはまた別問題

お互いに右手でにこやかに握手をしながら左手に武器を隠し持っているような状態でにこやかに笑いあう



確か世界史でこん棒外交なんて言葉があったわね  
彼の外堀を二人で埋めて、逃げ場をまずなくす  
まずはそれからだ

.....

沖縄のある島に不審な船が上陸する

「ここか？」

「ああ、ここだよ」

「俺たち転生者が原作キャラと会いに来てやったっていうのに学校に  
いないなんてどういうことだよ」

チンピラ然とした男たちがぞろぞろと降りてくる

「つてーな!!押すな!!殺すぞ!!」

「ああ!!突っ立っているお前が邪魔なんだから!!」

次々と小競り合いを始める

すると一人の漆黒の鎧をつけた子供が一言告げる

「やめろ」

ぴたっ、と男たちの動きが止まる

冷や汗を流している人間もいるくらい、その男から感じるプレッ  
シャーが半端ではなかった

「身の程をわきまえよ」

漆黒の鎧の男が剣を取り出すと、さっきまでいがみ合っていた男た  
ちの顔が恐怖にゆがむ

「ままっままままっま待ってくれ!!あんたとやりあう気はねーよ!!!」

その言葉を受けてすつと剣を下ろす

後ろには緑色のオールバックの髪型をしたピエロのようなマスク  
をつけた子供が立っている

表情はうかがえないが、その目からは狂気を感じ取ることができる  
「いけ。情報を集めてこい」

そういわれて必死に散らばる男たち

「.....HO!HO!HO!HO!HO!」

ピエロのマスクをつけた子供が笑い出す

「しつこくちやああああああん。最近機嫌いいねえくく。ママに

キャンデーでももらえのかい？」

「・・・お前とは利害が一致しているから一緒にいるだけだ。なれなれしくするな」

つれない奴だ、と吐き捨て、ナイフとトランプのジョーカーを片手にピエロのマスクの子供が歩き出す

「あ、そうそう」

ピエロのマスクの子供が鎧を着ている子供に振り返る

「あなたのその鎧に傷をつけた男な・・・」

この島にいるらしいぜ

そういつて闇に消える

鎧を着ている男は剣を上にあげると

海に向かって剣を振るう

海が割れる

モーセの十戒のように地面まであらわになる

「この鎧は私があこがれていた男が着ていたものと同じもの。

それを傷つけたあいつは許せん」

剣を握る手に力がこもっていく

しかし、感情を律して冷静になっていく

鎧の傷跡を指でなぞる

「この鎧と剣を使えるようになるまで幾たびと修練を重ねてきた」

だから

「私が敬愛するあのキャラクターに傷をつけたのと同じことだ。やつ

は私が」

倒す

そうつぶやくと、粉を取り出して自分に振りかける

光に包まれると

音もたてずにその場から消えてしまった

T o b e c o n t i n u e d



「管理局——。ナニを管理するのかな？ああ、神様気取りの政教分離ができていない軍隊は世の中のために滅びなくっちゃな」

子供は、顎が外れるまで笑い続けた

・・・・・・・・・・・・・・・・

えっほ、えっほとランニングを続ける

海岸沿いを走るのは気持ちがいい

波の音をBGMに走り込みなんてしやれている

そう酔いしれていると

漆黒の鎧を身にまとった子供が海を眺めていた  
魔物にエンカウントしちゃったよ

じっと見つめていると向こうもこちらに気づく  
とりあえずこんにちわーとあいさつしておく  
返してくれた

よかった、挨拶が通じる知的生命体のようだ  
どうしたんですか、と聞く

「・・・・・・・・・・私はない」

ぽつり、ぽつりと漏らす

「ある仇敵と戦っていた。そいつはすさまじく強く、一筋縄ではいかなかった。

なんとか食らいついたが。」

しかし、と続ける

「負けてしまった。それも二度も。二度目の戦いを申し込むときに、負けたらなんでもいうことを聞くという約束をしてしまつてな。負けた結果二度と俺に付きまとうな、といわれてしまったのだ・・・」

落ち込んでいるようだ

負けるのが悔しいなんて当たり前だ

「見たところ君も剣を持っているようだが・・・」

そういつてこちらの宝刀ミジンハをみてる

ああ、これはある人からもらったんですよ

「そうか、とても素晴らしい剣だな。私もこういうものを持っている」

そういつて何か物々しい剣を取り出す  
きれいな剣だった

「神が作ったといわれる剣だ。名はエタルド。名剣の中の名剣だ。」  
そういつて鎧さんがその剣を振るうと衝撃波が発生し  
海が割れる  
すげー

「今の私は目標を失ってしまってもぬけの殻だ。見たところ君はかなりの  
手練れとお見受けいたす」

手合わせ願いたい  
そう懇願された

悲痛な魂の叫びが目の前の子供からきこえたような気がする

曲がりなりにも剣を振るっているから感じることはある  
同情も多少はする

しかし

アヌビス神がとりついていた時に言われた

「剣つてのはな、剣の良さで決まるものじゃねー。心の在り方が剣その  
ものだ。」と

今、自分の目の前にいる子供はすごい実力を持っているだろうが迷  
走しているような気がして悲しい

高町恭弥さんや美由紀さんたちも実力は目の前の鎧さんよりは下  
かもしれないが、メンタル面がすさまじく安定していた

きつと、この子は力を入れたはいいがまだその使い道を見誤ってい  
るのだろう

黙って愛刀を抜く

こちらの刀をみて相手のほう・・・という感嘆のため息が漏れたよう  
な気がした

「感謝する。ごや。」

誰もみていない早朝でよかったと思いい、剣を存分に交えるのであつ  
た。

.....

あいつがいねえ

民宿で目を覚ますと田中がいなくなっていた

あいつも何か能力を持つているようだが、昨日みたいなやつらがま  
だうようよいるかもしれない

危険だ

眠りこけている遠藤、鈴木たちを起こす

「起きろ!!田中がいらない!!探しに行くぞ!!」

寝ぼけていたが、田中がいないと聞くとすぐに顔つきを真剣なもの  
に変え

戦闘モードに入る

「よしいく・・・」

ぞという前に

ただいまーと田中が帰ってくる

気合を入れていた俺たち全員がずっこける

なんだ、無事じゃねえか!!

みんなの思いが一つとなった瞬間だった

「お前どこ行っていたんだよ・・・」

ちよつと朝の散歩しに

何の気もなしにそういう田中

憎らしいぜ・・・

そして、遅れて気が付く

誰かを背負っていることに

黒髪ロングの女子を背中にしよっている

「田中・・・」

？

「自首しようぜ」

結構マジ気に怒られた

でもこいつどつかで見たことあるような気がするんだが・・・

鈴木や遠藤たちも俺と同じく見覚えがあるのか首をひねる

彼女が起きるまでみんなで田中から事情聴取を始めるのであった

なんで冷や汗かいてやがる!! 言え!!  
T o b e c o n t i n u e d

## 十一話 お仲間が増えたそうで

突然だが漆黒の騎士という存在を知っているだろうか

「身の程をわきまえよ」

「・・・中々やる」

漆黒ハウス、主人公の特別な武器以外ダメージが通らないなど様々なトラウマをプレイヤーに植え付けてきたゲームのキャラである

そして、そんなゲームのキャラにあこがれた子供がいた

彼女の名前は――

・・・・・・・・・・・・・・・・

「私の名前は黒。よろしく頼む」

よろしくー

民宿のおばちゃんに事情を話して一緒にご飯を食べさせてもらっている

おばちゃんは「ええよ」と一言だけ話すと、厨房に黒ちゃんの分のご飯を作りに行った

さすがおばちゃん（さすおば

そして、目の前のご飯を平らげている漆黒の鎧を身にまとっていて彼女にいろいろと話しかけてみる

まず、気絶させてしまっごめん

そういうと、ぴたつと食べるのをやめ、顔を赤くしている

「・・・・・・・・・・・・・・・・きやあっていったの聴かれちゃった・・・」

小声でぼそりとつぶやいてるがさっきの悲鳴を聞かれたのが恥ずかしかつたらしい

せ、せやな・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・もしほかの人にさっきのことを言い出したら死なす・・・」

たぶん自分の命を捨てても絶対にそうするだろうから墓までこの秘密を持っていくことにした

「あー、いいか？」

佐藤君が黒ちゃんに質問を行う



「なんだ？」

「あんたが何でこの島にいるのかは分かった。田中と一騎打ちしていたのも。」

「じゃあ、これからどうするんだ」

「顔を俯かせ落ち込んでしまう」

「.....わからない」

「剣に迷いが見えていたが本当に自身の在り方を見つめなおす必要がある時期なのだろう」

「そして、あることを思いつく」

「ねえねえ」

「？」

「俺から提案があるんだけど」

「.....」

「こんにちはー」

「ああ、久しぶりだな」

「楽しい旅行が終わって、今は高町さん家に顔を出している」

「これ、前に渡しそびれた沖縄旅行のお土産です」

「シークワサーにちんすこう.....わかつているな」

「嬉しそうな顔の恭弥さんを見てるとこちらもうれしくなる」

「あの子はどうですか」

「お前の言う通り筋がいい。精神的に不安定だったがそれもなんとか消えた。」

「あのあと、黒ちゃんを高町さんのところに紹介した」

「お金は持っていたので門下生として月謝を払いながら高町の剣術を教わっているらしい」

「美由紀さんは妹ができたーと喜んでいた」

「なのはちゃんが複雑な顔をしていたので公園で一緒にブランコをこいで遊んで機嫌を直してあげた」

「あの年齢であの強さ。技量だけなら俺やお前よりも上かもしれん」  
「拾いものだったでしょう？」

「ああ。それに翠屋での仕事もまじめにやっているしな」

社会勉強をしたほうがいい、という俺の勧めによりアルバイトもやってみている

彼女は普通に接客もこなせるようになり、なのはちやんと同じく翠屋の看板娘としてご近所の有名人になっている

「ところでだ。田中」

はい？

「お前はなのはと黒、どっちをとるんだ？」

いや、考えてないですけど

がつくりと肩を落とす恭弥さん

黒ちゃんはいいい子ですけどあったばかりですからさすがにそういう目では見れないですし、

なのはちやんもかなり素晴らしい子ですけど、前に話したように俺にとっては庇護の対象にしか見えないです

恭弥さんには俺が元大人であることは話しておいてある

証拠に前世での知識を生かして彼とトークを交わしたらあっさりと認められた

お前みたいな小学生がいるか、と

それからは酒こそ飲まないもののよく一緒にご飯を食べたりもしている

ああ、そういうえば忍さんとは最近どうですか？

「順調さ。どっかの誰かさんが俺たち二人の仲をとりもとうとしてくれてるからな」

そんな人がいるんですね、ととぼけておく

あ、そういうえばこれもどうぞ

「？なんだこれは・・・」

黒ちゃんから「お礼の証！受け取って！」ともらったものの一部です

いい剣でしょ？

以前宝刀ミジンハを見せたときにむちやくちや駄々をこねてほしがっていたから

黒ちゃんからもらっておいした剣を渡しておく

名刀“和刀”使いやすく、手になじみやすい剣です

もう一つは“キルソード”という剣です。こちらも使い手の技術力を底上げするという性能をもった素晴らしい剣です

士郎さんと恭弥さんのお二人ようにどうぞ

と渡すと鞘から剣を取り出す

キルソードを手に振るう彼の姿は新しいゲームを親に買ってもらった子供のようだった

あとは沖縄で拾った白い砂を瓶詰したものを渡して、恋愛成就のこのアイテムを恭弥さんから忍さんに渡せばさらにメロメロですよ。女の子ってこういうのを渡されるの好きですもん

「そうか」

とだけぶつきらぼうに返してくるが、素晴らしい剣と白い砂の瓶詰をもらってご機嫌なようだ

そうしていると

「師匠、ご飯の用意がー」

黒ちゃんがぬつと道場に顔を出した

「あー！ー！ー！！」

俺の顔を見た瞬間はあああああつと輝かせ始める

「久しぶりいいいいいいいい！！」

そういつて犬のようにとびかかってくる

受け止めて、よーしよーしと撫でまわす

「私ちゃんとお仕事やっているよー。えらいでしょー」

頭を撫でてやると一層喜ぶ

本当にあのきりつとした子がこんな活発な性格だったとは信じられない

「いつも驚くが、黒はお前以外と接するときはなんとというか凜とした態度だから、そういうった姿を見るたびに度肝を抜かれるよ」

彼女の境遇を聞けば納得できるが、前世から生まれ変わりを果たした人物で、難病にかかり家の中からまともに出ることもできなかったという

健全な体に今世は生まれてとてもうれしかったとか  
今、こうしてじやれてきているのも早くに家族を亡くし、一人つき  
りだったからとか

その分たくさん甘えて愛情を求めているかららしい  
「……………ほかの女のおいがする」

彼女が何かを言ったようだが小さくて聞こえなかった

「あ、そういえば私あれから強くなったんだよ。リベンジさせろー!!」  
そういつて決闘だ、と言ってくる彼女

恭弥さんにここで戦ってもいいですか?という意味を込めた視線  
を送る

「やっちまえ」とワクワクしながらアイコンタクトをしてきたので、模  
擬刀を借りて二人で向きあう

いざ

「じんじょーに」

勝負!!

道場に刀同士のぶつかり合う金属音が鳴り響いた

To be continued

十二話 女性同士のドロドロはおなかいっぱいだよ・・

おはよう

「おはよう」

そういつて、登校する俺

あの旅行からもう二か月近くがたとうとしていた

クリスマスもそうだし、彼女の誕生日も近い

最近、猫姉妹ががくがくと震え始めているが寒さに耐え切れられなかったのだろうか

ぎゅつと抱きしめながら炬燵に寝るととても気持ちよさそうにごろごろとのどを鳴らしていたけども

いつものメンバーと佐藤君のグループと一緒に登校する

遠くから彼女たちと彼らを見守る

アリサちゃんときキスをした

してしまった

言い訳は聞かない

俺はロリコンだったのか、と少々落ち込んだが、同じ年齢だからノーカウントと気を取り直してスタンド組に報告した

キスをしたことはさすがに言わなかったが俺の表情を見て何かを確信したグラ子妹とホープに一晩中尋問され続けた

言わないとださせてやらないと何度も寸止めされたがなんとか耐え切った

私たちの体じゃもう満足できないのか？と泣かれたが必死で雄として頑張つてとりなした

あのままだと心中しかねない雰囲気だったからホツとする

そうしているうちに学校につく

教室の中に入ってしゃべっていると、先生がやってくる

「もうすぐ明日から冬休みです」

そういわれていえーっ、とはしゃぐ子供達

俺も同じく喜ぶ

「冬休みに特に宿題はないけど、風邪をひいたり、けがをしたりしないように気を付けてね。じゃあ、おわり」

そう先生が告げると、みんな楽しそうに帰宅していく

俺はアリサちゃんとすずかちゃんからのお誘いを思い出していた  
家族に会ってほしいとか

断る理由もなかったのであっさりと了承して

今日、明日と続けてお泊りすることになっている

グラ子妹とホープは最近よく切れる包丁を買ったとか

理由を聞こうと思ったが藪蛇になりそうだったのでやめた

すずかちゃんとアリサちゃんの表情が以前と違うような気がする

こう、なんというか

子供から女になったときのような・・・

気のせい、気のせいと考えまずはアリサちゃんの家に向かう

お昼もご馳走してくれるというので、とりあえず高級なお菓子を  
もって向かうことにした

・・・・・・・・・・・・・・・・

今日は勝負のひだ

あたしにとつて一番大きな賭け事

学校からすぐに帰ってきて、お気に入りの服を着て、ママにおめかしを手伝ってもらう

シャワーはあびてあるので大丈夫。ちよつとだけ香水をつけな  
す

うん、これでよし

昼はママと、夜はパパとあつてもらおう

二人にはあたしの気持ち伝えてある

今まであたしがわがままを言ったことがあまりなかったからか喜  
んで協力してくれている

次の日はすずかの番だ

今のうちに忘れられない思い出をあいつに刻んでおこう

あたしのおいとかが付くぐらいには

そわそわしながらあいつが来るのを待った

.....

指定の時間になったから着替えを持ってきて、やってきましたアリサちゃん家

相も変わらず大きい

気押しされそうになったが昔いったあそこに比べればなんぼのもんじやーい

そう考え呼び鈴をならす

ぱたぱたと人が動く音が聞こえ、インターフォンが応答する

「はい、バニングスです」

田中太郎と申します。本日はアリサ・バニングスさんのお誘いで招待をいただいたものです

そういうと「少々お待ちください」と言われ、ぷつと切れる

玄関から見知った顔の女の子が出てくる

いつもと違うのは、髪型をストレートに下ろして大人っぽい装いになっているところか

正直とても似合っていてかわいい

「よく来たわね。上がりなさい」

そういわれお邪魔しまーす、と言って中に入る

ちゃんと彼女の格好についていつもとは違う服装もいいね。髪型変えた？

とほめておく

気をよくしたのか、ママに手伝ってもらったのよ、とご機嫌に言うてくる

くっそかわいい

彼女の振る舞いにずきゅんとハートを撃ち抜かれそうになりながらもおうちの中に入る

アリサちゃんの顔がグラ子妹とホープの病んでいるときの顔つきに似ているような気がしたが、違うかな、と考えて玄関のドアを閉める

この日をきっかけに、外堀を埋められていくことに気が付いたが、

後の祭りだった  
T o b e c o n t i n u e d



### 十三話 小細工は効かないけど、直球は別

あのあとアリサちゃんのパスとママスと謁見しました

普通に社会的な対応をしたら若いのによくできた子だ、とほめられ気に入られました

俺ぐらいの子供つてもっと馬鹿だったり、ゲームとか遊んでばかりの子が多いもんな

アリサちゃんはふんす、って感じで胸を張っていた

最近大きくなってきたのが自慢らしい

つつこまんよ、俺は

お泊りのときはなぜか彼女の部屋で寝ることに

アリサちゃんのおいを感じて落ち着かずそわそわしていたが、そんなこちらを見てニヤニヤと笑っている彼女にむっときてくすぐってやった

彼女もくすぐり返してきたのでお互いに息が切れるまでくすぐりあつた

事後みたいになってしまったが気にしない

死ぬかと思つた

目を覚ましたらじつとこちらを見ている彼女の顔が目の前にあつてビビつた

朝食を彼女のご両親が見られている前で食べさせられたり、口元が汚れている、といつてティッシュで拭かれたりして恥ずかしいつたらありやしなかつた

帰るときには来ていたシャツの襟を直されて行つてらっしゃいと  
言われた

ばいばいじゃないの？と疑問に感じたが楽しかった、とグツジョブのサインをだして帰つた

ご飯、高級なものをいただいたからまたお返し考えとかなきゃ

.....

行つてらっしゃいなんて言つちやつた

パパとママがよくやっているやり取りを真似てみたが想像以上に

恥ずかしい

恥ずかしすぎて途中から田中の顔を見られなかった

でも、あたしの匂いでたっぷりマーキングしておいた

すずかには悪いが、誰のモノかを思い知ってもらうためだ

そして、楔を打つことに成功した

田中にごちそうした食べ物が高いものが多かった

律儀なあいつはまた時間を見つけてはアタシの家に来てお返しを

渡しにくるだろう

その時にまた、何かプレゼントをしてやり取りが続くようにして、

外堀を埋めていけばいい

アタシの匂いをつけてマーキングもできるし、パパとママもますます

す気に入ってくれるだろうから一石三鳥だ

逃がさない

渡さない

どんなにライバルが増えていってもアタシは・・・

・・・

現在はずかちやん家の前の来ている

といつても俺のアパートは月村さんちのご紹介だからそもそも近

くにあるんだけど

呼び鈴を押す

こちらでも昼食と夕食をぐ馳走してくれるそうだ

するとすずかちやんがすぐに出てくる

「いらっしやう」

にここにことしながら近づいてくる

「お姉ちゃんも待っているよ。さあ、上がって」

そういつて腕を絡めてくる彼女

なんか・・・沖繩の旅行に行つてからやけにスキンシップをするよう

になってきたような・・・

すると、くんくんと体のおいをかかれる

「・・・・・・・・田中君、シャンプーとか変えた」

うん、と答える

「そうだったんだ。いつもとちがうにおいだったからさ。」

内心ほつとする

実はアリサちゃん家から帰ってきてからすぐにすずかちゃん家に来たわけではなく、シャワーを浴びておいた

アリサちゃんの家シャンプーとかを使って、そのまますずかちゃんにあつたら

アリサちゃんと仲がいい彼女は何かきづくかもしれない

それを危惧して匂いを落としてきた

あぶねー

と内心びびりつつ彼女に連れていかれる

そのまま中に通され、居間へと入った

そこには月村忍さんと見知った顔のお兄さんがいた

「やあ、ひつさしぶりー」

「……元気か？」

高町のお兄さん、なにしてはるんですか

と叫びそうになったが、人の家で叫ぶのもどうかと思ひ声を抑える

促されるままにソファアに座る

隣にすずかちゃんが座ってくるが、なんというか近い

「いやー、すずかから大切なお話があるって聞いて驚いたけど君もすみにおけないねー」

「お前が俺の義弟になるとはな。まあ、剣を交えた仲であるし、お前の強さも知っているから文句はない。あの刀だが父さんもひどく喜んで使っていたぞ」

山の木々を斬りすぎて土砂崩れを起こしたぐらいだからな、と暗い表情で言う恭弥さん

聞いてはいけないようなことを聞いてしまったような気がしたが無視して

すずかちゃんに聞く

すずかちゃん

「ハイ♡」

大切な話って何？

何も聞かされていない俺は当然戸惑う

俺とすずかちゃんについての大切な話をするって何のことだ、と

「田中君」

うん

「私は、あなたが好きです」

.....

季節はもうすぐクリスマス

雪が降り、恋人たちが互いの愛を確かめ合うお祭り

甲斐性はあるってもへタレな男の子が女の子からのアプローチを受けて

悩む

そんなことも気にせずには雪は降り続ける

原作を知っている者たちはあの事件を止めるために動き出す

原作を知らない彼は知らず知らずのうちに事件に巻き込まれる

彼が腹をくくって、彼女たちをめぐることになるのはもう少し先のお話

T o b e c o n t i n u e d

十四話 ヲっちゃんや 許しておくれ 愛してる(媚

おお、おおおおおっ……

すずかちゃんに告白され、あのあと家で……

これ以上はよそう

彼女にお婿さんになってほしいと求愛されたが、お互いが成人するまで

保留で、もし、その時になってもすずかちゃんが俺のことを愛しているというのなら結婚する約束をした

したんだが……

「えへへへー♡」

膝の上に彼女が乗っている

教室でそんなことをされたら当然目撃されてしまう

男子からの視線はもとより、女子たちからの視線もやばい

クラスのほかの女子たちは「すずかちゃんとたななんとかくんがつきあってるの?!」

とか言っているし

佐藤くん、鈴木くんたち以外の男子からは殺されそうなほどの殺気を受ける

怖くなったので彼女をぎゅっと抱きしめ甘えて現実逃避する

「よしよし♡」

計画通り、といった顔をしているような気がしたが気にせず彼女の胸に甘える

子供だからと侮っていたら、まさか性知識についても完備していたとは

忍さんがちゃんと教えていたとは……

テスタロツサ三姉妹はものすごく驚いていてフリーズしている

アリサちゃんは「よかったわね、すずか」と冷静になぜか祝福している

なのはちちゃんは抱きしめあっている俺の背中に引っ付いてきて肩をぽかぽか叩いてきている

スタンド組は「ちゃんと私たちを愛してくれるのならどうでもいいです」

と言つてそのままいつも通り求めてきた

お前らマイペースすぎんよ、と思いつつも今は押せ押せ肉食すずかちゃんから目を背けさせてくれるスタンドたちが癒しだった

学校中に六大美少女の一角と田中が付き合っているという噂が流れたし、本当の意味で修羅場となり始めることになるが、今の田中にはまだ関係のないお話

.....

彼に気持ちを伝えた

顔を真っ赤にしておろおろしていてかわいかった

普段、あれだけみんなから甘えられている彼が先日私のベッドで甘えてきたなんて夢の様

女としての知識はたくさんつけておいた

最後の一線は男子から求めるようにさせなさい、というお姉ちゃんのアドバイスにしたがつて生殺しという状態を作り上げて・・・

ご覧のとおりになった

彼は律儀な性格だとわかっていたので、一度肌を重ねておけば少なくとも勝手に逃げるような真似はまずしない

これからさき多くの女性に求められることになるだろうが、彼をいやしてあげられるのは私だけ

この役割は譲れない

首元を甘噛みしながら時間をともに過ごすのであった

.....

彼が私の誕生日を祝ってくれて、帰ったあとに変な本が出てきた

黒い、真っ黒な見たこともない本で、まがまがしきを感じさせるものであった

本がひとりでに開いたかと思うと、光を放ち、四人の人間が現れた

三人の女性に一人の男性

驚いて車いすから落ちそうになってしまった

なんでも私がこの本のマスターで四人は私の従者だそうだ

闇の書とかいう本のマスターとなった私は彼らを自分の家族だと  
みなした

ご飯と一緒に食べたり、お買い物に行ったりもした

おっぱいが大きいシグナム

私と同じくらいの外見のヴィータ

のほほんとしたおしとやかなシャマル

屈強な見た目のザフィーラ

彼と遊ぶ以外一人つきりだった家が今ではにぎやかになった

今も庭でシグナムが剣の練習をしていたり

ザフィーラが本を読んでいた

ヴィータがテレビを見ていたり

シャマルが料理をしていたり

メシマズなシャマルが料理しているのに気が付いてすぐにみんな  
で止めた

しかし、最近みんなが夜中にどこかに行ってしまう

こっそり私が寝た後を見計らって何かをやっているようだ

でも、私に内緒でやっているということは子供の私をきつと巻き込

みたくないからじゃないかと思う

彼らの気づかいを無駄にしないように気が付かないふりを続ける

いつか彼女たちが自分から言ってくれますように

そう願う、床に就くのであった

.....

すずかちゃんの猛アプローチを受けていて、前の世界でのダンス系  
イギリス女子の

バーニングLoveを思い出し懐かしくなった

すずかちゃんの場合、軽くタッチはしてくるものの最後はこちらが  
手を出すように調整してくる

まさに男殺しだ

ミジンハをもって夜中の稽古をするために裏山まで向かう

ホープやグラ子妹、最近出番がないヨーヨツマツに頼んで鍛錬用の  
器具をいろいろ作ってもらって

稽古場を作り上げた

いつも高町さんちの道場を借りるのも悪いと思って作った場所で、自由ののびのびと練習ができる

いつか風さんみたいになかつこいい一匹狼になるのも悪くないな、と思いつつ道を歩いていると

前に騎士の格好をしたグラマラスな女性が立っていた

暗くて顔は見えないが凜とした雰囲気をもっており、あの黒ちやんに近いものを感じる

誰だろう

こんばんわー、とあいさつしておく

警戒しながら見てきたが、こちらを数秒見定めると、警戒を解いてくる

「ああ、こんばんわ。こんな時間に子供が一人で出歩くのはまずいんじゃないか？」

用事を済ませたらすぐに帰りますよ

「そうか」と一言だけつぶやくとそのまま遠くを見始める

何かあったのかな、と思い横を通り過ぎようとする

彼女の手に剣が握られこちらの首元に突き付けられる

斬る気はないとわかっていたのでそのまま動かずに止まる

しかし、それが逆にまずかった

「見切ったな、貴様。相当の手練れだと見える。」

もし、彼女が剣を出した時に慌てるなり動揺するなりしておけばばれなかったかもしれないがそれも遅い話だ

「同じ剣を握るものとして興味がわいた。勝負しろ。」

俺の周りの女性は どうしてこんなにアクティブなんだ、と思いつつやらなければやられると思いい刀を抜く

この刀を抜くたびに相手からほお・・・、と言われるのに優越感を感じつつ

正眼の構えをとる

正面に相手をとらえ、いつでも構えを変えて残心をとれるようにする



「この剣の名はレーヴアテイン。私は烈火の騎士。行くぞ!!」

消えたかと思うと、目の前に突然現れる彼女。大きな胸が揺れて目がそつちに向けられてしまうがそれどころじゃない。

やるしかない。

アヌビス神に生きて帰れますように、とお祈りをするのであった

T o b e c o n t i n u e d

十五話 今までにあつた女性の中でも一番スタイルがいいってどういうこと？

現在絶対絶命

ピンチダヴィーンチって言っていたドラえもんズのキャラがいたよね、と思いつつ

彼女からじりじりと逃げるのであつた

実は普通に打ち合えて、こちらが優勢になっていたのだが汗で剣がすっぱ抜けちゃつた

まさかの凡ミスに向こうも唾然としていた

それどころか怒っているし

「貴様!!:剣士の命である剣を突然捨てるなど、私が貴様より弱いと判断してなめているのか!!」

勘違いで怒りのヴォルテージを挙げる彼女

ゆっくり、ゆっくりと後ずさりする

「峰うちで許してやる」

字、違くない?と突つ込みつつ彼女の剣が振るわれて両手でガードしようとする

すると物陰から黒い影が出てきて、彼女の剣を受け止める

その姿には見覚えがある

半生のたらこおにぎりで和解したこの人は……

「よう、お前俺がせっかくくれてやった剣をポイ捨てるなんてひどくねーか?」

まあ、十全以上に使いこなしてこの宝刀も喜んでいるようだけだよ。」

そういつて片手で相手の剣を受け止めながら宝刀ミジンハを投げてる

それをキャッチする

「貴様……!!何者だ!!」

「ただの風来坊さ。お前さんもなかなかやるようだが何か焦っている

「みたいだな。」

「!!!」

「剣を交えていたこいつも感じていたはずだがそんな剣で俺が見込んだ男はやれねーよ」

「そういつて赤く刀身が燃えている剣をしまう」

「喧嘩の邪魔はこれまでだ。あとは好きにやりな。最も、今のお前さんじゃ万が一にも勝ち目はないとは思うが。」

「そういつて踵を返して帰っていく風さん。」

「まじかっけえええええええええ!!」

「あの赤い刀見たことねーよ!!」

「ちよ、まだあんなのもつていたん?!と最近武器コレクターになってきた俺ははしやぐ」

「目の前にいる女の人は肩を落として落ち込んでいる」

「.....あの男のいう通り私は焦っている、私には時間がない」  
「かつて、プレシアちゃんから聞いたのと同じようなセリフ」

「それは。つまり.....」

「マスターの命がもうすぐ失われてしまう。それを阻止するために私たちは魔力というものを集めている」

「ユーノちゃんからかつて聞いた魔力の存在」

「こことは違う世界ではその魔導をつかさどる文化が発達した国があるのだという」

「プレシアちゃんももとはといえばそちら側の出身だという」

「助けない。マスターを救いたい.....!!」

「悔しそうに言うおっぱい騎士さん」

「しかし、魔力が足りないんだ.....!!」

「その子のために魔力が必要だという」

「さすがに子供の命が失われると聞いてほおっておけず、協力を申しでる」

「ありがとう」とはいうが表情は暗いままだ

「私にはほかにも仲間がいる。マスターに使える四人の騎士だ。」

「この人もかなり強かったからほかの人も強いのだろう」

とりあえず落ち着ける場所まで移動するのであった

.....

ということであうちに連れてきました

「お、お邪魔します・・・」

とおずおずと入っていくシグナムさん

グラ子妹は、「私より大きいだと・・・」と戦慄し、ホープは「寄せてあげる、寄せてあげれば私だってもっと・・・」とぶつぶつと言っている

無視してヨーヨツマツにお茶を出してもらおうように頼む

シグナムさんはびっくりしていたがすぐに取り直している

さつきよりは冷静になっているようだ

猫姉妹はシグナムさんをじつと見据えて警戒している

おや、珍しい。この子たち結構おとなしいのに。

ヨーヨツマがお菓子とお茶をもってきてくれたので会話を続ける

「改めて自己紹介させていたどころ。私の名前はシグナム。烈火の騎士と呼ばれるプログラマだ。闇の書と呼ばれるロストギアの防衛システムをやっている。」

ロストギア。あのジュエル・シードとかいうのと同じやつか

「ロストギアはそれ単体で世界を滅ぼしかねない力を持つものが多い。」

すさまじい威力を持つ存在だな」

そういってずずとお茶をすすりながらお菓子を食べるシグナム

さん

「あつ、このお菓子おいしい・・・」みたいな顔をしたのを見逃さない

「きさま、いやあなたほどの実力のある人に見込んでお願いがある」

頭を下げた頼んでくる

「どうかわが主、八神はやてを救うために力を貸していただきたい」

その名前を聞いた瞬間頭が真っ白になった

.....

今日も学校だ

彼に会える

告白して肌を重ねてからますます楽しくなってきた

夜の一族の事情も説明して彼の血を吸わせてもらっている

いつも一緒にみんな登校しているが今日は抜け駆けして彼を起  
こしに行く

ぴんぽーん、と呼び鈴を鳴らす

返事がない

「あれー？」

いつもならもうこの時間には起きているのに

おかしいと思えばドアノブをまわしてみる

開いている

鍵がかかっているなんて不思議だとかんがえ、そつとドアを開け  
て中をうかがってみる

電気がついていない

「田中君？」

そういつて中に入っていく

呼んでも返事がない

おかしい

そして、彼の部屋の前までやってくる

自分の旦那の安否が気にかかり、ドアを静かに開ける  
いた

ベッドで寝ている

布団から顔だけが見える

布団がやけに盛り上がっているような気もするが気にせず  
布団をめくる

いつも彼にはドキドキさせられているからお返しに一気に布団を  
剥いでびつくりさせようとした

それがまずかったのか

はだかのショートカットの女の子と抱きしめあって寝ていたのを  
見ってしまう

思わず布団をかぶせ直してしまう

え？

いや

え？

もう一度ぴらっ、と優しくめくる

やはり裸のショートカットの女の子が彼に抱き着いている

近くには車いすがおいてあるからこの子が普段使っていたのだからか

それよりも、嫉妬の感情がマグマのようにたぎってきて抑えるのに苦勞した

ぷくーつと頬が膨らむがあることを思いつく

布団にもぐりこみ、ショートカットの女の子が抱き着いている方は反対から

彼に抱き着く

もちろん噛みついて血を吸うのも忘れない

彼が起きたときに事情を聴かせてもらうのは当然として、

目を覚ました時にどんな風に驚くだろう、と愉快的想像をしながら彼と一緒に眠るのであった

▪ T o b e c o n t i n u e d

## 十六話 めでたしめでたし・・・とはまだいかない

おっぱい騎士ことシグナムさんに頼まれ、八神はやてちゃんを救うために

ホープを連れて突撃、夜中の八神さん家!!  
をやることにした

シグナムさんに連れられてホープとともにはやてちゃん家に入る  
おいしよつと

ほかの騎士さんたちにもものすごく警戒されているようだが  
シグナムさんを盾に進んでいく

そうしてはやてちゃんの部屋の前までつく  
ドアをたたく

「主、シグナムです。入ってもよろしいでしょうか?」

「ああ、どうしたんシグナム?」

という声が聞こえてくる

「協力者を連れてまいりました」

「え?」

そういわれて中に入る俺とホープ

「あー!ー!ー!ー!!!なんや!!!田中君やん!!!いやークリスマスの日以来や  
なー!!!」

とこちらまで車いすを漕いでやってくる彼女

もうすぐで死んでしまうとは信じられなかった

図書館で知り合ったあの子が死ぬかもしれないと聞いてあっさり  
と自分がいま持っている切り札を切ることにした

最後の願いを惜しみなく使う

ホープ

「はい」

はやてちゃんを救ってあげてくれ

そういうとホープが輝きはじめ

はやてちゃんを祝福の光で包む

驚いて剣を抜いてこちらの首元に突き付けてくるシグナムさん

しくじったら俺の命をやろう  
目でそう問いかける

気押されたのか、すこし動揺するとじつとこちらをにらみ続けている

光が収まると、彼女が現れる

見たところなんの変哲もないが

「な、なんやなんや?」

はやてちゃん、体の具合はどう?

「え?っとうわわわわわわ!!?」

そう驚く彼女

「心臓の痛みがとれたああああああ!!?」

そういつてがばつと立ち上がる

「足が動くようになったああああああ!!?」

ダツシユで部屋からでて外を走りまわる彼女

俺もつられて一緒に走り回る

彼女の脇の下に手を入れて大きく持ち上げながらくると回る

騎士たちは啞然とした顔で見ている

ホープに聞いた話だと、あの闇の書というロストギアにマスター登録されているのが原因だからそれを断ち切って普通の人間に戻したのだという

闇の書から魔力を奪われ続けていたから足も動かず、命の危険が迫っていた

そして俺の「はやてちゃんを救ってくれ」というあいまいな願いが功を奏し、

はやてちゃんの孤独な人生を救う、つまり彼女にとっての大切な家族たちも救うために、闇の書からの呪縛を解き、不老の人間として彼ら四人を切り離したという

グツジョブ!!マジグツジョブ!!お前最高だああああ!!

と昔みたいにテンションをあげてホープに抱きつく

誇らしげにえっへんと顔をドやらせている

そのまま夜だというのに朝まで騒ぎ続けた



．．．．．  
はずだったんだけど．．．

なんで俺は彼女と一緒にのベッドで寝ているんだ？

いや、ここ俺の部屋だけだよ

裸で俺に抱き着いているはやてちゃんを見る

そして、後ろから抱き着いてきているすずかちゃんを見る

意味が分からん

騒ぎつかれた俺がホープに連れて帰ってもらったのはわかる

でも、はやてちゃんがいる意味がわからない

すると、がちやつと部屋のドアが開けられる

シグナムさんとほかの騎士さんたちが入ってくる

「主はやて．．．と、ああやつぱり裸で寝ておられましたか」

寝るときはいつもこうなんですよね、とあきれた風に行く

「あなたが主のおっしやつていた田中様だったのですね。いつもあなたのことは主よりお聞きしておりました」

そういつて膝をつく四人

「そして、感謝を。闇の書の呪縛から主だけでなく、私たち四人を救っていただいたことにたいして最大の謝辞を」

どうやら騎士さんたちも救われたようだ。よかったよかった

「では、主が起きられたらまた声をおかけください。外でお待ちしております。」

旦那様。」

．．．．へ？

ぎいぎいぎいぎいとドアが閉められる

旦那様？

誰が？

オレエ？、と東方定介のようにとぼける

なぜかというと

「えへへ、旦那様だつてー♡あ・な・た♡」

はやてちゃんが実は起きていたからだ

シグナムさんたちが入ってきたときにはもう目を覚ましていた

そして、服を脱いで裸なのでダイレクトに感触が伝わる  
なるべく見ないように目をそらす

今気が付いたがなぜか俺もパンツ一丁だ

「あ、熱いと思うってうちが脱がせてあげたんやー♡」

ええ奥さんやろー?と言ってくる彼女

いいから早く服を着るんだ・

「えー?もう少しこうしてようよー♡」

じゃないと・

「じゃないと・ナニ?」

後ろを振り向くと八重歯をのぞかせてすずかちゃんがじつと無表情で見てる

「あれ?ほかに誰かいたん?旦那と私のひと時をじゃましないでほし  
いなー。空気を読むって言葉あるやん?」

「私の旦那様に何か用ですか?」

空間がゆがんで見える

「ああ、側室って意味かな?それだったら許してあげる」

「あんたどっちかっていうと愛人氣質に見えるけど」

「は?」

「あ?」

布団の中にもぐりこんで現実逃避する

龍虎どころか核弾頭と核弾頭のセッションだよ

グラ子妹が呼びにくるまでずっととうづくまっていた

To be continued

## 十七話 プレシアちゃんマジ女神

「……で？」

でっていう

殴られる

この漫才も久しぶりだな、とグラ子妹に向き直る

「これは何があったんだ？」

そういつて俺の両腕にくっついて二人を見る

左には服を着たはやてちゃんがニコニコと

右にはこれまたニコリと笑ってくるすずかちゃんがそれぞれくっついてる

「……マスターの嫁が増えるのはいつものことだ。ただ、ちゃんと手綱は握っておけ」

そういわれながら黒タイツに包まれたおみ足であそこを踏まれる

テーブルの下からこっさり周りにばれないようにやってくるあたりがグラ子妹らしい

いやらしい

このままなのもあれなので朝食を食べる

意外と料理上手なヨーヨツマツにごちそうになりながら食べようとすると

右と左、両脇から同時にあくんとおかずをはさんだ箸が伸びてくる  
どちらを先に食べようか迷っていたが器用に両方食べる

俺は、死なない

きつと

絶対

……

田中君がいつも通り登校してきた

娘たちも最近彼と遊べていなかっただから彼の顔が見えた瞬間喜び始めた

と思つたら、ぴたり、と制止する

よく見ると、見知らぬショートカットの女の子とすずかちゃんに腕

をとられている

思わずむっとするが、それよりもいつも飄々としている彼の顔が青くなっていることに気が付いた

腕をとっている二人は同時に彼に話しかけており、田中君は「あい」とか

「うん」とかしか言わない

女性同士のキャットファイトが男性を疲れさせるだけだと知っている私は

彼を二人から引き離し、抱きしめる

「自分たちの欲望を叶えるのもいいけど、彼の状態をよく見たほうがいいんじゃないのかしら」

幼女化してちいさくなってしまったが、最近成長しなおしてきた胸に彼の顔をうずめる

役得だと感じながら、そのまま彼を学校まで連れていく

娘達もついてくる

さつきまで争っていた二人は一時停戦したようだ

いつもは頼りがいのある彼の、女性同士の争いに巻き込まれて疲れしている顔が

なぜかかわいく見えてしまった

.....

あい

うい

はっ!!

おれはしようきにもどった

裏切り者のセリフを吐いて本当に正気に戻った俺

二人に今後もこんなことをするなら俺からは話しかけないようにする

と言ったらマジ泣きされた

今回ばかりは彼女たちに非があると考えたので、謝らずにテストロッサ姉妹やアリサちゃんたちと教室で話す

はやてちゃんは今まで休校していて、まだ復帰手続きをしていない

から途中までついてきて帰っていった

「ごめんね、ごめんね、と壊れたレコードのように謝り続けているその姿がホラーチックで、心臓がきゅつとなったのでプレシアちゃんに慰めてもらった」

「すぐかちゃんも落ち着いてきたので、もうあんなことはしないと約束してくれた」

大奥的な女の暗闘は別にして

「そういえば、冬休みが終わって転校生がやってくるらしい」

「俺たちと同じ学年だが違うクラスに転入してくるという」

「このクラスじゃないのか、残念だと思いつつ先生が来たので席に戻る」

猫姉妹はツボが割れて、どこかに逃げてしまった

モンスターのツボは割れたら入っていた生物も自由になるらしい

「またかえってきたら特製の鯉節をあげよう」

「そう考えながらにやんこたちの安否をうかがうのであった」

.....

「.....以上が、今まで私たち姉妹が音信不通だった理由と、闇の書の顛末についての報告です」

「そう告げるのは、かつて、田中のモンスターのツボで捕獲されてしまった猫姉妹」

「実は闇の書の主である八神はやてを見張っていて、その親交がある田中を玄関で見張っていたら姉妹そろってとらえられてしまった」

「つかまつている間に、一緒にお風呂に入れられたり、毛づくろいをされたり、おいご飯を食べさせられたり、一緒の布団で寝たりした」

「ま、まあ悪くはなかった」

「妹も思い出して恥ずかしくなったのか顔を赤くしている」

「今、私たちリーゼ姉妹はお父様であるギル・グレアムに報告している」

「.....計画がすべて無意味になった、か」

ふつと笑って肩の荷が下りたように安心するお父様

当初のプランだと、あの八神はやてを犠牲に闇の書もろとも禁断の兵器で封印する予定だった

「それが闇の書ばかりでなく、その騎士たちも解放され名実ともにハッピーエンドとは」

もう、私が管理局でやる仕事はなくなったな

「そういい、立ち上がる

きつと辞職されてるのだろう

そもそも、闇の書との因縁を断ち切るための最後の戦いだと踏まれて今回のプランを進められてきたお方だ

あの田中という男の子の顔を思い出しつつ、もうひとつ気がかりなことを伝えなければならぬ

それは・・・

.....

「おーいはやてー!!」

そういつてこちらに声をかけてくるヴィータ

足がよくなった私は部屋の本棚の整理をしている

今は他の騎士たちに手伝ってもらい、半分くらいが片付いた

「どうしたんや?」

「この本はどうする」

あー、とその本を見て懐かしくなる

彼から初めてもらった本だ

あの能天気なイケメンでもなく、不細工でもない普通の顔を思い出して

笑う

「それ、ちよーだい」

ほいよっ、と渡され、ページをめくる

彼がおすすめていた本は実は私はとつくの昔に読んだことのある本だった

でも、誰かからもらったプレゼントはひさしぶりだったのでうれしくてそのまま取っておいてある

今は私の想い人となったあのひと

急にやってきたと思つたら、私の命を救つてくれた

いっぱい、あのあと遊んで回った

本を閉じて、あの黒い本がおいてあつた場所に目を向ける

そこには何も存在していなかった

.....

「くそ!!くそ!!」

かつて特典を持っていたが、陸のルーン・セイヴによって力を失つた男子が悪態づいて町を歩く

「金はある。時間も、だけど・・・」

やりたいことが見つからねえ

自分のもっていた力を失い悲観にくれる少年

そんな彼の呼びかけに応じたのか、とある本が彼の前に姿をさらす

「・・・なんだ?こりゃ」

彼にとって不幸か幸福か、莫大な魔力を持っていたために事件は起きる

ぶちぎれた転生者たちが、本気で特典を使うのはもうすぐ先のこと

To be continued

## 十八話 これは夢だから問題ない

朝起きる

すずかちゃん、アリサちゃん、プレシアちゃん、はやてちゃんが一緒のベッドにいつの間にか入り込んできている

ドアのほうを見るとうらやましそうな顔でフェイトちゃんとアリシアちゃんが顔をのぞかせている

いや、これ以上はさすがに入らないから

そう目線で訴えつつ、抜け出す

寝言で「包丁、脇腹、植物人間、nice boat」というワー

ドが聞こえたが

気のせいだ

だ!!!

窓の方を見ると

黒くて丸い球体がうねうねとした触手を伸ばしていた

空をとんでいる同じくらいの子供たちが大勢攻撃を仕掛けている

もう一度窓の外を見る

触手が子供たちを吹き飛ばしている

夢か

そう考えて寝なおす

.....

「おい、大丈夫か?!」

そういつて弱っている鈴木に話しかける

「それ以上力を使ったら死ぬぞ!!」

鈴木が使った力はゲッターロボの力

つまり、ゲッター線という不可思議な力を浴びることでパワーアップ

のできる上に

ゲッターロボそのものを呼び出せる

「ごめん、ゲッターエンペラーをさせたはいけど維持しきれないや」

鈴木の切り札の一つであるゲッターエンペラー



最強のゲッターロボの一つでありその大きさは星を超える

無限に成長し続けるという能力をもったロボだ。しかし、莫大なエネルギーを必要とするのであまり長時間使えないようだ

「らあああああつ!!!」

そういつて黒い球体から放たれるビームやレーザーを切り裂く空彼のルーンセイヴがある限り超能力や魔法は効かないが、距離があまりすぎてこちらの攻撃も届かない

「王の財宝!!!」

かつて、古の英雄王が持っていたというすべての財宝が収められているという蔵を開けて、空中から神代の武具や、英雄たちがかつて使っていた宝具を打ち出していく佐藤

しかし、相殺される

ビームが当たっても、インドの英雄がかつて使っていた無敵の黄金の鎧を身にまとっているのでこちらもダメージはない、しかし・

「決定打にかけるな」

そういつて断言するのは最強の転生者である遠藤

自身の能力の使いどころを見極めようとしている

発動できれば勝ちだが、もし、効かなかつたら勝てない可能性がある

町に降りかかるがれきなどの二次災害を防ぐために、1000人以上いる転生者のうち500人は救助活動等に当たっている

攻撃を行っているグループもとめどなく攻め続けているようだが、

黒い球体はますます勢いを増す

その正体は闇の書の暴走体

原作では、八神はやてをコアとして暴走を始めたが、とある魔力が膨大にある原作知識をもつ転生者を取り込んでパワーアップを果たした

最悪なことに、取り込んだ魔力、知識等も黒い球体のパワーアップに使われる

それは、つまり・・・

「うそだろ・・・?!」

上空に大きなエネルギーボールが出現する

おそらく、この街にいる誰もがあの攻撃を知っている

「元氣玉かよ．．．!!!」

ドラゴン・ボールに出てくる最強クラスの威力を持つ攻撃

その名のとおりに、ほかの生物から元気を分けてもらってエネルギーの球体を作り、それをぶつけて相手を倒すという技だ。そして、この街には強力な力を持った多くの転生者たちが存在する

力を吸い取られ、息が切れていく転生者たち

「くっそ．．．!!力を吸ってやがんのか!!」

佐藤が宝物庫から霊薬を取り出して魔力回復を試みるが、回復した分すぐに

吸われてしまう

「ここまでかよ．．．」

そういつて、一人、また一人とあきらめていく子供たち

その顔には絶望の二文字が浮かんでいる

せつかくすごい力を手に入れて思い思いの人生を自由に過ごしていたのに、これで終わりなんてあんまりだ．．

黒い球体が元氣玉を放とうとした瞬間

元氣玉が霧散し

黒い球体が消滅する

は？という声を誰かが出したが、あれだけの死の恐怖をまき散らしていた存在が突然消えてしまった

そして、また誰かがつぶやく

「助かった．．．？」

そうだ。助かったのだ。

うおおおおおおお!!

とあちらこちらの歓喜の声が挙がる

ほっとして地面に降り立ち、倒れる佐藤達

その顔には笑みが浮かんでいる

「何が何だかよくわかんねーけど、俺たち・・・」

「助かった、ね」

おっしやあああああああああ!!!と佐藤と鈴木が抱きしめ  
あう

何があったか、起きたかなんてわからない

しかし、確実なのはあの闇の書の暴走体が消えたということだ

そのまま町は歓喜の声に包まれた

.....

「初めまして、主はやて、田中様」

正座をして三つ指をそろえてお辞儀をする銀髪の超人さん

「私は闇の書の制御プログラムの人格だったものです」

なぜ彼女が俺たちの前にいるのかは次回に答え合わせ

To be continued



その光景に驚いた周りの人たちが見つめてくる

今日の12時まででだったらなんでも治せるよ、修理したいものがあるならお早めに、と言っておく

あ、そうだ

風さんに前会ったときに謎のおにぎりと一緒にもらった色々な草があつたんだつた

風さんが渡してくれたメモをみて一つずつ効果を確認していく

えーつと、これはドラゴン草、飲むと火を吐く・・・アブな!!

これは胃拡張の種、胃が大きくなる・・・大食い選手権に出られるようになるのね

そしてこれが、と手に取って説明を見ながら草を調べようとした瞬間

「田中君おはよー!」

と言ってなのはちゃんかドアを開けて入ってきた

驚いて、間違えて飲み込んでしまう

あつ

急いで効果を見る

やばい!!何が起ころ?!!

メモを手にしたグラ子妹が読み上げる

「えーつと今マスターが飲んだのは」

高跳び草

.....

暗い暗い闇の中、ずっと私は一人つきりでここにいる

今までもこれからも

黒い球体の中から出られず、闇の書の制御プログラムである人格の私は

外で子供たちがなすすべもなく闇の書にやられていくのをこうして眺めているしかない

もうだれかを傷つけてしまうのはいやだ・・・!!

誰か

助けて

．．．．．ああああああ

叫び声が聞こえてくる

おおおおおおおおおおおっ!!!

近づいたと思ったら

男の子が目の前に降ってきた

頭から着地して、顔面を殴打する

痛みに悶絶して顔を抑えている

ああ、知っている

この子は．．．

「田中、か？」

へ？と自分の名前を呼ばれて振り返る田中

「主はやての知り合いである君がなぜここに？」

なぜか私のところまで降ってきた田中に問う

俺もわからない

草を飲んだと思ったら空高く飛び上がって

ここに落っこちたと答えてくる

意味不すぎて草生えそう、とわけのわからないことを言う彼

そして、彼の懇願する

「助けてくれ．．．!!もう誰かを傷つけるのはいやなんだ．．．!!」

そういうとまじめな顔つきになる彼

どうすればいい？

「私を殺してくれ．．．!!」

そういわれて顔をしかめる

こんなことを頼むのはひどいかもしれないが、このままでは世界を

滅ぼしてしまう

あなたはどうなる？

こちらのことを聞いてくる

「闇の書と一体化してしまっているからもう助からない。だからせめてこのまま人殺しになる前に消滅させてほしい．．．」

そう頼む

しかし、彼はなーんだと、  
会えたのが今日でよかったな

「へ？」

彼の横にハートマークの付いた青とピンクの怪人が現れる

その怪人が腕を振るって私に向かってこぶしを叩き込んでくる  
殺してくれるのか、ありがとう・・・

そこで私は意識を失った

.....

変なバグがくっついているからそれをクレイジーダイヤモンドで治して銀髪さんから引きはがした

すると、途端に力を失ったのか黒い球体が消えてしまい、後に残ったのは銀髪さんと、知らない子供

誰だ、これ

銀髪さんを背負いつつ、クレイジーダイヤモンドの治す力を使ってボタンのとれた自分のシャツをたたく

シャツがボタンのところまで引っ張られ、そのまま家に飛んでいく  
グラ子妹が裁縫をミスってくれたことに感謝しつつ戻った

そうして、今にいたる

深夜なのでほかの人は誰もおきていないが、彼女が無遠慮にこちらの顔をしっかりと抑えて、唇を重ね合わせてくる

服をまさぐってくる

手をつかんでナニしてんだ、とにらむ

「私の命を救ったのだから、私はあなたの物です」

おかしなところは何もないでしょう？と言ってくる

いや、なんで襲ってくるのかについて聞いているんだけど、と問いただすと

「.....こんな女はお嫌いですか？」

と言ってきた

大好きです、と即答してしまし、ベランダでする羽目になった  
もう、これ以上増えたら死ぬ・・・

遠くなる意識の中で、銀髪さんの恍惚としたドロ顔を見ながら  
体力つけるわ、と誓うのであった

AS 編完

S TS 編へ

To be continued



幕間 俺のなつやすみ1 くお前のルールはおかしい編く

次元航行艦アースラ

管理局所属の次元を駆け抜ける戦艦である

その館長であるリンディ・ハラオウンは目の前の現実が信じられなかった

自身の夫を死においやった仇敵である闇の書

それを地球から見守っていたらいきなりロストして消えてしまった

不思議な力をもつ子供たちが力を合わせて総攻撃を仕掛けていたが、それも効いてはいなかったはずだ

闇の書が上空に超高次元体のエネルギー弾を発生させたとき誰もが死を予感していたが

突然消え去ってしまった

何の比喩でもなく、本当に、忽然と

何が起きたのかわからない

そして、こんなことをどうやって上に報告すればいいのかわからない

い 出来上がった報告書に目を通す

部下が作ったその報告は、ありのままの事実を記すより、100倍上層部に納得されそうな記述だった

OKサインをだして、書類を部下に渡す

ため息をつきながら、ああ、息子と離れ離れはいやだな、とムスコンをこじらせるのであった

.....

えっち

すけっち

ぱいたっち

「田中」

森の中を男子友達と歩いていたら佐藤君のグループに声をかけられる

今日は男水入らずでゆつくり虫取りに来たのだ

「この蜜を木に塗れば昆虫が寄ってくるんだな？」

そうだよ、と答えてみんなに自分がとった虫を見せびらかす

キンオニクワガタ、小さいがめちやくちやタフで強い虫だ

俺が僕の夏休み2というゲームであった虫相撲で使っていた昆虫だ

最初は弱いのが、敵を倒せば倒すほどほぼ、無尽蔵に成長を遂げる愛着もあつたのでこいつでみんなの虫と戦うことにする

みんなで虫をとってそれを戦わせる遊びを提案した

のりのりでやるーぜ!!と気のもちのいい返事をしてくれた彼らに

こちらも全力で応えるべく、いい虫取りスポットを教えていく

次々にかかったようだ

「おお!?カブトムシだー!!」

「僕のはクワガタだ!!ミヤマクワガタだね」

それぞれつかまえられたようだ

もつてきたタンバリンに、相撲の土俵のように位置を示す線を引く

くつつくつく．．俺のキンオニクワガタは改良に改良を重ねた超工

リートクワガタ．．

全員ごぼうぬきしてやるわあああああ!!

と思つたら思わぬチャレンジャーが乱入してきた

その手には、大きな虫かごを持っている

あ、あんたは．．．

．．．．．

男子達と一緒に遊びたいといわれて出て行つた田中君

あのクリスマスからもう八か月がたつて夏になった

私たちも小学4年生へと進級し、今はみんな同じクラスだ

はやてちゃんも学校に復帰できたのでよかった

そして、今は女子だけの会議をやっている

私こと高町なのは、アリサちゃん、すずかちゃん、フェイトちゃん、

はやてちゃん、

アリシアちゃん、プレシアちゃん

子供組の女子は全員だ

アリサちゃん家にお邪魔して作戦を立てている

ふいにアリサちゃんが話し始める

「第一夫人になりたい人―」

爆弾をいきなりぶっこまれて面食らうが、周りの人たちは全く動揺せずスツ・・・と手を挙げている

なんでみんなそんなに冷静なの?!

「なのはは?..」

そう聞かれ、「ふえ?..」とどもる私

彼とそうなれたらうれしいけど..

「じゃあ、かれがほかのだれかに取られてもいいの?..」

そういわれて、彼の隣に誰か別の女の子がいる姿をイメージする

彼の隣に私以外の女の子・・・?

持っていたユーノくんからもらったレイジング・ハートという魔導道具にちからがこもる

二人まとめて砲撃し、彼の遺体を嬉しそうに抱きしめている自分の姿を幻視する

頭を振るって考えを変える

「いやだ」

あつさりと答えは出た

場を仕切っていたアリサちゃんも納得している

「じゃ、あいつをいたただくとしましようか」

にやりと笑うアリサちゃん

聞いた話だと、私以外のみんなは外堀をうめていつているらしい私もお兄ちゃんにそれとなく彼との仲をほのめかしたら、飲んでいたコーヒ―を嘔かれた

「二股・・・?いや・・・しかし・・・」

ぶつぶつと話し始めるお兄ちゃんはなんかおかしかった

ここに今はいない彼のことを考えながら、女つたらし、と頭の中で

彼の頬をつねるのであった

.....

「ぎっけんなああああああ!!」

「どうよ、俺のアメリカザリガニ・・・むしは」

「ザリガニつつつてんじゃねーか!!レギュレーション違反だろ!!!これ!!」

「ルールに虫とついた生物なら何でもOKって書いてあるじゃねーか」

「個体の名前じゃねーよ!!生物学的な名称に決まってるだろ!!!」

俺のキンオニが・・・キンオニが・・・

乱入してきた風さんのアメリカザリガニにフルボッコにされた

To be continued

幕間 俺のなつやすみ2      〽虫相撲したのか？俺  
(キンオニクワガタ) 以外の虫で？〽

やーつがくれたー

トラウマが最後までっもー

このこころをーたーしかに

えぐっているからー

(替え歌なら削除されない)

天元突破な歌のアレンジを歌いつつ風さんへの復讐を誓った俺

アメリカザリガニ絶対ゆるさねえ・・・

タンバリンの虫相撲の土俵をしいて、男子みんなを仲間に引き入れて

決戦の場を用意した

そして、やつがやってくる

網傘をかぶり、縦縞のマントをつけてカイワレ大根を啜えている男

風来坊、その人である

リターンマッチを申し込んだ。

もちろん、相手はあのアメリカザリガニである

レギュレーション？虫じゃない？こっちは腹の虫が収まらないんだよ!!!

奴を倒して俺達は前に進む

みんなの想いが一つとなった瞬間だった

「よお。田中・・・とその他大勢」

だれがその他大勢だ!!という声を無視してマイペースに座る風さん

「なんだ、先日の虫相撲のリターンマッチをしたって？」

アメリカザリガニを取り出して笑ってくる風さん

こちらをなめきつていやがる

しかし、今日の俺には勝算がある

それは・・・

.....

「ねーねー、アリサちゃん、この水着なんてどうかな?」

すずかに尋ねられて返す

「それ、ちよつと露出が多くない?」

「彼に見てほしくって・・・」

色ボケ全開で乙女チックな顔をする彼女

いや、あたしも田中ならいくらでもみてほしいけどさ・・・

「プレシア姉さん・・・これきわどくない?」

「何言っているの! フェイト! あの人を落とすためにはこれくらいやらなくちゃ!!」

「フェイト、フェイトーこれどう?」

横ではテストタロツサ三姉妹が水着を物色している

アリシア、それ（白色のスクール水着）は戻してきなさい

「でも、今日『男には負けられない戦いがあるんだ!!』って、目を輝かせて男子達とどっか行っちゃったね・・・あなたに水着を選んでほしいのに、バカ・・・」

なのはが若干すねながらも彼が喜びそうな水着を選んでいく

あのバカは今頃いったい何をやっているのだろう

夏休みのうちの一日を独占してやる、と計画を立てつつみんなで水着を買っていく

.....

「すげええええ!! なんだこのクワガタ?! はええええええ!!」

びゅんびゅん、と超高速で動き回るグレーのクワガタ

察しのいい人はもう気が付いたと思うがこいつは俺の今日のスタンドだ

タワー・オブ・グレー、かつて飛行機を落としたクワガタのスタンドである

見た目がまんまクワガタなので怪しまれずに虫相撲に出せた

空条承太郎という時間を止められるほど早く動けるスタンドを持つ彼にさえ捕まえることができなかつた速さを誇る

承太郎がまだ自分の能力が成長しきっていないなかつた時とはいえ、そのすごさがうかがえる

あつという間に風さんのザリガニをノックアウトした

「よっしやあああああ!!俺たちのクワガタが勝ったあああああ  
!!!」

抱きしめあつて喜びあう皆

しかし、いやな予感がする

倒れたアメリカザリガニをしまう風さん

「俺がリターンマッチを受けてやったんだから、当然お前らもリターンマッチを受けるよな?」

まずい、何か知らないが危険を感じる

断ろうとすると、佐藤君たちが「当たり前だぜ!!どんな虫でも出しやがれ!!」

といったので言質を取られてしまい、逃げられなくなる

そうしてリターンマッチが始まると……

……

「あーこれだけ買えば夏物の服は大丈夫よね」

女子用の服を買い込んで、今年の夏の服をそろえた

こっそりグラ子妹さんにおねがいして彼の好みを教えてもらった

代わりに学校での彼の姿をとった写真を渡したらとても喜んで  
いたが

いつもは彼にあーんしてもらっていたので物足りなさをかんじつ

つもパフェを食べる

「おいしー♡」

そういつてスイーツを食べるなのは

しかし、あたしはなのはを傷つけるわけじゃないけど残酷な真実を  
つげなければならぬ

特に、田中に水着姿を見せるのならば

「なのは」

「?」

「あんた太った?」

ぴしり、となのはが凍った

.....

「ふぎけんなあああああ!!!なんだその化け物はああああああ!!!?」

「虫だよ。ただ全長が1・7Mある普通のクモさ」

「生半可な脊椎動物より大きいじゃねーか!!!普通の虫にしろっつてんだろうが!!!」

「こいつはルール通り虫だぞ」

「タンバリンの上に乗っけられるサイズに決まってるだろおおおおお  
おおおお!!!」

きしゃあああああ、と俺のタワー・オブ・グレーを糸で捕獲して  
倒した化けグモが勝鬨を挙げている

スタンドのダメージは本体にもフィードバックするので俺も身動  
きが取れなくなる

家に帰ったらぼくなつやってひきこもろう

To be continued



幕間 俺のなつやすみ3 くトラウマ製造機な風さ  
んく

おもしろき こともなきよに おもしろく

高杉晋作

ヨロイグモ ぜったいゆるさん まじしなす

田中太郎

幕末の英雄の俳句と肩を並べちやつたな、と自画自賛しつつ  
最後の戦いに臨む

全開はタワー・オブ・グレーでさえもあの化けグモにやられてしま  
まった

今回はタンバリンでなく、ふつうに人間が使う大きさの土俵を作っ  
て戦うことを風さん提案した

それを聞いた時のやつの反応は「ああ、ごめんな、クモ子、このお  
兄ちゃんが負け犬な私めにもう一度チャンスをくださいだつてさ」と  
か言つてやがった

くさつたおにぎりを口に突っ込んでやったらトイレの住人になつ  
たが

チ そうして迎えたりリターンマッチのリターンマッチのリターンマッ  
チ

名前が長くなりすぎて意味が分からなくなってきたが、今回の目的  
はやつのヨロイグモを倒すことだ

生半可な生き物じゃかてない

そこで俺は今日のスタンドを呼び出す

タワー・オブ・グレー以外で勝機のあるやつが出てきた

それは

.....

「はあ、はあ、はあ」

息を切らして苦しそうにしているのは

「もうだめくく」

そういつて倒れそうになる

「なのは、いいの？あいつに水着姿みせてやりたくないの？」

なのはの頭に妄想が浮かぶ

彼とのプールでの水遊び

スライダーと一緒に滑る場面

そして、夕日を背景におしやれなレストランで素敵なひと時を過ごす二人

「なのー！ー！！」

おめでどう

高町なのはは高町なのはACT2に進化した

ボックスにおくりますか？

というウインドメッセージが出てきたと思えるくらい元気になってまた走り始める

ほかの子たちも懸命に走ってダイエツトしている

毎日体重を測って食べる量を管理していたあたしとすずかは涼しい顔で軽く走っている

プレシアは「若いつてすばらしいいいいい！！」とかランナーズハイに突入してハイテンションで走りまわっている

水着のセンスも私たちとは違っていたからきつと家族や周りの人たちの年代が大きく違っていたのだろう

田中にあたしのスタイルをみせてのーきつしてやる、と決意するのであった

.....

「おおおおおおお?!?!こいつはなんだああ?!?!」

リトル・フィートという虫です

一回目のときに風さんはザリガニを虫だといいはって出してきた俺も同じようにリトルフィートを虫だといいはって出した

大きさもヨロイグモと変わらない

今日のスタンドはリトル・フィートだった

それを生かして考えた

リトル・フィートは指先の爪で傷つけた相手を徐々に小さくしてし

もうスタンド

いかに硬い鎧に覆われていようが、甲殻には継ぎ目があるのでそこをほじくって傷をつければいい

みるみるうちに小さくなり、手の平で収まるサイズまで縮んでしまった

ぴきー、ぴきーと泣いている

ちよつとかわいそうだったかな

「俺たちの勝ちだ!!!」

勝利を確信した瞬間

俺たちはみた

とてつもなく大きな紫色の化けグモが風さんの背中から出てきたのを

.....

「はい、おわりー」

そういつて2キロメートルのランニングが終わる

「やつとおわったー」

息も絶え絶えでへとへとなグループとアタシやアリシアみたいに元気な子に分かれている

まあ、これからはちゃんとして毎日体重計にのりなさい

そういうと「はい・・・」としおらしくなるのは

お菓子屋の娘だから太りやすくなるのはわかるけど、油断しちやだめよ？

服とか切れなくなつちやうから

かわいい服はたいていサイズが小さいことが多い

だから、着るためになんとか痩せる人が後を絶たない

あたしたちはまだ小学四年生だけど今のうちに美容に気を使って  
おいて

潤いがある女性になる

そしてあいつをもっとメロメロにしてやる

あたしたち女子は想いを一つにするのであった

プレシアだけ「もちもち!!あゝゝもちもち!!!」

とか言いながら自分の肌さわってよだれを垂らしてるけど

.....

きしやあああああああああ!!!!!!

空をつんぎくばかりの咆哮を挙げて怒り狂う紫の化けグモ

普通のヨロイグモの数倍の大きさがある

俺のリトル・フィートはこいつの足に踏まれて身動きが取れなくなってしまう、

俺はというと、さっきまで小さくしていたが大きさがもとに戻ったヨロイグモに糸を吐かれてぐるぐる巻きにされている

なぜかこいつになつかれてしまったようだ

その姿をみた風さんが紫色の巨大な化けグモをツボに戻し、すつとモンスターのツボを渡してくる

「そいつ、お前になついちまったようだな。じゃあ、頼んだわ」

そういつてヨロイグモが入っていたツボをおいて帰って行ってしまった

ほかのみんなは女王グモに蹴散らされて地面に横たわって死体みたいになっている

ヨロイグモにじやれつかれながら

三度目の正直って言葉は？

と神様に問いかけた

あたまかじるのやめてっ

To be continued

STS 導入編1 あのトラウマの夏から数年がたち  
ました

クモが軽くトラウマになったあの夏休みが終わり、  
数年がたった。みんな中学生となった

相も変わらずアプローチの激しさは変わらないが、なんとか俺は生  
きている

すばらしい

今日はユーノちゃんに誘われて、ミッドチルダという場所までやつ  
てきた

魔導をつかさどる文化の国

魔導を知っていた男子達と、ちゃっかりついてきた女子たちも一緒  
に空港を降り立つ

うむ、いい天気だ

と、目の前の大火災から目をそらす

皆も絶句している

小学生の時に風さんからもらったモンスターのヨロイグモを出し  
てハグして落ち着く

ひんやりしてキモチイイ

「あほなことやってないでみんなを助けるぞ!!」

そういつてみたことのない服装に身をつつむ佐藤君たち

なのはちゃんたちも救助活動にあたるようだ

そういえば乗ってきた乗り物の中にいる人たちが俺と同じくらい  
の年齢の男子ばかりだったけど何かあったのだろうか

俺も今日のスタンドを出して戦うのであった

.....

「スバルはどこだああああ?!!」

俺たち転生者はわざわざ地球からやってきて、原作キャラが災害に  
巻き込まれる

この日を狙ってやってきた  
命を救ってフラグを建てるために

しかし問題があった

「あっ、あの柱の下にいるぞ!!」

「どけ!!俺が助けてフラグを建てるんだ!!」

そう、海鳴市にいるほぼすべての転生者達1000人近くがやってきてしまう

カオスになってしまったことだ

「ティアナ・ランスターもいるっけ?!」

「知らねえ!!俺はギンガ・ナカジマのほうが好みだがな!!」

お互いに原作キャラを助けようと向かうが、互いに邪魔をしあっている

なかなかうまく助けられない

すぐ目の前に原作キャラが倒れていて、俺が助ければ俺のモノになるのに

転生者たちの想いは一つだった

しかし

ずっと争っていて、時間が無くなってきたのか空港の柱が倒壊し始める

転生者たちがあつ、しまったと声を漏らすよりも先に柱がぐらぐらと揺れ始め

倒れているスバル・ナカジマに向かって倒れ始める

彼女が押しつぶされる前に転生者たちが見たものは

下半身が馬のようなビジョンを連れて原作キャラたちを助ける

自分たちと同じくらいの子の姿であった

.....

時は加速する

と言ってみたかったセリフをいって感動する

メイド・イン・ヘヴン

大当たりのスタンドだ

嬉しいことに、俺が成長したのか効果が少し変わっている

本来はこの世の時間をすべて加速させ、自分だけがその加速させた分動けるといふとんでもないスタンドだ

しかし、火災が起きているこの状態で時間を際限なく早めてもけが人が焼け死ぬだけだ

酸素不足に陥って意識不明の重体になる可能性もある

そこで、この世の時間すべてを加速して、その加速した分動くのではなく

自分の時間だけを加速させてみた

原作であるエンリコ・プッチは人類を幸福に導きために世界の時間を加速させ続け、宇宙が終わるときまで時間を早めた

しかし、俺にはそんな目的もないのですこし使い方を変えて扱っている

スピードは出したいだけだせる無限大のスタンド

けが人を助けるくらいいけない

青髪のショートカットの女の子と、同じ顔つきのロングヘアの女の子を救出し、

燃えている空港の外まで連れていき、郊外の安全な熱くない場所まで移動させる

スピードを無限にして一瞬でぬれタオルも用意しておいた

そして、炎の熱気でやけどしないように大きめのタオルも近くのお店から拝借して二人に巻き付けておく

これでよし

あとは救助が来るのを待つだけだが、その前に二人の意識を覚醒させておこう

.....

肩をたたかれている

誰だか知らないが私の体をたたいている

熱気で体が焼けるほど痛かったのに、今はその痛みさえ感じない  
死んじやったのかな、私

そう思って目を開けると

緑色の大きな化けグモがこちらをじっと見つめていた

「きゃああああああああああつ?!?!?!?!」  
思わずグーパンしてしまう

しかし、とてつもなく硬く、手が赤くはれてしまう

「~~~~~!!!」

起き上がると、遠くに燃えている空港が見える

ああ、そうだ

私たち、空港にいたら突然燃え始めて・・

するとさつきまで誰もいなかったところに誰かが現れる

とつさに身構えて警戒する

「誰?!?!」

おっ、起きた

そういつて誰かを担いでいる

その担いでいる人は・・

「ギンねえ?!?!」

君のお姉さんだったか

そういつてギンねえを肩からおろして、自分の服を上からはおらせ

て横にする

男の子

君、がれきに体を挟まれて倒れてきた柱の下敷きになりかけていたんだぞ

「へっ?あつ・・・・・」

そういわれて思い出す

朦朧とした意識の中

誰かの争いあう声が聞こえて

上を見上げると大きな柱がこちらに向かって倒れてくるのが見え

て・・

体が震える

さつきまであんなに熱かったのに

すると、体を抱きしめられる

「へ?」

ぎゆううううつと、抱きしめながら慣れた手つきでこちらを安心さ



せようと

頭を撫でてくる

「あ、あの・・・」

安心しな、悪夢はもう終わりだ

だからゆつくり寝てな

そういつて何か草を手を取って私の口の中に突っ込んでくる

「~~~~~!!!」

あまりの苦さに悶絶する私

「何するんですか!!」

ただけがは治っていないか?

「へ?」

そう聞かれ体を確認すると

打撲、やけど、擦り傷、さつきまで私の体を蝕んでいたあらゆる痛

みから解放されていたことに気が付く

じゃあ、俺まだやることあつから

そういつてその場から消え去ってしまう男子

後には足跡だけが残っている

あの人が私とギンねえを助けてくれたんだ

でも、それってつまり・・・

「寝顔を見られた・・・」

恥ずかしくなって地面に大の字になって横たわるのであった

T o b e c o n t i n u e d

## STS導入編2 俺の頭は食い物じゃねえ

あの日から数日が立ち  
今俺は

ヨロイグモに頭をかじられております  
ザクロのようにぱっくり頭が割れて血が吹き出す  
泣き叫ぶ子供

真つ青な顔でこちらをみつめる俺と同じくらいの年齢のお兄さん  
意識が遠くなっていく

そのままばたり、と倒れてしまった

.....

アタシの名前はティアナ・ランスター

兄であるティード・ランスターが入院している病院までお見舞いに  
やってきた

でも、最近何か視線を感じる

粘っこくて気持ちが悪い、こう、体をなめまわしてくるような

お兄ちゃんに早く会いに行って安心しよう

そういつて、兄の病室を開けると

兄と同じくらいの男子が緑色の化けグモに頭をかじられて、血を流  
していた

「きやああああああああああっつ???!」

病院内はお静かに、という壁の張り紙も気にせず<sup>!!??</sup>に思いっきり叫ん  
でしまうあたし

そのまま倒れてしまった

.....

ということがあったんですぅ

某司会番組の司会者のマネをしながら復活する

さつきまで死んでいた俺が急によみがえったのでびっくりしてい  
る二人

死人が歩き出した場面をみてしまったような顔をしている

お前もグルメだなあといいながらこちらの頭をかじっているヨロイグモの

クモ美をよしよし、と撫でる

あ、二人のこと忘れていた

えーつと、こんにちは。俺の名前は田中太郎。隣にいるお兄さんと病院で知り合った者です。きみがティーダ君が言っていた妹さんかい？

目の前にいるどこことなくティーダに顔が似ているツインテールの女の子に問いかける

「……はっ!!!」

フリーズしていた頭が再起動を果たせたのか動き出し、こちらにつきかみかかってくる女の子

「さっきのあれはいったい何よ?! 血を流して倒れたと思ったらすぐに復活して血も全部消えちゃったし!!!」

がくんがくんと首をゆらされながら今日の晩御飯を考える

目の前のツインテールの子の髪型を見ながら七面鳥の丸焼きが食べたいな、と考える

とりあえず落ち着かせる

名前を聴いてみたらティーダくんの妹さんで、ティアナ・ランスターとかいうらしい。

気が強そうな子だからきつと苦労しているだろうな、とティーダ君に同情しつつ

けがをしているという彼にあるものを渡しておく

「……?これは?」

飲むといいことがある草さ

そういうとティアナちゃんが「まさか麻薬!」と叫ぶ  
なんでやねん

こっちの草二つは飲んでいいけど、こっちは飲まずにお守り代わりにずっと持ち歩いていて。ご利益が必ずある神聖な草だから

「こいつどっかの宗教の回し者か!!」といった顔をしてにらみつけてくるティアナちゃん

これ以上は無理だな

そう思つて病室をお暇する

.....

あの田中とかいう変な男が出て行ってほつとする

大きな化けグモが出てきたときは本当にびっくりしたし、兄の容体が悪化したら困る

ナースコールを使って部屋から追い出そうか考えていたくらいだから出て行つたくれて安心して

「これとこれを飲むのか」

そういつてごくり、とさつき男からもらつた見るからに怪しい草を飲んでしまうお兄ちゃん

ちよ

「おにいいいいいいいやああああああんん!!?」

やばそうな草を丸のみしてしまった兄の背中をたたく

「おにいちゃん!!ペーしてペー!!」

ばしばしとたたき続けるがもう遅いみたいだ

飲み込んで胃まで到達してしまつたようだ

すると、お兄ちゃんの体が震えだす

ぶるぶるぶるぶる、と小刻みに振動している

やっぱり何か変なものだつたの!!?!

そう思い、兄の方をみると

突然発光し始めた

なんでやねーん

ぺかあああああつと後光がさしている神様みたいに

光り輝いている

輝きが収まると特に何もかわっていない兄が姿を現す

「大丈夫!!?」

顔を俯かせる兄

具合が悪化したのか

そう考え顔に手を伸ばそうとすると

がばつと突然立ち上がる

管理局で働いていて、大けがをおった兄は間違ってもたてるような状態じゃない

しかし、目の前にいる兄はとても元気そうに体をぐっ、ぐっと動かしている

「おれはぜんかいいもどった!!!」とかどっかの竜騎士みたいな言葉を吐いてどっかにむかって走り出す

そのまま笑顔で全力疾走して出ていく兄を、私はぽかんとした顔で見つめるのであった

なにこれ

なにこれ

「おかああああさああああああああん!!!」

STS導入編3 ムツのゴロウさんもまさか人間に  
手を食われたことはあるまいて

ヨロイグモことクモ美にのって旅をする俺

女子たちの過激なアプローチに身も心もボロボロになってきた俺  
は

グラ子妹やなのはちゃんたちに

「バケモンマスターになってきます」と書置きを残して家出した  
映画の大脱走の歌を口ずさみなが道を進む

適当にこの魔法世界をいろいろと回っているが、ここは一体どこな  
のだろう

本当に風さんみたいになっちゃったよ、俺、と思いつつも

おにぎりを取り出して食べようとする

あーんと口に入れようとする

なんか竜に乗った女子がこちらをじーっと見つめている

おにぎりをもった手を右に揺らす

女の子の顔が右を向く

おにぎりをもった手を左に揺らす

女の子の顔を左に向く

そのまま蚊取り線香の形みたいなぐるぐるとおにぎりを回し  
ながら

女の子の顔に近づけて

口に突っ込む

がじがじがじ、と手ごと食われる

その光景をみたクモ美が「それはあたしの持ちネタよおおおお  
!!!」

と言わんばかりにぶちぎれる

竜が「やんのかわれええええええ!!」とクモ美の威嚇にたいして咆  
哮し返す

腕を幼女に食われながら、真実の口に手を突っ込んだ罪人みたいだ

な、と見当違いなことを考えるのであった

.....

竜のフリードが危ないからと言って私を追い出した村の人たち

絶対いつか全員焼き殺しちやる

地獄に落ちろ、と心の中で中指を立てつつにこやかに村を出ていく  
ちなみにお返しに村の食糧はこっそりフリードにすべて食べさせて  
おいた

ざまあ

しかし、ピンチなのは私もだ

ろくな準備もなくついさつき村を追い出されてふらふらとあても  
なくたびを続ける

今日は一日目だというけど、こんな私みたいな子どもが言いたいこ  
とも言いにくい毒まみれなひどい世の中で生きていけるわけがない  
(ぽいずn)

フリードに乗っけてもらっているから疲れはしないけど、やっぱり  
食糧がほしい

うう、こんなことなら少しくらい自分の分の食べ物を確保しておけ  
ばよかった

今更になって後悔する

そして、空腹で倒れそうになった私の前に

大きな化けグモにのっかった変な男の人がおにぎりを食べようと  
しているのが見えた

はしたないことが分かっているでも視線が彼の手の手の白いお米に  
むいてしまう

手を振ってくる

そして、何を思ったのか私の口の中にあろうことかもっていたおに  
ぎりをつっ込んでくる男の人

叫ぶ化けグモとフリード

怪獣大決戦の等身大版だ、と変なことを考えながら目の前にいる人  
の手ごとおいしくご飯を頂くのであった

.....

風さんから家出する前に頼んで譲ってもらったモンスターのおか  
げで少なくとも空腹で死にはしないし、お金にも困らない

目の前にいる幼女に惜しみなく食べ物を与える

がつかつとどんどん口の中に詰め込む幼女

旅ガラスの幼女とはたまげたなあ、と考えつつ彼女の格好に目をや  
る

民族的な衣装を思わせる服装に、後ろにたたずむ大きな竜

食べ終わった彼女に名前を聴くと、キャロちゃんというらしい

金のエンゼルとかもってそうな名前だな、と馬鹿な考えを浮かべつ  
つ事情を聴く

なんでもこの竜が村にとって恐ろしい化け物だからその仲間であ  
るキャロちゃんも追い出されてしまったようだ

許せる!!と、どっかのモンスターな教授のマネをしつつ

案を出す

ツボをフリードに向かって投げる

ツボの中に吸い込まれるフリード

絶句するキャロちゃん

「なにやっつてんですかああああああ!!」

ビンタされる

事情をちゃんと話す

フリードと一緒にいるといやでもめだつし、街にいったら大騒ぎに  
なる

だからこうしてツボに収めて持ち歩けばどこへでも行けるのだ、と  
納得したのかビンタをやめてくれた

「ありがとうございます!!ありがとうございます!!」

と手をがっしりとつかまれガチ泣きで喜んでる彼女にドン引き  
しながら

一緒に旅をするか聞いてみる

「はい!!よろしくお願ひします!!」

そう元気な挨拶をしてくる彼女



俺の名前は田中太郎。よろしくな

「田中さんですね!!よろしくお願ひします!!」

そういつて一緒に歩き始める

「田中さんはどうして旅をしているんですか」

キャロちゃんに聞かれてぴたつと体を止める

冷や汗が止まらない

ツボから出てきたクモ美がよしよし、と六本足で頭を撫でてくる

息がくるしくなつて自立歩行できなくなった俺をクモ美が糸でぐ

るぐる巻きにして担いで歩き始める

何かまずかつたかな、という顔でキャロちゃんが白目をむいて痙攣

している俺の顔をみてながら笑っているのが見えた

手紙くらいは書こう、うん

T o b e c o n t i n u e d

## STS導入編4 プリズンなブレイクをしたい15 の夜

ぴかちゆう、げんきなんでちゆう

という言葉を思い浮かべる

旅を続けていた方がいいが、一緒にいたキャラちゃんと離れ離れになつてしまった

通信機器も全部ぶつ壊れてしまい、みんなと連絡を最近取つていない

ティアナちゃんやスバルちゃんの目が最近狂気をはらんできたように思えるが

無視する

ティーダが今頃犠牲になっていることだろう

星になったティーダ、とタイトルをつけつつ、現在の自分の状況を確認する

明らかに怪しいどつかの実験施設

俺は今、怪しい集団につかまってしまい、牢屋らしき部屋に入られている

隣ではびりびりという音が聞こえる

一日中十万ボルトしてんじゃねーぞ!!!このぴかちゆうが!!!と壁ドンすると、おとなしくなる

ちよつと大人げなかったかな、と考えつつ、隣の住人に話かけてみる

名前はエリオくんというらしい

何で電気ショックしてたの?と聞いてみると、やつらの実験で生み出されたようであり、ここから逃げ出して自由になりたいそうだ

だから自分の放電能力を使って壁を溶かして脱出できないかやっているが絶縁体で電気が通らない壁だという

横どころか前の方の扉はオートロックの扉で、ガラス張りらしい指紋照合しきだから特定の人物にしか開けられない  
俺の牢屋をいつも開けていたやつ顔は覚えている

い  
ガラス張りの壁を叩いてみるが、やはりとても頑丈で壊れそうにな  
隣の部屋にスタンドを送りこめはするが、壁をぶち破るほどのパ  
ワーは今はない

俺が君くらいの年齢の時には絶縁体とか知らなかったな、と考えつ  
つひらめく

電気が使えるのなら・・・

「やっとおとなしくなったか」

そういつて実験体を見つめる私

ここは管理局の裏の実験局

だ  
試験的な開発を好きなだけ行える科学者にとって夢のような場所

さつきからカメラで監視していたエリオと名付けられた実験体

その横には先日この研究所ちかくで倒れていて捕獲した青年

奇妙な刀とツボをもっていたのでそれを没収して解析していると  
ころだ

実験体エリオはあきらめずに放電し続けていたようだが、電撃を出  
すのをやめる

壁が電気を通さない絶縁体でできた硬い材質だからいくらやって  
も無駄だとうまくやけきがついたようである

隣の男と何か話しているようだが、マイクでは聞き取れない  
唇を読み取ってみると

だ　つ　ご　く

と言っているのがわかり、急いで部下たちを向かわせる  
すると、男とエリオがカメラの方を向いてきて口を動かす

ゆつくりときつきよりもわかりやすく

あばよ

それと同時に私は後ろから突然殴られる  
気を失う前の力を振り絞って振り返ると

電気を身にまとった河童のような化け物が、あの男から奪ったツボ  
と刀をもって電線の中に入っていくところだった

.....

「田中さんマジばねえっす!!」

もつとほめるがいい、エリオくん

俺が今日使ったのはレッド・チリ・ペッパー

電気を操るスタンドだ

電線の中に入ればどこへでも電気が通っているところに行けるし、  
電力を食らえば食らうほど際限なく強くなる

エリオくんが放電し続けていたのは壁を溶かすためじゃなく、俺の  
チリ・ペッパーに力を与えるためだ

そして、電気化して持っているものを引きずり込んで運ぶことがで  
きる

チリ・ペッパーに銘じて奪われて宝刀とクモ美のツボを持ってこさ  
せたわけだ

チリ・ペッパーから刀とツボを受け取り、隣の壁をぶった斬る  
いくら硬くて神様がつくったといわれる宝刀にはかなうまい

そうして、壁のむこうからエリオくんが出てきたというわけだ  
当然敵もすぐにやってきた

武装して何十人という大勢でやってきた銃を向けてくる  
動くな!!と叫んでくる

ガラス越しに俺たちはばーか、と挑発してやった  
奴らが激昂して銃撃してくる

しかし、強力なガラスの壁に阻まれる

当然、開けるには特定の人物しか開けられない  
普段同じ人間ばかりが開けていることに気がついたおれは

ことを起こす前に、それらの人物を全員気絶させておいた  
だからやつらはもう俺たちを追ってはこれない  
自分たちがつくった障害物に阻まれている馬鹿どもをみながら  
エリオくとふたりでチューチュートレインしながらあおり、チ  
リ・ペツパーで俺とエリオくんを電氣化させて脱出したのであった  
電線に入れたら、エリオ君がパワーアップしましたとき  
.....

「HOHOHO〜♪」

俺は今愉快なおもちやがたくさんつまった箱まで向かっている  
管理狂の老害どもにおもちやを用意させたら期待以上のモノをよ  
こしやがった

全く期待していなかった爺どもには笑顔になれる素敵なプレゼン  
トをくれてやった

クリスマスにはちよつと早かったがハロウィーンってことにして  
おいて注射してやった

今頃は俺と同じくらいの善良な人間になれていることだろう

実験所に向かうと

半壊していた

さすがの俺も唾然としてトランプのジョーカーを落としてしまう  
近くに倒れていた研究員に聞く

「おい!? ダイジョブか?! 何があった!!?」

優しく頭をなでながら聞いてやる

「に、逃げられた.....。実験体に.....」

そういつて指をさすほうをい見ると電氣の焦げた跡が見つかる  
なにかとんでもねえのがいやがったのか?

「た、助けて.....」

そう懇願する男

ああ、そうだ助けなくっちゃな

男の頭をぐいとひっぱり

のどにナイフを刺してやる

「ぐ・げええあああ・・・」

とかすれた悲鳴をあげて数秒痙攣した後に動かなくなった

ああ、やっぱりいいことすると気分がいいな

そう考えながら、次のおもちやを管理局に用意させるのであった

To be continued

STS導入編5 ドーラおばさんはかかあ天下の鏡

はい

「ほいー」

そういつて手を出し合う俺たち二人

今俺とエリオ君はどちらの道を進むのかを決めている

お互いにこっちのほうがいい、と言って譲り合わない

がちが明かない

俺の頭をクモ美が食べているので血も止まらず、このままでは失血死してしまうので俺の刀を上投げて、倒れた方向に行くことを提案する

了承するエリオ君

上に高く投げつけて・・・

・・・

「えーと、こんなものでいいかしら」

そういつて買い物袋をもって空を飛んで移動する私

ドクター・スカリエッティの生み出した戦闘機人と呼ばれる体をサイボーグ化した

人間、ナンバーズと呼ばれる集団の一人である

私の能力は他の誰かに化けることができる能力

それを使って管理局の中をスパイとして活動し続けていたのだが

最近管理局がおかしい

いや、上層部がもともとあれなのだから腐ってはいいるが

こう、前のヘドロみたいな空気から毒がまったタコツボみたいな感じに変質してしまっている

なにがあつたんだ・・・と戦慄しつつ、最近やけに笑いが絶えない職場で一人愛想笑いしながら働く

そうして、今日は金曜日の週末

仕事が終わってみんなのもとに帰れる

お土産や頼まれていたものを町で買って今は運びながら帰ってきている

考え事をしていたのが悪かったのか

下から私めがけて投げられてきた刀に気づかずぶつかってしま

顔めがけておもいきり当たったので痛い

体制がうまく取れず、ふらふらと制御を崩し

地面に向かって落ちてしまう

そのまま気を失ってしまった

.....

「.....どこまで高く投げたんですか」

一向に落ちてこない刀がとんでいった空をみて

つぶやくエリオくん

力をこめて高く投げすぎてしまったようだ

やっべ

すると、刀が落ちてきた

女性も一緒にふってきた

「ラ○ユタ?!」

四十秒で支度しな!!

と返しつつ、エリオくんにごめん、と言って頭を踏んづける

「フンギヤ!!」とつぶれたエリオ君を放っておいて

落ち続ける女性に向かって高くジャンプする

受け止めようとする位置が大きくずれてしまい

女性を受け止めようと広げた腕がからぶる

やっべ、と内心焦って顔が真っ青になるが

いつのまにかツボから出てきていたクモ美が糸を吐きだして

女性を捕まえる

ナイスだクモ美あいしてるうううううう!!

と頬にチツスしておく

硬かった

そのまま地面に着地して、ふってきた刀をパシツと受けとめる

エリオ君にはならまれたが人命救助だったんじゃない

これが最後だ、許せ

サスケエ!!



とエリオ君が叫びそうな顔芸をしているが無視して女性を見る  
なんかぴちぴちのボディスーツを着ている

恥ずかしくないの？と真顔で言ってしまうたくなるほど

煽情的でエロイ格好だった

見たところ俺と同じくらいの人らしいが・・・

起きる様子がないので、何か住所とか書かれたものがないか

探ってみる

当然、メスのクモ美に身体チェックは任せた

エリオ君ことエロガキくんが彼女の胸とお尻を凝視していたので

目つぶしする

そういう視線に女子は敏感だからやめーや、と説教しておく

今から仕込んでおいて女にモテるようにして、こいつも女関係でも

つれるようにしてやろう

めがああああああああ、と言いながら転がりまわる彼をみつつ、

俺と同じ泥沼に引きずり込む計画を企てるのであった

・・・・・・・・・・・・・・・・

おかしい

お姉さまがもどってこない

二番の名前を持つお姉さまは今、管理局にもぐりこんでいる

ドクターや、私たちの計画のために管理局の情報を集めてくれている

のだという

私が尊敬する人の一人だ

私は自分でも自分の性格が悪いもので嗜虐的なサディストだと自

負している

よく、妹をいじめたりもしている

でも、尊敬している姉さまたちは別だ

私もいつかあんな風になりたい

そう思ってドクターのもとで日々活動している

すると、アジトのドアが開いた

ここはナンバーズとドクター以外知らない秘密の場所だ

ナンバーズはドゥーエ姉さま以外は全員アジトにそろっている

それぞれが持つ専用のカードキーでなければアジトに入ることはできない

つまり、ここにはいないドゥーエ姉さまが帰ってきたということだ  
皆が扉の方に目を向ける

お化粧品とかを買ってきてくれる姉さまにはいつもみんな頭が上がらない

ドクターは男だからそういうのには疎いし

扉が開くとそこには

カードキーを持った

お姉さまではなく、糸でぐるぐる巻きになっているドゥーエお姉さまを背負っている緑色の鎧に包まれた大きな化けグモが立っていた

「おねえさまあああああああああああ!!?!」

きやあああああああああああああああああああ!!!!  
アジト内に私たちナンバーズの悲鳴が響き渡った

To be continued

## STS 導入編 6 科学者と化学者の違いがわかる人ってすごくね

猟奇的殺人事件の現場をみてしまったと勘違いした女の子たちが本気で泣いていたので抱っこしたり、抱きしめて一人一人あやしていった

エリオ君は泣いている女の子たちをみておろおろしていた頭にチョップしておいて女の涙にはなれておけ、と女性の扱いを叩き込んでおく

落ち着いたのか、一番お姉さんっぽい人が話しかけてくる  
クモ美はみんながこわがっているようなので

休んでていいよ、と頭をなでてツボの中に戻るように言うておく  
みんなと一緒にガールズトークしたかったようだがまた今度ね、と  
いって

ツボに戻す

さすがにお前女の子たちに怖がられてんぜ、と言ったら

きしやああああと怒りながらこちらの頭をかじってくる未来が見えたので表現をマイルドにしていた

「あなたたちがドゥーエを連れてきてくれたのかしら？」

そういつて微笑んでくるお姉さん

ああ、この人シャマルさんの雰囲気こそつくりだよ

ぽわぽわといやされつつ、会話を続けていく

「私の名前はウーノ。ここはドクター・スカリエッティの研究所です」  
彼のことを知っているか？と聞かれたので仮暮らしのほうなら知っていますと答える

ドクター？スカリエッティ？全然知らん

ほかのナンバーズと呼ばれる子たちがひそひそと何かを話している  
る

「知らないふりか？いや、うそをついているようには見えないが・・・」

「暗殺しちゃえば？」

「ドウエお姉さまを助けてくれたんだよ?!絶対ダメだつて!!」

ギヤーギヤーと騒ぎ始める

スタイルのいいお姉さんが出てきて

静かにしろ、といったらみんな途端に黙ってしまった

この人が副リーダー的な人なのか

「失礼した。私はトーレ。ナンバーズの三番目の姉妹だ。」

そういつて次々に自己紹介してくる子たち

おおむね好意的だったが、眼鏡をかけたクアットロとかいう子は目があったら

ふん、とそらされた

嫌われているようだがまあ、いいかと考え話を進める

「ここは秘密のアジトでな。できれば誰にもばれずにすませたかったのだが……」

そういつて俺とエリオくんを囲んでくる

「貴様らを消そうと考えているのも事実。しかし、貴様らがわれらのシスターズの一人をここまで運んでくれたのも事実。そこで、ドクターに判断を仰ぎたい。おとなしくついてきてくれるか？」

抵抗したら殺す、と殺気を飛ばしてきたので武装解除して刀を渡す  
よくわかっていないエリオ君にももっていた槍を渡すよううながす

勝てるかどうかはわからないが今はとにかくしたがっていようと決めた

そのまま彼女たちに囲まれながら通路を進む

強そうな子が俺とエリオ君の四方に配置されており、何か不審な動きがあったらいつで始末できるように位置どっている

戦い慣れしているな、と彼女たちの戦力を測りつつ

その技量を見極めようとしていた

間違っても変な真似はしないでくれ、という目で見てきているようにも感じる

とある大きな部屋の前にたどり着く

先頭を歩いていたウーノさんがドアに声をかける

「ドクター。来訪者の方々をお連れいたしました」

侵入者と言わないでくれるあたり、彼女の気遣いがうかがえた

「中へ」

と入室を促す声が聞こえ、入っていく

そこには、目をぎらつかせた白衣を着こんでいる男が立っていた

「やあ、こんにちは」

こんにちは

挨拶をされてペこりと返す

隣のエリオ君にも頭をこづいてちゃんと礼をさせる

につこりと笑ってくる男

「はじめまして、僕の名前はジェイル・スカリエッティ。しがない科学者さ。」

よろしくね、と手を差し伸べてくる

それに反射的に手を差し伸べ返し握る

握っているときに間の前の男の人の笑みが深くなったような気がするが

「ふむ、君たちがドウエを連れてきてくれたというのは本当みたいだな。」

感謝するよ。」

そういって、警戒を解いて心からの笑顔に変わるジェイルさん

さつきまでの営業スマイルと違い、本当に喜んでいるのがわかる

「僕の娘を助けてくれた礼に、一つ僕がかなえられることなら何でもかなえてあげよう」

そういって申し出るジェイルさん

エリオくんに目配せをする

彼の気持ちも同じようだ

何を言い出すのかハラハラしているのかナンバーズの子たちが緊張した顔でこちらの様子をうかがってくる

そして、願いを述べた

「ごはん、ください」

そういつてばかりと倒れこむ俺とエリオ君

おにぎりばかりじゃさすがに飽きたよ・・・

ピザが食べたいな、と地球の食事を懐かしみながら空腹で気を失う  
俺たちであった

T o b e c o n t i n u e d

STS・・・聞き覚えがないんですが、それは  
一話 管理局とかいう悪の組織がいるらしい

ステンバーイ・・・ステンバーイ・・・

とマクミランな大尉のマネをして所定の位置につく

ジェイルさんから聞いた話だと今日、管理局という悪の組織が

このホテルの人々を襲う計画を立てているという

くっそう、マジ許せねえ

激おこな様子で放電するエリオナにがしをいさめつつ

通信機で他のシスターズに連絡を取る

こちらコードネームT・応答願う。

「こちらコードネームW・所定の位置についたっス」

そういつて連絡を取り合う俺を冷めた目で見てくるクアットロ  
ちゃん

ノリが悪いよねー、と隣のセインちゃんと一緒にうなずき合う

ぴきぴきと青筋が張り始めたのでふぎけるのをやめる

「あんたたち、目的を忘れていないでしょうね？」

「ドクターがガジェットドローンを出してホテル内を監視、観測、攪  
乱」

そして、混乱のうちに管理局のやつらをぶつとばし、目的の聖王の  
レリックとかいうのを回収するんだっけ

「わかっているのならいいわ」

そういつて真剣な顔に戻るクアットロちゃん

彼女たちと出会ってからもう2年近くたつ

エリオくんも俺とまともにやりあえるくらい強くなったし、

ナンバーズの子たちも俺がアヌビス神から教わったラーニングの  
技術を伝授したらパワーアップした

潜入工員として送られていたドゥーエさんの話によると、最近管  
理局はおかしなことばかりやっているのだという

薬をのんで、ピエロみたいに真っ白なかおになって顎が外れても笑

うのをやめない人々とか、上層部の人間が常に何かに怯えているような職場環境だという

社会保険完備、福利厚生完璧、完全週休二日制、給料は毎年2%アップ、

賞与は年二回な完全ホワイトな職場で働かしてくれるジェイルさんに感謝しながら、社長、一生ついていきます!!と忠誠心を新たに固めるのであった

クアットロちゃんが肘でつついてくる

なににどうしたの?と双眼鏡でホテルの様子を見ながら

尋ねる

「あ、あんた。この仕事が終わって、みんな自由になったらあたしと一緒にー」

「ねーねー。おなかすいたー。田中ー。」

そういつて俺の背中によじ登って、俺特製のクッキーがないかあさるセインちゃん

もうすぐお昼だからダメ!!太るから!!

というと「けちー」と言いながらもおとなしくやめてくれる

さつき何かを言いかけていたクアットロちゃんに向き直って聞き直す

どうしたの?

「.....なんでもないわ.....」

素晴らしいながらもセインちゃんをにらんでいる

どこ吹く風で自身の能力で地面にもぐったり出たりして遊んでい

るセインちゃん

いいな、それ俺もやってみたいなーと思いつつ見ていると  
ホテルから煙が上がり始める

「!!動いたわ!!」

そういつて叫ぶクアットロちゃん

「お仕事開始ー!!」

おー!!とセインちゃんを肩車して二人で開戦の合図を通信機の向



こうにいるみんなに伝える

するとバランスを崩したセイインちゃんが肩から落つこちそうになり、受け止めようとする顔と顔が近づいて、唇と唇が触れそうになる瞬間

足元に銃弾が撃ち込まれる

舌打ちをして離れるセイインちゃん

双眼鏡をみると無表情でこちらを見ながら狙撃の体制をとっているデイエチちゃんが視認できる

口パクで何かを言っている

ふぎけるな

と言っているのがわかった

口パクでイエス、ママと返し、刀を抜いてセイインちゃんを抱っこして

彼女の能力で地面と一緒に潜るのであった

エリオ君、クアットロちゃん、デイエチちゃん、Wちゃん頑張れ、と

エールを送りつつ

武運長久を祈るのであった

.....

許さない

セイイン殺すべし

私  
ゴルゴな13の数字をもつ男のような顔をしてスナイピングする

危なかった

もう少しでセイインと彼がキスするところだった

阻止できてほっとする

彼をにらみつけて釘をさしておく

あなたは私のモノだ、ということ

彼とであって数年が経った

最悪のファーストコンタクトだったが、優しくしてもらった結果、コロツとやられてしまい、こうしてナンバーズ全員が今では思いを寄せている

抜け駆け禁止の協定を結んだにも関わらずさっきのセインやクアットロみたいに自分だけ彼と一緒にしろとうとする子が多すぎる

だから、お互いにけん制しあって、見張りあっている

武術一辺倒のトーレお姉さまや、チンク姉さままでぞっこんになるとは思わなかった

妹たちも虎視眈々と彼を狙い続けているので油断できない

彼からもらったお守りの腕輪を見る

きれいな透明の腕輪で、つけているだけであたたかな気持ちに生まれ

彼に内緒でドクターにナンバーズ全員で直談判し、

彼と一緒にいられる未来のために戦いたい、といった

ドクターは驚いた顔をしていたが、すぐにいつもの笑みを浮かべ

「はははははははは!!!わが娘たちがそろいもそろって同じ男をめぐるとは!!!面白い!!!いだろう!!!彼と君たちが一緒に生きている未来のために僕の頭脳を使ってあげよう!!!」

と言ってくれた

何だかんだいっても私たちのことを大切に思っていてくれていたドクターに、

父さんには頭が上がらない

ありがとう

私、きつと彼のハートも撃ち抜いてみせるから

隣で彼とのツーショットの写真をみてにやけているウエンディをみながら

気持ちを切り替えて、敵を撃ち始めるのであった

To be continued

## 二話 スナツチっていう映画が面白い

ふんぬらば!!

アイシールド21面白かったよな、と思い出しつつ目の前のピエロたちを斬っていく

峰はないが心の峰でたたいているので大丈夫だろう

セインちゃんは俺の背中についでいる

彼女の能力で一緒に地面に潜ったりしてショートカットするためだ

しかし、こうも敵の数が多いと厄介だ

高町恭也さんがやっていたあの技を使い、一瞬で片を付ける

瞬身

脚力をいかして、地面をけり、一瞬で高速移動する技だ

ちなみに、やると死ぬほど痛いぞ・・・とガンダムWの主人公みたいなことをつぶやき続ける羽目になるから注意が必要だ

オットーちゃんとデイドちゃんの子双子コンビによくマツサージしてもらおうと体の痛みが治りやすい

道をふさぐ管理局のピエロたちをなぎ倒しながら進んでいく

どけどけどけえええええええええええ

.....

俺はどこで道を誤ってしまったのだろうか

前世を持つ転生者の俺たち

この世界が魔法少女、リリカルなのはの世界だと知って歓喜した好きな原作キャラたちに会える

しかし、俺が生まれたのは海鳴市どころか地球ですらなかった

絶望した

同じ学校に通い続けて、原作キャラと子供のころから仲良くしておいてフラグを建てる計画がすべておじやんになってしまったからだ

しかし、ミッドチルダという魔法世界に生まれたのが唯一の幸運だった

魔法を早いうちから習い始めて扱えるようになった

管理局に行けば、高町なのは、フェイト・テストロッサ、八神はやてに会える

そう希望をもって管理局にはいった

しかし、俺と同じことを考えていたやつらがいた

ミッドチルダに生まれたほかの転生者達が大量に管理局に入り始めたのだ

管理局の黄金世代とも呼ばれるほど異常な魔力量をもった子供たちがある時期を境に大量に入隊した

これに喜んだ上層部が何をトチ狂ったのか

部隊運用の組織として、俺たち転生者だけのチームを10人×100として作りやがった

女子はもちろんいない

それどころか、原作開始の時期になっているというのにPT事件（プレシア・テストロッサ事件）や闇の書事件が起こったという話も聞かない

もしかして、俺たち転生者みたいな同じ存在が地球にほかにもいて、そいつらが解決してしまったのか

俺たちは女子が誰もいない女日照りの軍隊生活を送っているというのに

原作の美少女キャラたちときゃつきやうふふしているかもしれないやつらが地球にいるのか

そう考えると、無性に腹が立ってきた

最近では管理局も何かおかしくなってきた

それまでの戦闘衣装はそれぞれ自由だったのに、ある時期を境に男は全員ピエロのマスクをかぶることを要求された

力を持っていて、一人でも生きていけるやつらはそのまま管理局をやめてしまった

残ったのは、大した転生特典をもたない俺たちのような奴らばかりだ

そして、今はなぜかホテルでの警備を行っている

こんなしけた仕事をするために俺は管理局に入ったんじゃない

そういいたかったが、階級が低い俺は上の命令に従うしかなかった  
今更転職できるほどの市場価値もなかった俺は管理局で働き続け  
るしかなかった

そして、同僚と話していると

突然風が吹いた

突風に吹き飛ばされる俺と同僚

近くのモノにつかまろうとするがうまくいかない

そのまま壁に激突して気を失ってしまった

・・・・・・・・

なんか誰かを吹き飛ばしてしまったような・・・

セインちゃんが「またつまらぬものを斬ってしまった・・・」

とか俺が相手を峰うちするたび言ってくる

頭を軽く小突いてやめるよううながす

頭を押さえて「えへへ・・・」と朗らかに笑う

あゝ、かわいいいいいい

最近クモ美の笑顔にしか癒されていなかった俺は、無邪気で明るい

彼女に

心を癒されていった

すると、目の前に黒い装甲車を発見する

通信機でウエンデイちゃんに聞く

「あれが目的のものっす!!絶対、絶対、ぜーーーーーーーーーーーーーーーーた  
いに確保してくださいっす!!」

アヌビス神並みのアクセントと強めの言い方で断言するウエン  
デイ

あれをゲットすればお給料アップ・・・!!

と、昔の懐かしき社畜魂を燃やして襲い掛かる

どんな分厚い装甲をまとっついていようが関係ない

ぶった斬る

周りにいるやつらがこちらに気づいて攻撃してくるが

背中につけてるセインちゃんに頼んで床に一緒に潜る

俺が急に地面に吸い込まれたように見えて戸惑う敵

背中に引っ付いているのはセインちゃんを正面の攻撃から守るためと、

敵に俺が持っている能力を使って地面に潜っているように見せかけるためだ

そのまま敵の足元に腕だけ出して斬撃を振るって気絶させていく

そして、黒塗りの装甲車にたどり着く

運転手があわててギアを入れてアクセルを踏もうとしたがもう遅い

ズギユン、とタイヤが撃たれる

外からの援護射撃

デイエチちゃんが魔力弾で黒い装甲車のタイヤを撃ち抜いて逃げられないようにしてくれた

防弾のタイヤなら普通の銃弾は防げただろうが、デイエチちゃんの銃弾は防げまい

彼女がいる方向にむかってボディランゲージで愛していると伝え

たすると、近くの壁に銃弾が連射され、文字が撃ち込まれる

バカ、と書かれていた

きつと今頃顔を真っ赤にしていることだろう

背中のセインちゃんが怒って首をかんでくるが気にせず、目的のものが入ったスーツケースを取り、脱出する

侵入するときに敵の戦力は壊滅状態に追い込んだので楽々と闘争できる

他のここにいないナンバーズたちが足止めや妨害工作をしてくれているので

管理局の増援もこない

そのままおうちまで直帰するのであった

To be continued

三話 そいつらをぶったおせばお給料を上げてくれるんですね？

「ぱぱ・・・？」

見知らぬ幼女にそうしがみつかれた

引きはがそうとすると、泣いてしまうのでこまったらったー（ぱらっぱらぱー風に）

あのスーツケースは確かに聖王のレリックが入っていた入っていたんだけど

金髪の幼女もセットでついていた

最初にトランクを開けたときはそつ閉じてしまった

もう一度開けると幼女が目を覚まし俺のことをぱぱ、と呼んで

足にしがみついてきているわけだ

抱っこしてあやしてやるときやつ、きやつ、と喜ぶ

俺の鍛えに鍛えた顔芸の出番だな、と考えつつ

何の顔芸を披露しようかな、と考えるのであった

・・・・・・・・・・・・・・・・

ナンバーズに衝撃走る

セインと彼がスーツケースを持ってきた

目標のモノが入っているそうなので、中身をアジトに持って帰って

確認した

しかしなぜか子供が入っていた

目を覚ました金髪の子供が田中君を見ると

ぱぱ・・・？とつぶやいて抱き着いてしまう

引きはがそうとしてもすごい力でしがみついて

彼の体が痛むばかり

仕方がないので今はほおっておいて、子供と一緒に遊んでいる彼の姿を見る

笑顔で子供をあやしている

そして、皆が気づく

まま、と呼ばれるチャンスだと

これはあの子にママと呼ばれるようになれば、ぱぱと呼ばれる彼と  
一気に仲良くなるチャンスではないか？

そう考え、みんな彼と子供の方に向き直る

慣れた様子で子供をあやす田中君

すると、抜け駆けしたセイインが飴を彼女にあげて餌付けしていた  
しまった・・・!!

と思うこともなく

セイインがこちらにむかってにいいいいいい、と笑いかけてくる  
私たちがけん制しあっているときに・・・!!

そして、セイインが彼女に聞く

「ねーねー。パパがこの人なら、君のママは誰かなー？」

空気が張り詰める

ことの成り行きを見守っていたドクターが「こいつはやべえ」  
という顔で冷や汗を流している

すつと、子供が指をさす

セイインの方

ではなく、一番包容力のあるウーノ姉さま・・・

でもなく、一番スタイルの良いトーレ姉さまでもなく

他の誰でもなく

扉の近くにいた

自分が吐いた糸を紡いで裁縫しているクモ美を指さした

私たちはクモに負けたと知って泣いた

.....

あのバカが家出してもう数年

皆でミッドチルダにやってきて、探しているが情報が一向につかめ

ない

女子のみんながだんだん病んできたように思える

アタシも最近あいつと心中する夢とか



監禁して、一緒のベッドで寝ている夢とかばっかり見ている  
我慢の限界が近い

同じく病み始めているユーノが気になる情報を持ってきた  
奇妙な刀を持った化けグモを従える男と、雷をまとった槍を振るう  
少年がミッドチルダ中を旅しているという話を

二人というのが気にかかったが、きつとあいつに違いない  
刀は以前あいつが自慢して見せてきたやつだし、クモと言えばクモ  
美と呼んでいるあのモンスターだろう

皆で噂の二人を追うことにしたのであった

.....

皆は元気かなーと思いつつ

そろそろいったん帰郷しようかな、と考えつつも目の前にいる子供  
の相手をしながらドクターの話聞く

なんでも聖王と呼ばれる昔この世界に存在した人物のクローンだ  
という

管理局あたりがやったのだろうと苦い顔をしていうスカさん

彼から事情を聞いたが彼自身も管理局に生み出され、ずっと利用さ  
れ続けてきたのだという

管理局許さねえ、と心の中でヘイトを高めつつ、これからの方針を  
話し始める

「まず、彼女だが、聖王のクローンとして作られたということはプロト  
タイプの可能性が高い」

プロトタイプ。その言葉を聞いていやな感覚が走る  
それはつまり

「おそらく、もうすぐで彼女が大量に生み出され、量産されて戦場に送  
られたり

、実験に使われたりするだろう」

嫌悪感丸出しの顔で吐き捨てるスカさん

この子を量産ねえ・・・

それ自体はかわいい子だからまあ、いいとして

用途が気に入らない

刀を握る手に力がこもり、体から冷気がほとばしる

びくつ、と膝に乗っていた子供が怖がってしまったので顔芸をしてごまかす

何とか機嫌を取り戻せたようだ

「僕も実はずっと管理局と戦っていた。」

そう独白し始めるスカさん

「しかし、最近のやつらは常軌を逸し始めている。僕を生み出しただけでなく

聖王のクローンを作り、あまつにはそれを大量に戦地に送り込もうとするなど」

ダン!!と使っていたデスクに向かって強くこぶしを振り下ろし憤慨の表情で怒りをあらわにする

よし、スカさん

管理局、ぶっ倒そうぜ

そういつて手を差し伸べる俺

驚いた顔をした後に、笑顔になり力強くこちらの差し出した手を握り返してくるスカさん

「幸いだが、かつて聖王が使っていたという装備は同じスーツケースの中に入っていた。管理局が聖王のクローンは作れてもその装備まではコピーできない。」

やろうとしてもせいぜい劣化品が出来上がるぐらいだ」

ガンダムを量産しようとしたらジムになっちまう感じか

それでもかなり驚異的だとは思うが

「そして、聖王の記録を見ると面白いことが分かった。かつて、彼女は箱舟と呼ばれる兵器を使用していたそうだ」

パソコンで昔の壁画が乗っている画面を見せてくるスカさん

船に乗っている人々が描かれている

「向こうが聖王のクローンを作ってくれるならそれを利用してやろう」

にやり、と悪い笑みを浮かべる俺とスカさん

どこかのジョーカーの敗北がきまった瞬間だった

■ T o b e c o n t i n u e d

## 四話 101匹ようじよ

感謝の一万回素振りっ・・・!!

恭也さんから教わったトレーニング方法をアジトで行う

最近では音速を超える斬撃を出せるようになった

なぜかアジトにぶらりと立ち寄ってきた風さんが

「今のお前となら楽しめそうだ。抜け」

と言つて、見たこともないヤバ気な剣を抜いて襲い掛かってきた

スカさんに普段ナンバーズが使っているという修練場を貸しても

らい

そこで雌雄を決することになったが

左手を一本持つてかれた

左手を落とされたのでジョセフみたいになってしまったが

気にせず、吉良吉影だつて手を落とされたつて戦い続けたんだ

と気にせず戦い続けた

俺の宝刀が砕けてしまったのでドローとなった

うわああああああああ、と叫んで悲しんでいたら

すっ・・・と同じ宝刀を二本渡された

何本持つてるねん、と思いつつもいただく

腰につけていた青いギザギザの剣をじつと見ていたら

これはやらねえ、と言つて帰つていった

ラストダンジョン入る前にラスボスと出会っちゃった感覚を受け

ながら

ドクターの計画を進める

あ、腕はスカさんから仙豆みたいなものをもらつて食べたなら生えて

きた

ナメック星人みたいでキモかった

・・・

ナイフでデスクに落書きをつける

管理局のえらそうにしていたブックブックの爺をどかして座っている

自分のモノには名前を付けておかないとな

がりがり、がりがり、と傷をつけると

ぎやあああああつ、と叫んでうるさいでモモにさす

パソコンを立ち上げ、計画がどれくらい進んでいるのかを見る

聖王のクローンを量産する計画

先兵として送り込むために性能を多少下げてコストダウンを見込んでおかげで

大量に作れた

今はその先行量産型をとある場所に集めている

管理センターと名付けた中央のシステムが集まる場所で仕分けして、

出荷するシステム

前世では運送業をやっていたからこういうシステムの扱いは心得ている

うまくいけば金が入ってきて、それをつかってまた量産の資金に回せばいい

とりあえず100体作った

聖王のクローンというネームバリューはとんでもないブランド価値を生んでくれた

裏の悪党どもがほしがって、我さきと注文してくれたので、投じた費用以上の利益が見込めるうえに、犯罪組織との継続的なつながりが持てた

あとは、定期的に発送しながら聖王のクローンを売って代金を回収し、新しい商品を開発すればいい

聖王のクローンを作れたのなら、霸王やほかの偉人たちのクローンを作ることが可能だ

野望にワクワクしながら先行量産した聖王のクローンが管理センターについたかどうか確認する

しかし、そこで見たのは、発送し始めたという情報ではなく

何者かによって管理センターが壊滅させられたという悲報だった

.....

「もうすぐで終わる!!この子たちを救出したらはやくずらかるよ!!」

そういつて抜け穴から脱出するナンバーズと俺

ここに聖王のクローンが集められると聞いて、つぶしにやってきた各地に送り込まれる前に救出することができ、最大にして最後のチャンスだったから急いでやってきたわけだ

100人もいたから、全員ドクターが作ってくれた乗り物に乗せるのに手間取っているが

追手が扉の向こうからやってくるのが見える

今日のスタンドを使う覚悟を決める

そいつが腕を虚空に向かって振るう

相手は馬鹿が、という顔をしてこちらに近づいてくる

俺が出したスタンドがこぶしで相手の剣を受け止めると

相手の体がぐずぐずに溶けていく

悲鳴を上げながら崩れ落ちていく相手

周りのやつらは警戒して近寄れない

パープル・ヘイズ

殺人ウイルスを操る最悪のスタンドだ

こぶしにウイルスがたつぷり詰まったカプセルが付いており、

それに触れたものは死んでしまう

日光で細菌ウイルスは30秒もあれば死滅してしまうほど面白い

しかし、ここは室内

どこをみまわしても日光は存在せず、ウイルスが死ぬこともない

訳も分からず死んでいく敵たち

そして、最後の一人がセインちゃん有能力で地面を通過して運び込まれると、

セインちゃんが俺の足をつかんで地面に沈めてくる

敵が攻撃をしようとしてきたところをまたパープルヘイズで殺していく

ウイルスは俺にも効いてしまうが、壁の向こうまではやってこないつまり、セインちゃんの力で地面を潜っている俺には通じないということだ

そして、相手の悔しがる顔を見つつ

手をふって馬鹿にしながら地面に吸い込まれるのであった

.....

彼と娘たちが聖王のクローンを助け出したと聞いて

ウーノや、ほかの戦闘支援を行っていたナンバーズたちと喜び合う

計画の第一段階が成功した

もうすぐでこのアジトにつくらしい

特製のモグラ式の添削機を作って、地面を掘りながら進む乗り物を

数台作った

地上の警備はすごかったが地下が甘かった

魔法で空を飛べる文化が発達していただけに、まさか地面を掘って

やってくるという発想がなかったのだろう

あっさりと侵入でき、こうして、管理センターは崩壊した

アジトの外まで行って彼らを迎えに行く

乗り物が地下からぼこつと顔をのぞかせて出てきた

皆が駆け寄ると、ドアが開く

そこで見たのは

大量の幼女にしがみつかれながら、困った顔をしている彼の姿だつ  
た

ばば？とみんなから呼ばれている

101匹聖王ちゃんという言葉が浮かんできた

To be continued

## 五話 101匹のハンターたち

「ぱぱー?」「ぱぱ!!」「ぱーぱー」

「ぱぱ……」「ぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱ」

ぱぱー

と101人の同じ顔の幼女からパパと呼ばれる

ピクミンより一匹多く連れて歩けるな、と思いつつ

一人一人名前を聴いていく

まだ持っていないそうなので一人一人違う名前を付けていく

それだけで俺の一日が無くなってまいったが、気を取り直して

ドクターと今後の計画について話し合う

「これで君は101人の子供の親だね。僕は12人だから3桁の君はすごいと思うよ」

と茶化してくる

こうして話している今も、俺は彼女たちに囲まれている

ナンバーズが恨めしそうな顔で見ているが、それどころじゃないので

一人一人順番に膝に乗っけていきながら、世話をしていく

何人かはクモ美が相手をしてくれている

ホープとグラ子妹がいればな、と思いつつも

懸命に相手をしていく

「これで聖王のクローンがそろった。次は装備だが」

そういつて空中に映像を投影するスカさん

俺がみんなと協力して奪った聖王のレリーフだ

「僕が娘たちと協力して作ったのがこの量産型のデバイスだ。オリジナルの聖王のモノに比べれば性能は落ちるが、並みの相手じゃまず勝てない性能の開発に成功した」

そういつてそのうちの一つを投げってくる

それを受け取ってキャッチする

クローン娘のうちの一人、ヴィヴィとなづけられた娘に渡す



すると、膝に乗っていたヴィヴィが光に包まれる  
輝きが収まると17歳くらいの少女へと変身していた  
雰囲気も変わっている

「初めまして、ぱぱ、ドクター。ヴィヴィと申します」

そういつてお辞儀してくる彼女

「ごらんのとおり、戦闘中にだけ肉体と精神が一時的に成長するよう  
にしてある。非常事態や戦闘のときだけだから肉体や精神への負担  
もないから安心しておくれ」

そういつて、ヴィヴィのコピーレリーフを外すと、元の5歳児に戻  
る

「これを例の計画の最終段階までに100個作ってみせる」

そう意気込むスカさん

無理しないでね、と心配の声をかけつつ、今日からヴィヴィ達の  
訓練を始めるのであった

ご飯を作るのが一番大変で、ナンバーズやヴィヴィたちが自分のご  
飯を作れるようになるまで俺がほとんど指揮して作っていた

食堂のおばちゃんのごさぎに今更気が付いたのであった

.....

私、いや私たちはクローンだ

まだ肉体的には五歳の子供だけどその言葉が意味していることは  
知っている

それは誰かの模造品だということ

自分だけの肉体を持っている科学者が愉快そうに、お前たちは  
ぶろいらーの鳥と一緒にだな、と笑ってこちらを見ていた

それがなんのことかは知らなかったけど、そうきいたらとても悲し  
くなってしまう

ごはんは食べられるし、ちゃんと眠れるし、おもちゃもある  
でも、どうしてもほしいものが得られなかった

自由はクローンの私たち誰一人として持っていなかった

100人もいるのに誰、一人としてだ

それを知って、何だかやるせなくなつて落ち込んでしまった

一生、この人たちのいうことを聞いて生きていくのかな  
そんな疑問がみんなの顔に浮かんでいた  
でも、どうしたらいいかわからなかった  
そうして、ある日、私たちはとある場所に全員集められた  
100人も同じ顔が集まるとさすがにびっくりした  
出荷するとか、送り込むとか言っていたけども、みんなと離れ離れ  
になってしまふのだろうか  
いやだ

それだけはいやだ  
でも、手には手錠がつけられていて、逃げようにも扉は閉まってい  
る

皆それぞれ違う部屋に閉じ込められているようだ  
そうして、自分はもうすぐ死ぬだろうな、とあきらめていたら  
ある日、運命と出会った

初めは怖くて変な人だと思った  
刀で人をばっさばっさと切り伏せているし  
顔が怒りの形相だったし

地面から次々と知らないお姉ちゃんが出てくる  
みんなどこかへ連れていかれているようだ  
そうして、私が最後に残った

男の人が「ほら!!早く!!」と言って手を引っ張って来るが、体が動  
かない

もう、絶望したくない  
希望をもちたくない  
悲しみたくない  
傷つきたく・・・ない

そういつて手をほどこいた  
彼がお姉さんたちに呼ばれている  
でも、私はもうここで終わりにしたい  
生きる目的がない  
そう思つて目をつむっていると

ふいに浮遊感を感じた

目を開けてみてみると

男の人が私を抱えているのがわかる

「・・・なんのつもり？」と冷たい声で聴く

すると「うっさい」と一蹴されてしまった

暴論に思わず黙ってしまう

そんなことを言われたのは初めてでびっくりする

言い返そうとすると彼が口を開いて聞いてきた

名前は？

そんなものはない、と返すと、すこし考えてこういつてきた

じゃあ、お前は今日からヴィヴィだと

はあ!!?と反論してやりたかったが、そのまま抱えられて

機械の中に入れられてしまう

そして頭を撫でられる

後で全部文句は聴くからさ

行ってくるわ

じゃあな、と言って離れていく彼

目の前には多くの追手

彼の背中に手を伸ばすが届かない

そのまま発進してしまう機械

そうして、今までの緊張や疲労からか気を失ってしまう

次に起きたときにはベッドの上だった

私のほかにも100人全員が無事だったという

ベッドから起きてあの人を探す

いた

他のクローンたちに囲まれている

こちらにきがつくと、ほかのこと全く同じ顔で判別がつかないのに

前に私につけてきた名前と呼んできた

なぜか心が温かくなる

ふらふらと彼の元まで歩き

膝の上へのっかり

ぎゅうううううつと抱き着いた

彼も抱きしめ返してくれた

他のクローンたちが「じゅんばんまもれー」とか言っていたが気にしない

彼の顔を見る

平凡で普通な顔だ

取り立てていいところも、悪いところもないけども

なぜか見ていると安心する顔だった

皆で彼を取り合うことになるのはまだもう少し先の話

To be continued

## 六話 映画版レジアスさん

俺は今、土下座ならぬ、土下寝している

スカさん一人では到底計画がうまくいく可能性がとても低いことが分かったからだ

スカさんは天才だ。それは間違いない

しかし、レリックのコピーを作るのでほとんどの時間を費やしている

だから彼女に事情を説明して、こっそり来てもらった

プレシア・テストロッサ

スカさんに聞いたら自分を超える唯一の技術者でもあるという

彼女がいたからこそ、生まれることのあつた技術が数多く存在し、魔法世界に多大な貢献をもたらしたとも

だから、正直言うかと迷っていたが、事情をすべて話して彼女だけを呼ぶことにした

最初は怒っていたが、アジトによんですべての理由と状況を伝えると

すぐに理解して手伝ってくれるようになった

力強い味方を手に入れたが、プレシアちゃんにぼそつとささやかれた

「あの子たち・・・あなたを追ってきているわよ・・・私も探していたし」

冷や汗が止まらずだらだらと流れる

ミッドチルダ中をエリオと一緒にきままに旅していたから

どこにいるのかみんなが探し始めて結構近くまで来ているのだという

体の震えが止まらないので、近くにいたヴィヴィオのクローンを一

体ぎゅうつと抱きしめた

俺を助けてくれええええええええええ・・・

田中は気づかなかつたが、同じ女であるプレシアは、彼女の口角が不自然に吊り上がっていたのを見逃さなかった

.....

正直、彼から連絡を最初にもらえたことはうれしかった  
皆には言わないでほしいと頼まれたから私だけ指定された場所ま  
で

やってきた

都合のいい女みたいだけど、愛の前ではそんなことも言つてられな  
い

中に入って、彼と出会った

とりあえず、ビンタしておいて、今まで甘えられなかった分ぎゆう  
うううううと

抱きしめあった

すると、後ろに見覚えのある顔が見えた

ジェイル・スカリエッティ・・・!!

なんでここに!!?

私がかつてかかわっていたプロジェクトFATEの関係者だ  
すると、彼がそれまでの経緯をすべて説明してくれた

管理局がやろうとしていること

ジェイルと彼の今までの行動

ナンバーズと呼ばれる娘たちと101人の聖王のクローン

そして、中でも信じられないのが彼らの計画についてだった

そんなことをすれば、世界中を敵に回すのかもしれない

内部工作員のナンバーズという子たちの中から何人かが潜入して  
いろいろと管理局の弱みも見つけて、上層部の正体も発見したといっ  
てきたときには今度こそ卒倒しそうになった

けども、ここで管理局の膿を消しておけば、娘や私たちが追われる  
心配も完全に消える

そう考え、彼らのバカげた計画に付き合うのだった

ジェイル・スカリエッティが「あなたがそんな顔をするなんて驚い  
た」とか言ってきたので靴のかかとでつま先を思いつきり踏んづけて  
やった

これでとりあえず今までの確執はキャラにしてあげる

娘がもう一人できたのはこの男のおかげでもあるからそれで済ませてもらった

.....

「みてみて!!私がたおしたんだよ!!」

お姉ちゃんえらいでしょー、と言ってぼろぞうきんになっている男性を俺の元まで引きずって運んできたドウエちゃん

いや、誰これ？

「なんかレジアスとかいうおじさんの元まで潜入していたら、

いきなり襲ってきたから返り討ちにしちゃった♡」

何の気もなしにそういう彼女

強い（確信

昔戦った高町家の長女の姿を思い出し、とりあえずぼろぞうきんになっっている彼の両手両足を拘束して、転がしておく

ナンバーズの何人かの子たちに見張りを頼んだらご褒美をねだられたので、特製のダイエツトクツキーをあげた

カロリーと糖質が控えめだけでも、味がちゃんとおいしいクツキーなので大好評だった

とりあえず、ドウエちゃんに彼の詳しい情報を教えてもらうのであった

.....

体中が痛む

俺は一体・・

次元犯罪者であるジェイル・スカリエツテイのスパイを突き止め襲い掛かったはいいが、ものすごい強さで逆に返り討ちにされたことを思い出した

レジアスと話そうとしたら、あいつがいて・・

そして、目を覚ます

手足の自由が利かないところを見ると、どうやら自分はずかまっつてしまったらしい

周りを見やる

ボディ・スーツに身をつつんだ少女ぐらいの娘たちがこちらをじつ

と監視しているのがわかる

話しかけて情報を抜き取ろうとするが、のれんに腕押しでさりとかわされる

おそらく捕虜や敵との会話で余計な情報を与えないように訓練を受けているのだろう

すると、部屋に新しく二人の人物が入ってきた

ジェイル・スカリエツィ・！！

なぜここに・！！

横の男は見覚えがないが、こいつといつしよだということは共犯者なのだろう

体振る舞いからかなりできる相手だとわかる

ジェイル・スカリエツィが話かけてくる

「おはよう、ゼスト君」

自分の名前を呼ばれて心臓が跳ね上がる

「なぜ俺の名前を知っている・！！」

「僕には優秀な娘がいてね。きみのことを調べるくらい分けないそう  
だ」

そういつて俺が使っている装備を手で見せびらかしてくる

唯一の武装も寝ている間に取られてしまったか・・・

「さて、話がある」

犯罪者の言葉に耳を傾けるつもりなどない、と壁の方に寝転がって  
ふて寝する

「君の親友である、レジアス・ゲイズが管理局の闇を永遠に葬り去るた  
めに命を賭けるそうだよ」

かつて袂を分かった自分の親友の名前をだされてさすがに動揺せ  
ずにはいられなかった

どうということだ

「簡単な話さ。僕と彼がレジアス中將にすべて真相を話した。

彼は保守的な人物でどちらかというところではあったが、あること  
がきっかけで目をさましたそうだよ」

笑いながらそういうジェイル



「さて、いきなりなんでこんな話をしたのかと疑問に思っているだろうから率直に話そうか。管理局の上層部と、寄生虫どもを一掃したい。そのために力を貸してほしい。」

そういつて頭を下げてくるジェイル

その光景に驚く

「私は娘と友である彼が幸せな未来を生きられるために博打を打ってみることした。そしてその成功率を1%でも上げるために君の力を借りたい、ゼスト君」

その目は、先ほどまでの欲望をぎらつかせた狂気の科学者の目ではなく、

守りたいものを守るために命を賭ける覚悟を背負った一人の男のものであった

本音をいうと協力してもいいかと思っている

しかし、自分には管理局に置いてきた部下たちがいる

彼らの安否が気がかりだ

正直にそう告げる

「そうか」と残念そうにいうジェイル・スカリエツティ

そして今までことの成り行きを見守っていた男口を開く

あんた、その人たちを助ければ俺たちに協力してくれるか？

そういつてきた男

俺の名前は田中太郎。ちよつと訳があつてこのミッドチルダ中を旅している

まさか、女性からのアプローチがきつくなつてきたから家出したとは言えずに言葉を濁す田中

これはあんたの装備だったよな

そういつてジェイルが握っていた俺のデバイスを渡してくる

何のつもりだ、と聞く

でな。俺があんたの部下と一緒に助けてやる。だけでもその前にその感情を吐き出す相手がほしくないか

一目で名刀とわかる剣をこちらに見せてきて挑発してくる  
そうだ

今までやり切れない思いばかりが募っていた  
叫びたいと思っ<sup>た</sup>てもそれを受け止めてくれる相手もいなかった

だが、今日の前にいるこの男なら大丈夫そうだ  
剣を手<sup>に</sup>、目の前の男と向きあう  
そして、俺はこの日、新たに二人の親友を得た

▪ T o b e c o n t i n u e d

## 七話 映画版レジアスさん そのに!!

ばくばく

ぶくぶく

みんな太るよ

(替え歌なので削除されない)

と、あの人気子役の代表曲の替え歌を口ずさみながらヴィヴィたちに

最近太っているんじゃないの?と言ったら一斉にとりつかれて窒息死させられそうになってしまった

例え5歳児でも女子相手に太るとか、フケたはNGだと思い知らされた

二度といわない

例の計画までもうすこしだ

皆を鍛えている

ちようにいいので俺より戦闘技術そのものが高いゼストさんに  
教導してもらった

ナンバーズの子たちもめちゃくちや張り切っている

ゼストさんと戦っていて楽しいとかトーレちゃんやチンクちゃん  
が言っている

かつては殺しあつた仲だとさらつと言われてビビった

ドライすぎる・・・

ヴィヴィたちはようやく一通りの戦闘技術を身に着け、戦いに赴けるようになった

そんな彼女たちをぎゅつと抱きしめる

えらいぞーと一人一人抱えて抱き上げる

さて、ゼストさんのタイムンでの決闘だが

アジトの4分の一が崩壊してしまった

ドクターがマジ泣きしそなくらい落ち込んでいたので

俺が持っているアイテムや、スタンドを出して彼の好奇心を満たす

手伝いをし、

何とか許された

大の大人を泣かせちまったよ・・・

ゼストさんとの戦いは三日間飲まず食わずで行われ、互いに致命傷を負うまで

やめなかった

何で戦いを途中で中断しなかったのかって？

俺のほうが強いと思っていたら、気が付いたらそうになっていた

ゼストさんも同じだったとか

彼の信頼を勝ち取ることができたので、地面に横たわりながら握手をしあう

ナンバーズがそんな俺たちを見て男ってバカね、とか言っていたけど

今更知ってももう遅い

そして、彼に話すことになった

あのレジアス・ゲイズ中將がなぜ、命を失うかもしれない戦いに身を投じることになったのか

.....

こんにちわー

そんなふざけたことを抜かしてのうのうと侵入してきおった

それも、管理局の最上位に位置する立場にある、このわしの部屋まで

警備に当たらせていた者たちは？と聞くと

眠ってもらっています

と言われた

人質か？小賢しい

いざとなれば切り捨てるが

お話があります

実質的に脅迫に近い形の話し合いなど、政治的な交渉ですらない  
そう吐き捨てたかったが、相手の機嫌を悪くするのは得策じゃない  
喉の奥で飲み込んでおいた

まず、自己紹介を。私の名前は田中太郎  
しがない旅人をやっております。

「そんなものがわしに何の用だ」

彼と話してもらえればわかるかと。

そういつて通信機を取り出し、画面をこちらに見せてくる男  
なんだ？誰を呼び出そうとしている

ザザザザ・・・と砂嵐が画面に吹き荒れると、紫色の髪をもつ  
よく見知った顔がそこに姿を現した

「ジェイル・スカリエツィ、か」

「久しいですね。レジアス中将閣下」

そういつて慇懃無礼な態度をとってくるジェイル

ふん、その傲慢なふるまいはかわつていないようだな

「いえいえ、僕もいろいろとありましてね。本当は直接そちらまでお  
伺いしたかったのですが、戦闘能力をもたない僕がそちらに行つたと  
しても、最悪管理局の者たちに確保された処分される可能性が高かつ  
たかもので・・・」

だからこそ、彼に頼んだのですけれどね

隣の男に視線をやって告げてくる

要件を言え。次元犯罪者め。

わしは犯罪者が嫌いなのだ

「あなたも犯罪組織とつながりがあるというのに。」

そういわれ、思わずいらつく

貴様に何がわかる

語気を強め、声を荒げて叫ぶ

「お話をする前に、田中君、あれを」

そういわれた田中という男ががさごそと何かを懐から出すと

「ガジエツト？」

「ええ、その通りです。誰が聴いているのかわかりませんからね。

妨害電波とマジックキャンセラーを兼ね備えた優れたものの機械で  
す。」

おひとつどうですか？とふざけて言ってきたので、いるか、馬鹿が。

と返してやった

「それは残念です。さて舞台も整ったことですし、さつそく交渉とま  
いりましょう」

そこでやつらから知らされたことは到底信じがたいものだった

管理局の最上層部の正体

裏から操っている黒幕の存在

長年管理局にいるわしですら掴み切れていない事実

そして

「聖王のクローンだと?!?!ありえん!!」

思わず叫んでしまう

伝説上の人物を複製してこの世によみがえらせるなど!!

「ここに生きた証拠があります。じゃ、田中君、彼女を呼んであげて。」

誰を呼ばばいい?

「誰か一人でいいんじゃないかな。まあ、選ばれなかった一人以外は  
皆、呼ばれなかったとすねるだらけど」

何かに怯えたような顔で男が名前を呼ぶ

ヴィヴィ

すると、まだ五歳くらいの子供が画面に映る

「はーい!!ぱぱー!!」

元気―?と天真爛漫そうな金髪の童女が返事をする

この子がどうしたと言うのだ

「紹介しましょう。彼女の名前はヴィヴィ。」

あの聖王陛下のクローンです

そういわれて、さすがのわしもめまいがしてしまった

.....

んで、あとはヴィヴィに聖王がかつて使っていたというレリックを  
使わせて、

クローンであると証明して、彼の感情が揺れているうちに、過去に  
彼が果たしたかったことを果たす手伝いを今後してあげると約束し  
て協力を取り付けたってわけさ

お土産として“色々”あげたけど

ゼストさんと並んでベッドに横たわりながら話す  
壮絶な戦いを繰り広げた結果、一週間の入院となつてしまった俺たちは

余つた時間を使ってこれまでの経緯を彼に話している

「そうか……。レジアスのやつが……」

彼がレジアス中將とどんな関係だったのかはわからない

でも、その横顔は

かつて喧嘩別れした相手と、仲直りできてうれしそうな子供の顔に見えた

「お前たちのおかげで、俺はまた剣を振るう理由を思い出せた。」

ありがとう

首しか動かせないというのに、無理に頭を下げてまで礼をしてくる

ゼストさん

こちらと同じく首だけなんとか動かせるので礼をする

これで仲間はそろつた

101匹ヴィヴィちゃんが魔力を安定させて戦えるようになるまであと数日

俺たちのけがが完治するまであともう少し

俺を追つてきているという女子たちが気になるが、あとは前に進むだけだ

かつて、元の世界にいたときにこんな大きな戦いに巻き込まれたことを思い出した

お見舞いに次々と来るヴィヴィちゃんたちの相手をしながら、あれ”の奪還に向けて力をつけるのであつた

ナンバーズたちが全員ナース服を着ていたけども、スカさん  
あんたの趣味かい？

To be continued

## 八話 潜入 遠くの管理局

管理局に所属している人間というのは様々な人物がいる

原作の世界では活躍していた人物たちいない穴を埋めるかのよう  
に多くの人間がその力を発揮するようになった

高町なのは、フェイト・テスタロッサ、八神はやたとヴォルケンリッ  
ター達、

スバル・ナカジマ、ティアナ・ランスター、エリオ、キャロ

いずれも優秀で活躍するはずの人物だった

しかし、彼らはいない

皆、管理局に入る理由などないからだ

地球出身の娘たちはそのまま幸せに暮らし続け、ミッドチルダ出身  
の者たちも

武器を手取るつもりもない

それは、管理局の弱体化につながった

転生者達がこぞって管理局に大量に入隊したが、やがて、大きな力  
を持つものは管理局を離れて、思い思いの人生を謳歌するために巣  
立っていった

残された者たちはというと――

.....

「はい、あとこれもお願ひね」

そういつて俺のデスクに大量の書類がおかれる

かつては転生者という立場に浮かれていたが、いまでは前世と変わ  
らない

こんなしけた仕事しかできない

強力な能力を持っているわけでもない俺は、こうしてくそみそに働  
き続けるしかなかった

他にも俺みたいな境遇のやつらは山ほどいる

転生という生半可な希望を持ったがゆえに、大きな失望を抱えてい  
る負け犬どもが



今でもこう思う

なんで俺には強力な特典がなかったのかと  
神様にもっと強い能力がほしいと言ったら

70億分の一の価値しかないお前にそんな権限があるわけがない  
だろう

と言われた

そんなこと言われて黙ってられずに殴り掛かっちゃった

ふざけんな!!とね

そしたらお前には能力も恩恵もやらん、去ね

と言われてこの世界に放り出されてしまった

終わらない書類と格闘を繰り返しながら恨む

前世の働きづくめの人生となんら変わらない状況を

頭のおかしい職場の人間たちも

すべてに絶望していた俺に、ちよつといいことがあるのはもう少し

先の話だ

．．．．．

ここは、兵器管理の建物

ミッドチルダでは法律で魔法以外の兵器、つまりミサイルなどの兵器の使用が禁じられている

そんな戦略兵器を封印しておくための場所だ

しかし、魔法に該当するのにここの収められている兵器がある

それは

．．．．．

ここかい？

「ああ、そうだよ」

スカさんのナビゲーションを受けながら、ゼストさんとナンバーズとともに管理局のある建物に侵入する

見た目はただのビルだったが．．．

「周りに町や、人がいるようなわけでもないのに管理局が作ったビル。

電波塔でもないのにそんなものを作る理由などこのミッドチルダでは一つしかない。」

## 質量兵器の保管

「万が一の事態、例えば嚴重に保管していた兵器が盗まれたり、明るみに出そうになったりしたときに爆破して証拠を隠滅できるように、周りに何も無い地域に作られたんだろう。そして地下施設を作ればいろいろといけないこともできるのさ。」

「わしもかつては質量兵器に関して管理局の上層部としてかかわって居ったからな、複雑な気持ちだ。」

苦々しい顔で告げるレジアスさん

「レジアス中将のもたらしてくれた情報によればそのビルの地下に莫大な魔力反応が観測された瞬間があったそうだよ」

莫大な魔力反応

それが意味するものは

「僕たちが探していた聖王のゆりかごだね」

かつて聖王が使っていた全長数千メートルにも及ぶ巨大な戦艦

そのすさまじい戦闘力は町一つ軽く滅ぼせるという

「質量兵器ではないが、万が一こんなものを動かせる人間が敵対勢力にいたら管理局にとっては危険だ。管理局側にも今まで扱える人間がいなかったのだから封印するのも無理はない。」

しかし、今はヴィヴィたちがいる

「そうだ、僕たちがヴィヴィたちを救出したことがよくも悪くも敵に警戒させてしまった。クローンを強奪したやつらが次に狙うものは何か？とね」

警戒態勢を敷かれている内部を見て納得する

「じゃあ、始めようか。」

「頼んだぞ、お前たち。わしも全力でサポートする。地上部隊はわしの権限でできる範囲で適当に理由をつけて遠ざけておく。何かあったらすぐにしらせるのだぞ。・・・それと、ゼスト」

「なんだ？」

顔を俯かせて、手を震わせ、何かを懸命に言おうとするレジアス中

将

しかし、今までの確執が邪魔をしてゼストさんに言いたいことが言

えないのだろうか

それでも何とか勇気を振り絞ったのか

「.....すまなかつた」

そう一言だけもらすと

ぶつんつ、と言つて画面から消えてしまう

不器用で、最低限の謝り方だったが、

最大限の勇気をもって謝っていたようにも見えた

「.....」

かつての親友からの謝罪を受けて複雑な顔になるゼストさん

色々とお互いに言いたいことはあるだろう

恨みもあるだろう

しかし、スツと目を閉じると呼吸を整え集中力を高めていく

そして、再び目を開けると完全に迷いが消えていた

「くぐぞ。」

そうもらして内部を進むゼストさん。

彼らがまた仲良くなればいいな

そう思いながら、俺も刀を抜くのであつた

To be continued

## 九話 宇宙戦艦や（それ以上いけない

「侵入者はどこだ?!」

「こつちに来たはずだ!!」

「この場所に何者かが侵入した

狙いが何であれ、ここにある質量兵器を渡すわけにはいかない

そう考えて捜してるが、なかなか見つからず苛立つてくる

「上からの命令は?!」

「それが・・・通信ができない状態で・・・」

「このタイミングで？偶然にしてはできすぎている

ジャミングしているやつらがいるのだろうか

「俺が指揮を執る。なんでもいい。通信ができるまで交信を続けさせ、直接管理局本部まで使いのものを任せ!!」

「はっ!!」と言って走り去ってく部下

通信機能が使えないので指揮系統が混乱状態にある

まずは落ち着かせなければ

そして、必ず侵入者は捕まえてやる

そう考えて、画面を見ていたら

床から出てきた手に足をつかまれる

「?!?!」

「なんだ?!」

そのままひっくり返されて倒されてしまう

すると、地面から二人の男女が浮かんでくる

「この人が指揮官っぽいねー。じゃあ、一緒に来てもらいましょうか。」

女がそういうと隣の男が剣を振るい、こちらの首を強打してきた  
痛みでそのまま失神してしまった

.....

指令室にいた司令官らしき人を拉致して進む俺とセイインちゃん  
わっせわっせと進んでいく

すると、目の前に敵が現れる

「いたぞー!!」

と叫んでこちらに魔力でできた弾を打ってくる  
君たちの上司を抱えているんですけど

人望ないのかな、この人、と思い空いている方の手で刀を抜いて、  
魔力弾を斬ろうとしたら

後ろからものすごい速さで人影が目の前に飛び出してきた  
近づいてきていた魔力弾がすべて切り裂かれる

ぜ、ゼストさーん!!

「無事か?」

そういつて剣を正面に構えて俺たちを守ってくれるイケメン  
かつこいこいこいこいこいこい

敵を次々に倒していつてくれる

しかし

「きりがないな」

どンドンやってくる敵の雑魚たち

時間をかければかれるほど消耗して、こちらが不利になっていく

「どうする?・田中」

隣のセインちゃんがあたしの潜る能力で逃げる?と視線で訴えて  
くる

バリアジャケットとかいうものを着ていない俺ならばセインちゃん  
と密着していれば床を通過して逃げ切れるだろう。

しかし、バリアジャケットを装備しているゼストさんはそうはいか  
ない

前と後ろを敵に囲まれ絶対絶命

背中合わせで互いの背後を守る

「こうなったら」

「あれしかないね」

そういつて攻撃を仕掛ける俺たち

来るか?!、と敵が身構えたが

彼らの方ではなく

天井にむかって攻撃をしかけた

ここは通路だ

前と後ろの天井を落として道をまずふさいで敵が来れないようにする

そして、自分たちの上のところも壊して、上に上がればいい

易々と上がり続け、地上に出る俺たち

敵は地下から追ってこられないようだった

通信機で他のシスターズに連絡をとる

そっちは大丈夫？

「あともう少しで地上にできるから!!心配しないで!!」

クアットロちゃんにそういわれる

そして、三人と一人の荷物を抱えて逃げようとした瞬間

銃声が鳴る

足に焼けるような痛みが生じる

狙撃?!

通信機の向こうにいるクアットロちゃんが何があつたのか焦った声で聴いてくる

周りの方を見ると、敵が囲んでいるのがわかる

レジアス中將が妨害してくれてくれたようだがもう来てしまったの

か

痛む足を抑えつつ、なんとか止血しようと強くひもを巻き付けてお

く

隣のセイインちゃんはこちらを心配してくれているのか泣きそうだ

能力で地面に潜っておくように言う

素直に潜る彼女

ゼストさんは剣を構えたまま警戒している

「よーし!!そこまでだ!!みども!!」

そういつて近づいてくるえらそうな男

「よくもここまで暴れてくれたな。」

そういつてこちらに銃を向けてくる

「何が目的だ？質量兵器か？破壊工作か？それとも・・・」

聖王のゆりかごってか？

こちらが男の言葉をさえぎっていつてやると男の顔から一切の余裕が消えた

「きさま・・・」

先日はどうも

どこぞの宅急便みたいに運送システム見直した方がいいんじゃないの？

そういつて、クローンを強奪した時のことで遠回しに挑発しておく顔を赤くする男

「あのクローンどもをどこにやった？」

さあ

しらを切る

まだだ、もう少し

「貴様らが何をしようとしているのかなど知らん。だが、元のデータがある限りいくらでも生み出せる!!」

じゃあ、そのたびに奪ってやらなきやな

周りの兵士たちに発射準備をさせる男

もうちよつとだ・・・!!

「情報を吐く気もなしか。なら死ぬ!!」

撃て!!

そういつて撃ってくるが

その攻撃は阻まれた

ゼストさんだけではすべての攻撃を防ぐことはできなかつただろう

だから

彼女を呼んだ

短い短髪に、スタイルの良い体つき

ナンバースたつての武闘派のお人

ナンバースリー、トーレちゃん

「援軍だと?!」

ありがとう、セインちゃん

「どういためしましてー」

そういつてにゆつと出てくるセインちゃん  
さつきセインちゃんに潜れといったのは、逃げろ、というわけでは  
なく、

仲間を連れてきてくれ、という意味だった

その意図を汲んだ彼女がナンバーズの誰かを連れてくるまで  
会話で時間を稼いでおいた

そして、その目論見は成功した

「一人くらい増えたからどうだというのだ!!」

全員殺せ!!と言ってくる

多勢に無勢

まだまだピンチは終わらない

そしてトーレちゃんに聞く

そっちは終わった?

「ああ、終わったぞ。だからこうして迎えにきた」

そういうと、遠く離れた場所の地面が盛り上がり

とてつもない大きさの船が大地を突き破って姿を現した

「なっ?!・・・なああああああ?!」

驚くの無理はない

きつと何度か資料とかで見たことはあっても実物は初めて見るの  
だろう

俺だってその巨大さに圧倒されっぱなしだ

その全長が数キロメートルにも及ぶ、超巨大戦艦

「聖王のゆりかご?!」

銃を構えていた敵の兵士たちが口を開けて絶句する

じゃあ、俺空を飛べないからよろしくね

「ああ、感謝しろよ・・・ヤクトクダナ」

そういつて俺をおんぶして空に向かって飛び立つトーレちゃん



同じくゼストさんもセインちゃんを抱えて空に向かって飛ぶ

「逃がすな!!撃て!!撃てえええええええ!!」

今まであつけにとられていた兵士たちが気を取り直して撃つてくる

しかし

金髪の同じ顔をした少女たちに撃ち落とされる

「ぱぱ?!大丈夫?!足撃たれたの?!」

血で赤くそまった俺のズボンを見て驚くヴィヴィズ

大丈夫大丈夫、めちやくちや痛いけど

「どつち?!」

そうツツコミながらも守ってくれる

ヴィヴィたちがこうしてここにこれたということとは・・・

「うん、私たちのうちの何人がコアにいるから制御ができてるよ」

彼女たちの言葉を聞いてうまくいったことが分かり、ほっとする

そのまま戦艦内部まで連れていかれ、安全なところまで案内してもらった

地上に取り残された間抜けな顔をした男たちの姿が面白かったので

セインと一緒にバーカ、とあおってやった

顔をトマトみみたいに真っ赤にして、地団駄を踏んで悔しがる男

やーい、デーブ、ハーゲ

「メタボメタボ」

調子に乗るセインちゃんと俺

そこでヴィヴィがスツと目を細めていい加減にきなさい、と目で言ってきたので

黙る

そして、トーレちゃんに背負われている俺の姿を見てさらに目を細める

「トーレさん。私のパパを助けてくださりありがとうございます。大変でしょうから、私が代わりにパパを背負いますよ」

「いや、安心しろ。まったく大変だとは思っていない。もう少しこうしてたいくらいだ。」

そういつてなあ？と顔をこちらに向けて言ってくる  
いい匂いができて頭がくらくらしてきた

それにヴィヴィがぶちつと切れた

「いいから離れなさいーい!!」

「けが人だぞ!!何をする!!」

ぎゃあぎゃああと引つ張られ、足がさらに痛む

んぎゃああああああ!!と叫んでそのまま痛みで気絶してしま  
う

これ、家出した意味ないじゃん・・・

そう思いつつ、女性から逃れられない自分の運命を呪いながら失神  
するのであった

To be continued

十話 いちもーだじん？これプロレス（隠語）っていうんじやないの？

船長!!掃除が終わりました!!

「うむーくろろろ」

よきにはからえー、と抱っこをせがんでくるのでははー、と平伏して

抱っこしてあげる

しかし、中はものすごい快適になったなー

かつて、ずっと地下に封印されていたからとてもほこりっぽかったが

こうしてみんなで手分けして掃除をした結果、ピカピカに生まれ変わった

さすがにあのままだと子供たちの健康にまずかったからな

あきれた顔で見ってくるプレシアちゃん

「研究者としては、あの伝説の聖王のゆりかごに乗れるなんて至上の誉れだけど、

これからのことを考えると喜んでもいられないわね」

彼女の言う通り、あのあと全速力で脱出した俺たちは別の

次元世界とやらに逃げてきた

レジアス中将とスカさんの妨害工作により、追手がまともに追跡を行えないとか

鬼畜タッグの相手をしなければならぬ追跡者たちに同情するのであった

コアの点検をしていたスカさんが話しかけてくる

「よし、内部出力も安定している。自動操縦だから、みんな寝ていても動かせるよ」

そういつてくる

「聖王のゆりかごを使うにあたって一番心配だったことも解決したし

ね」

俺とスカさんが危惧してたこと

それは、ヴィヴィたちの寿命

かつてのスカさんが抜き取った聖王協会からの情報によると、聖王は若くして死んでしまったという。その原因がこの巨大な聖王のゆりかごを一人で動かしていて、体に大きな負担がかかったからではないかという記述があった。

それを見た俺とスカさんはすぐに対策を立て始めた

聖王のゆりかごを使うべきか？

いや、もしヴィヴィたちの寿命が削れてしまったら・・・

あーでもない、こーでもない」と議論していた俺たち二人見ていたナンバーズの誰かがぼつりと言った

「100人いるんだからみんなで動かせるようにすればいいじゃん」と

その案を聴いたスカさんが絶頂していきそうなアへ顔をしながら開発室まで走り去っていった

次の日の朝、目元に隈を作ったスカさんと「徹夜は美容の天敵なのに・・・」とぼやく眠そうなプレシアちゃんが開発室から出てきた船を動かす動力源を作るために彼女の協力が必要だったらしい

「これはレリック・コピーだ。戦闘能力のあるデバイスとは違い、単にエネルギー源として使うために、レリックを複製したもの。戦闘能力がないので小さくできるし、一人一人のヴィヴィくんにあわせて細かな調整も必要ないのですぐにたくさん作れる!!つまり、これを数百個作って船の動力源にすればいい!!」

断言するスカさん。サイズもとてもミニマムで、ビーズみたいに細かい

「これならヴィヴィくんたちが聖王のゆりかごとつながらなくてもいいから寿命が縮んでしまう可能性もゼロだ!!」

すげえ!!あんたすごいよ!!天才だよ!!とスカさんをハグする

プレシアちゃんが「半分は私のおかげなのに・・・」と言っていたので

後でほめ殺しにしておいたら機嫌が直った

チヨロかわいい

そうして、今は埋め込んだレリック・コピー（燃料用）で動いている船の最終点検をしていたところだ

あれから数か月がたっているが、その間にスカさんとプレシアちゃんが船の内部を改造し、人が住めるようにしてしまった

食糧とかも自給自足ってどういうことなの・・・

聖王の玉座があった場所は、今ではなぜか炬燵がおかれてる

聖王の玉座はスカさんとプレシアちゃんによつてマツサージチエアへと変えられてしまった

聖王さんは泣いていい

あなたのクローンは炬燵を玉座代わりにしています、なんて同情していたら

袖をぐいぐいと引っ張られる

どうしたの？

「お菓子たべさせてー!!」

戦いに赴くときは戦士の顔になる彼女も、俺の膝の上ではただの甘えてくる

年相応の子供にしか見えなかった

.....

田中君とじゃれているヴィヴィーズをみてほっこりする

そして、プレシアを呼んで離れた場所で話す

「聖王のゆりかごは手に入った。これでもう管理局は手出しできない」

「あとはどうなぶるか・・・か」

バリアーに、超高次元エネルギー砲、艦内には徘徊している101人のヴィヴィーズに1万を超えるガジェット・ドローン

敵がかわいそうに思えるほどの過剰戦力だ

「ここから管理局本部に向けてあの腐れ脳みそどもを砲撃で吹き飛ばしてやつてもいいが・・・」

「民間人が死ぬでしょうね、それも大勢」

ちらつと彼を見る

「以前の僕ならためらわずにそうしていたさ。でも、それをやったら彼や私の娘たちが悲しむ。」

今はそんなことをする気にはなれなかった

「じゃあ、プチプチくんをつぶすみたいの一つ一つ管理局の闇がいる場所を攻撃していくのかしら？」

「それも一つの家ではある。しかし、レジアス、ゼストという管理局に詳しい人材がいる今ならもっと面白いことができる」

そういう彼の顔は、最近見せる娘のことを思う父親の顔ではなく、無限の欲望と称された男の表情だった

.....

「たつくよー。レジアスの野郎、一体なんだつーの。」

「何かおいしい話でもまたもってきたんじゃねーか？」

そういつてとある建物に集まる者たち

レジアス・ゲイズとつながりのある犯罪組織の重要幹部である

「俺たちをこうしてみんなあつめるなんてよー。よほど大事な話なんだろうな？」

ええ？おい

と画面の向こうにいるレジアス・ゲイズに問いかける

管理局のとある重要施設が何者かに襲われて、その対応に追われて忙しく、普段は出席している会合にもでられないのでこうしていると、レジアス本人は主張している

どこまで本当か怪しいものだが

「早くなんで俺らをわざわざ呼びつけたか言えよ。じゃねーとこの建物を吹っ飛ばすぞ」

そういつてにらみつける男

他のメンバーも口には出さずとも同じ考えのようだ

「そうだな、では単刀直入に言う。わしはもうお前たちとは手を切る」  
はあ？と誰かが声をだして場が静まり返る

さつき彼が言ったジョークの撤回を待っているのだ

しかし、冗談ではないようだ

「お前よ、今まで甘い汁吸っておいて、いきなりはいさよなら、が通る  
と思ってるのか?」

そういつて椅子から立ち上がり銃をレジアスが映る画面に向ける  
一人の男

「そうだ。その通りだ。確かに貴様らと今までつながっておいでいき  
なり

簡単に手を切れるとは思っていない」

「だったらー」

男が言葉を続ける前にレジアスが告げる

「だから、全員ここでやられてもらうことにした」

は?という声よりも先に

悲鳴が上がる

「なんだ?!」

悲鳴が上がったほうを見ると

見覚えのあるガジェット・ドローンが男たちを襲っている

こいつはー!!!

「ジェイル・スカリエツティか!!」

「はい、正解」

そういつと画面が切り替わり、目の前にジェイル・スカリエツティ  
が現れる

「レジアス!!てめえそいつと組んだから俺たちと手を切るつてのか  
!!」

「厳密には僕たち、だけどね」

そういつて愉快そうに笑う

「安心したまえ、殺しはしない。ただ来てもらうだけだ。」

応戦するためにデバイスを抜く

しかし

「発動しない!!」

魔法によって起動するバリア・ジャケットというものを、魔導をつ  
かさどるものたちは使う

使えないパターンは二つある。一つはもともと魔力がないこと。

もう一つは妨害されること。

マジック・キャンセラーによって妨害をされていた

「くそが!! だったらこれでどうだ!!」

そういつて銃や剣を抜き次々にガジェットを破壊していく男

他の男たちはガジェットにやられて連れ去られてしまったようだが、この男は別格のようだ

「何体でも着やがれ!!」

「1000体」

「・・・あ?」

「君たちのところに送り込んだガジェットの数さ」

すこし多かつたかな、と笑うジェイル

1000体?・・・1000体だと!!??

ふざけている

数の暴力で圧殺するつもりか!!

勝ち目はないと悟った男が逃げようとする

「ああ、会場をこちらで用意したのはこういった理由さ」

そういうと扉が閉まる

殴ったり、けつたりしても開く様子はない

デバイスをセットアップして使おうとするが魔力妨害のせいでもれもかなわない

「くそが・・・!!」

「じゃあ、おやすみ」

そういうと部屋の中にガスが流し込まれる

こ・・・れ・・・は・・・

「人体には無害な睡眠ガスさ。たっぷり吸って日頃の睡眠不足を解消するといい」

男が薄れゆく意識の中で最後に見たものは、こちらに向かってくるガジェットの姿だった。

To be continued



十一話 管理局本部に、さよならバイバイ 俺はこいつと、旅に出る（ヴィヴィチュウ）

せいやー

「せいやー!!」

よいしょ

「こらしょー!!」

年が明けました

まさか船の中でお正月を迎えることになるとは

あ、どうも

今俺はみんなと餅つき大会やっております

餅つきの存在を知ったスカさんが「餅つきだと!!??なんだそれは!!?」

と大興奮していたので、やることになりました

衣食住の面倒見てもらってるから手伝うことに

仕方ないね

社長の無茶ぶりに答えつつ、ぺったんぺたんと餅をハンマー?

ああ、なんだっけあの餅をたたく用の木のあれ

を使っているヴィヴィオを支えながら一緒についている

なんでも熾烈な争いをヴィヴィーズの中で行い

勝利した子だとか

手に水をつけて、餅をこねたり、ひっくり返しているスカさん

意外とアクティブなんすね

時々餅をちぎってはつまみ食いしているからナンバーズのみんな

にぼこぼこにお仕置きをされている

作りかけのもちって固くない?

スカさんの胃の心配をしつつ、あの日のことを思い出す

「ぺったん!!」

あ、ぺったん

.....

「レジアスとつながりのある犯罪組織の幹部をらちっちゃった」  
いきなりのカミングアウトに抱きしめてたクモ美を地面に落と  
てしまう

きしゃああああ!!とおでこを床にぶつけたああああ!!とクモ美が  
悶絶しているがそれどころじゃない

ごめんもう一回言つて

「レジアスとつながりのある犯罪組織の重要幹部を全員らちつてき  
ちやった。報復活動を興される前にごうも・拷問して情報を抜き  
取つてそこらに捨ててくるね」

最初に聞いた時よりも情報が悪化している・・・!!

と戦慄しながらこの経緯を聞いた

それを全部うん、うん、とうなずきながらきいて、最後に一言だけ  
返す

スカさん

「なんだい?」

あんた、実はバカだろ

おかげさまでレジアスはきれいさっぱりになったとか

うん、犯罪組織とのつながり消えちゃったからね

きれいきれい（隠語）したからばっちいばい菌（比喻）も全部落っ  
こちっちゃったねー

とりあえずレジアスのおっさん呼べ

半切れでスカさんにそう命じるのであった

・・・・・・・・

「すまん。これから先のことを考えると、今管理局が混乱している  
うちに

犯罪組織とのつながりを断っておきたくてな」

正直に謝られ、納得はしないが引き下がる

そういえば娘さんとか身内の人たちは人質に取られたりしない?

「親子関係ははつきりいって冷えていてよくないが、そちらにもう  
送っておいた」

いつの間に・・・・・・・・

仕事人なレジアスをやべえ、と思いつつ見直す

「そうそう。お前、婿養子には興味がないか？」

そう聞かれる

は？なんで？

「いや、わしには一人娘がおるのだが、いい年齢でもまだ相手が見つかっておらんでな。お前だったらわしも安心して紹介できるんだが。」

孫の顔を見たがっているうっとおしい親の顔をしているレジアスに

娘さんに聞け

と言つて通信を切る

あのひと娘に縁談とか勝手に持つてきて嫌われたんじゃないか

と考えつつ、今後の予定をナンバーズとスカさん、プレシアちゃんとヴィヴィーズで集まって話し合う

床からにゅっ、て出てくるの心臓に弱いからやめて、セインちゃん座っている俺の膝の上に乗っかってくる

「さて、クアットロが先日僕たちが捕まえた次元犯罪者たちの尋問を行った結果様々なことが分かった」

それ、拷問だったんじゃないやね？とクアットロちゃんが尋問している部屋の近くを通りがかったとき助けを呼ぶ声が聞こえてきたのを思い出してツツコむ

クアットロちゃんの方をちらつと見ると

何よ、という顔で見返し来たのでごまかしておく

「それでだ、船の出力も出せるようになったからそろそろケリをつけちやおう」

ついにやる気か・・・?!

俺とヴィヴィーズとナンバーズたちに緊張が走る

するとスカさんが立ち上がり、指を鳴らすと

地面からボタンが出現した

「このスイッチを押したら管理局本部に向けて高次元エネルギー砲が発射されます」

とんでもないことを言うスカさん

「じゃあ、これ押したい人ー!!」

はいいとナンバーズの何人かの子たちとほぼ全員のヴィヴィーズの手が上がる

それを一人一人確認するスカさん

「ふむふむ、わかった。

じゃあ、僕が押そう」

ぽちっと、わざわざなんで挙手させたの?という皆からの視線を浴びつつ

スカさんが、管理局にとって破滅的な一撃となる死のボタンを押した

.....

「全く、あいつめ.....」

暗い部屋の中に浮かぶ脳みそ

お互いに、かつては人間だったが生きながらえて権力を持ち続けるために

このような姿になった者たちだ

「ジェイル・スカリエツィだけでなく、レジアス・ゲイズまで怪しい動きがあるそうだな?」

真ん中の脳みそが聴く

「そうだ!!あいつらのせいで聖王のゆりかごが奪われたときいたぞ!!」

憤慨する端つこの方の脳みそ

「レジアスはすぐに始末するとして、ほかのネズミどもはどうする?」  
「なあに、レジアスの家族のところ私に私の私兵を送り込んでい

それをネタにレジアスをゆすればジェイルの居場所も吐くだろう」  
はっはっはっは、と脳みそなのにどうやってお前らしゃべってんねん、みたいな

光景を繰り広げつつ脳みそたちが笑いあう

「じゃあ、そういうことで.....」

すると、ほぼ同時に脳みそたちにとある通信が入る

「なんだ？」

「どうしたんだ？」

何かあったのか

と確認する暇もなく

この世から消滅した

.....

「というわけさ」

何がというわけなのか知らんけど、その気持ち悪い脳みそを吹き飛ばせてご満悦なスカさんが笑う

実はこの脳みそたち、管理局本部・・・ではなく本当の管理局本部にいたらしい

地上のほうはいわゆるダミーで、ほかに存在していたとか

そこに全員隠れていたらしい

「ドゥーエが一晩ですべて調べてくれました」

彼女の方を見ると、ドゥエエ、と決め顔で胸を張るドゥーエさん

後でこの顔のことでほかの子たちにいじられるんだろな、と思いつ

っ

ボタンをいそいそとしまい終えたスカさんの方を見る

「じゃあ、これで僕たち自由だから」

わーい!!とみんなが喜ぶ

え？

え？

黒幕とのラストバトルとかは？

「全員吹き飛ばしたからないよ？」

出番の消えたどっかのピエロさんに黙祷をささげた

S T S 編完

V I V I D 編に続く・・・・・・・・といいなあ

T o b e c o n t i n u e d . . . するのか?こんな展開で?

▪ (東山源次)

おまけ 誰がお母さんだつて? え? 全員? ふ、ふーん  
(震え声)

娘の入学式に全部出るの大変だなー

白目でヴィヴィーズ全員の入学願書に目を通す

スカさんとレジアスのおじさんのおかげで戸籍情報は偽造し放題  
です

管理局をぶっ潰してから、スカさんは「僕はじゆううだああああ  
ああ!!!」

とかハイテンションになりながら毎日餅づくりに励んでいる

何が彼をこんな風に変えてしまったのか

レジアスのおじさんは上層部の人間がまるまる吹っ飛んで消滅し  
てしまったので

繰り上がりで昇進したとか

やべえ、俺軍部のお偉いさんとのコネもっちゃったよ、と自分がえ  
らい立場につくことなく権力を振りかざせる知り合いを持っている  
というおいしい立場を再確認しつつレジアスのおじさんをお願いを  
した

「なんだ?」

娘(オーリス)さんをとめてください

「娘をよろしく願います」

ああああああああああああああああ

オーリスさんと会って、最初はレジアスおじさんの知り合いだか  
らって

結構警戒されていた。いや、父親のことを嫌っていたらそりや無理  
もないかもしれないけど  
で、うまーく距離を取りつつ接していった

他の女子たちとの仲を取り持って孤立しないように配慮したり、

一緒に二人で食事にいったり、ヴィヴィーズを何人か連れてお散歩

していたら

老夫婦の方に娘さんですか？と聞かれて恥ずかしがっていたり

うん、意識するようになっていっちゃったんだろうなあ

聖王のゆりかごの部屋の一室に立てこもりながら、今にも破られそうなドアを見つめて思い返す

「あれで器量はかなりいいからもらって損はないぞ」

この・・・達磨腹!!

「太っているおかげでサンタの格好をしたらヴィヴィーズに喜ばれるようになった。むしろ誇りに思っている」

無傷だと・・・?!とレジアスおじさんのメンタルが強くなっていることに脅威を感じながら見つめていると

ドアが吹っ飛んだ

ぞろぞろと入り込んでくる彼女たち

先頭にはグラ子妹がいる

久しぶりだね

「さあ、出てくるんだ。今日は私たちの番のはずだぞ」

そういつてがっちり両脇をつかんでくる

同じくらいの背の大きさになったので、何とか抵抗してみようと力を入れて踏ん張る

「あつ、こいつ、まだ抵抗する気か!」

皆が引きはがそうとしてくるのを必死に壁にしがみついて耐えながら、レジアスおじさんに聞いてみる

俺、どこで間違っちゃったんだろう？

「生まれたときから」

俺は泣いた

.....

つやつやなのはちゃんたちと、からからになってヴィヴィーズに心配されている俺

スカさん印の精力おもちを食べて体力を回復しつつ、みんなにヴィヴィーズの進学について尋ねてみる



渋い顔だ

まあ、わからんよね、こんなの

そこで、なぜかちやつかりゆりかごに住み着いたヴォルケンリツターのヴィータちゃんが手を挙げる

はい、ヴィータちゃん

「あたしが一緒に学校通えばいいんじゃないかな?!」

だって永遠のロリだし

自虐ネタで場を和ませようとするヴィータちゃんに涙を流しつつ次の案を聴く

アリサちゃんが手を挙げる

はい

「とりあえず、みんな顔が同じで一緒に学校に通わせたらまずいから、ばらばらの世界に通わせた方がいいと思う」

さすがまじめっこ、とかつて委員長をやっていたアリサちゃんをほめる

照れている

離れ離れになっている間にすっかりツンデレが消えました

しかし、ここで戦争が起こってしまう一言をはやてちゃんが言ってしまう

はやてちゃんが手を挙げる

はい

「この子たちのママって誰なん?」

空気が凍り、空間がゆがみ始める

学校に通わせるには父親だけでなく、母親も必要・・・っ!!

この機会を逃してたまるか、と燃える女子たちと、やめてくれ、その質問は私たちに効く、とうちはオビトみたいに震えるナンバーズたち

皆がヴィヴィーズに目線を送る

わたししだよね

スツ・・・とヴィヴィーズが一齐に指をさす

私か?と胸を膨らませるグラ子妹

私なの！と選んで選んでーとアピールするなのはちゃん  
私よね？と元未亡人としてのプライドを賭けるプレシアちゃん  
絶望の顔つきになっっているナンバーズ  
指の先には

六本の多脚を活かして掃除をするクモ美  
ではなく

ぽけーつとこちらの顔を見ていたレジアスおじさんの娘さんであ  
る

オーリス・ゲイズさんだった  
なんで？

「だって他の人のこと良く知らないし」  
いつもヴィヴィーズとお出かけしていたオーリスさんが独り勝ち  
した

・・・・・・・・・・・・・・・・

結局、ヴィヴィーズにとってのビッグ・ママはオーリスさんとなっ  
た

101人いるのでそれぞれ嫁さん全員がママになった

入学関係の書類を書くたびに違う女性の名前がヴィヴィーズの母  
親欄に書かれているのを見て早まったかな・・・と感じた

あの戦いの後、俺と、みんなは・・・

やめよう（）

ただ一ついえるのは

ローテーションが決められていてもきついものはきついよね、とい  
うことだけだ

地球の学校の入学願書を見て、地球のみんなはどうしているのか  
な、と

思うのであった

To be continued

VIVID導入編1 え？光源氏計画？何を言っているんだヴィヴィーズ

やあ

ヴィヴィーズの入学式に出る服装を考えている田中だよ

今日は久しぶりに地球に帰ってきた

まあ、俺は地球に親とかいないけど久しぶりの帰国に高町家の人々は

大喜びしていたよ。なのはちゃんとか俺を追っつてずっとミッドチルダにいたもんなあ

その件について俺が原因です、ごめんなさいと謝っておいた。

殴られるかと思ったが、肩をがしつとつかまれて義父の高町士郎さんにこういわれた。

「美由紀も、おねがいたします」と

は？と素で聞き返しちやったよ

いや、小学生のところにいろいろとよくしてもらっていたけども、今俺まだ16歳だし、そもそも美由紀さんはどうだって話だし。

「大学でいろいろな男性に言い寄られているが、過去に自分とまともにやりあつて見せた男のことが気になるといわれてね・・・」

妹に先を越されたと感じて焦っている部分も多分にあるとか。

「もうすぐ帰ってくるよ」

と、士郎さんが言ったと瞬間に家の中に誰かが入ってくる

「お父さん、お母さん、ただいー」

ま、と言わずに持っていたバッグを落とす美由紀さん

「・・・・・・・・・・田中君？」

はい

ひさしぶりいいいいいい!!、と叫びながら飛び込んでくる

クモ美のタックルを受け止め続けて頑丈になった足で踏ん張って受け止める

「元気だったー？なのはとほどうなのよー」

うりうりと手でこちらの髪をいじってくる

彼女にとって、俺は小学生のころから変わらないらしい

「美由紀。話がある。」

そういつて美由紀さんを連れておくの部屋に引っ込んでしまう士郎さん。

そして、実はさつきから隣にいたなのはちゃんと二人つきりになる。

美由紀さんが俺に気があるかもしれない、という部分で不機嫌になっただけに今まで怖くて直視できなかったが、名前を呼ばれる。

「たろうくん」

あ、これ面倒くさいときのモードだ、と名前を呼ばれて確信する。

「……………今日は甘えさせて。」

反論は出させないから

そういつてこちらの手を握るなのはちゃん

指先が少し震えているのが分かった

もしかしたら自分の姉に嫉妬と不安な感情を持っているのだろうか。

実質的な嫁さんにそういわれては男として頑張るほかない

たっぷりとね、と返したら

「…ばか」

と顔を赤くして言った

そんなことをしてもかわいいだけだよ、とほめておいた

すると奥の扉から士郎さんがニコニコと、美由紀さんがハイライトがない瞳でじつと見てくる

もしかして……………

「今まで太郎君がなのはと付き合っているのを知らなかったようだからね、ちゃんと伝えておいたよ。」

叫びそうになるのを必死にこらえて美由紀さんに向き直る

かつてはおさげに眼鏡という格好だったがコンタクトにしたのか、

眼鏡をかけておらず、髪はロングのストレートに、前髪をくるくるにアイロンで整えてあった。昔はかわいい人だと思っていたが、今ではこんな美人になっていた

空気を呼んで士郎さんとなのはちゃんが静かにフェードアウトしていく

そして、部屋で二人つきりになる俺と美由紀さん  
時が止まったかのように静かな時間が流れ続ける  
そして、ほぼ同時にお互いが口を開く

「あの」あの  
そちらからどうぞ

「うん・・・」  
息を深呼吸して、呼吸を整えてから話し始める美由紀さん

「わたし、太郎君のこと、すき」  
ぼつり、ぼつり、と恥ずかしながらもシンプル、ストレートに告白  
をしてきた

高町さんちにお邪魔していた時はいつも彼女とよく会っていた  
なのはちゃんとは違うが、また魅力的な人だとは思っていた  
だからその告白にたいして俺は「……………」

「何か言うことは？」  
愛している

「キスして窒息死させたいか？」  
やめて

なのはちゃんの部屋で二人つきりになったら美由紀さんとのこと  
について問われ、正直に答えたらこうなったよ

彼女を後ろからあすなろ抱きしてなんとかその機嫌を直そうとしている

最近したたかになってきたうちのお姫様の顔を見る  
やきもちやいている、と言わんばかりの表情だ  
なのはちゃん

「……………」

「なのはちゃんの名前をよんでこちらを向かせた瞬間  
唇を奪った

「……………これで機嫌が直る安い女と思っただら大違いなの……………」  
「そういうながらも頬が緩みっぱなしで説得力がない  
手を引かれてベッドに連れ込まれる

「シャワー浴びないの？」

「すぐほしい」

「そういわれて服を脱がされる

「嫁さんたちは皆肉食だが、彼女は超肉食で隙あらばこちらとつながってこようとしてくる

「他の嫁さんがいる分、自分が本当に愛されているのか確認したいと思うだ

「ヴィヴィーズの入学式に着ていくクリーニングに出さなきゃな、と  
考えつつ、

「こっそり持っていたスカさん印の精力お餅をかじるのであった

To be continued

## VIVID導入編2 女の怖さは男のそれと違う

地球に来て、なのはちゃんの家に帰ってきたと先日言いました  
それはつまり

「ゴツチヲミネ・・」

はい

今、俺は黒ちゃんと一対一で向き合っております

そう、あの「きやあつ」って悲鳴を上げて気絶したギャップかわい  
い彼女です

凛々しさの裏に見えたかわいさがたまらなかったな

伝家の宝刀を二刀流で構え、相手に向き直る

ここは高町さんちの道場

黒ちゃんをここに住み込みで働くように勧めたのは俺だ

今ではお菓子の製造も任せられるようになっていているらしい

かつて彼女と何回も打ち合っていたが、最近はスカさんたちと

管理局をつぶすのに忙しく、地球に帰るところじゃなかった

そうしてだんだんと彼女との時間が取れなくなっていく

「どうしておんしんふつうになったの・・・？」

寂しがりやさんになってしまったようだ

実はなのはちゃんが小学生の頃の同級生たちの集まりに出ている  
ときに

高町家で待っていた俺と出くわし、冒頭のシーンとなったわけだ

ちなみにいきなり真剣を抜いてきて四肢を切り落とそうとしてき  
た

理由はどこかに行けなくなくなればずっと自分のそばにいてくれ  
るようになるからだとか

こわい

軽くシヨンベンをちびらせながらそれでも、嫁たちの病み度に比べ  
れば

鼻で笑えるレベルだ。だから全く問題はない。

例え今、剣と剣のつばぜり合いをしていて押し負けそうになつていたとしても

その体制のまま脛をけりつけてきていても

彼女は好ましく思っている

だが

「どうして私は一緒に連れて行ってくれなかったの・・・？」

悲しそうに言う彼女

俺がミッドチルダまでポケモンマスターになるといつて家出した時のことを

思い出したのだろうか

「こちらも率直な気持ちを言う

黒ちゃん

「？」

俺たち、付き合っていないよね？

ぴしり、と黒ちゃんの時が止まる

そもそもそういった気持ちを伝えられていなかった以上友達としてみなしていたのは至極当然のことだと思うけど

がくり、と彼女の頭が下に下がる

正論の刃で彼女の心をえぐっているようだが、やめない

もし、黒ちゃんが俺に気があるのなら、遠回しにいわずにストレートに言っていたら俺も必ず返事はしていた。伝わらない気持ちは、この世に存在しないのと同じだ

相手の剣を持つ腕にさらに力がこもる

殺気が入り乱れ始めた

「・・・そんなこと」

ぽつり、と一言もらし

「できていたらとつくにやっていたよおおおおお!!!」

女 うわああああああああん、と恥も外聞もなく泣き出してしまふ彼



う、うわあ、と少々引きながらも剣を受け止める

「だってだってだってだつてだつてだつて!!!今までそんな経験はろくになかったからどうすればいいかなんでわからなかったし!!!心がいつぱいいつぱいだったし!!!」

彼女の剣戟に想いがこもる

先ほどもでのうつろな感じが消えていき、熱くなつていく黒ちゃん「だから、あなたがミッドチルダって場所に行ってしまったとき、本当に悲しかったんだよ?!?!」

「ばかああああああ!!!」と言いつつ持っているエタルドという神剣に力をこめて、こちらの刀の柄を小手打ちしてはじいてくる。

とてつもないスピードで鞘を左手にもち、二連撃目を繰り出してくる

どこの飛天御剣流だ、と思いつつも首を強打され、意識を失う

暗転する思考の中、見えたのは

最初に会った時よりもきれいになったのに、あの頃と全く表情が変わっていない彼女の姿だった。

それになぜか懐かしさを感じ、ふつと笑いながら気を失った

.....

ぼた、ぼたとしづくが顔にかかっているのを感じる

生温かく、しよっぱい液体だった

目を開けると目を赤くはらした黒ちゃんが俺の頭を膝枕しているのがわかる

目を開けた俺にほっとしたのか頭をぎゅうううつと抱きしめてくる

シグナムさんなみに体型よくなったね、と心の中でセクハラしつつ彼女にたつた一つだけ質問を試してみた

俺のこと好き?と

それを聞いた彼女は先ほどとは違う理由で顔を真っ赤にし、何回も

深呼吸してから蚊が泣くような声で

「・・・・・・・・・・・・・・・・すき」

と言ってきた

そういわれて起き上がり、彼女を抱きしめる

「うへへへへっへ・・・・・・・・」

とトリップしている彼女をスルーしつつ、俺も気持ちを伝える

黒ちゃん

「うん」

俺も、すきです

・・・・・・・・・・・・・・・・

「で？嫁さんが昔の同級生とあっていた時に別の女を口説いていた田中君、死ぬ前に何か言い残すことはある？」

レイジング・ハートという魔導具を首に突き付けられホールド・アップする

抱き合っているところを彼女が帰ってきて目撃してしまい、今は事情聴取をされているというわけだ

その間も黒ちゃんが俺から抱き着いて離れてくれないので彼女の怒りのボルテージがどんどん上がっていく

「娘のヴィヴィーズたちの入学式と、私たちお嫁さんの実家周りのために帰省したのにそんなことをしていたんだー」

おう、出るどころでるか？こら、と自由業を営んでいる方々が示談を提示するときのような絡みっぷりで話しかけてくる

そして、首根っこをつかまれ、彼女の部屋に連れ込まれる

あつ、死ぬってそういう死に方・・・

ナニがあつたかというと

それはそれは、俺の口から言えたものではないけど

とても天国だったとだけ言っておく

嫁さんたちにDMにしこまれちゃったよ・・・

「今だけは譲ってやろう・・・私がマーキングしてつけておいたにおいを感じながら田中くんと交わるんだな。さぞや屈辱だろう・・・くくく・・・」

▪ T o b e c o n t i n u e d

VIVID導入編3 ぱぱー、無職って何ー？

月に向かってお仕置きよ、で有名なアニメのOPのソングが流れる  
フェイトちゃんとアリシアちゃんのがのりのりでセーラームーン  
のコスプレをしていて

思わず吹き出しそうになった

似合いですぎているっていうレベルじゃない

みんなもそれぞれが似合っているアニメのコスプレしているし

後ろでスカさんが「わたしがやった。だが反省はしていない。」と書  
かれたプラカードをもって立っていた

クサマア!!とオンドウルながら怒る

そして、俺を取り囲む嫁さんたち

今、俺は黒ちゃんに抱き着かれながら、体を縛られ床に転がされて  
いる

スタンドを出してなんとかしようと考えたが、今日のスタンドがラ  
バースで絶望する

サバイバーの次に最弱なスタンドじゃねーかあ!!

DIO様はスタンドに強いも弱いもないとか言っていたけどあれ、  
絶対嘘だよな

自分のスタンドのこと3部で最強のスタンドと言っていたし、と、  
この状況で考察を始めていると、なのはちゃんがしゃがみこんで顔を  
覗き込んでくる

いや、スカートだから見える、見えるって

「見せているの」

数年前までの天使なのはちゃんはどこにいったんだ・

誰が進化させたあ!! Bボタン押してちゃんと進化キャンセルさせ  
とけよお!!

と高町家の人々が娘へ行ってきた教育について聞いたです

「おい」

はい

考え事して逃げようとしたら話し方が一変したなのはちゃんに怒

られて

おずおずと目を合わせる

「地球に来て2人も嫁さんを増やしたんだってな〜」

鞭をぱしん、ぱしんと手首のスナップを効かせて地面に打ち付けるはやてちゃん

「大丈夫．．だんだん慣れてくるよ．．」

そういうしながら黒い瞳でスタンガンをばちばちっと放電させるフエイトちゃん

そのほかの人たちもいろいろな道具を手に持っていらつしやるく、クモ美!!クモ美はどこだ!!?

後ろを振り向くと

スカさんとクモ美が餅つきをしていた

「おお!!君は腕が六本あるから餅をこねるスピードが我々人間と段違いだ!!」

よし!!餅をつくほうは僕がやろう!!」

生き生きと楽しそうにお餅ライフにいそしんでいた

クモ美いいいいいいいい!!

まさかのご主人∠目の前のもちという計算式を持ち始めたクモ美にお前女王グモの餌にすんぞごらああああああ!!

と心の中で思いつき罵倒しつつ、みんなに運ばれる

あそこをグラ子妹にきゅつとつかまれ、体が動かなくなる

「こたえろ。地球に来てから新しい嫁と なん かいした」  
目が合うと、深淵を覗いてしまい気を失う

深淵を覗いているものはまた、深淵に覗かれている、という神はしんだ!!というセリフでお馴染みのひげ哲学者を思い出しながら、くっころ、と考えていた

．．．．．

からだがだるい

ああ、こんなんで同窓会に出るとは

場所はよくスターダックスカフェとか、ナックルカフェとかの偽物がインドに出没する女神なカフェだった

幹事はなんとあの佐藤君だった

といつても男子数人で集まる気楽なものだったので、女子勢は誰もついてこずに

貞操を今日は守れるな、と思いつつみんなが集まっている場所まで出向く

ドアを開けて、名前をお店の人にいい、みんなが待っているところまで案内してもらおう

「よお、田中!!」

久しぶりだなー。そういつてくるみんな

鈴木君に、遠藤君、渡辺君に空君、陸君までいた

椅子にすわって注文をする

「今までどこにいたんだ?」

と聞かれ、ちよつと上京（異世界）していた、と返した

皆の近況を聴いてみる

佐藤君たちはみんな大学生を送っているらしい

相変わらずみんな女子からモテているだろうなー、滅びろと願っておいた

皆が元気そうでよかったよかった、と思いつつ

あることに気が付いてしまった

「どうした?」

「……………てない

「え?」

高校どころか、中学も出ていない……

最終学歴が嫁たちから逃げるためにミッドチルダに長居して、管理局をスカさんたちと一緒につぶしていたらもう、20代だった

ヴィヴィーズの親として生活を送っているのに、先生から「あなたのパパは何をやっているの?」とヴィヴィーズが聞かれたら「無職!!」ということになる

その時に先生が「う、うん・・・」みたいな感覚で困惑する未来が見える

My father is musyoku

なんて洒落にならない

体をかくかく振るわせて、周りの人たちにドン引きされながらも頭を働かせる

あつ、そうだ

.....

レジえもん、レジえもん

「ポケモンなのか、青狸なのかわからない呼び方ははやめろ」

最近自宅でもできるRizapをやってやせてかっこよくなり、管理局の女性職員からの人気がうなぎ上りなレジアスのおじさんに

会いに来ている

結果にコミットしているレジアイスさん、頼みがあるんです

「レジアスだ。なんだ？」

両手を合わせて頼み込む

職をください

ひげもじやの50代のおっちゃんにガチ同情をされた

ちなみに、練習場で刀を抜いて局員の人たちと戦っているところをレジスチルのおじさんに見せたら、「お前、St, ヒルデ魔法学院ってところの戦技教官やってみないか？」

と言われ、教師の経験なんて全くなかったので断ろうとしたら「ヴィヴィーズが一人はいるそうぞ」と聴いて二つ返事で了承してしまっ

ああ、やっぱこのおっさんスカさんと別の意味で手強いわ、

と考えつつ、二人で秘蔵の酒を飲むのであった  
T o b e c o n t i n u e d



VIVIDっていうバンドが好きだった  
一話 学校に知り合いばかりいるんですけど

みんないいかなー？

はーいと言って返してくる子供達

というかヴィヴィーがいるここと女子学院だったのね

実はデバイスというものがほしいがごまかして

バリアジャケットの代わりに新宿で買ってきた一点もののおしゃれな服をきて

ごまかしている

魔力とかないからそんなもの使えない

素の身体能力で戦う羽目になっている

おい、その不審者二人

紫髪のもち狂いとひげもじゃ、何でここにいるんだよ

と、観客席からこちらをカメラで撮っている馬鹿二人をにらみつつ  
目線で追う

反省も悪びれもしていなさそうだが今は放っておいて、担任の先生

の

話に耳を傾ける

最初は担任を持たずに非常勤講師として働くこととなった

俺と目が合ったヴィヴィーが「ぱぱ、がんばって」と口パクでいったきたので気合が入る

「じゃあ、みなさん自己紹介から始めてください」

そういわれ、つぎつぎと自己紹介を始めていく子たち

ヴィヴィーの番になる

「初めまして、ヴィヴィーと言います。夢は私の好きな人のお嫁さん  
になって幸せな家庭を営むことです」

恥ずかし気にそういうヴィヴィー。

きやーきやーと騒ぐ他の子たち

そんな話を初めて聞かされて思わずヴィヴィーの方を凝視する俺  
なんか言ってやったぜ、みたいな顔しているがわけがわからない  
あとでその男の子を家に呼んできなさい

クモ美と一緒におもてなしするから、とアイコンタクトで伝えつつ  
次の子の自己紹介を聴く

「初めまして。チンクというものだ。これからよろしく頼む。ああ、  
この眼帯は気にしないで仲良くしてくれると嬉しい。」

知り合いがいた。

あなた俺より年下だったんですか、と思いつつなんとか顔に出さな  
いようにこらえる

「初めまして。あたしはヴィータっていいいます。特技はゲートボール  
です。いろいろとまだこちらの世界に来たばかりで不慣れなので教  
えてくれると嬉しいです。」

赤いパーカーに短パンのエターナルロリータがそこに立っていた  
机のサイズが子供様なのに似合すぎて吹き出しそうになる

現実逃避するために窓の外を眺めると

知り合いが学校のいたるところにいた

なのはちゃん、フェイトちゃん、スーツなんて着てどうしたの

はやてちゃん、君、今地球にいるんじゃないの

すずかちゃん、どうしてエプロンをつけているんですか

アリサちゃん、黒塗りのリムジンにのって学校の中に入ってくるの  
はやめて

シャマルさん、なんで白衣を着て保健室に向かおうとしているんで  
すか

ナンバーズみんなが清掃用具をもっていたるところを掃除して  
いるのは幻覚かな

そのほかにも知り合いばかりを発見してしまう

頭がどうにかなりそうだったが、担任の先生の自己紹介が終わり、  
俺の番の様だ

無難に自己紹介をしつつ、波音立てずになんとかしのげたな、と思っていたら

クモ美がツボから出てきてしまった

あつ

きしやあああああああ!!!

「きやあああああああああ!!!」

.....

あのあと、先生方から説教をされ、懲戒免職されかけた

担任の先生と、ヴィヴィー、チンクちゃん、ヴィータちゃんがとりなしてくれなかったら

初日で首になるところだった

嫁さんたちには働かなくてもいいのに、と言われたが絞り殺される未来を回避するために仕事をもって職場で落ち着こうとしていたら、学校中に嫁さんたちが先回りしていて詰んだ

レジアスのおっさんにはめられたことに今更気づきながらも、今日の授業と仕事がすべて終わったので、すっかり自分の家になってしまった聖王のゆりかごまで戻る  
すると

目の前に淡い緑色の髪を持ったツインテールの子供が現れた

無視して横を通り過ぎると

後ろから顔の真横をこぶしが通り過ぎる

え

「そのあなた、私と戦ってくれませんか」

体中に戦意を漲らせファイティングポーズをとる子供

見たところまだまだちっこい少女のようだが

なんで？

「あなたはなかなかできそうな人だからです」

バリアジャケットを身にまとい、力をためている

まずい、マジでやる気が

そう思い、後ろを振り返って彼女の真正面に立ち、懐からあるものを取りそうと探る

それを警戒して相手が体をこわばらせると

俺の体が後ろの空に向かってバツクする

いきなりの意味不明の挙動にビクウツとなる子供

そのまま家の屋根までつき、また別の建物まで移動し、あつという間に

消える

後に残されたのは、やる気満々だったのにみすみすと目の前の獲物に逃げられ、

力を込めたこぶしを振り下ろす相手がいなくて悔しがる少女だけだった

.....

何をやったのかは簡単

彼女の方を向く前に、クモ美が入っているツボをそつと取り出す

片手を後ろに回してクモ美のツボを少女に見えないように背中を持ちつつ

糸を周りの建物に向かって吐き出させる

近くの建物なら糸を吐いているのも見えにくく、今は夜で目も効きにくい

そのまま彼女の方を向きながらバツクで周りの家まで移り、

また別の民家まで移動するのを繰り返した

何が起きたかわからずあつけにとられていくうちに逃げ切ったというわけだ

ああ、怖かった

聖王化したヴィヴィーみたいな威圧感がにじみ出ていたからな  
クモ美に特製のクツキーをご褒美としてあげつつ  
おうちまで帰った

レジスチルのおっさんと、その日狂いのスカリエツティには  
削除したら増える呪いのメールを送っておいた

T o b e c o n t i n u e d

二話 この子の強さは少年兵ってレベルじゃねーぞ  
!!

先日の不審者が襲ってきた事件から数日が経った

スカさんがヴィーターちゃん手持っていたハンマーの武器で餅を作っていて、ヴィーターちゃんにばれてぼっこぼこにされていたという朝の風景を眺めつつ、落ち着いてコーヒーを飲む

そして、出勤。

嫁さんたちは一緒に出勤することを望んでいたようだが、恥ずかしいんで勘弁してください、と断っておき、ハグとキスで許してもらった

職場についたら、まず今日一日のスケジュールの確認をとる

幸い、主に格闘関係の授業のアシスタントを行っているのでむづかしい授業を子どもたちに教える必要もなくほっとする

そうして、修練場に向かい、設備の点検を行う。

子供たちが使うからきつちりと悪いところがないのか確認しておかなければならない。

後ろからとんとん、と肩をたたかれ、振り向くと誰かがとびかかってきた

おお、ヴィヴィーじゃないか

彼女は俺より早く家を出たのだが、朝練にでも来たのだろうか

ニコニコと微笑みながらこちらを見てくる

「パパ、おはよう」

うん、おはよう

「お仕事大変だねー」

いやあ、ヴィヴィーのためならそうでもないさ

親ばかを軽く発症しつつ、そう返す

彼女に聴いておかなければならないことが今できた

ところでヴィヴィー

「なあに？」

うしろの子はお友達かい？

後ろにはヴィヴィーと同じくらい年齢の子供がいた  
それだけならなんの問題もないだろう

ただし

先日俺を襲った人物らしき点を除けばだが

こぶしを握り締めてこちらをにらんできている

あつ、ばれてーら

「・・・こんにちは、ヴィヴィーのお父様。先日ぶりですね。私の名前はアインハルト・ストラトスと申します。」

すつと手を差し出してきて握手を求めてくる子供

それに応じる

一見普通に握手しているだけのように見えるが、実際にはものすごい力で彼女が握ってきて手が痛んでくる

この細腕のどこにそんなパワーがあるんだ、と思いつつも何とか耐える

「パパ、アインハルトさんと知り合いだったのー？」

彼女に襲われました、とはさすがに言えないのでお茶を濁しておく  
納得はしていないようだが、とりあえずごまかすことはできたよう  
だ

「アインハルトさんってとつても強いんだよー!!本当にびっくりする  
くらい!!」

嬉しそうに断言するヴィヴィー

その言葉を聞いて先日逃げておいて正解だったと思いつつも、次の  
一言で体が固まる

「そうだ!!ぱば、彼女の相手してあげてよ!!ぱばもかなり強いんだか  
らアインハルトさんもいい練習になると思う」

その言葉を聞いたアインハルトさんがスツ・・・と目を細め、だつ  
たらなんで先日逃げたねん、と言わんばかりの目つきで抗議してきた  
いや、だって、子供相手にさすがに戦えんし・・・

あれよあれよ、という間に決戦の舞台に上がる俺と彼女

それっぽい服に着替えてバリア・ジャケットに着替えたように見せかけて宝刀を両手に持つ、

彼女は、前に会った時と同じ格好をしていた  
威圧感は比にならないほど増しているが

やらなければ最悪病院送りにされるかもしれないので、腹をくくる  
審判を務めることになったヴィヴィーが腕を上げる

「時間制限は10分!!どちらかが気絶するか降参したら勝負ありね。  
はじめ!!」

そういつて、上げていた腕をヴィヴィーが下ろすと

一直線に突っ込んでくる彼女

かなり早く、もう腕を引き絞って拳を放つ体制をとっている

一手遅れて体制を立て直し、紙一重でよける

ナンバーズのトーレに匹敵するパワーと、ノーヴえちゃんのテクニ  
カルな強さ

その両方を持っている厄介な相手だというのがわかった

なんでもやってくる

腕をこちらに向けて振り下ろし、こちらがよけたとしても地面を揺  
らして足止めしてくる

そのすきを見逃さず、最速で打てるジャブで襲い掛かってくる

距離が離れれば、すぐにダッシュで近寄ってきて、刀のリーチをな  
くしにかかってくる

武器をもった相手との経験が豊富であることがその立ち回りから  
うかがえる

左手に握っていた刀を相手に向かって放り投げる

それを拳ではじいて難なく対処するアインハルトさん

仕込んでいた仕組みで刀をはじくときにばちいつ、とスタンガンの



ように放電させるがダメージはなく、一瞬しびれさせられたぐらいの様だ

右手に持っていたもう一本の刀で切りかかるがそれもよけられ、ポデーブローが放たれる

ぐふうつ、と体をくの字に曲げて吹っ飛んでいく

受け身をとって最小限のダメージで済ませるが、あばらが二本ほどお亡くなりになられて

構えがぎこちなくなる

そのすきを逃さずにもう一度突貫して来ようとする

彼女の背中に何かが突っ込んできてぶつかる

がはっ、と息を吐いて混乱する彼女

その背中にはさつき投げた宝刀の柄がぶつかっていた  
なぜ？どうして？という顔をして混乱している

簡単なことだ

さつき彼女が俺の刀をはじいたときに放電を食らったのは、刀にスタンガンを仕込んでおいたからではなく、スタンドをしこんでおいたからだ

その名はバステト神。物体に設置しておいて、それに触れたものを磁石に変えてしまう代物。刀の柄が彼女に向かって当たったのは、柄の方に鉄が使われているからだ。

不意打気味に食らわせることはできたが、刀をつかまれ、地面に抜けないぐらいおもつき

りつきさされてしまう

どうやら、回収するのは難しそうだ

あれほど深く突き刺せられたらバステト神の能力でも引き寄せることはかなわないだろう。

右手のもう一本の刀を構えて今度はこちらから襲い掛かる

袈裟切りを相手の胴体に向けて繰り出す、難なくよけられしまう

あいてがこちらにカウンターを浴びせようとした瞬間  
吹き飛ぶ

わけがわからずにふつとんでいく彼女  
俺の左腕には刀の鞘が握られていた

前に黒ちゃんにやられて、二段抜刀だ

右の刀で切りかかり、よけられたら左手に鞘を持ち、居合の要領で  
切り付ける

もちろん、見様見真似の技など大した速さも威力もない  
しかし、今彼女はバステト神の効果で磁石となっている

真剣を収めるこの鞘は鉄分が含まれており、彼女に向かって自動で  
引き寄せられるので

それにあわせて振ればいいだけだった  
空を飛んで体制を立て直す彼女

7メートルも上に飛ばれてしまい、普通ならバリアジャケットを  
もっていない俺の負けがほぼ確定する

しかし、神様があるプレゼントをくれたおかげで空への道ができた  
高く跳躍し、彼女の元まで高く飛んでいく

目を白黒させる彼女

さきほど彼女が地面に突き刺した刀を踏み台にしてここまで飛ん  
できた

ご丁寧にちよつとやそつとじゃ抜けないように、地面に突き刺さつ  
ていたから強く踏んでも問題はなかった

強くけつて踏んだから抜けて倒れてしまったが  
高町家に教わった奥義を放つために構えをとる

彼女も一撃必殺の技を繰り出すために力をためているようだ  
そうして、決着の時が訪れた

To be continued

### 三話 マジレスよくない

負けちゃった

いや、おたがいの必殺技出して、勝負だ!!と思っていたら後ろからさつき俺が高く飛び上がるためにけった刀が後頭部にぶつかってきて、

よろけていたら前からアインハルトさんの痛烈なこぶしをもらにくらって、そのまま気を失ってしまったようだ

アインハルトさんと刀の間にいたから俺にあたっちゃたんだろうなあ

拳を引っ込めようとしていたぐらいには彼女も動揺していたみたいだし

ヴィヴィーが聖王化して、俺をうけとめたから大したげにもならなかったようで

ほっとした

もし、何か重大な怪我でもしてたらスカさん印の回復餅を食わされ体が一日中ビンビンになるところだった

ヴィヴィーにはお礼として放課後一緒に買い物に付き合うことにした

アインハルトさんは謝っていたけど、勝負は負けた方が悪い  
気にしなくてもいい、と言っておいたら納得したみたい

戦闘狂の気を彼女から感じつつも職員室に向かい、次の授業の準備を始める

すずかちゃん、君が昨日エプロンを着て学校に来ていたのは家庭科の先生として招かれたからなんだね

だからみんなにばれないようにこちらの体をまさぐるのはやめて  
今、10分だけ二人っきりの時間をとるから、と約束して二人つきり  
りで空き教室にこもった

ナニがあつたのかは内緒

.....

亜鉛サプリを飲みつつ、修練場の整備を行う  
さっさきの戦いでだいぶやらかしたからもう一度点検しておく

幸い異常はないみたいでホッとした

今ごろチンクちゃんやヴィヴィー、ヴィータちゃんは教室で授業を受けているはずだ

ちよつと自分も授業を見てみたいなーと思ったので、スカさん特製のステルスガジェットを取り出して、起動させる

教室まで向かわせて、モニターでみんなの様子をしてみる

おー、やっているやっている

今はチンクちゃんが答えているようだ

教科は地球でいう道徳だ

「じゃあ、チンクさん、もし二人のうちどちらかしか助けられなかったらどちらを助けますか？」

「場合によつては両方切り捨てます」

ばつさりととんでもないことを言っていた

「そもそも、この二人を救う価値があるのかどうか重要であつて、ない場合は片方を助けられたとしても、助けずに見捨てます」

ほら、担任の先生がフオローに困っているよ

「へ、へー」みたいな感じで心の距離を取り始めているし

「じゃ、じゃあヴィヴィーさん答えてみてください」

おつ、ヴィヴィーだつたらまともな答えを・・・

「両方の人間にオークションをかけます」

・・・うん？

「より多くのお金を支払った方を助けよう。そういつて値段を釣り上げていき、最終的に落札した方を助けます」

ちよつと何言っているのかわからない

「ああ、手形とかは信用できないので、できれば住所を控えられる免許証、健康保険証のカードあたりを担保にださせて確実にお金が入るよ

うにします。」

あの純粋なヴィヴィーがどうしてこんなことになってしまったんだ

謀略を教えていたレジなんとか絶対ゆるさねえ・・・!!

とひげ親父に殺意を抱きながら、涙目でモニターを見ていたらいつの間にか周りに集まっていたナンバーズの子たちに慰められた

クアットロちゃんはチンクちゃんの回答を聴いて爆笑していたけど

・・・

放課後

さよーならー、と言ってくる子供たちに、はいさようなら、と返しつつヴィヴィーを待つ

するとヴィヴィーが向かってくるのが見えた

「おーい!!」

と喋ってぶんぶんと手を振ってくる

ああ、癒されるうくとほんわかとしながら走って向かってくる彼女を抱きとめる

お日様みたいでいい匂いがするなあ

「帰りにショッピング行こう!!」

はいはい、と言いつつも一緒に手をつないでお店がある区域まで向かう

その後ろ姿をとある女の子が眺めていたなんて知らずに

・・・

夕飯前だから軽いスイーツと一緒に食べることにした

黒ちゃん、なんで支店をだしているの、とソフトクリームを笑顔で渡してきた

彼女をスルーしつつ近くの公園のベンチで一緒に座って食べる

どこかで見たとのことのあるザッファイと呼ばれている大型犬が、子供

たちと一緒に遊んでい

る場面を見ながら仲良く食べていた

犬の姿のまままでブランコを漕いでいる姿ってシュールだな、と思いつつ、アイスが口元について汚れているヴィヴィーをティッシュで拭いてやる

ああ、これだよこれ。もつと家庭って穏やかでほんわかとした空気のはずだよ

いつも肉食獣とプロレスする羽目になっているからこうした空間で安らげるのは非常にありがたい

そういえばヴィヴィーに聴きたいことがあったんだった

なあ、ヴィヴィー、もうすぐで格闘技の大会があるっていうのは本当かい？

「うん!!それにしようと思ってるんだ!!」

なんでも次元世界では一定の年齢以下の子供だけが出ることのできる格闘技の大会があるとか

ヴィヴィーだけでなく、チンクちゃんやヴィータちゃんも出るのかな?と思いつつ

一緒にアイスを食べていると

後ろから攻撃をされた

それを瞬間的に聖王化して受けとめてくれるヴィヴィー

あつ、あつぶねええ……

後ろを見るとアインハルトさんがこちらに向けてこぶしを突き出してきているのが見える

なんで彼女が？

「田中さん、もう一度私と戦ってください」

「は?ぱぱとの憩いの時間を邪魔しておいて戦え?バカも休み休み言った方がいいよ」

そういつて黒いオーラをまとうヴィヴィー

アインハルトさんも戦闘モードだ

ちよつ、ザツファイー!!!子供たちをまもれえええええ!!

俺が子供たちと一緒に遊んでいたザツファイーにそう叫ぶと、ザツファイーが子供たちの前にでて守りの体制をとる

二人のこぶしとこぶしをぶつかると

衝撃波があたりを吹き飛ばす

当然、その近くにいた俺も例にもれずスカイ・ハイしていた高く吹き飛ばされながら、二人とも後で説教だ、と思いつつ地面に落下するのであった

T o b e c o n t i n u e d

## 四話 この田中!!容赦せん!!!

あのあと二人が喧嘩を思いっきりしていたので、ナンバーズや知り合いの武闘派の人々を呼び、いさめてもらった

もし、今後もこのようなマネをしたら退学だと、学校の責任者が出てくる事態に

それに気をよくしたヴィヴィーと、頭に来ました、と思ってそうなる私不服です、という顔をしているアインハルトさん

もうこれあれだな、俺とちゃんと戦って負けないとあきらめてくれないな

そう考えある提案をする

一か月後にガチで彼女とタイマンをすることになった

彼女は強い。実際に戦ってみてそれが身に染みた。だからこちらも期限を先に設定して修行できるようにした。

さて、対価に何を要求されるのかわからないけど、ナンバーズやヴォルケンリッターのみんなに頼むでしょう

嫁さんたちがお弁当作って応援に来そうだから内緒にして、スカさんとレジアスのおじさんにこっそりと決闘の場所を用意してもらおうか

.....

ぱぱと一緒に買い物に行っていたらアインハルトさんが強襲してきて、喧嘩になっちゃった

ままだぱぱにも怒られたし、学校の先生たちにも叱られちゃった  
さすがに市街地での戦闘はまずかったか

でも、ぱぱが彼女と一対一で戦うという提案を他のみんなに内緒でしたことを聞かされたときびっくりした

彼女がまだ不満を抱えていることを見抜いていたらしい  
さすがぱぱ

私が相手してぶっ飛ばしてもいいんだけどアインハルトさんはパ



パと戦いたいらしいから譲ってあげることにした

それにばばに勝てるわけないし

私たちの将来の旦那さんになるんだからこれくらい勝てて当たり前だもん

ナンバーズやヴォルケンリッターのみんなとトレーニングしているパパを見ながら

他の世界の学校に行っているヴィヴィーズたちにその映像を送る

決闘まであと15日間

.....

と、思うじゃん？

実はもう当日でした

彼女もすでにやってきている

ヴィヴィーとスカさんとレジアスのおじさんぐらいしかこの場所を知らないのに誰にもじやまをされずに戦える

さて、こちらにも鍛えに鍛えたけど向こうも段違いの強さになっているようだ

今日のスタンドもこれまたマイナー

しかし、勝機は十二分にある

「逃げずに来てくださり誠にありがとうございます」

こちらの姿をみて、ペこり、と一礼する彼女

「本来ならあなたが受ける必要の全くない勝負。それを受けていただいたことには感謝の言葉もありません」

淡々と熱のこもった言葉を述べてくる

「そして、今の私のコンディションは最高潮です。そんな風にこちらのことを考えてこの決戦の舞台を用意していただいたことに対して報いることができるくらいには」

彼女が戦闘態勢を取ったのを見てゆっくりと刀を抜く

「では、死合いましょう」

文字が違うような気がしたが気にせず構える  
一天二刀流

あの古の剣豪の物まねだ  
気迫ぐらいは似せることはできただろうか

今回は相手の攻撃を待たずにこちらから向かう  
空を飛ばれる前に地上に釘付けにして一気に片を付ける

飛ばれたら俺の負けだ

それを見て迎撃の体制をとる彼女

あつ、やばい、これは

彼女が何かをつぶやくと

拳から轟音をうならせその必殺技を打ち出す

「霸王断空拳」

刀で受け流して威力を殺そうとするが殺しきれず、体をかすめてしま  
まう

うがっ・・・

右肩をえぐられ、右腕がだらりと下がる

血がぶしゅああつと吹き出て彼女の顔にかかる

動かない

どうやら使い物にならなくなってしまったようだ

「勝負ありですね」

勝ち誇った顔をしてそう告げる

返す刀で、もう一発撃ってきた

からぶる

「・・・??」

なぜ?といった顔で困惑する彼女

俺が全く動いていないのにどんどん距離が離れていくのが不思議  
なのだろう

どんどん距離が空いていく

じたばたともがくがもう遅い

ジャンピング・ジャックフラッシュ

自分の体液がかかったものを無重力にすることができ  
接近戦しか勝ち目のない彼女にはもう手も足も出せない  
しかし、彼女はこちらの斜め上を行っていた

自分の体を頭を下の方に向けると

脚から魔力を放出してジェット噴射の要領で地面まで戻ってきた  
ミサイルが着弾した時のような大きな音とともに着地する彼女  
土煙がひどくて何も見えない

決着をつけるためにある秘策を持ち出す

.....

こんなに楽しい戦いは久しぶりだった

自分の勝ちを確信しながら、拳を握り締めて警戒する

足を地面に食い込ませ無重力でも浮かさないようにしておいてある  
どうやら相手の能力らしい

砂煙が舞っているが関係ない

地面に強く拳をたたきつけて衝撃波を発生させる

あたりの視界が晴れて、相手の姿を探していると見つけた

右腕がボロボロで使えないから、左腕で持っているようだ

こちらは地面に足が埋まっているとはいえ両腕が使える

刀を左腕に持ちながら突っ込んでくる彼に対してこぶしを振りぬ  
く

躲かれる

彼が刀で襲い掛かってくるが上半身をくねらせ躲し、彼に対して

右腕の正拳突きを放つ

彼の左腕での攻撃はよけた

勝った!!

しかし、私の拳は彼に届かなかった

彼の右わき腹からもう一本腕が生えており、その腕が刀をもって切  
りかかってきた

喉元を狙われ呼吸が苦しくなる

構えが揺らぎ、正拳が彼の顔をかすめる

そして、彼が左腕に握っていた刀で体を斬られる

消えゆく意識のなかで彼の顔に向けて手を伸ばした

・・・ああ、この人こそ私が探していた最良のパートナーだ・・・

そう確信を抱きながら、笑みを浮かべて失神する

■  
T o b e c o n t i n u e d

五話 ああ、やめてえ．．．俺をベッドまで引きずり  
込まないでえ．．．（寝言）

「．．．ん．．．」

どうやら寝てしまっていたようだ

私はさっきまであの人と．．．

周りを見渡す

どうやら私の知らない場所の様だ

すると、ドアが開いて、金髪のショートカットの女性が出てきた

「あら、よかったわー、元気になったのねー」

そういつて微笑んでくる

誰だろう

「ああ、自己紹介がまだだったわね。私の名前はシャマル。あの人が  
「ヤバイ!!殺しちやっただかもしれない!!助けてクレイジーダイヤモンド  
ドのおねーさん!!」ていつてあなたを担いできたときにはびっくりし  
たけどね．．．」

あとで対価に何をもらおうかしら、とつぶやきながら黒い笑みでに  
こやかに笑っている

あ、私

負けたんだ

ぎゅつとベッドのシーツを握りしめる手に力がこもる

顔を俯かせて、あの人との戦いのひと時を思い出す

全力を出して戦った。本気をもって迎え撃った。

でも、負けた

負けたんだ

涙が頬を伝い、見られないよう慌てて隠す

それを察してくれたお姉さんが退室して、私一人だけが部屋に取り  
残される

．．．．．

「田中くん?」

はい

今、俺はみんなに囲まれてお説教されています

そんな時でもマイペースな娘たちはべたべたとくつついてきてくれるけども、こんな時にはそれさえもありがたい

子供相手に大人げないのではないかというのが彼女たちの言い分だ

「ちよつとやりすぎちゃうん?」

「ヴィヴィーと同じ年齢の子供相手にあれはねえ・・・」

さすがにその言葉を聞き流せずに反論する

彼女は俺と本気の戦いを望んでいた。それに対して手心だの、手加減などしていたら俺は自分を恥じて二度と彼女の前に姿を表さなかつただろう。そうでもしなければ彼女の欲求不満は何一つ解決されなかつた。

やはり、女性陣にはあまりわかっていなようだ。これは当事者に行きわたることのできない理屈ではない感情なのだから無理もない。

ヴィヴィーや、小さいながらも戦士を自負しているチンクちゃんやヴィータちゃんは賛成してくれているが

それでも納得していないのなら、彼女の様子を見てみて、もし、浮かない顔をしていたら俺がどうとでも責任を取ろう。

そう断言した

アリサちゃん、今シリアスな話しているから俺の膝を使って膝枕するのちよつとやめない?

.....

ひとしきり部屋で泣いて、すつきりしたので、ベッドから立ち上がり部屋を出ようとしたら、ドアをノックされる

どうぞ、と告げるとあの人が入ってくる

体の具合はどう?

「大丈夫です。あなたこそ大丈夫ですか?右肩は・・・」

優秀なドクターがうちには二人いるからモーマンタイぶんぶんと肩を振り回してアピールしてくる彼

戦いの中で見せていた修羅の顔つきはどこにも見受けられなかった

で、本気で戦ってみてどうだった？

「・・・負けて悔しいです。正直、今でもやりきれないと感じています」  
うん、うん、と頷く彼

「でも、もう一度戦いたい、と思えるくらいに吹っ切れもしています。  
ここまでやり切って負けたのは生まれて初めてでしたから。」

それが真剣勝負の味さ。俺も昔のことだけど、元上司の人に殺されかけたときは完敗で嫁さんたちに助けてもらわなかったら死んでい  
たから。

懐かしそうにそういう彼

君がもし、また戦いというのなら、こちらの都合が許す限りは協力  
しよう

俺ももつと腕を磨いておくから

じゃないとヲっちゃんたちに再開した時に夫婦げんかどころか一  
方的にやられて監禁ENDになるからな・・・と死んだ魚のような目  
でつぶやく彼

私は少し気になったので聞いてみた

「あの、あなたは どうしてそこまで戦いなれているのですか？見たと  
ころ魔力も持っているわけでもないのに・・・」

嫁さんといちゃつくため

そう聞かされ、顔が熱くなる

はっはっはっは!!ごめんごめん、子供にはまだ早かったか!!耳年増  
だなー

子供扱いされてムツとする

・・・・・・君もいつかわかる。自分の命を賭けてでも守りたい  
と思えるものに出会ったときに、その意味を知ることになる

急にまじめな顔になってそういう彼にどきつとする

自信を持てずにいた俺を愛してくれた人がいたから、その人たちと  
自分のために戦うのさ。

まあ、まずは同じ年代のチンクちゃんやヴィータちゃん、うちの

ヴィヴィーと戦ってみるといい。いい娘達ばかりだからきつと仲良くなれる

そういつてドアの方まで歩いていき、ぴたつと立ち止まる

ああ、そうそう、あとでヴィヴィーに案内させるから食堂まで来て手のひらをひらひらと振っては部屋を出ていく

ああ、あの背中をあきらめていない人の背中だ

どんなに戦いが続いてもおれない刀のようなものだ

気分が高揚としてきて、体中からエネルギーがみなぎる

気分は最高だ

強い雄というのはいいものだ

あれがほしい

既に他の雌が寄ってきているようだが問題ない

戦って私が勝ったら彼のことをいたただくでしょう

まずは、体を癒す

そのためにベッドの中に戻り、再び寝なおすのであった

■  
T o b e c o n t i n u e d



六話 それいけ！スカさん！

わかいつて何だろう

「残弾数が多いことだよ」

こちらをむさぼりながらそういつてくるのはちゃん  
もうちよつと手心加えてくれない？

「全力全壊がモットーだし・・・」

んなモットー聞いたことない

と言つてもむさぼられる

「がんばれ♡がんばれ♡」

な、何をするだあーーーーー!!!

ぬわーーーーー!!とパパスのような悲鳴を上げながらプ  
ロレスに耐えるのであった

あ、俺もうパパスだったわ

.....

「えっ、餅を売るビジネスを始めたい？」

昨夜の激しい運動による筋肉痛を引きずりながらそういう

「そうだよ!!僕はお餅に関してなぜか情熱がある!!そのことばかり  
考えるくらいにはね!!」

懐かしいなー。

俺も昔起業した時に最初は売り上げがゼロで困っていたっけなー

遠くを見つめながらスカさんの熱き思いに耳を傾ける

「それでだね、私は開発者だがどうやったら売れるのかわからない  
!!なので君の力をかりたい!!」

それはいいんだけどさ・・・この船大丈夫なん？

「もう自動操縦で数百年後まで稼働し続けるようになってるよ」

スカえもんの相変わらざるの開発チートっぷりに驚愕しながらも話  
を続ける

「やるのはとめないけどさー。一つきいていい？」

「なんだい？」

「どんな人に向けて売りたいの？」

「そりゃ、同じくもちがだいすきな・・・」

「ストップ、抽象的なことを聞いているんじゃないやなくて、実際にお試しで売ってみてお客さんから感想聴いた？まず限られた資金と時間を使ってやってみて、撤退のラインを決めておくのは必須だよ。」

「せっかく作ったお餅が売れないなんていやでしょ？」

「むむむ」

「何がむむむだ!!とネタに走りそうになったが抑えて言葉を紡ぐ」

「まず、今作つてあるのをこの世界のどこでもいいから許可もらつて売ってみな。それからまた相談に乗つてあげるから。まず動きなよ。」

「紙にアドバイスを一通り書いて渡す」

「わかつた!!じゃあ、いつてきまーす!!」

「そういつてどこかに行つてしまうスカさん」

「ああゆう言われたことをすぐに実行するタイプは周りの人から応援されやすいだろうな、と考えつつ修練場に降り立つ」

「中ではおっぱい騎士のシグナムとドゥーエちゃんが戦っているよ。うだ。」

「接近戦ではシグナムが圧倒しているが、姿を消したり奇襲したりするのはドゥーエちゃんの方が上手の様だ」

「結局地力の差でシグナムが勝つた」

「なかなかやるな。あと何回か戦つたらもう互角ぐらいまで行くだろう」

「あなた本当に強いわね・・・」

「ひとしきり戦つてお互いの力を認めたから仲良くなれたようだ、よかったよかった。」

「そのまま二人の元までスポーツドリンクとタオルをもって向かう」

「はい、どうぞ」

「へ？ああ、ありが・・・と・・・」

「む？すまん・・・な・・・」

こういつたときのパターンはよく知っているから離れておく  
その方が彼女たちのためだし

(あああああああ!! 私汗臭くない??! 大丈夫かしら?! シャワー!! シャ  
ワー浴びなきや!!)

(恥ずかしい……。汗で服が透けている……。す、すぐに着替えな  
ければ……)

顔を真っ赤にして出ていく二人

気が付かないふりをしておいたから被害はなかった

さて、じゃあやろうか風さん

そういうと修練場にもう一つの人影が降り立つ

「ああ、本気でやっていいんだな？」

シユラ、と腰に携えている秘剣と黒い盾を取り出してそういう

いつも剣を打ち合っている時とは比べ物にならないほどの闘気だ

ああ、やつと風さんに盾を使わせることができるようになったし

「へっ、俺にあんだけほこぼこにされて毎回戦いを挑んでくるお前は  
奇特な奴だよ……。で、そんなに強いのか? そいつ」

正直、次やったら勝てるかわからない

だから彼女より強い風さんと戦って鍛えておきたい

これは風さんだけにしか頼めないことだから

「人を乗せるのが上手い奴だ」

にやり、と笑いながら構える風さん

俺も彼からもらった宝刀を抜いて二刀流に構える

あつ、そうだ。これだけは言っておかないと

風さん

「なんだ?」

後で俺のドーピングコンソメスープで鍛え上げたキンオ二と虫相  
撲で勝負ね

そういうと顔を引きつらせていた

勝てばいいのだああー！ー！ー！ー！！

剣の勝負は負けた

虫相撲は、あのザリガニと相撃ちまで持ち込めた

こんだけやって互角かよ・・・

スカさんが、自分の作った餅をどこかに売りこみに行ってから数日後

今日はヴィヴィーのお友達を紹介される

コロナちゃんにリオちゃんという娘たちを家に呼んできた

二人とも最近の子にしては珍しくよくできた子たちだった。

俺に息子ができたらあんな子たちを彼女にするように教育しておこう

・・・幸い、病みそうにないし

小学生のころのてんすだった嫁さんたちのことを思い出しながら、月見団子を食べていた

一口の中に団子餅を入れるごとに、スカさんは今、どうなっているのかを夢想した。

まあ、十中八九最初はうまくいかないだろうけど。

資金がなくても事業を立ち上げる方法をコーチングで学ばせるか。

そう思案していると、ドアがノックされる。

はい

「私だよー」

声からするにヴィヴィーのようだ

はいっていいよーと答える

おじやましまーす、と言って入ってくるヴィヴィー・・・とその同級生さんたち

ちよ

「すみません、おじやましまーす」

「お、おじやましまーす・・・」

てつきりヴィヴィーの部屋で三人きりで遊ぶと思っていたのに。

「いやー。パパの話しているうちにお話ししてみたいなー、って二人が言うものだから部屋まで連れてきちゃった」

てへぺろしていて、ちよつとかわいかったからスカさんの置き土産

の月見団子をヴィヴィーの口に突っ込む  
「あむあむ」とおいしそうに食べている。

後ろのいる二人にも分けてあげた  
どうやらお気に召しようだ。

「あ、そういえばぱぱ。ちよつと聞きたいんだけどー」  
どうした？ヴィヴィー

餅を咀嚼しながらそう聞く

「ジークリンデ・エレミヤさんって知ってる？」

その言葉を聴いた瞬間、餅が喉に詰まりそうになる

「だ、大丈夫ですか?!」

せ、背中たたいてくれ・・・

三人に頼んで背中をたたいてもらい、詰まっていた餅を吐き出した。

あー、呼吸困難で窒息するかと思った

「もしかして知り合い？」

あんま思い出したくない。

真顔でそういうと、あまり追求せずに会話を打ち切ってくれた

「じゃあ、こっちの方を聴こうかなー」

そういつて質問を続けるヴィヴィー。一体何を言う気だ、と警戒してしまふ。

「――学校の生徒たちからいくつプレゼントをもらったの？」

その後、ヴィヴィーに「わいろ」を渡して事なきを得た。

なんでしってるの・・・？

To be continued

## 七話 関西弁キャラに狙われているような気がする。

ある夕暮れの、たそがれ時の何の変哲もない町。

人々が行きかうその街並みにその少女はいた。

黒髪のツインテールのまだ12、13程度の小柄な少女。

その名はジーク・リンデエミリア

その名を知るものからは畏怖のまなざしをもってその名がかたられる猛者である。

彼女は原作の世界では次元世界での格闘部門インターミドル優勝という経歴を誇っていた。しかし、このお話しでの彼女はいささか違った道を歩いていた。

偶然出会って殺しあつた一人の男をずっとずっとずっと追いついていくからだ。

今も旅を続けて、自分が狙っている相手のことを町の人たちから聞き込みをし続けて、その手掛かりを追っている。

この街にも手掛かりはなかった。

そう考え、踵を返して立ち去ろうとしたところで、とある店の看板が目に入る。

餅、というスイーツを売っているという。

試食販売をやっているのも、もし気に入らなかつたらお代はいらないという。

おもしろそうだとエミリアは思い、一つもらうことにする。

店の人は紫髪の中肉中背の男性が出てきて、いろいろな説明をしてくれた。

醤油味、バター醤油味、あんこ味、様々な味を取り揃えているという。

一つおすすめのきな粉餅を頼んで食べてみる。

喉に詰まらないようによく噛んで飲み込んだ方がいいと注意を受けたので、かみちぎって口の中で少しずつ食べていく。

独特の触感と、モチモチとした伸びのある食べごたえのあるお菓子だった。

結構おいしい、と思つてはむはむ食べていると、のどに詰まつてしまふ。

アカン、死ぬう、とぶるぶると体を震わせていると横からお茶を差し出される。

誰がくれたのかは知らないが、それを受け取つて必死に流し込むエミリア。

公共の場でリバーズするという醜態を避けられて安堵し、お茶をくれたであろう定員さんに感謝の言葉を述べる。

「いやー。あんがとなあ。お兄さん。」

そういつて紫髪の男性にお礼を述べる。

「いやいや。その商品を開発したものとしてはいい食いつぶりだったからうれしくつてね。そのお茶はサービスさ。」

こちらがお餅を食べているのを嬉しそうに見ながらそういう男性。

よほどお餅と、お餅が好きな人が気に入っているようだ。

「うちの名前はエミリアつていうんよ。」

「僕の名前はアジル。ここで小さなお店を開いて餅をお試して売っているものさ。」

アジルと名乗った男がエミリアに質問をする。

「見たところ旅をしているような格好だけでも、どこかに行くところかい?。」

「どこかつていうか、まあ誰かのもとつていうか。」

頭をぽりぽりと掻きながら恥ずかしそうにそういうエミリア。

夕日の色に照らされて、表情が柔和なものになっている。

「探し人かい?どんな人を探してるんだい?。」

好奇心からそう尋ねるアジフと名乗る男。

あまり期待せずに捜している男の特徴を伝える。

「年齢は20代程度。背はあんたの同じくらい。なんかきらびやかな刀を持っていて、変な能力を使っている人や。」

それらの情報を聴いて、アジルがんとある考えに至る。

その特徴って

あつ、そうだった、と思い出した情報をエミリアが続けて伝える

「———なんか人と同じくらいの大きさのクモを飼っていたわ」

.....

あの戦いからもう数か月がたつ。

アインちゃんとは何度も戦っていたが、風さんやほかのみんななどの特訓のおかげでなんとか勝ち続けることができています。

しかし、戦うたびに成長を遂げる彼女にたいして少々焦りを感じてきた。

こちらの肉体的な全盛期は今で、彼女はまだまだこれからだ。体が出来上がったならそれこそこちらの勝ち目はほぼなくなってくるだろう。

嬉しくもあるし、悲しくもある。

こちらの肉体年齢はお餅を売りに出ていく前にスカさんから渡された薬で固定化させることはできているが、もう成長もしない。

嫁さんたちもある意味不老になってしまったので一生夜の生活が続くことになった。

ありがとう、でも帰ったら一発殴らせてくれ、スカさん、とこぶしを握り締めて

今後大成功するであろう、スカさんのお餅ビジネスの計画を練る。

スカさんからFAXで送られてくるターゲットとなるお客さんと、競合相手、商品の情報を読みながらデータをまとめていると、ドアが



ノックされる。

データ入力をしながらどうぞ、と告げる。

中に入ってきたのははやてちゃんだった。

珍しい。

基本彼女はヴォルケンリッターと一緒に遊びに来ることが多い娘だ。

一人でやってくるとは何かあったのだろうか、と考えつつ仕事の手を止めて彼女に向き合う。

どうしたの？

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何も言わずにこちらが座っている椅子の上に乗っかってくる。

いつも飄々としてくる彼女は二人つきりになるとこうして甘えてくることが多い。

・・・・・・・・・・アリサちゃんとかは人前でも甘えてくるけど。

「・・・・・・・・最近、2人っきりの時間がないから寂しかった・・・・・・・・」

その言葉を受けてあー、と納得する。

スカさんに頼まれて事業を軌道に乗せるために働きづくめだったからなあ。

それを理由に家庭をないがしろにするのはいただけない。

はやてちゃんの肩に両手をおいて、顔と顔と合わせて見つめあう。

目が心なしかうるんでいて、彼女の心情を物語っているようだ。

お互いに目を閉じて、顔を近づけあう。

相手の首に手をまわし、唇を重ねあう。

そのまま数分そうしていて、もういいかな、と思つて離そうとしたらがっちりとつかまれる。

目を開けると同じく目を開けている彼女と目と目がある。

いたずらに成功したようなあくどい顔つきになっている。

さつきまでの演技だったのか、と思つていると舌が侵入してきて

口内をねぶられる。

ちゆるちゆると空気を吸われて息が苦しくなってくる。

反対に、彼女はとても気持ちが悪そうにむさぼっているように見えた。

もう、今日の仕事はここまでだな、と悟り、パソコンを空いている方の手を使って画面をぱたりと閉じる。

田中は知らない。

パソコンを見るのをやめたから、はやての機嫌を損ねることなく満足させることができたのと同時に、見ていればスカリエッティからの緊急連絡にも気が付いたのであろうことに。

そのままぎっ、ぎつと二人が乗っている椅子が揺れる。

彼との再会を、文字通り死ぬほど望んでいた少女が彼の居場所を突き止めたことも知らずに。

To be continued

八話 ああ、逃げられない!!

昨日のデレデレっぷりをいかに甘んじて甘えてきた大狸ちゃんことはやてちゃんと一緒にまどろんでいたら、ケータイに緊急連絡が入っていた。

横で寝ている彼女を起こさないように確認すると

きをつける 関西弁 少女

とメールに書いてあった

何のことだ?と考える

関西弁で少女・・・?

関西弁・・・ツインテール?の?

顔が青くなっていく

血の気が体から引いていって、寒気を感じてきて怖くなったので、寝ている彼女の胸に飛び込む。

目を覚ました彼女が「かわいいーなー♡」と言ってぎゅっと抱きしめてくるのが今だけは救いだった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

紫髪の男に写真を見せたらなぜか動揺していた。

それを隠そうとしていたみたいだが、すこし強引に聞き出すとなんでも仲の良い知り合いだという。

彼の居場所を教えてもらおうと頼み込んで、お願いした。

協力を頼んでいるときにアジフという男の顔が泣きそうになってたのには気が付かずに、居場所を教えてもらう。

ミッドチルダ、ヒルデ魔導学院。

行先は決まった。気持ちは固まった。

愛しの彼に会いに行こう。

私を傷物にしたんだから責任、とってもらわないと。

どこもおかしくない完璧な乙女の理論を胸に、彼のところまで突き

進む。

心の内側にわいてくるどろどろとした黒くて醜い感情を抱きながら、鼻歌を歌いつつ。

.....

「せんせー、大丈夫ですか？」

あつ、へーきへーき。

あのあと目を覚ましてたはやてちゃんと数回戦行っていたら、頑張りすぎて気を失い、次の日になった。

皆で一緒に朝食をとりながら、こうして職場まで学校にやってきた。

今は体育実技の授業中。

俺は主に体の使い方をみんなに教えている。

もともと基礎や初歩的なことがきちんとできている子ばかりなので教えがいがある。

彼女たちがこれから先どんな風に成長していくのか楽しみだ。

ヴィーちゃん、張り切るのはいいけどケガしないようにね。

アインハルトさんとヴィヴィーは最近タッグを組んで実技の練習に励んでいるようだ。

実力的にも拮抗しているのでいいペアとなりそうだ。

.....アインハルトさんはタイムンをしてからこちらを見る目つきが少し変わっているようでちよつと怖いけど。

胸ポケットにいつも入れてある嫁さんたちのベストショットを一枚一枚取り出して眺める。

心が乱れそうなきにはいつもこれを見て、気持ちを落ち着かせている。

最初に渡されたときはもつと過激なショットばかりだったから健全なものに変えてもらった。

学校で生徒に見られたら洒落にならないので頬を膨らませて残念

がるのはちゃんや、暗い瞳でこちらを見てくるテストロッサ三姉妹、昨日の余韻に浸って妄想の世界にトリップしているはやてちゃんを一人一人慰めつつ、なんとかとりなした。

しかし、前世でもこういういった教導は行ったことがほとんどないので新鮮で面白く感じる。

見込みがある子は他にもたくさんいる。戦いなれているヴィー、アインハルトさん、ヴィータちゃん、チンクちゃんを除けば、前にうちに会いに来たりオちゃん、コロナちゃんはかなりの実力者だ。

同じ年齢の頃の自分を思い出して少し自己嫌悪に陥る。

10代のころは学校にも行かずにホームレス小学生になっていたからだ。

もう、無職なんてよばせないっ、と思いながらみんなの動きをチエックしていると、

なんか見たことのある黒髪のツインテールの子供と目が合った。思わず目をそらす。

いやいやいやいや、連絡もらったのが昨日で、まだ一日しか・・・ちら、と顔を上げて彼女の方をみると、

顔がくつつきそうぐらいの距離で、彼女がじつとこちらを見てきている。

驚いてしりもちをついてしまう。

周りの子たちも見慣れない子供が混じっていることに気が付いて騒ぎ始めている。

まずい。とりあえずごまかさなければ。

立ち上がって、みんなの事情を説明しようとしたら、目の前にいる子にそつと肩に手を置かれて押し倒された。

その上に馬乗りになってくるエレミアちゃん。

体を起き上がらせると胸倉をつかまれ、

キスされた。

.....

今、私の眼前ではありえない光景が広がっている。

私のパパが、私だけのパパが

10代ぐらいの女の子に唇を奪われている。

頬を赤く染めていて、メスの顔をしている。

私と一緒に訓練をしていたアインハルトさんも呆然としている。

そして、ようやく気が付いた。

恋敵の小娘が一人増えたのだと。

許さない。

渡さない。

私のモノだ。

あの人は私だけのものだ。

隣にいるアインハルトさんにアイコンタクトを送る。

こくん、と頷いてきたので、目を白黒させて驚きながら見知らぬ女  
に

唇を奪われている私のパパを助けるために近づいていった。

.....

「離れなさい」

聴いたものの心臓を止めてしまいそうな冷たく、無感情な声を出し

て告げるヴィヴィー。

その言葉を聴いてエレミアちゃんが、すぐ近くにいるアインハルトさんとヴィヴィーちゃんの方をちらりとみた。

ようやく解放される、と思っていたら

舌を入れられる。

きゃーーーーーーっ、と周りの女の子たちから黄色い悲鳴が上がる。

無理もない。まだまだ子供な生徒達には刺激の強すぎるシーンだろう。

かくいう、大人な俺にとっても大きすぎるのだから。

何も考えないようにして彼女に抵抗して舌を押し返そうとすると、こちらの舌がエレミアちゃんの舌とぶつかってしまい、絡み合ってしまった。

しまった、これではノリノリでベロちゅーしているようにしか見えない。

騒ぎを聞きつけた嫁さんたちがやってきてしまう。

アインハルトさんとヴィヴィーが彼女を力づくで引き離してくれたのでようやく解放される。

荒く乱れた息を整えて、立ち上がる。

修練場のドアのところでニコニコと笑っているが目は全く笑顔ではないすずかちゃんと、

涙目で目を潤わせているテストタロツサ三姉妹、レイジングハートをセツトアップしてバリアジャケットを着てこちらに杖を向けているのはちゃん、ハイライトが消えた瞳でこちらをじっと見てくるはやてちゃんが見えてしまった。

言い争いをしているヴィヴィーたちを見ながら、俺の学校での評判

終わった、と絶望にくれた。

▪ T o b e c o n t i n u e d



九話 あの日から変わらずに追いかけてきた彼女

「正座」

この天井ネタもう三回目だな、と思いつつレイプ目でこちらをじつと見つめてくる彼女たちに囲まれながら事情聴取という名の弾劾を受ける。

今回に限っては俺は悪くねえ!!と某生まれた意味を知るRPGの主人公みたいに叫んだら、腹を何かでチクリと刺された。

それは包丁だった。

なんでもまずかちゃん家庭科室のカギを持つているからそこからこつそり持ちだしてきて、いつでも俺をさせるように準備しておいたのだという。

ツツコミどころがありすぎて固まっていたら、「このままおなか刺されて一生寝たきりで私たちにかわいがられるっていうのもありだよね」と嘘だか本気だかわからない迫力でなのはちゃんが提案をしてきた。

エイプリルフールに乗っかってジョークをとばしているわけではないことに気が付いた俺は必死に事情を説明し始める。

そう、決して俺はエレミアちゃんとキスして気持ちが悪かったとか思っていないし、いい匂いがしていたなんて思っていない。

彼女に強引に迫られた結果あんなにただで俺は自分から彼女とキスをしようなんてこれっぽっちも思っていないことをアピールした。

ヴィヴィー、アインハルトさんに怒られながらもしれっとしていて、こちらをみてきてはにっこり手を振ってくるエレミアちゃんを横目で見ながら彼女とのなれそめを話し始める。

すべては、俺がミッドチルダを放浪し始めたときにさかのぼる。

.....

今日も今日とて気ままに暮らし、生きる。

最近アプローチが激しくなってきた彼女たちから逃げるためにこうして魔法世界にやってきた。

書置きに「バケモンマスターを目指しに行つてきます」と書いておいたからまあ、大丈夫だろう。

プレシアちゃん、はやてちゃんあたりはそこら辺の事情を察してみんなに説明してくれるだろうし。

グラ子妹とホープにはなんていわれるかわからないが俺だつてたまには一人っきりの時間がほしい。

いくら慣れているとはいえ、複数人の相手に迫られると引いてしまふのだ。

ああクモ美、俺の癒しはお前だけだよ……と思ひなが俺を乗つけて歩き続けるクモ美の頭を撫でてやる。

ふるふると、きにすんなよ、とでも言いたげに腕で俺の頭を撫でてくる。

ほんまによくできた女やでえ……と感動しながら進んでいると、前の方から誰かやってきた。

ローブをまとい、全貌はわからないが、背の高さが小さく、まだ小学生くらいの子供であることがうかがえた。

顔が見えないなんて怪しいなあ……、と思いつつクモ美に道を横にそれるようにいった。

道を邪魔にならないようにどかなきやな。

全身ローブの人物とすれ違う。

その時の俺にはわからなかった。

そのすれ違った相手とまた出会うことになるとは。

.....

進み続けていると、なんか街みたいな村みたいな場所にたどり着いた。

予定だとエリオ君も来ているはずだけど……。

「田中さん!!」

そういつてこちらまで走ってくる赤髪の少年、エリオ君。

最近、俺とのコミュニケーションの賜物によってノリが幾分か軽くなってきた少年だ。

うちに連れて帰ったらぴかちゆう、げんきでちゆうやらせてみよう。そう考えていると

へっへーんとどや顔をしながらサタデーナイトファイバーのポージングをしながらこちらをあおってくる。

「ねえねえ、今どんな気持ちですか？『ハンデあげるからどちらが先に目的地につけるかご飯賭けて勝負しようぜ』って言ったのに負けた気分は？」

本気でイラツとしてきたのでクモ美に命じて糸を吐かせて捕縛する。

「なっ、なにをするだあー！ー！！」と顔が劇がチツクになりながらジョジョっていたけど無視して会話を続ける。

で、目的の大会は開催していた？

その言葉を受けてにやり、とクモの糸にぐるぐる巻きにされながらしたり顔をし始めるエリオ君。

全然かつこよくないからね、それ。

「ばっちりやっていましたよ!!これで当面お金に困りませんね!!」

そうなのだ。食費は風さんからもらったおにぎり製造機のおかげでゼロに近いのだが、さすがにお金が先立つものとして必要だと感じている俺たち二人は何か手っ取りばやく稼げる手段はないか探し始めた。

そこで見つかったのは季節ごとに天下一武道会みたいな催しをやっている町だ。

賞金は日本円でいうと100万円。二位は50万円だから俺とエリオ君が一位と二位をとれば150万円は確保できる。

まだ見ぬ金に舌なめずりをしながら、エリオ君と二人で戦略を立て始める。

この時からだった。

彼女、ジークリンデ・エレミアに追いかけてまわされることになるの

は。

今、うちはとある武道大会に出るためにとある小さな町までやってきている。

先ほどまで気晴らしに散歩していたが、なかなかできそうな二人組とすれ違った。

一人は赤髪のうちと同じく子供だったが、もう一人はかなりの実力者であることがうかがえる。

すれ違ったときにも油断なくいつでもこちらを攻撃できるように刀をそつと構えていたし。

予選がそろそろ始まるらしい。

うちは招待枠だから最初から本選に出場できるが、通常の参加者は、まず予選から勝ち抜く必要がある。

だから、あの二人を、特に大きなクモの怪物に乗っかっていた方を見る。

どうやらあのきれいな刀を使って戦うらしい。

赤髪の子供は槍のような武装を持っている。

大きな特注のリングには100人以上が集まっており、そこで時間制限まで生き残った者だけだ本選に進めるらしい。

お手並み拝見、と思いつながら戦いが始まるのを待つ。

早く、早く、と自分らしくもなく子供っぽく落ち着きがなくなる。

敵らしい敵がいなくて退屈している自分をあの人なら満足させてくれるかもしれない。

そう思うだけで気が昂って仕方がなかった。

.....

じゃ、エリオくん、準備はいいかい？

「OK!!」

ズドン、という音が聞こえてきそうなコマンドーネタでやり取りを

しつつ、作戦を進める。

この予選のルールはシンプル。

100人のうち、8人までが本選に出られる。

時間がいっぱいまで周りのやつをぶつ倒すか、リングの外に出してしまえばいい。

戦いの始まりをしらせるブザーになる。

皆が皆、それぞれの狙っていた相手に襲い掛かっている。

当然俺たちも襲われているが、関係ない。

後で町の人たちに謝っておくか。

そう考え、エリオ君に命令を下す。

エリオ君、かみなりだ。

ポケモンでは命中率70%の外れることが多い技だが、地面に向けて撃つ分には問題ない。

あたりに雷撃がほとばしりリングがずたずたになる。

周りのやつらも感電して気を失っていく。

俺？さっきお店で買った絶縁体のゴム河童着ているからノーダメージ。

それでも何とか雷撃をよけて無傷のやつらが一斉にこちらに襲い掛かってくる。

元気なやつちやなー。

じゃ、あとは任せな。

そういつてエリオ君をおぶって力をためる。

腰に収めてある刀を居合の要領で引き抜き、斬撃を飛ばす。

リングを居合切りで壊して、足場を壊す。

バランスを失ってどんどんリングの外に足をつけていつて失格になっってしまう選手たち。

ルールはリングの外に出たら失格だから、リングを破壊して自分たちだけの足場を残して戦えばいい。

まさに外道、と言われそうだがお金のために手段を択ばない今の俺

たちに勝てるやつらはいなかった。

戦いはもちろん俺たちが勝ったが、リングが壊れてしまったので明日まで大会が延期するとか。

大会運営側からは嚴重注意を受けてしまった。

結構エリオくんが落ち込んでいたので、露店の食べ物をおごつてやったらほくほく顔で元気を取り戻しながら食べていた。

現金なやつちやなー。

T o b e c o n t i n u e d

十話 武道大会 . . . . 天下一的なアトモスフィア

街の一角にある宿泊施設に泊まって明日の大会に備えて休息をとることにした。

あいつらがリングを壊したやつらか . . . . と畏怖の存在として周りの人たちから見られていた。

気にせずに、早食い競争で戦うことにした。

景品は二段ベッドの上か下かを自由に選べる権利。

高いところが好きな俺たち二人の間でいさかいが起こりそうだったの、後腐れない方法として勝負することにした。

食べきったらお代が無料というジャンボラーメンがあったので、2人ともそれを注文し、

届けられるまで待つ。

届いたらお互いに割り箸を手にとって、頂きます、と礼をする。

今まで研究所暮らしで常識を知らないエリオ君にはこうして一つ一つ仕込んでいっている。

ずるずる、はふはふ、と食べるどころか麺を飲み込む勢いで吸収していく俺とエリオ君。

ぬぬぬ、やるな、と思いつつも食べるスピードをさらに上げる。

そのまま俺たち二人は食べ競った。

ポンポン痛い。

. . . . .

あのあと食べ過ぎてちよつと気持ち悪くなったので、散歩をすることにした。

エリオ君は二段ベッドの下でうなされている。

寝言から察するにどうやらラーメンの津波に襲われているらしい。俺もちよつとトラウマになりかけていたけども、かろうじて耐え切った。

今はだいぶ消化されていて、体がようやく軽くなってきたところだった。

ふらふらと夜の街を歩いていると、何かもめているところが見えた。

小柄な全身をローブで包まれている子供が何かチンピラみたいな男たちに囲まれている。

周りの人たちは見て見ぬふりをしている。

ビス子と初めて会った時もこうだったな、と考えつつも持ってきていた宝刀を手にかけて、ばれないようにこつそりと斬撃を飛ばして男たちだけを吹き飛ばす。

突風が起こって近くに立っていたローブを着こんでいた人物のローブが吹っ飛んでしまった。

やべ、と思いつつすぐに撤退する。

こちらをじつと見つめてくる、少女の熱いまなざしには気が付かずに。

.....

ああ、ほっとした。

自分が泊まっている宿泊施設までやってきた。

どうやら無事に帰ってこれたようだ。

いまだにベッドでうんうんうなっているエリオ君をほおっておいて、近くのお店でついでに買っておいだ胃薬をテーブルの上に置いておく。

書置きを残しておいて、もし、まだおなか痛いようだったらこれをのみな、という旨の言葉を書いておいた。

さすがに見ていられなかったので、胃薬をかってきておいたのだっ



た。

そのまま二段ベッドの上まで登り、布団をかけて寝ようとする  
とベッドが膨らんでいることに気が付いた。

おかしい。

エリオ君はいまだに夢の中でラーメンの海をチャーシューのサー  
フボードで泳いでいるはずだ。

じゃあ、誰が？

そーつと布団に手をかけて  
ばつと一気に拭きはがす。

そこにいたのは、

黒髪の、まだ小さな少女だった。

えへへ、ばれてしもうた。と小さく笑ってこちらを見てくる。

……どちらさま？

……

先回り成功。

いえーいと心の中で自分自身とハイタッチを行い、ミツシヨンコン  
プリートとしゃれこむ。

目の前にいる彼は渋い顔でこちらに懐疑的な視線を送ってきてい  
る。

おっと。自己紹介せなあかね。

「うちの名前はジークリンデ・エレミアていいます。」

よろしゅう。と言うと、

う、うん・・・みたいななんとも言えない感じで返事を返してくる彼。

自分の寝床に侵入者がいたら落ち着かないか。

何で自分のベッドにもぐりこんでいたの？

そう聞かれ思わず答える。

「お兄さんと話がしてみたくって。」

面識あったかな・・・？とつぶやく彼を見る。

パツと見は普通の男性で、特にこれといって目立ったような感じはない。

しかし、見るものが見れば明らかに違うことがわかる。

濃密な闘気を体に宿している。

戦いを重ねてこなければ身にもまとうこともできないレベルのオーラを体から出しているのが見えた。

その気にあてられて、気がどうしようもなく昂る。

今すぐにここで戦いたい。

明日までなんて待てない。

そう思い、拳を構えて襲い掛かろうとした瞬間。

口に冷たいものを突っ込まれる。

いきなりの衝撃に悶絶する。

その正体を確かめるとアイスキャンデーだった。

彼の顔を見るとにやりと笑っている。

いや、ちよつと・・・どころかかなり怒っている感じがする。

さつきここで何しようとした？

ごおつと気を放出してこちらに問いかけてくる。

寒気を感じるのには口に入れてあるアイスのせいではない。

さすがに節操なかったと感じたので素直に謝る。

向こうも気を抑えてくれた。

いやー面目ない。

もし、君と俺がここで戦えば大変なことになるってわかっていると  
思うんだけどなあ？

その確認するような意地の悪い言葉を受けて、うぐ、と言葉に詰ま  
る。

さあ、今日はもう帰った帰った。

そういつて私をベッドから追い出して、寝転ぶ彼。

アイスキャンデーの棒を近くのごみ箱に捨てて、立ち上がり、部  
屋の外に向かう。

アイス、ごちそうさんでした。と一言述べてから出る。

ばたん、と扉を閉めて、すーすーと息を大きく、深くすって興  
奮を静める。

あれと明日戦えるのか。

そう考えるとにやけた表情が抑えられない。

うちの目的は強い相手と戦うことだ。

そのためにこうして旅を続けていてよかった。

神の存在に感謝せざるを得ないほどの嬉しさに包まれながら、明日  
の戦いに胸を躍らせるのであった。

.....

いやあ、普通に怖かったわ。

自分のベッドに知らない人がいたら誰だってそう思うでしょう。

しかも子供が入り込んでいたとは.....

ドアのロックをしつかりと掛けて、今度こそ本当に眠りにつく。

一応、すぐそばに宝刀をおいておきながら寝る。

明日は一体どんな戦いをしようか。

賞金を絶対に得る、と気持ちを新たにエリオ君と同じく夢の世界に  
旅だった。

▪  
T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

十一話 エリオ君、バター醤油味のポップコーンとはわかつているじゃないか

かめはめは撃てねえかな。

天下一武道会みたいな大会に出ているんだし。

そうぼやくと隣に座っているエリオ君に「僕は気田斬がいいです」と言われた。

一撃必殺の技を真つ先に浮かべるとは殺意が高すぎだと思っただが、原作のドラゴンボールの敵って最後らへん再生しちゃうから意味なかったよね、とだべる。

今、俺たち二人は選手控室のモニター映像で自分たちの番を待っている。

今はあのジークリンデ・バーミヤ○とかいう子が戦うようだ。

エリオ君がどっかの売店で買ってきたポップコーンをむんず、と掴んで口の中に頬る。

む、醤油バターとはおぬしやるな、とエリオ君のセンスをほめる。

キャラメルもいいけど今は醤油バターの気分だ。

「あの子が田中さんの言っていた子ですか。」

ああ、君が眠りこけている部屋に不法侵入かましてきた意味不明の子だよ。

侵入を易々と見逃したことに罪悪感を感じているのがうぐ、と詰まる。

まったく、堅物なんだからそこまで気にしなくてもいいっちゃゆるのに。

空いている方の手でわしわしとエリキチの頭を撫でてリラックスさせる。

「あの子って見た感じどれくらい強いんですか？」

興味深々といった様子で聴いてくるエリオ君。

「ああ、彼女？そうだな。少なくとも・・・」

出場者の中では最強かな。

隣のエリオ君が息を呑む。

・・・

「いっちに。さんし。おいっちに。さんし。」

軽い運動の前にはちゃんと準備運動しておかないとなー。

体をほぐして肉離れや、けががないように念入りにストレッチする。

相手は呆然としている。

まあ、とつくに試合開始の合図は始まっているからまさか、敵の前でこんな真似をする奴が信じられない、といったところかな。

だんだんと相手の表情が怒りに染まっていく。

よっぽどおかんむりのようだ。

(まあ、今のうちが興味があるのは・・・)

考え事していると、顔面にパンチを食らう。

「おらああああああっ!!!」

咆哮に近い雄たけびを上げながらラッシュを繰り出してくる。

・・・

「ちよ、ちよつと田中さん。彼女が一番強いって笑えない冗談ですよ・・・」

ははは、と笑って俺の話のオチを待っているエリオ君。

現に、彼女は今相手の戦士の攻撃を受けまくっている。

やはり信じられないか。

「だってあんなに小さな子ですよ?!それにやられっぱなしじゃないですか!!」

納得いかない、といった感じでそう訴えてくるエリオ君。

才能に年齢は決して関係ない。

そとことを告げると押し黙るエリオ君。

自分自身が得意な電撃体質だからか反論できないようだ。  
そろそろ終わるな。

「えっ？」

そう俺が告げると

ジークリンデの対戦相手の体が吹っ飛んだ。

会場ではどよめきが起こっている。

リングの外に出てしまったので相手は失格となった。

な？終わったろ？

絶句するエリオ君。

「……………田中さん。」

なに？

「三位でもいいですか？」

二位以上取れなかつたら一か月間エリオ君のごはんはおにぎりだけね。

エリオ君が泣きながら膝から崩れ落ちた。

……………

順調に試合が進んでいって、もう準決勝。

エリオ君と俺は楽勝でここまで来た。

問題は

まさか決勝ではなく、準決勝で当たるとはね。

こういったとき、王道の展開としてはそうなると思ったんだけど。

そういつて目の前にいる強者にふざけて言う。

拳を構え、いつでも戦える態勢をとっている。

それまでの試合の戦い方とは違い、一切の侮り、軽率さが消えていた。

ああ、やつぱりそうか。きみが今までふざけていたのも手の内を隠すためでしょ？

そういうとにこっ、と笑ってくる。

「いやー。やつぱりお兄さんにはばれちゃったなー。」

嘘つけ、最初っから俺への当てつけでそうしていたくせに。

話は簡単だ。

わざとらしく、わかりやすく試合で挑発的な行為を続けて自分の手の内を隠し続けていた理由はただ一つ。

お互いに手札を隠しながら進んで戦おうぜ、って意味だ。

昨日お互いに相手を「観た」。

そして大まかな実力を見極めたからこの相手が勝ちあがってくる  
と確信を持った。

エリオ君はぐーすか寝ていたけど。

実力を隠すためだけなら、もつと他の手段をとればいい。

だからあんな方法をとって、「お前もちゃんと手の内を見せないようにしろよ?」

という言外の挑発。

完全な初見同士で戦いたいという欲求。

それを満たすための準備。

そうまでして強い相手と戦いたいのか。

バトルジャンキーってこわいなあ（白目）

「そういうお兄さんだって刀を一回も抜かずに戦っていたやないか。」

やはりというかこちらも手抜きをしていたのがばれている。

「うちのお誘いにのつてくれるなんて優しいお人やねえ。エスコト、頼みますよ♡」

そんなハートマークつけたって全然和まない。

せめてその闘志をもうちよつと抑えろよ、と思いつつ情報をとって  
いく。

相手の方が背が10CM以上低い。

刀での切り上げはまず当たらない。

向こうの方が小さいから懐に入られたらまずい。

パワーもあるようだし、パンチの回転スピードが腕が短分早い。

自分の距離で戦えるか、それが重要だ。

「じゃあ、改めまして。うちの名前はジーク・リンデエレミア。戦姫

って呼ばれています。」

よろしくお願いいたします、とお辞儀される。



こちらでも自己紹介する。

俺の名前は田中太郎。とある事情で世界をさすらっている根無し草さ。

挨拶を返す。

「じゃあ、おしやべりはここままでして・・・」

いざい

剣と拳がぶつかった。

▪ T o b e c o n t i n u e d

## 十二話 言い出しっぺの法則ってやつ

剣と拳がリング中央でぶつかる。

あたりに強烈な衝撃波が発生し、周りの物が吹き飛ぶ。

あちらこちらの観客席では悲鳴もがちらほらと聞こえてくる。

ずいぶんと手荒な挨拶だね。

びりびりとしびれる腕を相手にばれないように隠し、回復するまでの時間稼ぎをするために話しかける。

「お兄さんこそ、いたいけな少女相手に大人げないやないか？」

君は子供気がないけどね、と悪態について刀を構える。

よし、腕の痛みが取れた。

しかし、予想していたとはいえ、結構まずい。

パワーがあるのもそうだが拳を斬ってみて確信した。

とんでもなく硬い。

下手をすると、ダイヤモンド以上の硬さかもしれない。

斬撃を飛ばして遠くからけん制する。

それを最小限の動きでよけて、こちらに近寄ってくるジークリンデちゃん。

「おお、こんな技はじめてやわー。」

余裕そうにそういつてくる。

だったらこれはどうだ、と言わんばかりに足場を崩す。

しかし

「その技は予選で見たよ。」

自分の足元以外のリングをすべて壊す前に接近されて内側に入り込まれる。

拳の嵐を叩き込まれる。

一発一発がハンマーで殴られていると錯覚するほどの重みと、それでいてマシンガンの連射のような速さを持っていた。

や、ば……

「もらったで!!」

ゴキーン、という音ともにあばらが何本か持っていていかれる。激痛に顔をゆがめながらも彼女に一撃を返す。しかし、踏み込みが浅かったのかそのままバックステップで後退されて躲される。

「あぶない、あぶない。」

ステップを踏んで体制を整えて、またこちらに突撃してくる。なんともボクサーみたいな戦い方だ。

痛みから脂汗が出てくる。

体温の上昇によるものではなく、精神性の発汗によつて流れるぬりとした汗だ。

本当に子供なのか疑いたくなる相手だ。

右手の刀を鞘に納める。

「なんや？……ーさんか？」

そのまま腕を振りかぶつて殴りかかってくる。すうつ、と一呼吸して、鞘に納めた刀を右手で振りぬく。

「な?!」

居合を知らなかったのか、驚愕する。

しかし

「なんのおおおおおおおお!!」

両腕をクロスさせてガードする。

ボクシングで使われるクロスアームブロックだ。

渾身の居合をふせがれる。

「もろたああああああ!!」

彼女からの一撃が俺に届く前に

俺のもう一撃の居合が彼女に届いた。

「な……に……?」

彼女の側頭部にその一撃が入る。

居合の二段抜刀。

恭弥さんが使っていた技だ。

最初に居合を抜刀し、左手で鞘をつかみすぐに二発目を繰り出す技。

最初に居合に対応されたときにはびっくりしたが二撃目は当たったようだ。

そのままふらつく彼女。

右手でつかんだ刀を彼女に振り下ろす。

「あ、あたらんよ．．!!」

ガードされる。

そしてすぐに左手でまだつかんでいる鞘を二刀流の要領で構えて、攻撃を当てる。

「あ．．．ぐ．．」

リングに倒れる彼女。

歓声上がる。

よ、ようやく勝ったか．．．

ホツとしながら早く試合終了の合図が告げられるのを待つ。

しかし、様子がおかしい。

なぜか試合が終わらない。

なんだ？どうした？

あたりを見回すと、観客が俺の後ろを、固唾をのんで見守っている。静寂の中で誰かが唾をのむ音が聞こえた。

まさか、と思い、後ろを振り返る。

顔面に拳が突き刺さった。

くくく!!?

リングの外まで吹き飛ばされそうになるが、刀を地面にさして耐える。

な、これは．．．

驚きながらも顔をあげて前を向いた俺が見たのは。

ツインテールにまとめていたヘアゴムがはずれて、乱れた髪を気に

せずにこちらを仁王立ちでにらんでいるジークちゃんの姿だった。

「「「「おとおとおとおとおとおお!!」「」」」」

会場が熱狂に包まれる。

彼女がしゃべり始める。

「いやー、容赦ないなー。鞆が体に当たったときには意識が数秒飛んでいたんやで。」

もー、うちだって女の子なんやからこんな格好恥ずかしいで……。ぱん、ぱん、と服についたよこれを手で払いながらそういうジークちゃん

!!!

おとおとおとおとおお!!

彼女の体力を回復させないためにすぐに彼女に襲い掛かる。

こちらもあばらをもつていかれて体はボロボロだ。

お互いに最後の気力を振り絞って剣と拳をぶつけ合う。

らああああああああつ!!

「はああああああああつ!!」

ラツシユは互角、と思っていたが、折れたあばらが痛み、横なぎに払った一撃が

遅くなって彼女に回避されてしまう。

「おそい!!」

こちらの両腕を拳でへし折ってくる。

ペきりっ、という軽い音の後に腕が折れ、刀をこぼしてしまう

「うちの勝ちやああああああつ!!」

彼女のとどめの一撃が眼前まで迫る。

ここまで・・・か

意識が遠のく。

そして、ある言葉を思い出す。

あ、俺、エリオ君に三位になったら一か月間食事はおにぎりだけな、  
と言ったんだっけ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

あれ？

もし、俺がここで負けて三位以下になったら・・・

言い出しつぺの俺が三位

←

エリオ君「おう、おまえは一か月間おにぎりだけな」

←

稼いだ賞金でうまいものを食べるエリオ君

←

それを横目に俺はおにぎりをほおぼる

←

しょっぱく感じるのおにぎりの塩味が強いからじゃなくて、俺の  
涙が頬を伝っているから

ま、負けられるかあああああああああつ!!

意識を取り戻し、最後のあがきをする。

「無駄やあああああ!!」

こちらの腕を折って、刀を手で握れないことがわかっているからか  
勝利を確信した顔つきで殴り掛かってくる。

ぐら、と前の方に体を倒して攻撃をよける。

「な?! 往生際が・・・」

そして、顔を突き出して

刀を口で咥える

そのまま、咥えた刀を彼女の横腹に突き刺す。

おおおおおおおおおおおつ!!

最後の力を振り絞って差し込んだ。

体から力が抜けて、倒れ込む。

もう限界だあ・・・。

顔を上げて、彼女の方を見ると  
にやりと笑みを浮かべていた。

き、効いていないのか・?!

そして、ふっと笑うと目を閉じて、床に倒れた。

お、終わった・・・。

こうして彼女との死闘がようやく決着の時を迎えた。

■  
T o b e c o n t i n u e d

十三話 鬼ごっここの始まり始まり

「あほですね」  
うるさい。

バカを見るような目でじとつ、と見つめてくるエリオ君にそう返す。

勝ったには勝ったけども

「その腕じゃ、料理なんて食べれないじゃないですか。」

彼のいう通り、両腕がぺつきり折れていて、ギプスで固定された状態で首からつるされている状態だ。

あのゴリラ少女のパワーに腕を粉碎されてしまったのだ。

あああああ、俺のめしがあああああ

ご飯を食べられない俺を気にせずにはくばく料理を食べるエリオ君。

腕が治ったら覚えておけよ・・・と報復を考えていると、横から料理をはさんだ箸が突き出される。

あ、ありがとう。

そういつてその突き出してきた本人の方を見ると

「どういたしました♡」

満面の笑みを浮かべて、こちらにあーんさせようとしているジークリンデさんの顔が見えた。

悲鳴を上げそうになる。

エリオ君は気にせずマイペースに食べている。

おい、ごらあっ!!

助けるよ、という意味をこめた視線を送ると、「僕、かわりたくないで。」という意味をこめた視線を送られる。

「どうしたの？食べへんの？」

不安そうな表情でこちら心配している彼女。

い、いや。いただくよ。

そういつて差し出された料理にぱくつく。



あつ、おいしい

「あつ、間接キスやね。」

息が止まりそうになった。

.....

「大丈夫？」

そういいながらこちらの背中をさすってくれるジークちゃん。

さんではなく、ちゃん付けになっているのは彼女から「ジークさんなんて心の距離を感じるわー。じ・い・く・ちゃんってよんでーなー♡」

あれ、地球に置いてきた関西弁のためきちちゃんに酷似しているぞ、とデジャヴを感じながらも素直にそう呼ぶ。

そして、どうしてここにいるのかを聞いてみた。

「いやー。戦いが終わってお兄さんと一緒にご飯食べたいなー、と思っっているんな場所を探していたんよ。ここにいるのを見つけて、こうして一緒にご飯を食べているわけや。

からから、と気持ちよく笑う彼女。

戦いときはあんなバーサーカーだが、本当はこんな気さくでさっぱりしているのか。

驚かすにはいられなかった。

食べさせてもらいながらぱくつく。

おいしい。

まあ、見た目10歳の子供に料理を食べさせてもらっているのは恥ずかしいけど。

むしゃむしゃと咀嚼していく。

そういえば横腹は大丈夫？

先ほどの戦いでわきにちゃんとそらしたとはいえ彼女に傷を作ってしまった。

本当はまだ、安静にしていなくてはいけないのではないだろうか。

「へーきへーき。おいしいもの食べたら一分で治るし。」

どこの地上最強の生物だ。と恐怖を感じる。

「ところでちょっとこの後付き合っしてほしいんやけど。」  
横にいる置物と化したエリオ君をちら、と見ながらそういつてくる。

二人つきりで話したい、ということに気が付きエリオ君にお金を渡して好きなものを買ってきていい、と告げて外に行かせる。

「エロ本でも買うか。」と言いながらすたと出て行った。

エリオ君……。いくら少女でも女性のまえでそういつちやうのはどうよ、と思つたがジークちゃんはたいして気にしていないようだ。

「ああ、男の人ってそうなんやろ？ 気にせん、気にせん。」

男性への理解が深く、寛容なジークちゃんの話を聴く。

「あんな、うち。今まで負けたことなかつてん。」

俺はいつもボロボロにやられている方が多いけどね、と軽く冗談めいて話す。

どうやら彼女の話は幾分かまじめなようだ。

「で、今日始めて負けた。」

どくん、と心臓が跳ねる。

あれ、なんか本能が警鐘を告げているぞ？

早く逃げろ、みたいな悲鳴を心と体があげている。

「なんちゅーか。シヨック、というよりはやつと負けられたかー。みたいな気持ちかわいてきたんや。」

ぎゅっ、膝の上に乗っている拳を強く握りしめる。

「ありがとな。なんかやつと前に進めたような気がするわ。」

そういう彼女の顔つきは、年齢相応の子供らしい魅力的なものだった。

きつと、今まで孤立していたんだろう。

幼くして才能に恵まれ、強くなると、人はしばしば周りとうまくいかなくなる。

嫉妬、羨望、ねたみ、ひがみ。さぞかし多くの経験をしたのだろう。

あれだけの強さをこの年齢で持っているから大人の理解も得られなかったのかもしれない。

手を伸ばして何かを探し求めている赤ん坊のような、そんな純粹さが彼女から見て取れた。

とにかくよかった。

ここで話が追われた本当によかったんだけど。

「うちな、望みができたん。」

もじもじと体をくねらせてそういつてくるジークちゃん。

の、望み？

特に意味も深い理由もないがすこしずつ彼女から距離をとる。

反対に俺にススス・・・と近寄ってくるジークちゃん。

「うちより強い人と恋愛結婚するっていう、ね♡」

ドアの前まで後ろ歩きで近寄る。

彼女もついてくる。

エリオ君にSOSを求めようとしたら、さっきまで彼が座っていた席から姿を消しており、

後ろの窓が開いている。

「だ・か・ら♡けっこん、しよっ♡」

その言葉が言い終えられるよりも先に、ドアから逃げだす。

両腕が折れて体のバランスがとりにくいが、必死に態勢を整えつつ全力疾走する。

「逃がさないで♡旦那様♡」

恋人さえいないっていうのにそれは早い!!と思いつつ駆け抜ける。

そして、彼女との鬼ごっこが始まった。

勝利と引き換えに、ストーカーにまとわりつかれるようになってしまった。

T o b e c o n t i n u e d